北條早雲

早乙女貢

四

北條早雲

北條早雲

早乙女貢

四

北條早雲 四 早乙女貢

文藝春秋

文藝春秋
¥950
0093－361680－7384

北條早雲

早乙女貢

北條早雲 四

北條早雲 四 早乙女貢

文藝春秋

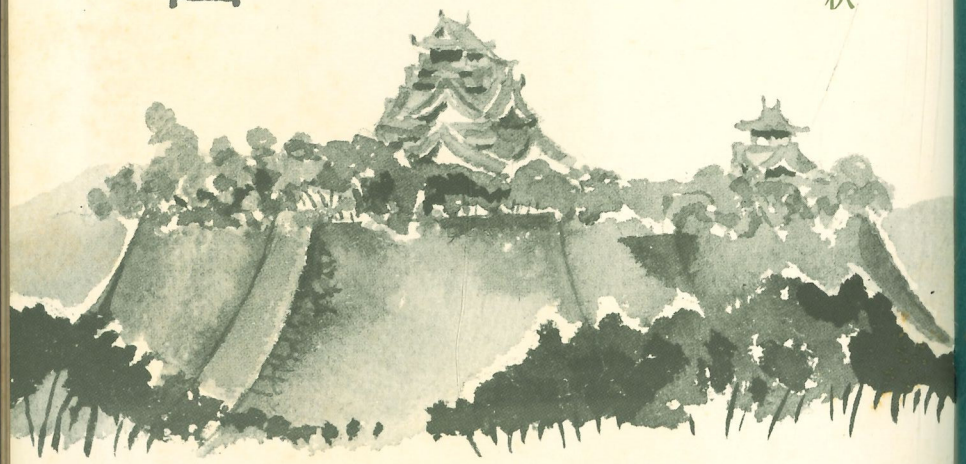
文藝春秋

北條早雲

早乙女貢

吉鋼藏書

四



文藝春秋

北條早雲　四

装幀　粟屋　充

承前

伊勢新九郎長氏が駿河へやって来たころ、守護大名の今川家では、大国の安逸を貪り、遊惰に流れていた。今川家は足利尊氏の子国氏から出ているが、当代の義忠が遠征の帰途、遠江で一揆の奇襲に遭い横死したことから、後継者争いがはじまった。すでに前代からの確執も尾を曳いていて、義忠の子竜王丸と、義忠の弟弥三郎春忠、義忠の従弟小鹿新五郎範満の間で卍巴(まんじともえ)の争いとなった。

竜王丸の実母で北川どのと呼ばれる夢子は、新九郎の義妹であり、新九郎が駿河入りしたのもその縁を頼ってのことだが、実は新九郎とはからだの関係がある。夢子の心中は複雑だった。義忠の生存中は新九郎への想いに悩んだが、政権争いに突入すると竜王丸のためにも新九郎が唯一の頼りになった。新九郎はその母子に応(こた)えて、戦乱中に再会した五人のなかまとも竜王丸擁立に腐心する。

範満の奸策にあって府中の館を逐われた母子は安倍川を渡り泉ヶ谷の旧臣一庵のもとに身を寄せる。混乱の府中に寿々女を探しに戻った新九郎は、妖美な女陰陽師天殊のところから寿々女と黒丸を救け出す。寿々女を連れ戻ることが泉ヶ谷の一庵の条件だった。だが、すでにそのとき弥三郎春忠の狡智によって母子は山西の石脇城に連れ去られていた。〝庇護〟を名目とした軟禁であった。

黒丸とともに新九郎は宇津谷峠を越え山西に潜行する。深夜の地蔵堂で悶えているおよねを知る。蛸の太兵衛の恋人だった女で弥三郎春忠の寵妾小菊の姉になる。現在は山西長者と称われる小川法栄の世話になっている。新九郎はこのおよねの案内で法栄屋敷の食客になるが、北川どの母子を救出のため囚人たちを味方につけ、くぐつ師などを使い、巧妙な軍略で石脇城を奇襲する。弥三郎春忠は辛うじて脱出、鳥羽十蔵を威して伊豆へ逃れた。

石脇城の守将となった新九郎は、駿西の大小名、豪族を次々と味方につけ、勢力を増やして、竜王丸の帰府に劃策する。おりょうの父親明珍高義を招いて甲冑を作らせるなど武備も充実していった。

五年経った。竜王丸も十三歳になった夏新九郎は、突然、安倍川を渡って府中館を襲った。館は改築されていたが、黒丸などが潜入して探っていたのである。範満も応戦した。この戦いは一勝一敗、容易に決着がつかず府中内外は戦火と流血の腥風に蔽われた。

府中の東四里ほどのところ、興津に塩湯があり、湯治客が集る。ここにおりょうが来ていた。浜松からの諜者に伴われて来ていたのだが、関東管領の部将太田資長（のちの道灌）も歌詠みに窶して、ここで戦局を探るうちに範満の手に追われ、おりょうを連れて東へ走る。あらためて府中へ乗りこんで来た資長と上杉政憲によって、竜王丸の成長まで範満が城を預ることになった。

新九郎は関東公方を動かすべく伊豆へ乗りこむが、伊豆韮山の足利政知の館でもお家騒動が起っていたのである。

京の小笛

新九郎は駿河へ戻ると、幾ばくもなく、京へ旅立った。

伊豆での構想は、かれ一人の腹中におさめておいての、旅立ちであった。

伊豆を奪うには、大義名分が必要であり、力を得るには、駿河一国の背景があるほうが容易なことはいうまでもない。

だが、駿河はいまだ今川（小鹿）新五郎範満のものだ。

（範満を逐って、竜王丸を正式に駿遠の主にせねば）

と、思っている。

だが、範満は、あの約束を忘れたかのように、譲る気配がないのである。一たん握りこんだ権益というものは、誰でも放したくないものだ。

（こうなることはわかっていた）

約束というものは、それを履行しない場合の罰則がない以上、守ろうとしないものだ。人間の道義心などは、乱れた世の中では、殊に露よりもはかない。

「こうなれば、攻め寄せて討ち滅すしかありませぬ」

と、大道寺太郎重時などはいきまいているが、

「それは最後の最後だ」と、新九郎は慎重だった。「堀越の公方や、管領の思惑も考えねばならぬ」

「しかし、約束を守らないのは、範満の方でござるゆえ」

「江戸の太田どのに、使者を立てた。いずれ吉左右あろう」

そうやって待ったが、関東では、その太田資長と主人の関東管領上杉定正の仲が何やら怪しくなっているらしいという。それが事実だとすると、とても駿河のことなどに、気をまわしてはいられまい。

「関東のほうが駄目なら、京の公方に頼みまいらせねばなるまい」

新九郎はこう提案して、京へ向ったのである。

もはや一介の旅牢人ではない。駿河の国でともあれ石脇城を預かる身分である。関東公方足利政知の紹介状と、竜王丸の歎願書などを携えての、上洛だった。

この文明十八年、足利将軍は義政の子義尚である。

義政は将軍職を退き、東山山荘、いわゆる銀閣に引っこんで悠々と閑日月を楽しんでいた。

悪妻の名が高い日野富子とその腹の義尚に地位を譲りながら、しかし、まるっきり身を退いたのではなく、時々、思いだしたように、政治に口をはさむ。

そんな政治の下では、社会の安寧が保たれないのは当然だった。徳政一揆が起り、悪党たちが跳梁し、強盗が出没して、京を荒しまわっている。放火も毎日のようにある。

新九郎が久しぶりに訪れた京は、こんな情勢だった。

この京で、小笛に逢おうとは思いがけないことであった。

その日も、御所の執事などと逢って将軍を動かす工作をして退出しようとすると、小笠原備前守に逢った。以前、同じ御番衆で同輩だった仲である。

「おお、これは珍しい。いつ上洛なされた」

備前守は非常に喜んで、屋敷へ招いた。

「つもる話もある。今宵は、ゆるりとなされよ」

かれも伊勢新九郎が今川家でしかるべき地位になっていることを風聞していた。

「東海地方は、気候温暖で、よいところだそうな、是非一度、まいってみたいと思うているが」

「気候がよいゆえ、食物も美味い。ははは、もっとも、京には諸国から、珍味が集まろうが」

「いや、それも、近ごろはさっぱりよ、こう諸国が乱れては、荷駄も無事に着かぬ。魚がな、第一、京では新鮮なものが食えぬ」

「それは確かであろう、駿河や伊豆では、魚など、摑みどりよ、まだぴちぴちはねるやつをな、すぱりと肉を削いで食するという塩梅じゃ、美味いぞ、これは」

「タデ酢などで食するとのう、そりゃ美味かろう、鳥羽や志摩辺でもそうだとのう、貝が美味なそうだ」

「ほう、鳥羽といえば、以前にいたことがある。伊勢のくによ」

新九郎は遠い目になった。思いだす面影があった。

その面影のひとが、小笠原備前守の屋敷について、目の前にあらわれたとき、一瞬、おのれの眼を疑ったほどだった。

「――小笛!?」

思わず洩らした声に、

「新九郎さま」

と、はずむような応えがかえってきた。

「やはり、小笛か」

「はい……お懐しゅ存じます」

小笛だった。

あの幼かった少女がすっかり成人して、輝くばかりの美女になっている。京へ来て、どれくらいになるのか、屋敷女の作法も板につき、挙措も淑やかで、京生れの女といっても通る容子だった。

「知り合いか、おぬしらは」備前守は驚いて、「呆れたな、これは」

「おれのほうは、まだ夢を見ているようだ、わけを聞かしてくれ」

「なに、さしたる理由はないさ」

伊勢には足利義視が下野したとき居ついた者が残っている。その某からの推挙で、京へ奉公に来たのだという。

小笠原備前守も身元のたしかな者を探していたので、大いに喜んだ。京へ来て、すでに五年になるということだった。

あれから九年――

小笛の成熟は眼を瞠るばかりだった。

二十歳を越えたはずだが、小笛の姿には、まだ初々しさが残っている。

あの少女のころは、ただ清純な愛らしさだけだったが、京の生活は、潮と強烈な太陽に曝された肌を滑らかにし、香料をつかう毎日が、その肌を香ぐわしくしていた。

京の御所仕えの武士たちの生活は、公卿ぶりを見習い、歌をたしなみ、文学に親しむ機会が多い。

上臈姫はむろんだが、下々の者にも、その影響が少なくなかった。

むろん、そういう環境でも、受け入れる熱意の有無に左右されるだろうが、素直な小笛は、それも奉公の一つと思い、日々のはげみが、成長につながっていった。

そんな小笛の姿に、新九郎はあらたに惹かれるものをおぼえた。

将軍義尚の返事ははかばかしくなかったが、小笛に再会できたことが、新九郎にこの京まで来たことの意義を感じさせた。

従者五人という小人数で来たことも、新九郎に解放感を与えていたのであろう。

新九郎は数日経った夜、小笛の部屋へ忍びこんでいる。

この男らしい、想いを行動にうつすやり方だった。

その日、遊びにくると、遠慮なく盃を重ねて、

「今宵は飲み明かそうぞ」

「よいとも、大いにやろうではないか」

備前守も受けたが、内心、弱ったな、と感じた。

二人ともすでに昔日の壮軀ではない。

新九郎がしかし、少しも衰えを見せなかったので、つい備前守もつりこまれてしまったが、とても飲み明かすほど、体力が保(も)たない。

「強いのう、おぬしは」

五ツ刻(午後八時)を過ぎるころには、ぐでんぐでんになってしまって、枯木の倒れるように横になった。

「なに、おぬしが弱いのさ」

「つよい、強すぎる。とてもに、かなわん」

「ははは、まだ飲み足りん」

「勝手に、飲みさらせ」

「男は、やはり、酒と女さ」

「酒は……女も、まだ、おぬし、やるのか」
膝朧とした酔眼に、新九郎ははっきりと頷いてみせた。
「ほしいものがある」
「なんでも飲め、飲め、諸国の名酒が……」
「酒ではない、女だ」
新九郎は、膝をにじらせた。
「お、女だと？」
「そうだ、小笛だ」
「おい、おぬし……本気か」
「本気さ」
新九郎の声には、よどみがない。
「おれはな、小笛とは因縁があるのだ」
新九郎は盃を口から放して言った。
「そりァ、誰でも、あるわえ」
「人間の出逢いというものを大切にしたい」
「おれとおぬしも、さ」
「そうじゃ、おぬしとめぐり逢うた。そのゆえに、小笛とも再会できた……その意味でもおぬしに感謝しているぞ」
「ははは、おぬしが逃げたがっている女でなくてよかったな、ははは」
「――小笛を見たとき、おれは、神の引き合わせとまで思うたよ」
「――おい、ばかに意気込むではないか……」
まだ小笠原備前守のほうには揶揄めいたものが残っていたが、新九郎の表情は真剣だった。
「一応おぬしが主人であるゆえ断わるのだ、よいな、小笛はおれがものにする」
「おい……飲んでいるか」
「飲んでいる。よいな、小笛のことは」
「よいとも、あんなよい女はいない、さすがに眼が高い」
「まさか、おぬしが手をつけてはいまいな」
「ははは、ははは」
「おい、どうじゃ、小笛に」
「ははは、その気力はないのう。第一、愚妻がな、うるさくてな。近ごろ、京では、女どもが、女公方を見習いおって、角を生やしてな……」
女公方とは、義尚の母御前、日野富子のことであろう。
「おれは手が出せぬが、おぬしなら、な……よかろう」
「よいな、あとで、イザコザ申すまいな」
「ははは、男と女、男に女……小笛の胸三寸よ」
「それだけ聞けばよい」
新九郎は、瓶子をひきよせた。
たしかに小笠原備前守は、酒にも弱くなっている。京の生活に比べれば、新九郎の東海地方の活躍は、健康度に於ても、大きな相違があった。
新九郎は体力気力の充実を感じた。

音王丸のことは、いざとなれば範満を攻め陥せば、目的は果せる。暗愚な将軍義尚の裁決を期待するほうが、間違いかもしれなかった。
その夜、新九郎は、小笛の寝所を襲ったのである。
（久しぶりだな）
夜這いするのも久しぶりのことだ。
新九郎は、夜の静寂の中を、女のもとに忍んでゆく、密夫の緊張を、久々に味わった。
備前守が了解しているとはいえ、ほかの家人たちに見咎められてはまずいのである。
廊下で、軋むところがあった。まさか夫の夜這いを制するために夫人がそうこしらえさせたものではあるまい。
新九郎は、若者のように、胸が高鳴るのを知った。
闇の中に切ない呼吸があった。
新九郎は板戸を静かに開けて、身をすべりこませたが、その女の呼吸が、夢でも見て、うなされているのではないかと思った。
夜這いの愉しさは、闇の中の緊張にある。もともと、太古から、男は女を〝盗む〟のが風習だった。力もあれば甘言もある。利で誘う者もあれば、情で言い寄る者もある。
いずれにしても、男は常に能動的に、女性に近づく。女性は甘肌で惹き寄せるのだ。
愉悦は、その首尾如何が未知であるところから、倍加する。昂奮も期待と不安のせいである。
新九郎は、夜具の裾ににじり寄っている。
女の呼吸は、まるで、熱を病んでいるかのように、闇を赤く染めて感じられた。
「――小笛」
あたりを憚って、低く、呼んだ。
「……」
返事はなかった。
が、聞えたはずである。呼吸が止った。息をひそめて、闇を見つめているように感じられたのである。
新九郎は、もう一度、その名を呼ぼうとした。
その出鼻をくじいて、また、熱っぽい呼吸になった。また眠りに入ったのだろうか。
新九郎は、夜具の裾に手をかけた。そこに手を差し入れることがしかし憚られたのは、小笛に対する想いの深さからであろう。
かれは、枕元のほうに、にじり寄って、静かに声をかけている。
「小笛……私だ、新九郎だ」
それから、夜具に手をかけた。
漸く闇に馴れてきた眼は、女の顔が仄白く浮き上っているのを見ている。
大輪の花が、ひっそりと、闇の中で咲いているという感

じであった。
「小笛！」
夜具の中に手を差し入れると、温かい肌に触れた。腕のあたりらしい。うすものを通して若い女の肌は熱っぽくなっている。
手をそっと握る。無意識だろうか、握りかえしてきたのである。
顔を寄せると、女は眼を閉じていたが、長い睫毛がふるえているように見えた。その睫毛に唇を寄せた。はっきりと、ふるえがわかった。
新九郎は、頬ずりをした。
「好きだ、小笛……」
九年前の、幼な児だった頬の感触が甦った。
「逢いたかったぞ」
「――あたくしも……」
微かな声が返事した。新九郎が唇をかさねると熱い唇が待っていたように迎えた。
小笛は待っていた。
新九郎の来るのを待っていた。情熱がそれを物語っている。わざと、小笠原備前守と酒を痛飲し、時刻を稼いだのは、
（あたしのもとへ来て下さるための……）
策略だったとわかった。

そこまで、術をつかって忍んで来てくれた、というのが、小笛を一層、感激させた。
女の本能は、男にもとめられることに、喜びを感じる。性の衝動というより、小笛をとらえていたのは、めぐりあった新九郎との運命の出逢いを貴重なものと感じる心だった。
（わたしたちは、こうなるように定まっていた……）
愛が、もとより、それを支えている。
が、その二人を結びつけずにはいない生れながらの宿命のようなものが、小笛を感動させるのだった。
数奇な運命といえよう。あのような環境で、二人で出逢ったのも異常なら、九年の歳月をへだてて、また相見たのだ。
その間、新九郎の環境も大きく変化している。その歳月の間、小笛の心の中に、新九郎の姿があった。
若くて目立つ小笛だけに、これまでも、さまざまな男たちが言い寄ってきている。
町衆もいれば、侍もいた。賤しい男もいたし、公卿もいた。
そんななかには、心を動かされる男もいないではなかった。が、小笛には、なぜか、それらの男に抱かれることを拒否するものがあった。
なぜか、わからない。新九郎が迎えにくることを期待し

ていたのだろうか。
だが、それも、年月が少女の夢だと諦めさせたはずである。
鳥羽にとどまっていればまだしも、京へ奉公に上るということになったとき、その夢は断ち切られたといってよかった。
それにもかかわらず、彼女を待たせたのは何だろう。
それが〝愛〟だといえた。彼女自身の心の底に、それが強い力で、崩れようとする心を支えたのだ。
（いつか、きっと……）
その、いつか、が突然、目の前にあらわれたのだ。
新九郎の強い腕に抱かれ、その熱い息吹きと、唇の感触をおぼえたとき、
（ああ、とうとう……）
待っていたものが、来た。このために、この夜のために、あたしは、からだを汚さずに守ってきたのだ。その甲斐があった、と思った。
新九郎の指が触れたとき小笛はいつか、しとどに濡れている自分自身を知ったのである。
静かに愛撫する指が、熱く濡れてゆくのをおぼえる。感激が胸を浸して新九郎は、われにもなく青年のころのような昂ぶりを知った。
「小笛、おれは、あのときから……」声がかすれ、かすれたままに、かれは感動をあらわにした。
「あのときから、ずっと、そなたを……思うていたぞ」
「わたくしも！」
指を浸す熱いものは、そのまま小笛の情熱を伝えている。それはかぎりなく溢れ、かれの逞しいいのちを待っているようであった。
「小笛、もはや放さぬぞ」
かれのものも熱く硬いのである。潤んだ肉襞が、羞恥と期待でかれを受け入れた。その部分は、嘗て男を許したことがないにもかかわらず新九郎を容れている。恰も、新九郎のための存在であったように。
小笛の気持は、たしかに、新九郎を生涯に一人の男と決めていたようである。
もしも、新九郎との再会がなかったら、小笛は、生涯男を知らずに通したかもしれない。
新九郎にすがりついて、小笛は歓喜に泣きむせんだ。これまでの過してきた青春が、無駄ではなかったという思いと、男の愛撫を受ける歓びが、一度に、小笛をめくるめく情感の渦の中に巻き込んだのである。
新九郎は小笛の肌に溺れてゆく自分を嬉しく思った。
今川家中の勢力争いや、堀越公方家の陰湿な内紛に巻き込まれて過した歳月が、何か虚しい。
男の仕事だと思っていたことどもが、この感激に比べる

と、なんと、愚かで、虚しいものに見えたろう。
いのちがけで築きあげた楼閣が成ったとき、ふっと、襲ってくる淋しさに似ていた。いかに壮大華麗なものを築いたとしても、それは人間の心とは無関係なものだ。楼閣は楼閣として存在するにすぎない。
人間の手になるものは、それが完成したとき、人間を拒否しはじめるのである。
その虚しさに比べると、小笛とのこの時間の充実は、生きてきたことの歓び、そのものだった。
小笛の熱い肌が、眼が、唇が、乳房が、それを物語り、表現している。
そこには、生き生きとした生きものの男女の歓びがあり、その歓びこそが、永遠のものだった。
新九郎は、行為に馴れぬ小笛を誘い、そして、二人で、その歓びに果てながら、何度も、声を放った。
二人だけの世界であった。闇は二人を優しく見守り、温かく包んでくれている。闇の中に満ちた甘肌の匂いは、新九郎と小笛に、この世ならぬ極楽の花園を想わせた。二人は時の更けるのも忘れて溺れた。

「小笛を娶ることにした」
翌朝、新九郎は小笠原備前守に言った。
「おい、何と申した？」

寝起きが不機嫌な備前守は、とろんとした眼で、新九郎を見た。
「娶ると申した。妻に申し受ける」
「え、おい……寝呆けているのか」
「一睡もしておらぬ」
「ならば、寝たらどうじゃ、おれも、まだ眠い」
「いや、きわめて爽快よ、したがって、頭ははっきりしておる」
「どうだか。頭のはっきりしている男の申すことではないぞよ」
「そのように言うところが、寝呆けている証拠よ」新九郎は豪快に笑った。「おれは小笛を妻にしたい」
「……」
「昨夜、はっきりと心に決めた」
「本気、らしいのう」備前守は眼をこすった。「連れてゆくのか、駿河へ」
「左様、妻として、な」
新九郎の決心が動かぬのを、漸く備前守は知った。
その日からあわただしく婚礼の準備がはじめられた。むろん、新九郎は旅先であるし、すべては簡略に行われることになった。
足利将軍家は、故実典礼にうるさいし、小笠原家、また然りである。

が、場合が場合なのだ。それに京も戦乱で疲弊している。格式通りに行うには、ものが不足だった。
「略式でよい略式で」
新九郎は簡素にやりたかったが備前守の妻女が、少しでも豪華にと配慮し、その好意がわずらわしいほどだった。
「婚礼の衣裳も縫わなければなりませぬ。お支度には、両三日はかかりますよ」
「そんなにすることは要らぬ。一日で片付けてくれい」
「ほほほ、殿方はそれでよろしいでしょうが、女子にとっては一生の祝い事、できるだけのことはしてやらねば」
妻女にしてみれば、素直な小笛が実の子のように可愛いのだ。小笛は小笠原備前守の養女として新九郎のもとへ輿入れすることになったのである。
「婚礼に用いる衣裳は決っています。上着には幸菱、白の小袖で、打掛を着ます。下着はすべて練り物でなければなりませぬ」
「夏は暑いだろうが」
「いいえ、夏は、まる涼を着ますゆえ、左様なことはございませぬ。婚礼には男女とも初日から二日までは白色のものを着ます。三日目には色なおし、をしますゆえ、色のついたものを着ることになっています」
「なるほど、色なおしとは、そういうことか」
「それに輿入れでございますゆえ嫁御の輿の受け渡しにも作法がござります」
こういう輿入れのしきたりは、複雑にするほど、格式を感じさせるものだ。
たとえば、花嫁の入った輿を受け渡すにも、右の長柄から先に受けとらねば不吉だとされているし、輿入れの際の松明役は、庭上でかしこまるのに、左側の役人は左手に松明を持ち捧げるとか、嫁を送り出す場合輿が出てから門火を焚くには門の右の方でしなければならないなどと、現代人が考えると、さして意味のないことが、御大層な約束事になっている。
もともと新九郎は、ものごとにこだわらない、淡白な性質だし、そういう形式よりも中身だと思っている。
小笛と夫婦になるのは、周囲とは、関係ない。夫婦の契りは、夫婦だけのものだ。肉体と心のつながりがあれば、それでよかった。
だが小笠原備前守が養い親となっての入輿ということであれば、かれらの京に於ける地位のこともあるし、感情的にもある程度、かれらを満足させてやらねばならない。
三日間にわたる婚礼は、しかしあとから思うと、やってよかったと思った。
東海道を下る泊り泊りで新九郎と小笛は、その華燭の宴を思い浮べた。
（おれたちは夫婦なのだ……）

青年から壮年へ、振りかえってみると、長い人生だった。いつも、前へ前へと進むことを考えて、気力を充実させてきた新九郎である。

大志を抱いての人生行旅には妻を娶るなどということは考えなかった。

考えるひまもなかったし、不安定な時代に、不安定な一介の旅牢人である身に、妻など持てなかった。いたずらに娶ることは、無責任すぎる。子を生して食わせることもできない。

その思いが、常に、かれを結婚から遠去けていた。その思いを事前にすでに断ち切っていた。

これまで、かれの若さを彩ってきた女の数はどれほどになるだろう。両手の指では、むろん、数えきれない。

その女たちとの思い出は、どれもが楽しく、悔いはない。おのれの行動に悔いを残さないのが、新九郎の人生哲学だし、また、卑劣なことはして来なかったつもりであった。女との交情を一期一会として、その瞬間を楽しみ、相手を楽しませてきた新九郎である。

悔いはない。悔いのない行為には、あと腐れもない。

小笛を妻にするにつけても、したがって忸怩たるものは何もなかった。

(もしもあのとき……)

伊勢ではじめて小笛を知ったとき、境遇の哀れさに同情して、妻にしていたら、その後の発展もなく、同情と愛を混同した悔いを残すことになったろう。旅の宿で小笛を愛撫しながら、新九郎はその意味でも、これでよかった、と感じるのだった。

駿河へ帰った新九郎は、小笛を妻としてみんなに披露した。

新九郎ほどの身分で、またその年齢で、妻子もないのはおかしい。

北川どのとの関係をうすうす察していた者たちも、

(あれは、ひが目であったか)

と、納得した。

北川の夢子は、竜王丸の実母だから、新九郎は、

〝妹〟

ということにしている。

実際に義妹である。血はつながっていない。

したがって、悪く解釈すれば今川家乗っ取りの野心があると見られる。たしかに、新九郎が腹黒い男なら、それも可能だった。

そういう気持にさせるだけ、今川の社稷というものは、魅力的であった。が、新九郎には、そこまで、小汚ない考えはない。

(おれが手を伸ばせば、今川家はあるいは、おれのものになろう)

だが、そんな卑劣なことをしないでも、もっと気宇を大きく持って、眼を関東へ向けるほうがよかった。

早い話が、北川の夢子に、おのれの子を生ませ、長じてのち、竜王丸を殺せば、そのまま、新九郎は、今川家の後見人として、力をふるうことができる。

かれの男らしさは、子の親としてではなく、おのれ自身が武将として、どこまで、新しい道を切り拓いてゆけるかにあった。

その道を歩むことの生き甲斐なのだった。

「小笛と申す、よしなに頼むぞ」

こう言って引きあわした。

北川どのには、寝耳に水のことだった。

一瞬、顔色が変った。が、すぐに平静にもどったのは、それだけ彼女も成長していたのであろう。

すでに竜王丸も長じている。いまの夢子にとって、唯一の頼りは、竜王丸が、

(元服して、一日も早く、駿河の守護大名になること)

だった。

そのためには新九郎しか、頼る者はいない。

いや、新九郎がいなくては、竜王丸が権力の座へ坐ることはおぼつかない。

範満は、約束したことも忘れたように、駿河府中の城から出ようとしないのだ。

「喜ばしいことでございます、祝い事をいたしましょう」

と、率先して夢子は、新九郎の婚礼披露を、自らの手で行った。

石脇城のそれには、新五郎範満も府中から来て出席したが、

「めでたいの、わがことのように嬉しいぞ」

大仰に祝った。

北川どのと小笛が、女らしいいさかいをすれば、ますます竜王丸の力が小さくなる。それを期待しての礼讃だった。

しかし、それも新九郎の計算のうちだったのである。

(馬鹿めが、油断している)

ひそかに、新九郎は、算盤をはじいている。

新九郎は、太田資長(道灌)に対して、約束している。

〝駿河にて乱を起さず〟

新五郎範満に駿府城を預けることだ。

但し、竜王丸の成長後に、範満が隠居することを、その条件としたのだが、

「万一、この約定に違約せる場合」

を想定して、違約に対する罰則を設けなかったのが、失敗であった。

ずるずると、範満は居坐ったまま動かないのだ。

違約した以上、新九郎も約束を反古にしてもよい理屈だったが、

「男と男の約束だからな」
太田道灌の了解を得た上でなければ、範満攻めは、後患を残すことになる。
新九郎は慎重だった。
もはや、一介の旅牢人ではない。その行動には責任が伴うし、将来の大志に差しつかえる。
「関東へゆく」
と、ある日、新九郎は言った。
小笛との寝物語にである。
「まあ、戦さでございますか」
「いや、戦さではない。友人にな、逢いにゆく」
「御供の衆は」
「そのことよ。これは秘密なのだ、おれが関東へまいったことを、府中に知らせてはならぬ」
「では、微行を」
「そうだ。誰か二人ほどの供でよい。太郎と黒丸にとどめよう」
「でも微行と仰せられましたが、あなたさまが不在なれば、隠しおうせますまい」
「そこだ。伊豆に行ったことにする」
と、新九郎は笑った。ここ数日考えていたことである。
「伊豆へ？」
「韮山へな。四、五日で帰ることにしておく。世間にはそうふれておく。そうすれば帰城が十日ほどに延びても、人人は疑うまい」
深謀遠慮はそれだけではなかった。
かれが伴ったのは、前記の二人のほかに荒川又次郎と多目権平だった。
夥しい進物を馬に乗せていったのだが、その一行とは三島で別れている。
新九郎の名代として、かれらは韮山にゆく。
新九郎らは箱根を越した。範満の眼を警戒しなければならなかった。
範満がいま危惧していることは、関東公方や管領に対しても違約したことなのだ。

道灌死す

箱根の山は、歌にある通り天下の嶮である。
江戸時代になっても、わざと、整備をしないで、関東の守りにしたくらいだが、殊に、戦国時代は、越すのに容易ではなかった。
山中城のあたりに関所を設けて、往来を一々、あらためているのも、胡乱な者を入れないためであった。
小田原には大森信濃守氏頼がいる。
大森氏は、西相模の豪族である。三浦半島一円を掌握する三浦時高の庇護を受ける一方、上杉顕定の被官でもあった。足柄郡を領有し、小田原に蟠踞している。足柄上郡の岩原城などにも重臣を配し、勢力を暗示していた。
すでにして、古稀七十歳に達した老齢ながら、壮者をしのぐ、豪勇の漢だった。
倅がいる。ゆくゆくは後を嗣がせようと思っている藤頼が孫のように幼いせいもあって、老齢ながら、頑張っているのだった。
藤頼には、異母兄がいるが、これは、氏頼の意志で、箱根権現の別当になっている。
新九郎が訊ねたのは、その金剛院であった。
大森海実という、その男は、容貌魁偉な大入道だった。
「駿河の伊勢新九郎と申す」
すでに名は聞えている。
「これはこれは、ようこそ来られましたな」
「関東へ下向の途次でござるが、貴殿の雷名を伺ったので、立ち寄りました」
この海実は、棒を使うことで、著名だったのである。
「いや、お恥しい、無聊なるままの手すさびでござる」
「是非、拝見したいものだが」
「いやいや、お目をけがすほどのものではない」
海実は、仄聞したよりも、意外に謙虚だった。
「それがしの棒など、まことに、海坊主が櫂につかまって、あぷあぷやっているようなもので。ははは」
ともかく、旅の疲れを休ませられるように、と、酒を出された。
山菜の料理は素朴だったが、新九郎たちの口にあった。
酒もうまかったが、何よりも、その海実入道の気持が気に入った。
飲むほどに酔うほどに、話が関東の情勢に及び、新九郎

は大いに得るところがあった。
その夜は、とうとう飲み明かしてしまった。
海実入道も、新九郎の博識と人柄に魅せられたように、
「二、三日、逗留なさらぬか」
と、誘った。
「いや、忝けないが江戸に要用がござれば」
「御逗留下されば、拙ない棒振りも御覧に入れようがな」
と、海実は哄笑した。
胸襟を開く、という言葉がある。百年の知己、ともいう。
新九郎と酒を汲み交した大森海実がそれであった。
一つには、箱根の山中深く、権現の社を守る別当職という環境が、大いに感激させたともいえるが、やはり新九郎の人柄であろう。
明日は山をおりるというと、
「小田原に寄って下されい、親父どのにお引き合わせ致そう」
と、書状をしたためてくれた。豪快な漢であった。
箱根権現の別当職といえば、神官である。入道になった理由を聞くと、
「頭が火照るのでね」
と、呵々大笑した。
もともと〝別当〟とは、兼官であり長官であるから、権現社に籠りきりというはずはないのだが、なぜか、海実は、山を降りようとしない。数年も、山麓の小田原にいったことがないという。
ともあれ、紹介状を貰った新九郎は、太郎らを連れて、小田原へ下った。
大森氏頼はあいにくと病床にあった。
「病いの床に臥せっておりまするゆえ、まことに卒爾ながら御免たまわりたく」
その代り、逗留なら宿を仕るし、東行なさるとあれば、案内をつけましょう、という、懇切なものだった。
「では、左様に願いましょう」
新九郎は、申し出をこころよく受けた。
相手が、そこまで、好意を見せてくれるのを、無下に断わるのは悪かった。その好意に全幅の信頼を寄せたわけではない。
むしろ、
(何かあるな)
と、感じた。
より以上の好意には、裏がある。
それを見抜く目がなくては、人の上に立つことはできない。相手に企みがあれば、それを拒否することは、猜疑心がはたらいたことを物語る。
嚢中の錐は、隠してもあらわれるが、むしろ、さらけ出すことによって、その上をゆく手がある。

(乗ってやろう)
と、思った。
相模を東行する新九郎の動静を見きわめたいのであろう。別に新九郎としては、隠すことも、秘密のこともなかった。
(見せてやれ。そうすれば安心する)
七十歳の氏頼が、老獪であろうことはわかっている。内懐を開くと見せて、逆手をとることだった。
この小田原で知った男がある。大森の親戚になる三浦義同(よしあつ)である。かれは氏頼の見舞いのために来ていたのだった。
三浦義同は三浦半島の豪族三浦時高の猶子である。実子ではない。
時高には子がなかった。そこで扇谷上杉氏の一門の高救(たかすけ)の子義同を貰った。
これは政略でもある。扇谷上杉氏とのつながりを緊密にするための方法でもある。
義同の母は大森氏頼の娘とも姪ともいう。はっきりしないが、近しい親類だ。氏頼は、義同には、頼りになる、おじさんといった関係にある。
この義同が氏頼の病気見舞いのため小田原に来ていた。
新九郎に挨拶に出た。まだ二十歳を越したばかりの若々しい男だ。大森藤頼と、どこか似通っている。
「茶を一服、参らせたく存じますが」
初対面の挨拶のあと、義同はそう申し出た。
藤頼は、幼いので、病床の当主に代って、歓待したいという気持であろう。
あとから知ったことだが、箱根権現の別当大森海実との父子の争いは氏頼が義同を我が子のように可愛がるのが原因だという。
その真偽は後段に譲るが、新九郎に対した義同は、長幼の序を心得た折目正しい、青年という印象だった。
「かねがね、御高名は耳にしておりました。一度、お目にかかりたく存じて居りましたが、本日は、思いがけないことで」
と、世辞ではない喜びようであった。
茶を点(た)ててくれたが、その手前も清々しい。当時、わび茶はまだ主流を占めてはいない。
「江戸の太田道灌どのと御面識がある由、伺っておりますが」
茶を喫しながら、話題が歌道に移ると、義同は、目を輝かせていった。
管領上杉定正の武将である太田左衛門大夫資長のことであった。
駿河へ乗りこんで来てから間もなく、資長は入道して道灌と称した。その風聞は、駿府にも伝わって来ている。
「左様、その太田どのへ逢いにまいるところじゃ」新九郎は隠さずにいった。「太田どのの入道頭は、まだ見ていな

いので、楽しみにしておる」
「かたちがよいそうで」と、若いのに、義同はなかなか面白い男だった。「入道なさる方は、いろいろ理由がおありのわけですが、頭のかたちのよい方は、早くに剃髪なさるようですな」
「ほう、そういうものかな」
新九郎は頭の地肌をさわって見た。

「面白い奴だったな」
大磯のあたりを歩きながら、新九郎は義同のことを思いだして微笑した。
「頭のかたちがいいやつほど、早く入道するという」
「そんな莫迦なことがあるものか」大道寺太郎は冗談もわからぬように、真顔で反撥した。「入道せにゃならんから、入道する。頭のかたちとは関係ないわい」
「いやいや、そうともかぎらぬぞ」新九郎には面白く感じられるのだ。「人間には、何歳になっても、しゃれっ気ということがあるからな、ははははは」
「それにしても」
「おいおい、そうむきになるな。頭のかたちが悪いと思われるぞ」
「それがしは、入道するまで、長生きはしませぬわい」
「そうとはかぎらぬさ。入道するもせぬも、老齢で髪が抜け落ちればおしまいだ。それよりは、早くに髪を剃ったほうが、極楽浄土にゆけるぞ」
「おいて下され。第一、それがしには、頭のかたちの良い悪いという、規準がわからぬ」
「恰好がいいか悪いかさ。つまり、頭でいえば、才槌頭がいいわけだ」
「そんなものですか」
「鉢のひらいた頭というであろうが」
「はあ」
「わしのような頭よ」
「ふうん。それなら、入道なされたら如何でござる」
「そうよな……ま、よしておこう」
「ほれ、見なされ」
勝ち誇ったように、太郎は哄笑した。
足もとで、砂が崩れ、ざざーっと、波が押し寄せてくる。ぱっと、砂の上を飛んだ。まだ太郎には精悍の気が横溢している。
「いや、とっておくのだ」新九郎は、涼しい顔でいった。「わしが入道するときは、そうするのが、最も効果のあるときよ」
「……」
「この国では」沖を眺めて、新九郎は、微笑を口辺に漂わせた。「人間の行動に一々、理屈をつけたがる」

「……」
「つまりはそれだけ、行動に意味を感じるのだな。生れて以来、数十年、蓄えた髪を剃り落し、仏門に入るということに、重大な意味を思うのじゃ」
軽々に、その行為を喜ぶべきではない、と思っていた。すでにして、新九郎は、中年を過ぎている。行動には無駄があってはならなかった。
大磯の松籟を聞きながら、街道を江戸へ向っている。その間も、無駄口を叩きながらも地勢や風俗に、鋭い観察の目を怠らなかったのである。
小田原から江戸まで二十里余。馬か足に頼るしかない時代である。今日から見ると健脚は普通だった。
新九郎たちが江戸へ入ってきたのは、翌日の昼ごろである。
健脚だけではない。品川の村で馬を借りた。
大道寺太郎も馬上で、黒丸が、新九郎の馬の口取りをして、江戸城へ来たのだ。
大森氏からつけられた案内の者はその馬の調達をするところまでで、ひきかえしている。
「ここが江戸か……」
新九郎は感慨をもって、四辺の風物を眺めた。
入江が大きい。現在の銀座や築地あたりから浜町、蠣殻町あたり一円、海だった。
海というよりは、隅田川の河口だったというほうがいいかもしれない。
干潮になると、遠浅になって、一面の葦原になるというふうで、大きく入りこんだ溜池や、神田川の小石川池などが今日に僅かにその形態を推測させる。
その意味で、江戸――東京の姿は、徳川氏の入国（天正十八年）以来のものということが言えよう。
それにしても、〝江戸〟という地名が知られるようになったのは、その三百年もの昔からである。
元来、この地は武蔵のくにで、いわゆる坂東武者といわれる武士団――豪族たちの暴れていたところで、その棟梁たる〝江戸氏〟にやっと開かれたところだったのである。
秩父党なる武士団の棟梁とされているが、その年代は、鎌倉幕府が成立したころ、すでに、〝江戸〟と呼ばれるようになっていた。
江が、入江のそれで、戸が入口を意味するものであるから、地名の方が先にあり、その地を領する者がおのれの〝氏〟としたのであろう。江戸氏はこの地に蟠踞して、屋形を築いていたらしい。
その正確な位置は不明だが、麹町の台地あたりであったろうことは、ほぼ、間違いない。
太田道灌が、これを利用し、さらに、徳川氏も、そこに城をかまえ、規模をひろくし、今日の皇居となった。

そう見てくると、たいていの城下町のひろがりと城の変遷と大差はないようである。城を必要とする条件は、山城と平城の違いくらいで、あとは変らない。

窪地や湿地に城を作ることは意味をなさないからだ。

地勢的には、そのことが言明できるが、道灌のたてた城は、今日の概念から見ると、随分、貧弱なものだった。石垣もあったかどうかは疑わしい。

史実では、長禄元年に道灌が築いた城が、「関東に甲たり」と、怖れられたというが、はたして、それほどのものだったかどうか。

普通、城というと、白亜の天守閣を思い浮べる。傲然と聳える堅固な石垣も、城のイメージの一つである。

が、それらは、たいてい安土城などが織田信長の手で築かれて以後のことで、それまでの城は、おおむね、木や竹で作られていたといってもいいかもしれない。

ただ、石垣は、場所によっては丸石の乱積みなどはあったであろう。この江戸の道灌の城は、

〝石垣などは一ヶ所もなく、みな芝土居でただ竹が茂っているばかり〟

であった、と、後々に、徳川氏が入国して来て、その荒廃ぶりに驚いたとして、記録に残っている。

だが、それをそのまま、道灌時代の城と結びつけるのは尚早であろう。

道灌の死後、二百年を経ているのだ。その間、曾我豊後守が守り、北條氏のものとなってからは富永四郎左衛門などが城代となっていた。城主のない時代もある。その二世紀に垂んとする間に、荒廃したとも考えられる。

話が飛ぶが、豊臣秀吉の外征の大本営にした肥前名護屋の城は嘗てない大規模なものであったが秀吉の死により外征をやめ、後、唐津城を寺沢氏が築くに際し、弱体した石垣や瓦を運び下して使っている。

おそらく〝江戸城〟の石垣（丸石であったろうが）なども、近隣の城や護岸工事などに使われてしまったのではなかろうか。

もっとも、太田道灌は戦略家であり、その在世中、殆ど、他国から江戸に攻め込まれてはいない。

つまり、江戸城は他国からの侵略に対して、防備の必要の実感がなかった。

その点から考えれば、後世のように見事な城郭が出来ていなかったという反証になるかもしれない。

城内の建築もしたがって、瓦葺きなどは、一棟もなかったといわれる。

この点に関しても、いささかの疑問は残るが、記録にはそうなっている。

瓦どころか、板をうすく削いで〝ずらし重ね〟にする、いわゆるこけら葺き（檜を最上とする）すらもなかった。

いずれも、粗雑な板葺きや萱葺きだったらしい。

どの程度、信用がおけるかわからないが、とにかく、後世の江戸城の規模や壮大さを想像するとまるきり違ったものになる。

おそらく、江戸城は麹町の高台に空濠を掘りめぐらし物見の高楼と矢はずま、柵に萱葺きの二階門などが見るべき姿だったのではあるまいか。

日比谷の入江が、大きく湾入している。

「やあ、あれは、何事でござろうか」

大道寺太郎が、小手をかざして眺めやった。

「夥しい軍船でござるぞ」

「いくさ船か？」

と、新九郎も眼をほそめた。近ごろ眼が遠くなっている。

「いくさ船とも思えぬが」

幟がはためき、十数艘の船には、ふなばたに幕をもって飾りきらびやかに装った女たちの姿も見える。

「女がいます」

黒丸が、飛び立つように叫んだ。

「ははァ、女だ。女を混えての船遊びだわ」

江戸城の方から、数十人の群れが入江の方にやってくる。大半が武装しているのだが、これは当時の常識だ。乱世では、いつ攻め込まれるかわからない。理由なぞは後からつけられる。いつ何刻でも攻め込まれても、応戦できるだけの用意は必要なのだ。

「女ばかりではありませぬ」

若いだけに、眼のいい黒丸は小手をかざしていたが、またこう叫んだ。

「僧侶の姿も見えまする、二人、三人、いや五人……」

いよいよ、奇怪なことだった。

武士と女と坊主と、呉越同舟というが、身分のやかましい時代に、これだけの階層の人々が同じ船に乗り込むというのは、めったにない。

武装している者ばかりではない。数人は寛闊に平服を着ている。

笛の音が流れてきた。鼓の音も聞えてきた。

「こりゃ、風流なことぞ」

新九郎は馬上で、耳を澄ませた。風の加減か、その妙なる音色が聞えてくるのだ。

「ほう、琴も弾じているようだな……」

関東は草ぶかいところという印象がある。東海地方の温暖で、文化的にも発展しているところから来ただけに、新九郎には、どうしても、関東の粗野な面が目につく。

江戸に入った日にこういう雅びな風流を目のあたりにしようとは思いがけなかったのである。

「――船遊びであろう」と、新九郎は、頷いた。「さすがは、太田どのだ。京でも宇治川や桂川で船遊びを楽しむこ

とがあるが……なるほどな」
やんごとない京の上﨟姫と堂上公卿たちばかりが、船遊びをするとはかぎらない。殊に太田道灌は歌道に通じている。
「さぞかし、詩歌に通じた人々が乗り合わせていることだろうな」
新九郎は羨ましくなった。
そのとき、数人の武者が馬を飛ばしてくるのが見えた。
「いずくへ参られるぞ！」
先頭の男が嚙みつくように喚いた。
口のまわり、髭だらけである。
三騎だった。あとの二騎は、それぞれ長槍と、半弓を携えている。
乱世である。こういう誰何は当然だった。味方か、しからずんば敵という時代だ。他領に入ったら、不意打ちを喰っても文句はいえない。
「われらは駿河の今川家より参ったもの」と、大道寺太郎が挨拶した。「太田入道資長どのに御意得たい」
伊勢新九郎と聞くと、すぐに髭侍は頷いた。
其許か、と、新九郎を見て、
「殿より駿河に新九郎ありと伺っていた」馬上から入江をふりかえって、「残念した。すでに、船へ乗られたぞ」
「ほう、あれに……」

「今日は船遊びでな、鎌倉から名僧が多数、まいられておる」
鎌倉の建長寺、円覚寺の僧侶が来ているということだった。
「左様とあれば、邪魔をするのも悪い。帰城なさるころを見計らって城の方へ伺おう」
「いや、せっかく駿河から見えられたのに、そのような扱いはできませぬ。ともあれ、船着きの方へ来られい」
三騎は案内に立った。
今日のために、入江の船着き場には、小屋が建てられ、食事の支度などで、女たちが働いている。
船の上で酒を飲み、ものを食うのであろう。その膳部の用意をしているのだ。
髭侍は、竹田大炊介と名乗って武将らに引き合わした。
床几を奨められ、休んでいる間に、使番が小早に乗って、注進にいった。
「せっかくの興をさまたげるのでは」
と、新九郎は気になったが、やがて、飛ぶように漕ぎ戻ってきた使番は、
「殿に申し上げたところ、非常なる喜びようでござった」
「おお、それはよかった。興をさまたげては、われらの真意が伝わり難いゆえ、遠慮仕るつもりであったが」
「それどころか、珍客、駿河より来たる、と仰せられまして。ただちに、お迎えせよとの」
「え、これからでござるか」
「いかにも。さ、あの舟にて」
断われなかった。新九郎は、小舟に乗った。
当時の船遊びである。徳川時代の初期のように五間六間という大船はない。大道寺と黒丸は遠慮することにした。
エッサエッサと漕ぎ寄せてゆくと、数人が乗った御座船の中から、潤んだ視線を新九郎にそそいでいる女がいた。
女は、新九郎の名を使番が口にしたとき、はっとしたのである。
反射的に、太田資長入道道灌の顔を見た。
女性はほかに二人いた。が、二人とも中年で、酒肴の支度をしている者たちだったし、その女だけが身なりも艶麗だし、美貌が冴えていたのである。
「……」
新九郎が、はっとしたのは、舟が三間ほどの近くに寄ってからだった。
あやうく、声を洩らすところだった。
（おりょう！　おりょうではないか）
姿は変っている。
一目でわかった。贅美な打掛を着て、これは太田道灌の寵妾にちがいなかった。
そのために、一度は、おのれの目を疑ったのである。が、たしかにおりょうなのだ。
（こんなところで!?）
驚愕に応えるように、おりょうは目礼して、微笑した。
久しぶりだった。他人目がなければ、船から船へ飛び移って抱きしめたろう。
（道灌のおもい者になっているのか？）
あれから何年経ったろう。年月の経過を感じさせない美しさだった。
最初に逢ったときから、派手なところのない、静かな容姿が、清楚な感じで、男心に訴えるものを持っていたのである。
その日陰の花のような内向性の慎しさが、豪奢な衣裳に包まれると、自ずと気品があらわれていた。
苦難の月日も、彼女の場合、強い意志によって、避けられてきたのだろうか。少なくとも、苦しみはその容姿をそこなうに至っていなかった。
むしろ、衆生の苦難を、そのおだやかな微笑にくるんでしまう慈悲観音のように、おりょうは、昇華していたようである。
「――よう在せられた」
二人の視線に気づかぬように、道灌は声をかけた。
「伊勢新九郎どのだな、よいところへ来た。さあ、船へあがられよ」

道灌は、あのころから見ると、頬に肉がつき、肥ったようだ。頭を剃って入道していたからかもしれない。

「今日は、ゆるりとなされることだ。まるで、お招きしたような塩梅だった。ははは、心が通じたのであろう」

「一別以来、健勝の体にて、祝着に存ずる」

「おてまえも、健やかに見ゆるぞ、駿河に伊勢新九郎あり、と、随分評判は、関東にも聞えている」

道灌は、同船の僧侶たちを一人一人、引き合わした。

いずれも鎌倉の建長寺、円覚寺などから招かれた詩僧であった。

道灌の子の資康や、甥の太田資忠や、主人の扇谷定正の舎弟である朝昌などは、近くの船にいた。

鼓と笛と酒——船は、相連なって、大川へ出ると、千鳥を騒がせながら、遡った。詩を作る者、それを吟じる者、船遊びの極致である。

一艘の船が寄ってきた。

「おお、万里どのだ」

僧侶の一人が言った。

やはり僧侶が手を振っている。美濃の禅僧で、道灌とは年来、交友していた万里集九である。

「出来ましたぞ、拙ない詩なれども、まずお聞き下されい」

船を平行させながら、読みあげた。

千里舟をやる浪
おのずから花の如し
春遊、天涯にあるを覚えず
隅田の鷗は
正に都鳥なるべし
鼓吹晩に来りて
末は霞に入る……

まことに、長閑なる船遊びの風景が目に浮ぶようだ。

「いや、みごとみごと」

道灌も詩歌に通じている。ふなばたを叩いて、褒めそやした。

いうまでもなく、この時代の隅田川は清冽な川であったろう。

葦が水際に生え連なり、遠く湿地や水田がひろがって、所々に、段丘が見え、疎林がその表面を蔽い、集落からは、炊事のけむりが上り、丹沢や秩父の山波も時には見えたに違いない。

江戸の城下は、江戸というよりは、やはり武蔵野の一部であり、隅田川の河口附近の集落という雅景にすぎなかったと思われる。

江戸城もまた、森林に蔽われ、乱積みの石垣の一部や、高楼の屋根などが望遠できる程度であったろう。

隅田川を上り、下る船遊びには、乱世の修羅を忘れようとする道灌の意図が汲みとれた。

「如何じゃ、伊勢どの、一さし、舞われぬか」

「それがしが？」新九郎は、その奨めに驚いて、「無骨者のこの身に、それはチト苦しい。容赦してたもれ」

「ほう、よくなさらぬか」さらりとひいたのは、道灌の性格である。「ならば、この身が」

「おう」

「いや、舞うことは、難い。何か興を添えよう」

「歌を」

「この景色を歌うには、非才にすぎるからの」

道灌は胸のうちに歌心が湧きながら、それが、まとまらぬ歯がゆさを感じていたようである。

「あの、ふつつかながら」と、声をはさんだのは、おりょうであった。「小唄でよろしければ、拙ない咽喉をお聞き下されましょう」

おりょうは、こういって道灌から、新九郎の方に視線を転じた。

それは、遠来の客を、道灌の寵妾の立場から、もてなそうとする女の心映えに見えたことである。

「忝けなや」新九郎は一揖して、「それがしには、何よりの馳走でござれば」

ひたと、おりょうを見た。

視線がからんだ。おりょうは、新九郎だけに聞かしたいのだ。その気持があらわだった。

大胆というほかはない。道灌の前なのである。

どういう経緯で寵妾になったのか、新九郎はもとより知らぬ。が、道灌が寵愛しているらしい様子は、短い時間でもわかった。おりょうに不満があったとすれば思いがけなく新九郎があらわれたことであろう。

新九郎との出逢いと、あの感激の夜は、どんなに倖せな身分になっても、忘れられないにちがいない。

死を前にしての交情ほど、女の胸にきざみつける印象が強烈なものはない。

おりょうにとっては、道灌との結びつき以上のものだったのだ。

「おりょう、そなたの小唄を聞けば一段と酒も美味くなるやれい」

道灌は、酔いの発した顔で促した。

「はい……」

檜扇をさらりとひらいて、ゆるやかに舞わしながら唄いはじめた。

〽年々に人こそ古りて
なき世なれ
色も香も
変らぬ宿の花ざかり
変らぬ宿の花ざかり……

かなしいほど、澄んだ声であった。ほそいが、よく透る声は、ほかの船にも聞えた。人々は耳をすませ、優雅に舞うおりょうの姿を見まもっている。

〽誰見はやさんとばかりに
又めぐり来て
おぐるまの
我とうき世に
ありあけの
尽きぬや恨みなるらむ
よしそれとても
春の夜の
夢のうちなる
夢なれや……

女心の哀しさ、愛しさを、檜扇の微妙な動きに托しての舞いと歌であった。

男たちの誰もが、武将も、僧侶も、うっとりとなって見惚れていた。

最後の歌詞の、〝夢のうちなる夢なれや〟をリフレインして、静かに檜扇をおさめて、おりょうがもとの座に坐ると、道灌が目をほそめて、

「佳きかな、ずんと心にしみ入るぞ」

それにつれて、人々の間から、拍手が起った。自然に湧いた賞讃である。

おりょうは頬を赧らめ、ちらと新九郎を見た。

その眼は、想い想われた二人をひき裂いた運命が恨めしいと、訴えているようであった。

悧口なおりょうである。

道灌に新九郎とのことを饒舌るようなことはしなかったであろう。

過去のことだから話しても、別段どうということはあるまいが、この国の風習では、女性の過去の情事は名誉なこととはされない。

たとえ、知人であることは洩らしても、特殊な関係のことは伏せておいたにちがいない。

船遊びの宴果てて、新九郎は江戸城へともなわれたが、かれの目のあたりした江戸城は遠望したよりも、きわめて壮大で堅牢なものであった。

〝塁ノ高サ拾余丈、懸崖峭立シテメグラスニ繚垣ヲ以テスルモノ数十里バカリナリ。外ニ巨溝浚塹アリ、ミナ泉脈通リ、タタフルニ鱗碧ヲ以テス。巨材ヲ架シテコレガ橋トナシ、以テ出入ノ備ヘトナス……〟

江戸城の大手は、当時どのあたりであったか、諸説あるが、やはり、徳川家康が定めたと同じく現今のように東に向いていたものと思われる。

一説によると、三日月堀の辺という。これは北拮橋門に

あたるわけだが、築城学から見ても、方位の風習からしても、頷きかねるようだ。

「見事なものだ」

新九郎は、嘆賞してやまなかった。

地形の利度の巧みさもさりながら、道灌の築城のワザは、並々ではない。

特に、深い濠に橋をかけて、この橋を切って落して、籠城に備える工夫に感心した。

橋を切り落すのは、さして珍しいことはないが、落ち仕掛が巧妙だったのである。いわゆる〝車はずし〟というやつで、大いなる歯車の噛み合わせで、多勢の力を必要とせずに落せる。

この工夫が拙劣だと、切り落すひまがないままに、敵の乱入を許してしまうのだ。

これだけの工夫がなされていながら、実際には、江戸城は攻められたためしがない。

城を作るに完璧であって、その城に頼ることがない。

これは、剣のワザに練達し、その上で、剣に頼らぬ、いわゆる無手勝流の活人剣の精神を得るのと同じ素晴らしさである。

当時はまだ、その兵法（剣法）なども編みだされてはいなかったが、新九郎は道灌の人物に、あらためて、魅了された。

さらに、大手門から入った城内は三郭になっていたことが、記録にある。

〝ソノ塁営ノ形タル、子城ト称シ、中城ト称シ、外城ト称ス。凡ソ三重ナリ。二十又五ノ石門アリ、各々飛橋ヲ架ク懸崖千仞ナリ〟と。

いうまでもなく、この三郭のうち、〝中城〟と呼ばれるものが後世の本丸にあたり、道灌の御殿はここにあった。地形的には、もっとも高い場所だ。

太田道灌は周知のように歌道に通じた文学大名である。この作るところの歌、詩文、また武人の中でずば抜けているが、おのれの江戸城の本丸の居館には、〝静勝軒〟という軒名をつけていたという。

我が庵は……という人口に膾炙された歌によって、この居館が、蓬屋のように伝えられているが、それはあくまでも歌人としての謙虚さが歌わせたもので、そこには、多分に誇張がある。東洋的、慎みの誇張である。

富士の霊峰を軒端に見る景勝の地であった。

この〝静勝〟の意味を、静寂の地にして、景勝に富むところ、これは〝兵以静勝〟の語から採ったものである。

孫子などと同じく兵書として知られている。〔尉繚子〕の中にある。

この御殿、静勝軒の背後に物見の高楼があった。

道灌は時折、この高楼に登って八方を展望し、戦略を案

じていたという。

新九郎は江戸城に三日間、滞在したが、道灌は連日、かれを歓待した。野試合を催したり、鷹野に出たりした。

江戸城の裏手にあたる市ヶ谷、指ヶ谷白山あたり、また赤坂、渋ヶ谷あたりにくると、兎が走っていたり、鹿が樹間に見えたりした。

江戸城の高楼にのぼって、馬を走らした地点を遠望するのも愉しいものだった。

「よい場所だ」何度も、新九郎は嘆賞を隠さなかった。

「この城あれば、数万の軍勢に攻められても、こたえませぬな」

「さ、どうかな。わしは、まず、攻められぬ工夫をしているのだが……」

道灌はこう言って、ふっと、言葉を跡切らせた。

それは、自慢や衒いではなく、気がかりなことが、頭に浮んだからのようであった。

「城を築くには堅牢にするのが当然、難攻不落こそが、築城の根本理念であろうがな……だが、これが、必ずしも、主家のためになるともいえぬ」

「……」

「世の中とは、難しいものよ」

そこには、ほかに誰もいなかった。

小姓も、おりょうもいない。二人きりである。初夏の空に、二人だけが浮いている感じだった。肝胆相照らす二人の男の間で、隠すものはなかった。

「わしと管領の殿とのことをどう観ているぞ、新九郎」

「どうとは」

「どのような間柄と見ているかじゃ、思うところ言うてくれい」

評判は聞いている。

(関東の扇谷家は、太田資長あっての威勢よな)

そういう噂は、屢々、耳にしている。

前にも述べたように、関東管領は扇谷上杉と、山内上杉にわかれていて微妙な勢力争いがつづいているが、もともと、両家は同じ上杉であって、非常に複雑な血縁関係と、その確執が反目せしめることになったのだが、はじめから、同等の勢力があったわけではない。

争いというものは、同じくらいの力があるところから生じるもので、弱肉強食の論理はあてはまらない。

はじめ扇谷上杉は、山内上杉の下位にあった。

両方とも鎌倉の各々の地名を名乗るようになったのだが、山内は顕定の代には軍勢二十万を号していた。

関東一の大勢力であり、その力は、公方の成氏も怖れていた。多くの坂東武者は、かれの被官となっていたのだ。

当時、扇谷上杉定正が顎で動かせる武者は、たった百騎にすぎなかったという。

その関係は、定正自身の表現をかりれば、

「膠飄の遊ぶに似たり」

というほどの大差だった。

太田資長は、その卓抜な才能と戦さ巧者と人柄によって、心服する者を増やしてゆき、それはそのまま、主家たる定正の勢力の伸長となって、いまや、山内顕定に拮抗するほどの勢力にのしあがったのである。

——扇谷どのは山内より分国(領地)は少く軍勢も僅かなれども、太田父子の善政を聞き及び武功の者集る事その数を知らず……

と、〔永享記〕にある。

道灌の野心がどれほどのものであったかは、よくわからない。

人間は一すじの道を歩いてゆくうちに、思いがけなく、その道が、大きなものになっていることに気がつくことがある。

荒野を歩いているつもりが、おのれの通って来たあとに、道がつくことがある。

そのとき、その涯に何を見るだろうか。

その道を歩み進むのが、おのれに与えられた使命だと観じるか、

(自分の道は、本来、これほどのものではなかった)

と、謙虚に省みるかである。

(こうあるのが運命だ)

多くの者はおのれの器量を過大に評価する。

道灌が器量人である以上、ここで手を退くに至らなかったのは、当然かもしれない。

かれは、江戸城と川越城を改築し、益々、堅固なものにした。

それが、顕定の猜疑心を増したのである。

「道灌、謀叛!」

の噂が流れた。

出る釘は打たれるという。

太田道灌の器量が成果をあげれば、あげるだけ、これに反対の動きが生じるのは世のならいである。

重臣たちの間に、

「道灌の心中こそ恐ろし」

「何を考えているか、計り難し」

と、囁く者が増えたのも、しかたがない。

前出の〔永享記〕には、こう述べてある。

——かゝる所に、道灌江戸、川越の城を構へ、その普請に心を労して隙なかりしかば、久しく出仕もせざりければ、かのざん臣ども、よき隙なりと悦び、道灌父子山内どのを退治すべきため要害を構へ候条疑なしと申上げける間、山内より此事を扇谷へ談合あり……

両上杉の関係は度々言っているように、微妙なものがあ

る。表だった争いではないが、腹の底では、相手の退勢を狙っている。

憎悪反目の底流がある。

山内顕定が扇谷定正へ〝談合〟したとすれば、

「暗殺」

であったろう。

むろん、この記事は後に書かれたもので、そのために必ずしも事実かどうかは判然しない。

こういう記述を明らかにすると話が前後して興が削がれるが、道灌の立場が、複雑なので、書いておきたい。

顕定が、ざんげんによって、道灌の野望を疑ったのは、事実であろうし、そうしたざんげんを受け入れる素地が出来ていたであろうことも、叙上の行動でわかる。

顕定は武将としては相当な漢(おとこ)だが、大人物とはいえなかった。

器量の小さい者ほど、邪心は強い。

(道灌めは、定正のために、城を築いた。つまりはおれを亡ぼす心算であろう)

そう思うと、定正をそそのかしたのだ。

(道灌の野心を御存知ないか、其許にとって代る方寸であろう)

器(うつわ)の大小からいえば、定正は顕定より、下まわる。

(そういえば、江戸城は立派すぎる。川越城も、あそこまで堅牢にしたのはあやしい)

ひが目で見れば、白いものも黒く見えるし、真っ直ぐな木も歪んで見える。

定正は道灌を疑った。

——定正大いに驚き、事実ならばこれ一家不和の基、国土乱逆の端たるべしと、度々専度を下されしかば……。

どう見ても定正は大器ではない。

道灌によって、大身になったのに、その道灌を疑ったのだ。かれが聡明であれば、顕定の謀略に気づくはずであった。

定正の擡頭に対して顕定がどう考えているかがわからなかったとすると、洞察力に欠けていたというしかない。

道灌はおのれが中傷され、定正に疑惑の眼で見られていることを知った。

これに対して、かれは、一言の弁解もしてはいない。

道灌は、暗然として、

「ああ賢子(じし)謀をともにするに足らず、近年当家不才庸愚の者、政務を争ひ、真を乱すなれば、さん者の糺明もあるべし、ただ忠功のもと死を賜りて、衰老の屍(しかばね)をさらさん事、何のいたみか有べき」

とて、陳謝にも及ばなかったという。

実際、そう言ったかどうか。ただ、道灌の心情としては、そうであったろう。

中傷を一々釈明するよりは、臣としてなすべきことをちゃんとしていればいい、と道灌は言った。

だが、日増しに、道灌への疑惑と憎悪が濃くなってゆくのを、かれは暗然とした思いで見ていたのである。

「——先日の船遊びも、それよ」

眼を隅田川へ転じて、道灌は言った。

「わしに他意ないことを、あのような閑々たる遊びで見せたのよ。愚かと思うたであろうな」

「いや」

「愚かと思うてくれた方がよい。ある男は、わしに忠告して、嚢中の錐は隠してもあらわれる、と申した。わしは、こう答えたよ。わしの錐は先が丸いとな」

道灌はかわいた笑い声をあげた。

「しかし、それよりは、錐を蔵しないことが一番よいのではありませんか」

新九郎はこう忠告したが、道灌は首を振った。

「それは城を崩せということだ」

「……」

「この城を」

道灌は高楼から、城を見まわした。

中城、子城、外城は三つの曲輪である。空の内濠があり、清冽な水を湛えた外濠と、緑の樹々、欝然たる森の城である。東の方には沼地をへだてて、隅田川が流れ大海の入江にそそいでいる。

〝道灌がかり〟という言葉が後世伝えられている。これは道灌の編みだした築城法だというのだが、後世の捏造語らしい。

しかし、道灌が後世の江戸城の基盤を作ったのは事実だ。本丸から二ノ丸、三ノ丸と段をなして低く削って、攻め難く、守るに易くしたのは、平城としては画期的であろう。

これを「道灌がかり」と称するのかもしれないが、前代の山城の築城の常識を平城にうつしたといえばそれまでである。一説によると、濠に架けた橋を切り落せる装置のこともいう。

ともあれ、道灌にとっては、この改築なった江戸城はわが子のように可愛いものだった。

新九郎がわざわざ関東に来、江戸を訪れたのは、竜王丸のためである。

範満の横暴を制し、先年の約束を守らせるために、道灌の出馬を願おうとしたのであった。

新九郎としては、あのときの約束もあり、能うかぎり、平和裡に解決したかった。

範満が非を認めて、隠居しさえすれば、

(戦さにはならぬ)

竜王丸の首途(かどで)を血でまみれさせたくない。それは、北川の夢子の希いでもあった。

むろん、それは希望であり、それが成らないときは、
（攻めるしかない）
と、思っている。
戦さに対して、後世の人のような罪悪感は何もない。
ただ、範満も今川家の者である。内紛は、〝今川〟の勢力を内側から削ることになる。それだけ、竜王丸の継ぐ今川家の身上が小さくなる。弱くなる。それをおそれたにすぎない。
道灌に内紛の救済を頼むことは、この場合、賭けであった。内紛に乗じようとすれば、その可能性がある。
新九郎は、道灌を信じた。ことをわけて話せば、それに乗じようとするなど、卑劣なことはすまい。
窮鳥懐へ入れば、の譬えもある。
だが、江戸城に逗留する間、道灌の立場がわかるにつけ、
（道灌の力を借りるのは無理ではないか）
と、思うようになってきた。
あのときは、顕定と定正の命令があった。
が、今度は、道灌自身が、兵を動かすのに、慎重にならざるを得ない立場である。下手に動けば、定正の猜疑心はますます深くなるだけだった。
（頼まないほうがいい）
と、新九郎は思った。
切りだす機会を狙っていたのだが、これなら、言わないでよかった。
（おれの力で）と、決意をあらたにした。（範満を討とう。それしかない）
むしろ、その方がいい、という声が、脳裡の一隅にある。
（竜王丸も、それで男になる）
乱世に男が生きる力は、所詮、血で購わねばならないのだ。
（戦さで、奪る！　それしかない）
その戦さで敗れれば、それもしかたのないことなのだ。
運命は切り拓くものであり、その力の及ばないときは、それが、与えられた全部だと思うしかない。おりょうとの仲もこうなるようになっていたのだろう。
新九郎は、しかし、おりょうが道灌の寵妾になったことを、ひそかに、祝福した。玉の輿には違いなかったのである。
（道灌がこの城に在るかぎりは）
江戸城は完璧だ。難攻不落といってよい。
（この城から出さえしなければ、道灌はいまの勢力を維持できよう）
関東管領扇谷上杉定正の家宰たる権力を持ち、おりょうはその寵妾としての不足のない日々をおくることができる。
男の世界は闘争である。が、女の望むところは、平和で無事な日々だ。

おりょうのために、新九郎は道灌と江戸城の安泰を願った。
明確な数字は記録にないが、当時、道灌の麾下、およそ三千騎。郎党家人など含めて小一万の軍勢を擁していた。
新九郎が駿河へ帰る前日、道灌は城内で、ささやかな宴をひらいた。
この日は、越生から、父の道真が招かれてきていた。
道真（資清）はまだ健在で隠居して悠々と、梅林に囲まれた竜穏寺で余生を送っていたのだ。道真もまた詩歌に巧みな武人であった。このとき七十六歳。
道灌が老体の父を呼んだのは新九郎への好意であった。
その日、道灌は大いに飲み、且つ、気持よく酔った。
「おりょう、一さし舞わぬか」と、奨めた。「明日は新九郎が駿河へ戻る。そなたのような舞いの名手は、駿河には居まいからな」
「はい、でも……」
ちら、とおりょうは新九郎を見た。
新九郎は頷いた。
「それがしからも、是非、所望したい」
おりょうの表情は冴えなかった。
もうこれっきり、二度と逢えないのではないかという哀しみが先へ立ったのであろうか。
その舞いも、歌も、かぎりなく哀切な調子だった。
〽人買船は
沖を漕ぐ
さても
売らるゝ身を
静かに漕げや
船頭どの……
こういう席では不向きな歌であった。哀しみが大きい。
道灌は眉をひそめた。
かれはおりょうが舞い終ると、間をおかせず、すっくと立って、
「白楽天じゃ」
朗々と唄いはじめた。
〽春をとぶむれど
春駐まらず
春帰りて
人寂寞たり
〝落花〟と題する詩であった。道灌の声は力強くよく透った。
〽風を厭えども
風定まらず
風起りて
花蕭索たり……
新九郎はこの宴を生涯忘れないだろうと思った。道灌の

死は、それからふた月あまりの後のことである。

道灌の死に就いては、古来、諸説がある。

それだけ、真相が伏せられていたのだ。

前出の〔永享記〕や〔甲斐国妙法記〕また〔室町殿日記〕などによると、定正が道灌の叛意を見ぬいて急襲し、道灌は抵抗したが、とうとう討たれたというふうになっている。

これは、当時の風聞に拠ったものであろう。

こういう風聞が信じられていたところを見ると、定正がひろめさせたのか、定正が、道灌討ちを否定しなかったのであろうが、事実は、もっと卑劣な手をつかっている。

陰暦七月二十六日、定正は相模国糟屋の館へ道灌を招いた。

糟屋の館というのは、神奈川県伊勢原町である。現在も館址がある。

この館址の西方に糟屋城址があるが、これとは別だ。城の方はその以前に廃城になっていた。

詳しくは、上糟屋山王原の、立原というところで、館址は、北側が谷で、西方も崖になっていて、そのころの館の様子が想像される。

的場の跡というところもあって、当時の土塁らしいものが、日枝神社のうしろに見られる。

この〝糟屋の館〟に定正がいた。

この館がどの程度、贅を凝らしたものであったかは、定かではない。

しかし、江戸城に比べると、これは小さすぎる。定正が、不安を感じるのも無理はない。

前にも度々書いたように、公方とか管領とかは、肩書だけは高いが、直属の家臣団が、常時、傍にいるわけではない。

いうならば、動員力があるというだけで、その意味でも、戦国時代の〝軍勢〟と〝合戦〟の様相が前期と後期とでは随分違ったのだが、江戸城と道灌のありかたは、後期——つまり近世の大名の形態をすでにとりかけている。

これは、定正の目を畏怖させるものだったにちがいない。

定正がどういう口実で呼んだかは明らかではない。

だが、たとえどういう口実であろうとも、道灌は出かけたろう。暗殺の陰謀が判然としていないかぎりは、糟屋の館に赴いたろう。

七月二十六日というと、残暑である。江戸城からでは炎暑砂と埃りで、真っ黒になっていたろう。

「まず、風呂に入り、汗を流すがよい」

定正は親切げに言った。

「これは何よりの馳走でござる」

「さっぱりしたところで、酒など汲もう」

道灌は、奨められるまま、風呂屋に行った。別棟になっている。汗を流して、いい気持になって、出て来ようとしたところに、小口に影がさした。

「如何であったかな、湯の加減は」

嗄れ声であった。

道灌は身に寸鉄を帯びていない。

風呂から上ったばかりである。全裸だったともいうし、下帯だけつけていたともいう。

全裸説は、下帯をつけようとした隙を狙ったというが、当時の入浴方法は、心得ある武人はたいてい、下帯をしたまま入浴する。上るときになって、股間を洗って、新しい下帯をしめる。

そのときは、必要以上に用心するし、手早くしめる。したがって、その隙を狙うというのは難しい。

下帯はしめ、上にうすいものをひっかけたくらいではなかったろうか。

汗と埃りをおとして、さっぱりしたし、下帯もしめ、ほっと、気が弛んだところだ。

かえって、その虚を衝かれたと見るほうがいい。

その小口に近寄ったのは、曾我兵庫頭という老臣だった。還暦まで二つ三つという老齢である。定正の重臣であり、性質は温和だった。

これが、もしも三十代の屈強な壮漢だったら、道灌も気をひきしめたであろう。が、老人だけに放心した。

「馳走であった」

と、道灌は言った。

そして、衣服の方へ行こうとした。

道灌ほどの身分だ。小姓もいたろう。汗を流すのに手を助けたろう。下帯をしめるときは、傍にいて、四辺を警戒していたはずである。

そのあとなのだ。おそらく、衣服を脱いだ場所に、先にひきかえしたのではなかったろうか。

兵庫頭の狙い目としては、図に当った。

「太田どの」

兵庫頭は、道灌の背に声をかけた。

「ん……」

何気なく、振りかえった。

その顔へ、

「まいる！」

嗄れ声とともに、さっと抜き打った。

刺客を、この老人が——いかに戦場往来の古強者とはいえ、老体で承るとは、あまりにも思いがけなかったのである。

「あっ！」

道灌は、袖が翻るのを見るや身を転じた。

が、白光は瞬後に、顔面を襲っている。道灌は肩から胸

へ、冷たく、何かが走ったのを知った。
「む……」
「上意じゃ！」
「卑劣な……当方滅亡じゃ」
血を吐くように叫んだ。
二ノ太刀が、頭を割った。道灌はどう、と倒れた。が血まみれた顔の、唇だけは動いていた。当方滅亡、と。
〝当方滅亡〟
この最期の言葉は、いろいろに解釈されている。
滅亡はわかるが、当方、である。この当方とは、扇谷上杉家自身をさしているのではないか。
道灌の身分が、父の代から扇谷家の家宰として、とりしきってきた以上、扇谷家、そのもののことが、道灌には切り放せない存在であったことだ。
定正は、その言葉を兵庫頭から聞いて、
「まことか！」
と、いったきり、絶句したと伝えられる。正常な精神の持主なら、当然そうであろう。
（しまった、殺るのではなかった……）
と、悔んだにちがいない。
ただ、小心で、猜疑深いというだけだから、最期の言葉にまで、扇谷家の将来を案じていたと知って、はやまった、と後悔したのではないか。
当方、とは扇谷家をさしているはずだ。道灌の器量あっての扇谷家である。
だが、道灌殺害を思いたったときの定正は、その事実まで忘れていたのであろう。
とすると、その一言で、顔色を失ったというのも、俄かには信じられないのだが。
話があとさきになるが、道灌亡きあとの扇谷上杉家は、のちに亡ぼされる。
但し、新九郎こと北條早雲の孫氏康によってである。
ともあれ、このとき、道灌五十五歳。武人らしく、戦場では死ねずに、主君の上意討ちで、それも、身に寸鉄も帯びず横死したのだ。哀れというほかはない。
道灌に辞世の句がある。
かゝるとき　さこそ命の惜しからめ
　かねて無き身と思い知らずば
武人たるもの、いつ何時、死に臨むかわからないので、日ごろから、辞世を詠む者は少なくない。
それにしても、ちょっと出来すぎているようだ。
後世の者の作ではあるまいか。
伝えられているように、上意討ちで、ふいを喰ったのが事実ならそんな歌を詠んでいるひまはない。
それに、
「当方滅亡！」

という叫びに、真実味がある。
こういう言葉は、捏造して出来るものではない。
道灌が死ぬや、供の侍たちはいずれも討ちとられ、用意の軍勢が時をうつさず、江戸城へ奔った。
これを率いるのは曾我兵庫頭の伜、同苗豊後守祐重であった。
合戦もなく江戸城へ軍勢は入った。城兵たちが道灌の死を知らされたのは豊後守がこの城を預かるという上意を伝えた後である。
おりょうはそれを聞いて、目の前が真っ暗になった。
「太田資長どのは、上意によって……」
と、強い口調で曾我豊後守は言いかけた。
父の兵庫頭が討ち取った！　そう言おうとしたのである。
老いた父のなお、豪勇の武者ぶりを自慢したい気持だった。
だが、言いさして、おりょうの顔を見たとき、その言葉が、口の中で消えた。
言えなかった。
おりょうは無言だった。耐えようとしていた。この突然の悲報に耐えなければ、と自分に言いきかせていた。
（いまの世は……乱れた世の中なのだから、こんなことも……）
さっきまで快晴だった空が、突然曇るように、突然、雨を降らせてくるように——こういうこともあるのだ。これが、世の中なのだ。
騒いではみっともない。泣き哀しんでは名ある武将の寵妾たる値うちがない。
（わたしは、太田道灌資長のおもいもの）
その誇りを失ってはいけない。
自分が取り乱すことは、そのまま道灌資長の名誉を傷つけることになる。
これまで関東の雄、歌道練達の武将、文武両道を心得たる武士……それらの賛辞を、すべて泥まみれにしてしまう。
ここで強くならなければ。
おりょうは、顔をまっすぐあげ両手をふとももに置いていた。
さすがに瞼はあけておられず、つむっていたが、その誇り高い側室の姿に、豊後守祐重は、調子よく口上しかけたのが、途中で詰ってしまったのである。
ほかの女たちも集められていた。道灌の妻や、数人の側室もいた。道灌の遺児資康も真っ蒼な顔をしていた。
城内の道灌の居間に集められたのである。
遺族たちの処分についてもまだ決定するところまではいっていない。
豊後守は一刻も早くこのことを伝え、騒擾を鎮めたかったのだ。
資康とおりょうが、間ははなれてはいるが、前面に並ぶ

かたちになっていた。
豊後守には、老いた正室よりも、美しいおりょうの方が目についたのはしかたがない。
かれは、
「――死を賜うた」
とだけ短く言った。
「上意じゃ。みなの者、かまえて、立ち騒ぐことなきよう。よいな」
資康は、はっと、両手をついた。
凝っと目を閉じていたおりょうの両眼から、清冽な玉の滴くが、ほとび出るように睫毛を濡らすのが見えた。
豊後守が何か言おうとしたとき、おりょうが濡れた眼をあけた。
おりょうが眼をあげたとき、長い睫毛におさえられていたように、どっと、堰を切った涙が溢りおちた。
白桃のような頬を濡らしてふたすじ、とどまるところを知らないように流れおちるのを拭おうともせずおりょうは、きっと豊後守を見上げた。
「お聞き致しまする」
「何か」
「遺骸は、如何なりましたか」
「遺骸？」
「はい、たとえ、いかなる所行あろうとも、殁りたる上は、仏でござりまする。手厚く埋葬し、供養しとう存じまする」
豊後守は、ぐっと詰った。
そこまで知らない。一刻も早く江戸城を奪いとり、叛く者あらば斬って捨てよという定正の命を受け、軍勢を率いて乗りこんできたのである。
死体の処置など、考えもしなかった。
「その儀は……身共は存ぜぬ」
「御教示下さいますよう。出来ますならばわたくしどもより、引き取りに参りたく存じますが」
「それは……」
苦汁を呑んだように、豊後守は、顔を歪めた。
が、人情としては、これは自然のことだ。
「身共の一存では何ともならぬがその希いがあれば、糟屋へ案内させよう」
定正からは、遺児や家族を処刑しろとはいってきていない。
道灌の叛意といっても、あいまいなものだし、定正の恐怖から来ているとすれば、尚更、一族に酷い仕打ちはできない。
むしろ定正としては、道灌を討ったあとで、謀叛の証拠をさぐろうとしているのではないか。
そのため、証拠になるようなもの一切を差押えた。

糟屋の館に、調度をはじめその品々を運ぶことになっている。
「では、お館の方へ」
向うへ行けば、どうなるかわからない。叛意があったと見られると一族すべて酷刑を受ける可能性も大きいのである。
が、おりょうはひるまなかった。
その日のうちに、おりょうは豊後守の家来に守られて、南へ下った。
「つかぬことを伺いますが、お手を下されたのは、どなたでございましょう」
「殿でござる」
家来は得々としていた。
「豊後守さま御尊父、兵庫頭さまと承りましたが」
「左様、つまり、大殿が」
「お手を……」
兵庫頭が討ったとは聞いたが、普通の場合は、家来が直接手を下しても、主人が斬ったことになる。責任も、名誉も主人に帰すのが、当時のならいだ。
が、家来の話では、間違いなく大殿なる老人の兵庫頭が、手を下したというのだ。
扱いは丁重だった。
謀叛人としての上意討ちに死んだ太田道灌である。その寵妾となれば、苛酷な取扱いを受けてもしかたのないところだった。
その覚悟はできていた。
むしろ、
（一緒に殺してほしい）
と、言いたいほどだった。
おりょうは、江戸から相模の糟屋館へ送られて来る道々、そのことを思い詰めていた。
道灌によって、やっと、人間らしい倖せを得ることができたおりょうにとって、その不慮の死は、また彼女自身への、死の宣言にひとしかったのである。
薄倖の運命の波に洗われてきたおりょうは、現実につかんだものしか信じられぬようになっている。
一緒に死にたかった。が、それが許されぬならば、せめて、道灌の遺骸を厚く葬り、供養をした上で、
（死のう）
と、思った。
その覚悟と心情が、上杉家の人々の眼には、けなげなものとうつった。
「道灌の寵妾か」
兵庫頭はおりょうが来たと聞いて、ひどく興味をおぼえた。
「道灌めの死にざまを、執こく聞いておりました」

「死にざまを？」
「誰が手を下したかとか、如何ように討たれたかと」
兵庫頭は黙って立ち上った。
おりょうが案内された部屋の外にいって、のぞき見た。
高窓で無双になっている。仄暗いなかに、おりょうはきちんと坐っていた。鈍く栗色に沈んだ床で、円座を与えられていたがそれをよけて坐っている。
床板の上に直接に坐っているのだ。
目を閉じ、手に数珠を持っていた。声は洩れないが、道灌の成仏を願う神妙な姿だった。
（あの女か……）
兵庫頭は、凝っと見守っているうちに、眼頭が熱くなるような感動を受けた。
（道灌はよい女を持っていたな）
兵庫頭には、むろん、道灌を討ったことの悔いはない。さむらいの道として上意を全うしただけである。が、感動はまた別のものであった。
かれは自室へとってかえすと、脇差を抜いた。
左の肘をまくった。
「何をなされます」
家来が驚いて、止めようとした。
「見ておれ、いや、金創をもて」
切傷の膏薬の用意をさせた上で、ざくっと、おのれの左腕を切った。さっと、鮮血がほとばしる。これを手拭いでおさえた。
「殿……」
「繃帯を」
顔色も変えぬ。膏薬を塗って繃帯したが見る見る血がにじんだ。
左腕に繃帯して首から吊った兵庫頭がおりょうの前に姿をあらわしたのは、それから間もなくだった。
「江戸城から来たとな」
兵庫頭は入ってくるなり言った。
「はい……」
「太田資長どのは上意によってこの身が討ち果した」
「……」
「最期の有様が知りたいとか」
「はい、お聞かせ下さいまし」
「われらは……不意打ちした。左様、卑劣にもな」自嘲を浮べて、兵庫頭は言った。「だが、資長どのは、敢然と立ち向うてきた。ほれ、この通りじゃ、見るがよい」
兵庫頭は、繃帯を自らほどいていった。鮮血が生々しい繃帯である。膏薬を塗布した布をひらくと、ぶわっと血があふれ、流れおちた。
「いま少しで、腕を落されるところであった」
「……」

「不意を襲いながら、かような拙ない結果で、羞入っておる。これが、まともに打ち合うたならとてもに、いまごろは、かようにロをきいてはいられなかったであろう」
その話の間も、血はじゅくじゅくと小さな泡を噴きながら盛り上ってくるのである。
あまりにも鮮烈であった。その傷を道灌がつくったものだと思うと、おりょうは、まるでそこに道灌の息吹きを見るような懐しみさえ感じた。
「痛い……」と、兵庫頭は言った。「よいかな」
「は、はい」
「痛いのう、いっそ死んでしまえば、人間、痛みも感じぬが、生きてあれば……痛い」
眉間に深いタテ皺をきざみまた血塗れた膏薬の布をあてた。
「あの、わたくしが」
おりょうは、無骨なその手つきを見ていられず、つと膝を進めて、布を当ててやった。
この男が、道灌を殺したのか。その憎しみを感じるはずなのがなぜか、激烈なものが胸に湧いてこないのだった。
兵庫頭も腕をさしのべて、おりょうの厚意に甘えながら、凝っと、彼女を見守っていた。
それは警戒のゆえではなかった。おのれの死んだ伴の嫁を見るような愛しげな憐れむような目ざしだった。
「この傷は間もなく、癒えるであろうが……」
「……」
「わしは、死ぬまで、この痛みが残ることを願うている」
「え!?」
「武士の義理じゃ。憎しみも怨みもない者も斬らねばならぬ。上意とあればいたしかたなかった」
おりょうは意外だった。
道灌を斬った男の腕の傷に繃帯をしてやる自分も、思いがけない行為であったが、その〝敵〟である兵庫頭のロから、苦渋に満ちた言葉を聞こうとは思わなかったのである。
「手ごわかった」と、兵庫頭は言った。「よき敵……なろうことなら、戦場で堂々と槍を合わせたかった。かような立場に生れたのが、不運というしかない。資長どのも不運、わしも不運……」
それは暗に、道灌誅戮を命じた主君を怨んでいる口吻だった。
主命で討ったものの、道灌が何をしたのか、道灌の罪とせらるるものが、何一つ、かれにはわからなかったのである。
いまとなっては、かえらぬことだが、おりょうも、ここへ来て、しだいに気持が落着いてくるのを感じている。
それはひとえに曾我兵庫頭の人間性によるものかもしれなかった。

（この方の手にかかったのなら）

あきらめもつく。

たけだけしい、ただ、人殺しを役目としているようなつまらぬ者の手にかかったのではないだけに、気持が安らかになってゆくのをおぼえた。

「あの、かようなお願いをしてよろしいかどうか」

おりょうは江戸城を出るときから、胸に抱いていた希みを口にした。

「御遺骸は何処にございますのか、できることなら、一族の者の手で葬ってやりたく存じますが」

「その願いはもっともなことだ」

深く頷いたが、兵庫頭は、なぜか、眉根を寄せて考えこんだ。

それは、困難なことを意味していたようである。

が、真摯なおりょうの表情を見、おのれの行為に慚愧を感じていただけに、突き放すことができなかったようだ。

「何分の尽力をいたそう」と、言った。「確約はできぬが……何せ、御当家では罪人ということになっている。罪人の遺骸は投込みにとり棄てるのがならわしだからの」

「はい、でも、その投込みであろうとも、お目こぼし頂ければ、わたくしどもで引きとりまする」

「いや、それが許されぬのだ。投込みの谷には、山犬や山猫が……」

言いさして、さすがに、あとは口をつぐんだ。

あまりの残酷さに、おりょうはみるみる蒼ざめた。

「ま、何とかする。二、三日待つがよい。殿の機嫌を見はからうて、お取り下げを頼んでみよう」

「お願いいたしまする」

おりょうは涙でうるんだ眼をあげて、頼んだ。いまは兵庫頭しか頼る者はいなかった。

その三日の逗留の間に、しかし事態は悪化したのである。

三日目の朝早馬が北から駈けこんできた。

一縷の希望を、その早馬は打ち砕くものだった。

「逃亡しおったぞ」報告を受けた兵庫頭が怒髪天をつく形相で入ってきた。「資康めが、江戸城を逃げ出したのじゃ」

「まあ！」

「伜の取扱いに苛酷なことはなかったはずじゃ。せめては叛意のないところを見せて、温和しゅうしていればよいものを！」

まだ、道灌の叛心の証拠はつかめてない。いわば調査中なのである。

定正の側としては、むしろ、遺族たちの行動で、判断しようとする含みもあったようである。

したがって、兵庫頭の伜、曾我豊後守祐重は江戸城を占拠し、一族を軟禁して調査している。

兵庫頭は、疑心に憑かれた定正の心を柔らげようと腐心していた最中なのだ。

軟禁状態にあった資康が、看視の目をくらまして失踪したのは、明らかに叛逆を意図するものであった。

武士の場合、その行動は一々が、主義主張を代弁する。武門の常識で判断されてもしかたがない。

江戸城は父道灌が築いたものであり、そこで生れた資康にとっては、我が家であった。隅から隅まで知っている。

何しろ自然の起伏を多く利用したので、城といっても、藪のままの丘だったり、乱積みの石垣などの陥没場所なども多い。

かれが逃亡したのは、巽の櫓の下からだった。

当初、突然、定正の軍勢が侵入してきて、要所を固めてしまったので、資康はしかたなく、軟禁に甘んじていたのだが、その場所の兵がほかへ廻された。

かれは小躍りして、その抜け穴をたどって、空濠へ出、空濠を渡って、藪の中へひそみ、外濠を泳ぎ渡って、とうとう脱出に成功したのである。

「資康逃亡」

の報は、豊後守を激怒させた。

「武士の情けで、待遇してくれた恩を忘れたか」

本来、こういう場合、文句をいわせず誅戮するのが、常道だった。

それをしなかったのは、道灌の叛意の裏づけをするという必要性もあったのだが、恩情が作用していたのだ。

この急報は、また糟屋の館の内部でも、定正をはじめ、人々の怒りを煽ったのである。

「これで、道灌父子の叛意は明白なるぞ」

「道灌の愛妾が来ているそうではないか、何を企んでのことか、きびしく糺明せよ」

「首を討ち落して、見せしめにした方がよい」

そんな声が湧き起ったのだ。

兵庫頭にしてみれば、好意を持っていただけに、一層腹立たしかった。

「聞こう、資康の逃亡は、そなたとしめし合わせてのことではないか」

兵庫頭の痩頬は怒りのため、赧くなったり、蒼くなったりした。

「――存ぜぬことでございます」

おりょうは驚きに打たれながらも、心を鎮めて、答えた。

「まことか」

「はい」

「たばかっても、すぐにわかること、そなたの為になるまい」

「嘘は申しませぬ」

（殺されるかもしれない……）

と、思いながら、おりょうはほかに答うべき言葉を知ら

なかった。
「資康は、いずれ、捕まるであろう」
「……」
「ただちに手配された。捕えられるか、討たれるか、そのいずれかであろう。それもいたしかたないが、問題は、そなただ」
「はい」
「家中の者は、そなたを討てと申しておる」
凝っと、おりょうは、兵庫頭を見上げ、それから、疲れたように眼を伏せた。
「しかたがございませぬ」
どんな刑罰にも甘んじるという姿勢だった。あまりにも素直で柔順なので、兵庫頭は次の言葉を失った。
おりょうの目的は、道灌の遺骸を手厚く葬ることだけだった。
そのあと、どうするか、身の振り方も、念頭にはない。苦難の青春の経験が、先のことなど考えてもしかたがないと悟らせている。
「そなた、やはり、資康と」
「いいえ、存じませぬ。資康どのは、私には戦さのことなど、一切、話されませぬ。まして、かようなことを」
考えてみれば、道灌の寵妾であって、資康の母ではない。血縁ではない。
道灌を中心にして、一族を構成したのであって、その死は、縁のきずなを断ったにひとしい。
道灌には、ほかに資家という養子がいる。これはもともと甥であったが、養子にした。
資康が幼かったので、後嗣を資家に譲るつもりだったのだろうか。あるいは、資康のための後見として考えていたのかもしれない。
そういう複雑な一族構成である。ほかにも、縁辺は多い。一丸となるには問題が多いのではないか。
兵庫頭は、おりょうの言葉に裏はないと見た。
が、他の者はそうではあるまい。
「資康は討たねばならぬ。それまで、そなたは、当家へとどまることだ。そのほうがよいと思うが」
「御遺骸を守らせて頂きまする」
江戸城も奪われたいま、もしも道灌の遺骸を運ぶ先は、資家が居る岩付の城しかなかった。が、おりょうにしてみれば、どこであろうとも、手厚く葬ることができさえすれば、いうことはなかったのである。

元服の夜

太田道灌の死は、駿河へも聞えてきた。
「討たれたか！」
あのときの道灌の言葉を思いだして、新九郎は愕然となった。
「よき侍を……惜しいことをいたした」
宿恨は、しかし、両上杉家の争いによって、巧妙に抹殺されたことである。
「堂々と、戦さで死なせたかったが……」
という思いは、武士ならば当然の感慨である。
新九郎にとって気になったのは、
「おりょうは、何としたか」
おりょうの身の上に、大きな変化が起ったのは疑いない。
「黒丸、その方、さぐってまいれ」
「はい」
「おりょうの安否を、な」
「かしこまりました」
「どういうことになっているか、見当もつかぬが、おれが力になってやりたい」
黒丸におりょうを連れて戻って来い、という意味がこめられていた。過分に路銀を与えたのも、そのためであろう。
できるなら、大道寺太郎か、山中才四郎でも派遣したかった。が、いまの新九郎は、そのゆとりを持たぬ。
道灌の死は、必然的に、今川屋形に蟠踞する範満の意を強くさせた。
そのことは推測に難くない。
「鎖りがはずれた」
と、感じた。
約束した者が死んでしまえば、もう約束を守らなくてもいい。
もともと範満は、そんな男である。約束は破るためにあると豪語して憚らない男なのだ。
かれが、どんな手段で、
(邪魔な)
竜王丸を抹殺しに魔手をのばしてくるか。
その腹の中を見抜いて、手を打たねばならなかった。
新九郎は石脇の城にあって、ひそかに西駿河の被官大名たちに、旧交をあたため、その軍備を計算し、いざといえば、動員できるように配慮した。

その上で、竜王丸に時々、引見させて、関係を深くし、将来を暗に約束した。

範満の方へは、強い態度を見せていないが、万一を警戒して、川岸には、矢倉を組み、朝夕の看視を怠らない。

「大道寺、いよいよ、範満を攻めようと思うが、どうだ」

太郎は髭面をほころばして、

「ほい、その仰せを待っていたところでござる」

「勝算があるか」

「ありませいでか、一騎当千、われら、一人で百人は引き受けましょうぞ」

「強がりだけでは駄目だ。冷静に考えねば、一つ間違うと竜王丸どのも終りだ」

人間の考えは同じようなものである。

こちらが相手を討とうと思うときは、向うでもまた、その気を起している。

範満の方にしてみれば、

(竜王丸も成人したし、北川どのがやいのやいのと、近臣どもをせっついているのであろう。新九郎もそろそろ、シビレを切らすころだ)

悪いことをしているという意識がある。

その意識は、丁度、仇討ちの場合、討たれる側の心理に共通する。

(返り討ちにしなければ)

と、思うと、

(隙あらば、こっちから、討ち入ろう)

ということになる。

範満は虎視眈々として、石脇城を狙った。

道灌の死は、範満にとってもまた制約のワクを解かれたわけである。

(この世の中は強い者が勝つ。正も義もあるものか、勝てば、それが正義だ)

今川の社稷を支えるには、竜王丸のような幼い者ではおぼつかない、というのが、範満とその一派の理論であった。

いままた、その竜王丸が成長しても、

(まだ弱輩ではないか、今川家を任せられる器量ではない)

と、一蹴してしまう。

もはや、誰の目にも、範満の暴戻は明らかであったが、しかし、この十年近い間に、範満の威光は、駿府のみならず、領内に浸透していた。

範満自身も、以前より肥満し、すっかり自信を身につけている。

権力構造というものは、磁石のように、そのものが大きくなればなるのに比例して、周辺に、権力亡者たちを惹きつけるのである。

それは遠望すれば、おそろしく巨大なものに見える。権

力が権力を増大してゆくのは、こうしたメカニズムによるのだが、その巨大さには、また寄生する者をも安心させるものがある。

(新九郎めを、やはり最初に始末した方がよいな)

そうすれば、竜王丸の周辺は糸が解けたように、ばらばらになるに違いない、と思った。

範満は新九郎の股肱である六人の武将たちの切り崩しをはかった。

が、これはみごとに失敗した。その工作に三ヶ月ほどかかったのだが、徒労に終っている。

「まるで同胞のように、信じ合っています。とてもに手を切らせることは」

腹心の者は、むしろ呆れたような調子で報告した。

「そうか。ふうむ。やり難いな」

その範満のところへ、新九郎の方から使者が来たのである。

文明十九年の夏のことであった。

石脇城からの使者は、盂蘭盆会を修するための招きであった。

いわゆるお盆の供養は先祖の精霊迎えの行事で、これには、今川家二家にて行うのは、精霊を迷わしむるもの。大窪寺にて今川家累代の仏の盆供を営むべし。然れば七月十五日に御来集なされ度し。

というもので竜王丸の名で召集している。

小鹿新五郎範満は一読するなり唇を歪げた。

「うまい術を考えおった」

それから、

「新九郎めの策略だな」

と、呻いた。

かれは爪を噛みはじめた。思案するときの癖である。

「その術に乗るものか……いや、乗ったと見せて逆に……」

範満は、絵図を持って来させた。

大きな絵図である。ひろげると一間四方に及ぶ。

床の上にひろげて、範満は両手をつき、その思案をつづけた。

これは、城下だけではなく、安倍川はむろん、宇津谷峠から西、藤枝のあたりまで、描いてある。

東は、狐ヶ崎以東までである。

「大窪寺か……ふむ」

大窪寺は、現在の大窪山徳願寺である。

後世、興国玄居和尚を迎えてあらたに開山としたのは、北川どのが薨じてその法名徳願寺殿慈雲妙夢大姉の法号からとったものである。

いまは静岡市に編入されているが、有渡郡向敷地で、北に山を背負い東南に面した陽あたりのいい山腹で、東には安倍川の広い河面をへだてて静岡市街を望む、いい場所だ。

ここで盂蘭盆会を修せん、というのである。
範満としては、あくまでも今川八代を号しているのだから、これを否定できない。
老臣の瀬名陸奥守も呼ばれて、意見を聞かれたが、
「大窪寺での修会こそ、合点まいりませぬな」
と、小首をかしげた。
「左様さ、魂胆はわかっておる。わしをとりこめて討とうというのであろうわさ」
「多分……それがしも、愚考仕りますが」
「それゆえ、逆手を」
「向うへまいれば、どのような罠があるやらわかりませぬな」
陸奥守の言葉は冷静である。かれは竜王丸に何の恨みもない。ただ、若年の竜王丸より、壮年の範満が今川家を代表するにふさわしいと思っているだけである。
「いっそ、こちらで、修会の予定があると申されては如何か」
「この方でか」
「左様、先殿、桂山宗公（義忠）の長保寺で行うと。されば竜王丸どのも参らねばなりますまい」
「うむ……」
範満は、思わず、小おどりしたい気持だった。
（なるほど、いいところに気がついた）
そう叫びたい思いで、口がむずむずした。それを耐えたのは、かれが弱みを見せたくないからだった。
支配者という者は、容易に家臣の言葉に首肯すべきではない。どんな進言にも、即座に反応を見せるべきではないという、権力者のイロハを守っていた。
おのれの才能の貧しさを悟られないための、尊大さであった。
「それも、悪くはないな」
大様に頷いた。
「悪くはない……」
と、くりかえした。
その表情を陸奥守は凝っと見守りながら、さり気なく、こう申し出ている。
「御下命あれば、それがしが、とりしきりますが」
その口調と目つきには、勿体ぶっても駄目だ、結局すべてを任せることになるだろう、という年長者の自信と、軽侮の色がまじっていた。
それが範満を反撥させた。
「早まるな、まだ決めたわけではない」
「……」
「第一、長保寺に竜王丸が罷り越すと思うか」
「その儀は大丈夫と存じます。もっとも、話の持ちかけようでございますが」

「と申すと？」
「たとえば、こちらから誰かが参ります。ま、一種の人質を出すわけでござる」
「うむ」
「そうすれば、参らざるを得ないでしょう。柱山宗公の御霊に対しましても」
「うむ……交換か。だが、竜王丸を討てば、こちらの人質も、いのちがない」
「そこでござる。竜王丸がまいれば新九郎を呼ばせまする」
「なるほど」
「竜王丸には当然、北川どのも従いてまいるは必定。それに新九郎が加われば、人質は三人」
「ふむふむ、それで」
「こちらは、たとえば、御舎弟の孫五郎どのに乗りこんで頂くのが、良策と存じますが、そこで、新九郎と孫五郎どのとの交換ということになります」
陸奥守の深謀には、もう範満はただ、聞き役にまわるだけだった。
「それで孫五郎どのは無事に戻る。新九郎が向うへ帰れば、非難が起りまする。むろん、このほうより流言をふりまくわけでござるが、新九郎めは、若殿を捨てて、おのれだけが戻った、とかように、言いふらす。これで、人心は、新九郎から離れまする」
「そうだろうな」
「一方、竜王丸もまた、新九郎を憎む。如何でござる。この案は」
瀬名陸奥守の名案は、しかし、現実化はしなかったのである。
範満がそのことを申し出たのに、新九郎が、ぽんと一蹴してきたのだ。
「若殿の長保寺修会には、新五郎範満どの大窪寺へ罷り越さるべし、事は速やかに行われん」
これは返事であるが、範満の心情の間隙を衝いたものだ。
「ぬッ、わしを！」
範満自身を人質にしろという。
さすがに、新九郎に抜かりはなかった。
範満自身が囮りになるほどの度胸はない。いや、陸奥守や孫五郎がうまくやってくれるといいが、その点を安心して任せられないのである。
かれが行かない以上、竜王丸たちが長保寺に来ないとなると、この案は、計画倒れというしかない。
塩買坂で、討ち死にした義忠の遺骸は駿府に持ち帰られ、厚く葬られて、長保寺殿と号され、柱山宗公と称したのは、前に記した通りだが、このとき長保寺という禅寺が開かれたらしい。大岩の天沢寺の塔頭（たっちゅう）である。この長保寺は、後

世、その跡がわからないまでになっているから、廃寺となったのは、徳川時代も、早いころであったろう。
もっとも、義忠の墳寺は、城東郡高橋村（現小笠町）の正林寺にもあって、義忠の五輪塔が現存している。
ともあれ、範満の企みは挫折した。
同時に、新九郎の計画もつぶれた。
狐と狸の化し合いが、結局、零になったようなものだが、新九郎はこうした結果は予測していたのである。
「これで一応、世間体が通る」
実力時代だが、まだ格式や礼節を重んじる風習が残っている。
その筋を通した上で、実力行使に出ようと新九郎は考えた。
奇妙なものだったが、この盂蘭盆会はしたがって、同じ今川家でありながら、二ヶ所で行われている。
実際、義忠の魂魄は、どっちにいったものか、大いに迷ったことであろう。
迎え火が焚かれても、どっちにいったほうがいいか、ホトケさまにはわからない。情からいけば伜とその母親のところがいいわけだが、駿遠守護の今川家という大局に立てば、現在の実力者たる範満を重んじよう。
お盆となれば、盆踊りが賑やかに行われるのは、乱世でも変りはなかった。
いや、乱世だからこそ、一層、庶民は、乱舞のうちに昨日の悔いを、今日の不満を、明日の不安を忘れようとするのかもしれなかった。
その盆踊りの最中に、喧嘩が起った。
安倍川は、静岡市街の西郊を断ち切るように流れている。
現在は川幅がせまくなって、さらに、その川底を細い流れが這っている程度だが、当時は水量も豊かに、川幅いっぱいに清流が満たしていた。
堤防などもなく、手越ガ原から向敷地辺一帯が河原だった。
水際には葦が生え、少し高みになったあたりは水が増すと中洲になるが、雨期に入ったらすっかり水に隠れてしまう。
石ころに蔽われた河原を見おろす山腹に大窪寺（徳願寺）がある。
この河原で盆踊りが行われた。
当時の群集のこうした踊りなどは、自然発生的なものが多い。
現在のように幹事がいて、組織的に会場設定して雰囲気を盛り上げるということはない。
踊りには、もともと、神や仏を招く意味がある。また、喜びが思わず手足を動かさせるのも人間の自然である。
群舞はまた昂奮の渦で、人々を狂喜させるものだ。歌と

踊りの狂熱によって、人々は、日ごろの憂さを忘れることもできる。
お盆も神社のお祭りも、一般庶民にとっては、大した違いはない。要は、僅かの酒で気持よく踊ったり笑ったり出来ればいいのだ。
延年舞でも、田楽でも、そういう庶民の願いのあらわれである。
この群舞のおもしろさは、貴賤男女の別なく、一つの踊りの渦に溶けこむことにある。
駿府の今川館の被官たちやその郎党、家来なども集まってくるし、泉ヶ谷の人々もひろい河原に出てくる。
西と東の者が、この河原に集まったわけだ。
その踊りの熱狂がさせたものか、あらかじめその意図があったのか。喧嘩になった。
鞘が触れた、肩がさわった、こっちを見て笑ったetc……なんでも喧嘩の口実はある。
朝比奈泰熙の被官と小鹿孫五郎の被官がやりはじめたのである。
「やあ、うぬは泉ヶ谷の腐れ茄子だな」
「こやつめ、お屋形ぬすみの古狐めが何を吐ざく」
「文句があるなら、抜け」
刀の柄に手をかけて威嚇した。
「おう、やるか！」
それにつられて、二、三人が抜き放つ。
その周辺の男女が悲鳴をあげた。
日の暮れがたで、まだ残照は西の空を赤くしていたし、山麓には、黄昏の色がにじみ出ている。そろそろ明りとりの焚火に点火されようという時刻だった。
「わっ、喧嘩だ」「斬り合いだ」「危ない、近よって怪我するな」
どどっと、群集が雪崩れた。
悪口を投げ合うのは、相手の気勢を削ぐためである。
打ち刀を抜き放った金仏ノ菅六という男が、
「おりゃ刀を抜いたら、血を吸わせなかったことはないぞ」
と、喚いて、朝比奈の家来へ斬り込んだ。
小鹿孫五郎の方は、はじめからこのことは予期していたようである。目撃者の話では、その金仏が、踊りながら、わざと、刀に反りをうたせて、朝比奈の侍の鐺に触れさせたという。
ところが、喚いたのは、金仏が先であった。
相手が気がつかなかったので、埒があかないと思ったのか、
「やい、何をする。目玉をどこへつけておるぞ」
と、罵ってきたという。
朝比奈泰熙は、今川家の重臣である。竜王丸擁立に、新

九郎と力を合わせている。この日は河原でなるべく諍いを起さぬようにといましめていた。

その鐙を当てられたのは同苗朝比奈久利であった。朝比奈一族の端に連なる身分の低い者であったが、わざと、咎めなかったと、後に語っている。

久利の方から咎めるのならわかるが、相手は、ことを構えるために敢て喚きたてたのだ。

こうなったら、もうしかたがない。

「これはしたり、鐙をあてたのは、その方であろう」

「なに、なに、なんと申す」

金仏は、やにわに、両手をばちりと、目の前で叩き合わせて、

「いまの音はどっちの手が鳴らしたぞ」

禅問答のような調子だったが、これもおのれの行為を晦ますためだったろう。

「どっちが鳴らしたかわからぬ。されば、見た眼を信ぜねばならんわい」

「そうだ、おれが見た」

菅六と踊っていた大前主計允が口を出した。

「ちゃっと、この眼で見たぞ。やったのはうぬだ」

「そうだ、おれの双の眼も見たわい」

山地ノ次郎左と呼ばれる男も、口髭をひねりあげながら言った。

「さあ、謝れ」

謝るはずがないと知っての言いがかりである。

こうなったら、もう斬り合うしかないのが、時代の風潮だ。金仏が斬りこんできたのは、腕に自信があったからなのだろうが、これは、気負いすぎていた。

朝比奈久利は、身をかわしざまに抜き討ちに掬い斬った。これがずばっと、金仏の腕を肘のところから斬り放したのである。刀を握った腕が夥しい血をふり撒いて宙へ飛んでいる。

金仏ノ菅六は色が浅黒く、剛力を誇っていた。金仏という渾名もそのゆえであろう。腕も木の根瘤か閂（かんぬき）のように太い。それが一颯で斬り放された。

朝比奈久利にしても、さしたる腕前というわけではない。こうしたときの手練も、はずみみたいなものだ。

刀を持った腕がみごとに宙へ飛んだのが、その騒ぎをさらに煽った。

「斬り合いだ」

「危ないぞ、近よるな」

「女子供は逃げろ」

恐怖の叫びは、悲鳴の渦をひろげて、群集は崩れたった。宵闇が迫っていたし、足場の悪い河原なのである。大小の石がごろごろしているし、葦や草が生え、平地と違って、凹凸が多い。

一人が倒れると、将棋倒しに、ばたばたと倒れる。女子供の悲鳴と泣き声がつんざき、歓楽の盆踊りが一瞬で、恐怖の修羅場になってしまった。

閃々と刀がひらめき、剣戟と怒号と、血の臭いと——五、六人ずつの斬り合いだったのが、たちまち、双方に味方が増えた。

こうなるのを予期していた者もいたろうし、また、まさか、盂蘭盆会に血を流すようなことは起るまいと、素直に信じていた者もいよう。

が、刃のひびきと悲鳴は、かれらを磁石のようにひきつけた。

目前で、友人や朋輩が斬り合っていれば、黙過できないのが時代の武士である。

たちまち、どちらかに与力するかたちで、抜刀して走り寄る。

その数がおよそ、三、四十人。大変なことになったが、

「鎮まれ、鎮まれ、双方とも、刀をひけい」

大音声で馬を乗りつけた者がある。

三騎。抜身の大薙刀をかいこんでいるのは、騒動を聞いて駈けつけてきたのであろう。

「踊りの宵に喧嘩などはじめおって、何たることだ」

「鎮まれ、鎮まらぬと斬るぞ」

びゅんびゅん大薙刀をふりまわした。馬の蹄の下で石がはねた。

群集は八方へ散っている。だが帰ろうとはせず、そのまま遠巻きになって、この喧嘩を見物しはじめている。

用意の焚火に点火した者がある。

暮れてきたなかでの喧嘩を、よく見ようとするのであろう。乱世にあっても、人間の欲は、残酷さへの興味を忘れきれないものだ。

斬り合っている連中の姿が、火明りの中へ浮び上る。

閃々たる白刃が赤く光り、飛び交う男たちの姿が、まるで田圃のいなごのようであった。

その仲裁に飛びこんできた騎馬の侍たちは、瀬名陸奥守の被官だったのである。

瀬名陸奥守は、範満についているが、表向きは、中立のような顔をしている。

「今川家の恩顧を蒙る身なれば」

という抽象的な言辞で、立場を誤魔化している。

その今川家の正統をどっちに決めるかが、被官たちの執らねばならぬ態度だった。その意味では、瀬名は狡いといえよう。

かれの被官たちも、したがってその意に忠実だった。公けの場では誰が聞いても、通る話をする。

この喧嘩の場でも、多勢の眼がある。

「止めよ、止めよ、双方とも、いたずらに打ち合うな」

馬を駈けこませたから、漸く、左右にわかれた。
「うぬ、邪魔ひろぐな。金仏の片腕の仇をとらずば、ここを一歩も退かぬぞ」
「ええい、こっちは三郎次が虫の息になっているわい。何としてくれる」
両方で、喚きたてるのだ。
血を見て誰もが昂奮している。
「そこを退けい、斬るか斬られるかじゃわい」
「そうだ、邪魔立てすれば、うぬの首も、胴から離れようぞ」
むろん、喧嘩がはじまると、双方とも、屋形へ注進がいっている。
そのあたりにいた連中を引き連れて、執事などが駈けつけてくる。
瀬名陸奥守も対岸から早舟でやってくると、
「この場はわしに預けよ」
と、睨みを利かした。
「ともかく、この件の裁断をお屋形に仰がねばならぬ」
役人たちに差図して、朝比奈の侍たちを引き立てようとした。
そこへ、漸く、新九郎が才四郎や権平を連れて、飛んできたのである。かれにしてみれば、全く寝耳に水だった。
「しまった、早くも」
事を起したか、と、唇を噛んだ。
まだ、機は熟していない。かれの計算では、まだ早すぎたのだ。
いましも、安倍川の渡し舟に乗せて連れてゆこうとするのを見るや、
「待てい、いずれへ連れてゆくぞ」
と、大喝した。
「おお、伊勢どのか」陸奥守は松明の火に、にやりとして、
「これは、遅かった」
「なんと！」
「喧嘩はおさまった」
「……」
「これから、お屋形の裁きに待つ。喧嘩両成敗、左様であろうがな」
「待て。その方、お屋形とは誰のことを申しておる」
新九郎は馬からおりると、陸奥守へ近づいて刀の柄に手をかけた。
「申されよ、誰のことを」
「それは……」
「新五郎範満は幼君御成育までの間の城代に過ぎぬ。それをお屋形と称するのは不届千万」
「……」
「僭称に加えて、権勢におごり、越権の沙汰であろう」

新九郎の大喝に瀬名陸奥守は後の言葉が出なかった。
新九郎の立場も、すでに昔のようにフリーではない。身分がはっきりしている。堂々と対抗できる。
「朝比奈の者どもを連れてまいることはならぬ。速やかに、主人のもとへ返すがよい」
「しかし、それでは、喧嘩の裁きが」
「そのことは、御屋形の前で、理非曲直をはっきりさせればよいではないか」
「……」
「いずれ、泉ヶ谷の御隠殿で、黒白つけることになろう」
「御約束下さるか」
陸奥守も、こうなったら、諦めるしかないが、みんなの手前もある。念を押すことで辛うじて、体面を保った。
「よいとも」新九郎は大きく頷いて、「双方の者の名を記しておけばよい。それに、われらで裏書いたそう」
てきぱきと、話を進める新九郎に、唯々として従うほかはなかった。
喧嘩した連中も、ほっとしたようであった。このまま引き立てられるよりは、あとから呼び出しがあるほうがいい、弁明の用意もできる。
その夜の事件は、こうして、一時的には、おさまったように見えた。
が、おさまらないのは、新五郎範満のほうである。孫五郎と、額を合わせるようにして、無念の歯を噛み鳴らした。
「やり損じたか」
「聞くところによると、新九郎めが、邪魔だていたした由」
「彼奴めがな、くそっ、なんとかせねばならんな」
「せっかく、喧嘩さわぎから一気に攻め立てるつもりでござったのに」
いまなら、戦さは勝つ。
その計算だった。だが、このままで、一日一日経ってゆくと新九郎の方に人望が集まってくる。
竜王丸は一日一日成長して大人らしくなってゆくし、そうなればいやでも、駿遠の人々は、新九郎と竜王丸のコンビに、新政の期待を持つようになる。
範満がおそれているのは、そのことだった。
竜王丸の元服を、なんのかのと口実もうけては反対していたのもいつまでも竜王丸を〝幼い〟という印象を世間に与えていたいからだった。
「そうだ、あれしかない。あれを利用しよう」
範満は何を思いついたか、にやりとして、顎をなでた。
「天殊を呼べ」
範満は孫五郎へ命じた。
「またあの女ですか」

「なんだ、不服か」
「はあ、あの女は信用なりますまい」
「そうさ、信じてはおらぬ」
「ならば、あれに占いを立てさせるなど、御放念下さい」
「わしは信じないが」
にやりとして、また口髭をひねりあげて、
「世間が信じる」
「……」
「世の中というものはな孫五郎、何が真実か、ではない。何を真実と見るか、だ」
「はあ」
「わかるか、世間が真実と思うことが、真実よ」
若い孫五郎には、そう言われてもすぐにはぴんと来ないようであった。
「ともかく、天殊を呼べ。お前が案ずることはない。わしのほうが世間のことは知っておる」
範満の顔は自信にあふれている。
この男はちょっと困難にぶつかると、すぐ表情にあらわれる。
それだけ気の弱さがあるのだがその反面、うまくいきそうだと思うと、強気になるのだ。
孫五郎は退出すると、天殊のところへ、使いを走らせた。
天殊は、範満の天下になると、また以前の名声をとりもどしている。もともと機を見るに敏い女なのだ。
新九郎と範満に、二股かけていたから、どっちに転んでも、自分の生きる道は開ける。
新九郎には、その狡智を見抜かれても、範満の方はまだ、彼女を役に立つと思っている。
以前の場所で、天殊は、大々的に文殊堂陰陽師の派手な宣伝をしては、人々をたぶらかし、金を巻きあげていた。
府中のお屋形、今川屋形のうしろだてがあるのだから、どんなにも強気に出ることができる。
「――おお、来たか」
半刻あまり待たせて、天殊はお屋形へ伺候した。
「相変らず綺麗だな」
十日ほど逢っていなかったのだが、範満は天殊を見るなり、目尻をさげた。
「まあ、上様の、お口上手な」
天殊は、全身に媚をあらわして、からだをくねらせた。
「いや、世辞ではないぞ。そうではないか。いまさら、お世辞をいうほどの間でもあるまい」
「ほほほほ、それゆえ、おかしゅございます」
「いや、こう言いたいほど、綺麗だということだ。女は魔物だというが、全く……」
「あら、いやですよ、天殊は女、上様をお慕いしている女、でございますもの」

「これこれ、それでは困る。文殊の化身たる天殊になってくれねば」
「ほほほほ、ほほほほ」
白い咽喉をそらせて、天殊はけらけらと笑った。
いやしくも、新五郎範満の前で、こんな笑い方をするのは、この天殊くらいのものであろう。
もっとも、〝場〟を心得た女である。家臣どもがいる前では、そうした、はしたないところは見せない。
その辺が、範満に気に入られている点でもある。それに、考えてみると、長い仲だ。範満のような、我儘で陰険で狡猾な男が、この長い間手放そうとしないのだから、天殊は大した女である。
その流し眼だけでも、たいていの男の心をとろかすが、どうかすると、小娘のように見えることがある。
年齢を数えてみると、いい加減ぞっとするのだが、したがって範満は、天殊の年齢を考えないことにしている。
その魅力に、自ら没入することによって、甘い快楽を享受する。
そうしたお互いの技巧と、功利性のつながりが、いつまでも、二人の仲を支えているといえる。
範満にとって、天殊の魅力と、その魔性は必要だし、天殊にとっても、範満の強引さと野心と、今川家の血統は大いに役に立つのである。
それから見ると、伊勢新九郎は男としての価値は大変なものだが、この東海に在る限り範満に及ばない。
なんといっても今川氏の血が強い。その今川氏は、足利尊氏の流れである。
これを至極と見る目からすれば、新九郎などは、（素姓の知れぬ旅牢人上り）にちがいない。
「天殊、そちの力を借りたい」
範満は身を乗り出すようにしていった。
「如何ような」
「占え」
「はい、何を占いましょう」
「そうだな、新九郎めを何とかして、やりこめねばならぬ。その術を考えるのじゃ。あやつに、何か弱みはないのか」
「弱み……」
「そうじゃ、世間に知れては困ることよ」
「ございます」
言下に天殊は言った。
「あるか」
「はい……女でございます」
「女。うむ、それはいい、女狂いいたしているか、それはよい。で、その女は、誰だ」
「北川どのは」

「あ、あれは、駄目だ。妹であろう」
「あやしゅうございますよ、あの二人は」
「うむ……だが、確証がない。第一、新九郎には、妻女がいる」
範満は考えこんで、凝っと、天殊を見て、「いる」と、言った。「お前がいる、ははは、どうだ、これは」
天殊はぎょっとなった。範満の顔を見かえした。
(あのことが、ばれたのかしら)
と、思った。
範満は笑いを含んでいる。が、その眼は、凝っと、天殊の肚裡のなかをのぞきこむように、見つめて、
「お前との仲だ」
「……」
「つまり、新九郎と、お前がいい仲だということだ」
「そんな！　そんな！　嘘です」
思わず、天殊は、狂いたつように叫んだ。
「嘘かな」
範満は意地が悪い。
新九郎と天殊の間に、何かあったらしいことは、範満の情報網に当って入っている。それには目をつむって、関係を保っていたのも、二人の功利性だった。
「ええ、嘘です、そんな、何もありはしませぬ」
「そうか、ま、それでもよい」
「おかしなことを仰有います、何もありませぬ」
「それならそれでよいさ」
にやりとしてみせたのは、実のところはわかっているのだぞ、と、一本打ちこんでおいたのだ。抜け目がない。
「そこでだ、つまり、狂言だの」
「……」
「新九郎とそなたの間で、肌の交りがあったように思わせる」
「困ります、そのようなことは困ります」頑なに、天殊は首を振った。「そのような、ありもしないことを」
「だから、そう見せるのさ」
「いいえ、それだけは、お許し下さいまし」
「わからぬやつだ」
「たとえにも申しまする。火のないところに煙は立たぬとか」
「水けむりということもある」
「御冗談を。その代り」
「何だ」
「占ってみましょう。されば、必ず何かが出ましょう……」自信ありげな天殊であった。「必ず、新九郎の汚点が」
「出るか」
「ほほほ、人間には必ず、汚点がございます。焙りだせば、汚点が出るもの」

「人間を焙るか」
「蛙を火にかざしますと、タラタラと油が」
「ひどいことを申す」
「占いとは、左様なもの」
こんなことを平然という天殊の顔は白く、輝くように、冴えわたっている。
滑らかな頬といい、皺一つない顔は、まるで、二十歳そこそこの感じなのである。
天殊は自信たっぷりに、退出しようとしたが、あ、と何やら思いだしたように、
「一つ所望がございます」
と、範満を見た。
「何が望みだ」
報酬のことか、と、太い眉をしかめた。
「竜王丸と新九郎さえいなくなれば、望みのままに、何でもとらせるというのに」
「いいえ、占いのために」
「ふうむ」
「新九郎の持ち物が、必要でございます」
「ふうむ、どのような」
「何でもよろしゅうございます。なるべく、肌身につけたもの」
そう言ったとき、天殊の頬は、ぽうっと、湯上りしたように上気した。
(美しいな……)
範満はあらためて思った。
もはや、ちょっとのことで顔を赧らめる年齢ではない。もともと、年齢の見当のつかない妖しい女なのだが、それにしても、範満が知ってからでも十数年になる。どう考えても、四十近くなっているはずだと思うのだが、とてもそんなには見えない。
ただ妖女というだけでは足りない、何かが、この女の若さを保っているのだろうが、ともかく、その、恥じらいぶりが、初々しさを感じさせるのだからしかたがない。
「肌につけたものか、ふうむ、新九郎の下帯がいいかな」
範満はふっと、そんな意地の悪いことをいう。
「まあ、おたわむれを」
下帯とは褌のことである。いくら何でもそれでは困る。
「肌着か、そうでなければ、匂い袋とか……」
「なるほど、な、しかし」範満は頷いた。「あいつめ匂い袋など持っておるかな」
「たしなみのある方ですから」
と、言ってしまって、天殊ははっとなった。
範満に気づかれはしなかったかと思った。
新九郎に抱かれたことがあることなど、隠すよりあらわるるはなしという。うっかり洩らしてしまいかねない。

それだけ新九郎の影響は大きい。天殊の心のなかに〝男らしい男〟として新九郎が棲んでいる。

範満に加担して、敵へまわっているのは、新九郎の〝女〟になれない腹癒せであろうか。

「よかろう、両三日、待て」

範満は頷いて、

「どうだ？」

話は済んだ。あとは、男と女である。

範満は両手で抱きよせる仕草をした。抱いてやろうか、というのだ。その行動に直接でなかったのは、それだけ、二人の仲がすでに長いことを意味している。

天殊は上眼づかいに、そんな男を見、笑みを含んで、

「新九郎を討ったあとで」

と、甘い声で言った。

後世のように儒教が道徳の規律とされていない時代である。主従の関係も渇いたものだし、仕官にしろ雇傭にしろ、そこには、功利性がきわめてストレートに受け入れられる時代の背景があった。

それだけに、主人は臣下を信用していないし、また、家来も、主家のために死ぬるよりは、まずおのれを生かす。そこには悖徳も背信もなかった。

たとえば、年俸が一貫文だとすると、二貫文くれるところに、牛を馬に乗り換えても、後世のように誰も非難はしない。

それだけ、おのれを高く買ってくれる——つまり、価値をより多く認めるところに移るのだから、当然のことだった。

そういう時代に、大道寺太郎ら五人が〝盟約〟して終世、新九郎を裏切らず、末代まで、北條家の忠臣となったのは、稀有のことであろう。

範満は、手をまわした。利を以って誘った。

新九郎の身の廻りを整える侍女であった。

「恐ろしい」と、最初、身ぶるいした。「新九郎さまの眼をかすめるなどとてもに」

「なに、新九郎とても鬼神ではない。眼をつむることもある」

口説きの任に当った男は、金袋をちらつかせた。

「一品でよいのだ、できるじゃろ」

「でも、あとが……そのときはうまくいっても、必ず、見つかります。私の仕わざだと知れてしまいます」

「ははは、そのときはそこにいないさ」

「でも」

「それゆえ、これだけの金子がモノになる」

「……」

「これだけあれば、一生、食える。唐天竺に逃散しようと思えば、それも容易じゃ。な、何を恐れることがあるものか」

その半ばをつかみだして、手に無理矢理握らせて、

「な、品物を掠めとったあとは、風を喰って逃げればよいのだ。その前に——わしに渡しさえすればよい」

すみという侍女だった。

新九郎の隙を窺がった。

就寝しているときを最初の日は窺ったが、新九郎には寝ている間も隙がない。

それに肌につけているものは添寝でもしなければ難しい。いや、添寝してでも難しかろう。

となれば、裸身になったときしかなかった。

入浴の世話をする。そのときを狙った。

すみは、新九郎の匂い袋をそっと袖に忍ばせると、何くわぬ顔で、脱衣の間から外へ出た。

匂い袋というのは、香料を入れて、懐中に入れておくものだ。いつもからだが香ぐわしい。昔は女ばかりでなく、社会的に身分のある男はそれだけの心づかいをした。

後に大坂夏の陣で木村重成が兜に香を焚きこめて、戦場に出ていったという故事が、伝えられているが、別に木村のみのことではない。

鎌倉時代から上級武士の間では常識的に行われていたことだ。それが武士のたしなみとされていた。

その匂い袋である。金襴の袋で、紫と白の組紐がついていた。

新九郎は、湯から上って来て、侍女のすみがいないのに気がついた。

「どこへ行ったのか」

脱いだ着物を整えるだけではない。

下帯をとり代えたり、かわいた手拭いを用意したり、こまごまと、手伝うのが仕事である。

新九郎は眉をひそめた。

不審を感じた。

「あっ……」

匂い袋がないことに気がついた。

「すみが？」

盗んだか。

なぜ盗んでいったか。大して金目のものではない。

女が欲しがるのはわかるが、新九郎には目をかけられている。石脇城の主の侍女という身分を放擲してまで、盗むほどの品物ではない。

城主の肌のものを盗むというのは、大変なことだ。

盗みとしては、およそ引き合わない。

（おれにとっては大事なものだが）

需めようとすれば、匂い袋そのものは手に入る。

が、そのものは、二つとはないのだ。購ったものではなかった。大事な贈り物だった。それも、江戸城で、おりょ

うから贈られたのである。
別れ際に、
「あたくしと思って、お肌に」
万感の思いをこめて手渡してくれたものだった。
まさか太田道灌があのような横死をとげるとは思っていなかっただけに、おりょうの身の上にも、変化を来たしたのだが、ともかく新九郎には、思い出と、そして、青春の意味を持っていた。
「すみを呼べ」
新九郎は、まだ悪意には感じなかった。
だが、すみが、所用を申し立てて、乾門から出ていったと聞くとはじめて、
(何かある)
と、感じた。
(あの女が……そのような女とは思わなかったが、誰かに動かされたのか)
おりょうとの思い出を引き裂こうとしたのか。とすれば、妻の小笛だ。
が小笛には、そんなかげはない。
(小笛でないとすれば……)
誰が教唆したか、だ。
もっとも、おりょうから貰ったということを知っている者はいない。
とすれば、ほかの意味だ。
(すみが一生を棒にふってもいいほどのこととなると、男か……金か?)
後者だ、とわかったのは、すみの家を調べさせてからであった。
父親が明日をも知れぬ重病で臥せっており、借銀が嵩んで、妹は人買に売られたという。
そういう境遇では、金で釣られれば、恩義も二ノ次になるのはしかたがないかもしれない。
「すみを探せ。多分、府中からは出ていないはずだ」
それだけの金を出すとすれば、範満であろう。
匂い袋とそれだけの大金とを結びつけると、ほかには考えられなかった。
(しかし、何につかうのか)
匂い袋に密書などを秘匿することはある。
が、いまの新九郎の立場では、秘めておくほどのものは、何もない。
(おれを……罠にはめるか?)
たとえば、府中の城の宝物蔵の中へ落しておく。
戸を破るなど細工しておいて、騒ぎたてる。
いかにも新九郎が忍びこんで何かを盗んだように見せかける。
石脇城の主となった身分で、本城へ忍びこむなどとは、

理に合わないが、それでも世間の半分は、疑いを抱く。
すくなくとも、現在よりは評価が下る。
しかし、その方法は、いささか姑息だ。
(範満は、もっと、大きな術を考える男だ。絶対的な……おれを抹殺できる術を)
韮山の堀越公方の妻女と怪しい関係に見せるか。
公方を怒らせるために。
新九郎が堀越に伺候しているのは、むろん、範満にはわかっている。
富士子が後妻で、先妻の子茶々丸を押し込めていることも、伊豆駿河では知らぬ者はない。
そう見てくると、範満が、富士子と新九郎を結びつけて、スキャンダルを捏造する可能性はあるわけである。
もっとも、新九郎のアリバイがあれば、その企みは潰れるのだが、うっかり、この二、三日うちに韮山へ行けば、申し開きが出来なくなるところだ。
「そのほかの術は?……」
新九郎は、範満の気持になって考えた。
「おれを仆す手段としては……あとは呪い殺すくらいだな」
呪殺。
人形に針を打ったり、人形を焼いてお祈りしたり——呪咀調伏の法も当時は信じられていた。
「ははあ、これか」新九郎は、天殊のことを思いだした。
「あれかもしれん。天殊のやつ、範満に命じられて、おれを呪殺するか」
すみの行方はわからなかった。
「すでに範満が殺したかもしれぬな」
匂い袋が目的だとすれば、すみは任務をやりとげたことになる。この秘密を抹殺するのを範満は躊躇すまい。
「おれを呪殺するとすれば、やはり、天殊であろう」
新九郎のこの推理は、半ば当っていた。
呪殺ではないにしても、調伏に近い祈禱をするのだ。
文殊堂にこもった天殊は、匂い袋を護摩壇に供えて、三日三晩狂的な祈念に費したという。
範満が如何に、その成果に期待したかは、家臣をして、文殊堂の周囲を固めさせ、他の妨害をうけぬよう計らったことでもしれる。
それだけ、範満は天殊の陰陽師としての能力を信じていたようだ。
力しか信じない男が、占いなどに凝るのは面妖だが、おのれの力に限界を知るからこそ、それ以上の力に、憧れにも似た信頼を寄せるようになったのかもしれない。
範満も以前から見ると、変った。
それが成長か、後退かは別として、歳月の経過は否めな

いのである。
範満が、この時代の典型的な武将として、ある一時期を築いたのは、その手腕を評価しなければならないが、かれは、果して、かれ自身が信じていたほどの智勇兼備の武将であろうか。
名門の血統と信望によって、義忠のあとに立つことができたという、それだけのことではなかったろうか。
かれが、新九郎や竜王丸との争いに、あれほど苦慮したということは、やはり、それだけの人徳と信望が不足していたことを物語る。
また智勇を兼ね備えていたなら、その名流からいっても、義忠のあとを襲うのに、それほど難しくはなかったはずだ。
新九郎たちに押しまくられるだけ、弱かったのだ。
範満という男は、いうなれば、義忠と竜王丸の間を埋めるために生れて来たのかもしれない。
それだけの男だった。
駿河の守護大名になるだけの器量に欠けていた部分が、すなわち、天殊の陰陽術に頼るということになったのではなかろうか。
「まだか」
結果が出るのが待てず、何度も範満は、促した。
「まだ、文殊堂の戸が開きませぬ」
家来の報告だけでは足りずに、自身出むいてきた孫五郎が首をかしげて、
「一体、三日三晩も、籠りきりというのは、食事や、大小の用足しはどうなっているのですか」
「馬鹿、わしに聞いてもわかるか」
範満は怒鳴りつけた。
その文殊堂の扉が内から開いたのは、三日三晩経ってからだった。
緋の袴に白衣を着た天殊は、眼が吊り上り、蒼白な面てに、唇だけが鮮烈に朱かった。
蹌踉として、天殊は出てきた。
左右から二人の巫女が抱きかかえるようにしている。
「――すぐに、お屋形へ」
しわがれて、消えそうな声で、天殊は言った。
屈強の男たちが手輿を持ち出す。華麗な模様を四方に透し彫彩色した四人手になる輿は天殊の専用のものであった。
府中の城館では、範満が立ったり坐ったりして待っていた。
「間もなく、天殊どのが参上仕りまするとのこと」
「おお、すぐに通せ」
「かしこまりました」
「余人を近づけてはならぬぞ」
どんな成果があったか。

新九郎を仆せる手だてが見つかればいいのだ。
天殊は、範満の前にくると、崩れるように坐った。
三日三晩の祈禱で、精も根も費い果したようである。
そのからだから、くちなしの花が匂っている。どういう秘香を用いたのか。
「わかったか、天殊!!」
「は、はい……」
何か言おうとしながら、天殊の双眸はともすると、重くかぶさりかけるのだ。
「おい、どうした、しっかりしろ」
範満はかき抱くと、狂ったように、天殊の唇を吸った。
恰も、その唇から、情報を吸いとろうとするかのように、
「匂い袋は、新九郎の匂い袋は、役に立ったか」
「は、はい……」
「申せ、どのような?」
「やはり、女……」
言いさして、また声が消えかける。範満は、ふたたび唇を吸い、あらあらしく揺すった。
「申せ! 女じゃと」
「はい、おりょう……」
「おりょう?」
範満は首をかしげた。聞いたことのある名のようであり、はじめて聞くようでもあった。
「そのおりょうが何とした、新九郎のおんなか、それとも新九郎が手にかけたか」
「よくは、まだ、よくはわからない」
「……」
「新九郎とおりょうが……どこかで」
そのどこかがわからなければ、意味がない。
範満はあせった。
「もう少し、はっきりせぬのか」
「たくらみを……堀越公方を、殺めんと……」
きれぎれの叫びだった。
「おう、新九郎めが! その証拠じゃ、どこで摑めるぞ、どこで」
「東の方に……」
天殊は手をあげて、東を指すと、ぐったりと範満の腕の中に崩れこんだ。
――新九郎とおりょう。
――東の方。
――堀越公方の暗殺の企み。
この三つをどうつなぎ合わせるか。
(まず、事実かどうかを調べあげるのだな、それが最初だ)
そのためには、〝おりょう〟の存在を確かめる。
東の方、とは、その所在を意味するのだろう。だが、韮山の堀越も、この駿府からいえば東になる。

その関連性はどうなのか。
（堀越の近所か、少なくとも西伊豆……）
範満は〝おりょう〟のことを捜らせるのに、意を注ぎはじめた。
新九郎の唯一の弱点だというのだ。
新九郎の以前を知る者などからの聞込みや、現在の新九郎の日常の動向など微細な点まで、あらゆる角度から、調べはじめた。人手はある。完璧を期すのだ。
（新九郎の情婦であろう、そうとすれば、たしかに弱みになる）
範満は思った。
竜王丸はすでに成長しているし、その母北川どのとともに、駿河人の期待と、敬愛を徐々に集めてきている。
これを、たとえば手籠めにしたり人質にしたりすれば、領民たちの反感を買うのは必定。
とすれば、搦手から新九郎を圧迫するにも、母子には手をつけられない。
そこに〝おりょう〟の存在が浮び上ったことは、範満にとって、思いがけない幸運に思えた。
（もしも、情婦であったなら、人質に、いや、オトリにして、新九郎を威すことができる……）
美い女なら、むろん肌を弄ぶのも自由なのだ。
範満はあれこれと空想をひろげていた。

二、三日経って報告が集まったが、
「おりょうという名の女は、この府中には、居らぬようでございます」
というのが、最初の答えだった。
「ただし、昔のことになりますが甲冑師の明珍高義の娘に、その名が居りました」
「あ、そういえば、うむ、思いだした」
「現在は行方がわかりませぬ」
「捜せ、その女のことに違いあるまい。〝東の方〟というのが、手がかりだ」
その次に来た報告は、れいの興津の塩湯で見たという者のものだった。
「十年ほど前のことになりまするが、たしかにおりょうと申しました。当時を知るなかまに二、三あたってみましたが、間違いございませぬ」
「で、興津でな……どこへまいったかわからぬか」
たしかに、興津は、静岡よりも、東の方にあたる。
（東とは、そういう意味だったのかな）
十年近くも前のことでは、どうも役に立たない。
興津――塩湯の客――その関連性から、意外な答えが引き出せた。
「――おりょうと申す女を、歌詠みの宗伯と名乗る男が連れ去りましたが……なんと、その宗伯とは、実は先日殺さ

れました太田資長入道道灌の仮の名でございましたとやら」
「おお、そうか。思いだしたぞ、道灌め、やつして戦さの模様をサグリに来ていたというな。そのとき、おりょうを」
そう頷いたが、範満はふっと不審を眉間に翳らせて、
「したが、おりょうという女、塩湯で何をしていたのか、春をひさいでいたのかな」
「それが、でございます。はっきりはしませぬが、遠江の曳馬の城から遣わされた者だったとか」
「ふうむ、小堀がな……」
「何せ、もう十年近いむかしの話、いまさら、その真偽をさぐるのも、いたずらに波風おこすことになりまするゆえ」
「それもそうだ。まあ、それだけ胸にとどめておけばよいことだ。で、道灌の寵妾になっていたのが、新九郎と、どこで結びつくのか」
「それがわからないので」
ともかく、〝おりょう〟という名の女は、その者に違いない。
明珍高義とその弟子が、甲冑や鍔などの金工として石脇城で起居していることと考え合わせても、その関連性は頷けたことである。
堀越公方の暗殺を企んでいるという、天殊の占いが、当っているかどうか。
その証拠を握ることができれば、範満は優位にたてる。
それを口実に、石脇城へ攻めこむことができる。
むろん、単独ではない。公方政知の指令、管領の軍勢が後押しになる。
「韮山へゆけ」と、範満は東雲之助へ命じた。「おりょうという女を探せ」
「韮山に居るのでございますか」
「馬鹿、わからんから探せというのだ」
「はあ」
「それと、わしの睨んだところ、公方のまわりだな」
「まわりと申しますと」
「きさま、年ごとに頭が悪くなるな」
いまいましげに、範満は舌打ちして、
「女じゃよ、女。きさまも女好きであろうが、公方も同じじゃ、公方の妻女や寵妾や、その辺のところが、新九郎とどの程度に仲を深くしているか、それを捜ってこい」
しかし、範満は数十日を経ても満足するに至らなかった。
おりょうの行方は依然としてわからないし、堀越公方をめぐる女性たちとの間に、新九郎が関わっている様子はない。少なくとも、その証拠はつかめなかった。
ともあれ、新九郎がどういう画策をしているのか気にか

かってならない範満は、ある日、自ら韮山を訪れることにした。
政知は大いに喜んだ。
嘗て、京都から下向の途次、義忠在世のころだが、駿河の府中へ立ち寄っている。
そのとき範満とも逢っているのだ。
「久しいの」
政知は、うすい口髭をなで肥満したからだを脇息へ寄らしていた。
「御健勝のてい、祝着に存じまする」
「ああ、ちと大儀だがの、まま、まだ死ぬまい」政知は笑って、「肥っていると、何かと不便でならぬわ、暑いにつけ、寒いにつけ、不自由なものよ。おお、そうじゃ、名を変えたぞ」
「は、それは……」
「政知の名は捨てる。氏満と名乗っている」
「氏満さま……」
「ははは、その方は範満と称していたな。満の字が同じゆうしたわけじゃ」
「――光栄に存じまする」
「そうであった、そのことを忘れていたわい」
「……」
「わしは、年来、なかなか気分がすぐれぬ者ゆえ、改名すりゃ、運が変ると思うてな。それに、この名は、実を申すと」
と、声をひそめた。改名を子供のように面白がっている。
「鎌倉どのの名を慕うてのことじゃよ」
「はあ」
「氏満どの、世に在られるときは短かったゆえ、わしが、まあ、継ぐことによって、この名を生かせるというわけじゃ」
「まことに、御賢明なお考えと存じます」
「左様に思うか。ほ、ほ、ほ。つまりは、余慶を蒙らんがためじゃ」
政知あらため氏満は至極上機嫌だった。
範満は、この改名を朗報と聞いている。
(偶然だが、幸運だ、おれはついている!)
範満と氏満――それだけでも親近感が抱けるのではないか。
「まあ、数日、ゆるりとしてゆけ、猪狩りでも、楽しんでゆくがよい、この伊豆の山には猪や鹿が多い」
「お言葉に甘えまして」
範満は新九郎と同じようにその日富士子に引き合わされている。
「新五郎どのは府中のお屋形育ちと承りましたが、京にも、度々、お出でになったことでございましょうね」

「まあ、何度かは」
新五郎範満はあいまいな顔で誤魔化した。
「京の上臈衆は、目もさめるばかりにあでやかな御方が多いとのこと」
「いや、それほどには」
「新五郎どのの目から見て、わたくしは、如何でございましょう」
「……」
「忌憚のないところを仰せられませな」
「お美しい……」
「ほほほほ、このあたりでは、どなたも、左様に仰せられますが、ほほほほ、三国無双とか豆相(伊豆と相模)無比とかいろいろに申す方がいます」
「まことに、まことに」
範満はうんざりしてきた。が、富士子はやめない。こういう女にとって、自分の美しさを再確認しているときが、こよなく楽しいらしい。
来客好きという種族には、多分に、そういうナルシシズムがある。遠来の客というと、富士子がはりきるのは、讃辞に浸ることができるからであった。
堀越公方のところにくる客である。富士子のことを悪くいうはずがない。お追従とわかっていても、人間は褒められると悪い気はしないものだ。
ところが、それが度重なるうちに、自惚れ鏡が絶対のものになる。鏡を見ても、自分で自分の眼を晦ましてしまう。
他人の特に、男の口から聞くのは、殊に、楽しいものだ。富士子は自分を褒める言葉を、妙なる音楽のように聞く。うっとりとなるのである。その恍惚の感じは、あたかも、性的快楽にも似ていた。
「わたくしも、京に行きたいと思っておりますが、如何なものかしら、わたくしなどが京へまいったなら、田舎ものと嗤われるようなことがないかしら」
むろん、否定させるために言うのだ。
「滅相もない。御方さまならば」
「はい」
「それはもう、京の上臈姫君など束になっておしよせても、まるで」
「まるで?」
「花園の蝶、いや、御方さまを花にたとえるならば、左様、草のようなもの、御方さまのあでやかさは、左様々々、野菊の群れ咲く中に、ひときわ、派手やかに麗わしい牡丹のような……」
「まあ、それほどでは、ほほほほ」
富士子は満足気な嬌声をあげた。
範満は腋の下にびっしょり汗をかきながら、下をむいて、やれやれ、と、苦笑を嚙みころした。

範満が氏満（堀越公方）と一字を同じくする結果になったことを大いに喜んでいるうちに、新九郎のほうでは、着々と、竜王丸の今川家継承の基礎作りを進めていた。
すなわち、
「元服」
である。
竜王丸が元服することで、名実ともに、義忠の後継者たるを、世に示すのだ。
竜王丸はすでに、成長している。
世の中は実際の年齢や器量よりも、世にあらわれたかたちでしか反応しない。
竜王丸が義忠の後継者たるにふさわしい成人であり、今川家を継ぐだけの器量の持主であることを、世間に認識させねばならない。
新九郎はそのために、
「烏帽子親を誰にするかだ」
と、考えた。
それが先決であった。
「烏帽子親が誰かで、すでに世間では竜王丸の器量を判断する。これを大物にせねばなりませぬ」
と、北川どのにも話した。
「まず、京の将軍」
「それはかないますれば、それに越したことはござりませぬが」
「左様、これはいささか難しいでしょうな」
「では、管領どのでは」
「左様にも考えました。だが、管領と申しても、二人……扇谷どのに頼むか、山内どのにするか。一方を立てれば、一方がつむじを曲げるでしょうな」
「そのあたりが、まことに難しいところでございますなあ」
「扇谷定正どのは、なかなかに腹が黒い、これはうかつにはできませぬ」
「はい……」
「たとえば、扇谷定正どのに頼むとすれば、一時は、よい気持になりましょうが、どう野心を伸ばしてくるやら、烏帽子親は、いうならば、親も同然。多少の無理難題を吹きかけられたときに、否み難いことになります」
新九郎もここを一つ間違うと大変なことになるから、慎重だった。
「力があって、左様な野心が少ない人物。身分も高く……と考えると一人しか居りませぬ」
「では」
「左様、地理的にも、近いし、何よりも、管領に対して、圧えとなりますゆえ」
「堀越公方を」

「そのつもりで居りました。堀越にまいって、お願い致しましょう、おそらく、心よく引き受けて下さると存ずる」
堀越公方にとっても、今川義忠の子の烏帽子親となることは、マイナスではない。
新九郎は、親しく書状を出し、さらに、二、三度、韮山を訪問して、快諾をとりつけた。
「竜王丸元服となれば、新五郎範満は隠居ということになるかの」
「――左様でございます。小鹿新五郎どのは隠居して頂く」
わざと、新九郎は、〝小鹿〟というところに力をこめた。
「当初から、そういう約束でござった」
「おう、そうであったな」
「小鹿新五郎は、何を間違えたかもの忘れが甚しくなったか、一向に隠居を申し出ませぬ」
氏満はとぼんとした顔で聞いている。
公方の立場などというものは、あまり意思表示をはっきりさせない。
殊に、範満が夥しい進物を抱えて来たり、富士子に取り入ったり、なかなか如才ないし、所詮は今川家内のお家騒動であって、公方の立場から、発言することは、話を難しくする。
実際問題としては、公方直属の軍勢などしれたものだ。
土豪と違って堀越公方はいわば旅人が、腰を据えてしまっただけにすぎないのだ。
その立場では、核芯に触れないことが、上手な世渡りといえた。
もともと、あまり頭の良い方ではないし、せいぜい、頭の良いような顔をして、おっとりと、目をほそめてさえいれば、関東公方としての威厳も保て、家来に囲まれて、美衣飽食の御殿生活ができる。
「竜王丸元服いたせば、新五郎も進退を考慮いたしましょう」
「烏帽子親となると、わしが竜王丸の親になるわけだの」
氏満は、うれしそうに言った。
実子茶々丸を狂気ということで、土牢に押し込めてしまったことが、やはり氏満の心を翳らせていたのであろう。
古来、東洋では加冠ということが、人間の身分をあらわす。
冠と帽との違いが、身分の上下を意味して、冠は、したがって、官人たる象徴でもあった。
元服が、少年から成人への表現であり、その際、仮親を立てて烏帽子をかぶせてもらう――つまり加冠の儀式によって、一人前になる。
烏帽子親と烏帽子子の関係がそこに生じる。
これは一時のものではなく、実際の親子に次ぐ関係にな

るのだ。

元服は遠く遡れば、聖武天皇のころからあったらしい。いうまでもなく中国からの移入された風習であるが、貴族階級に伝承され、武門にも及んだ。

殊に、武門では、集団による闘争がその存在の根元でもあることから、元服――加冠による人間関係のひろがりと結合が重要視された。

強者とのそれを望む者が多く、元服の儀式を意義あるものにしていったのである。

今川家の跡とりとしての権威を再認識させるためにも、関東公方たる足利政知あらため氏満に頼むのはきわめて自然であった。

さて、この元服の年齢だが、常識的には十一、二歳から十五、六歳の間に行われる。

公家では、殆どそうであった。これを踏襲した武家も、当然、それに準じたのだが、武家の場合は、もっと、年齢による必然がある。

すなわち、父親の隠居との関連性があるし、戦さによる出陣の必要性が、それを早めることが多い。

そうなると、戦さに出陣の年齢が問題になるが、古い書物で見るかぎり、かなりまちまちである。

たとえば、〔南海治乱記〕には、「十五以下、五十以上の者は大小によらず戦場に出すべからず」とある。

これは十五歳以上が、出陣の資格と読める。

また、〔朝倉始末記〕には、「六十を限り、十五以上打立て」とあり、〔里見九代記〕にも、「十五歳になり奉公相勤むべき時」などと書いてある。

そうなると、十五歳以上は一人前かというと、そうでもないのだ。

一人前なら、すなわち成人式である元服の上限が十五歳ということになるのだが、これを一般的にはまだ若年と見なしている。

ずっと、後世の徳川幕府の大目付の文書では、「幼少と唱え候儀は十歳までにて、十一歳より十七歳までを若年と唱え候」

などというのがある。

もっとも、戦さに明け暮れた戦国時代と、泰平の世では大いに世間の認識が違う。

今次の大戦ではわれわれの周囲でも十七、八でどんどん戦場に出ていっている。

そのくせ、その戦国末期の物語である〔三河物語〕では、徳川家康の子である信康二十歳を「御年にも足らせ給わねども」という表現で、まだ若年だとしている。

〔奥羽永慶軍記〕では、「年にも足らぬ憎き童（わっぱ）」とある。

これが矢島某という十五歳の者のことだ。

年にも足らぬ、というのは大人の年（成人）に年が足らないというのである。

日本語は複雑だし、誇張や悲劇性の修辞のこともある。

が、そうとばかりもいえない例が多い。

「――師氏わずか十四歳の若武者なれども」「御年十五歳、いまだ御弱冠なり」「今以十六歳、いまだ弱冠」等々の表現が随所に出てくるのが〔応仁記〕だ。

これは〔三河物語〕よりも、冷静な記述では定評がある。

これらのことが、竜王丸の元服に、範満をして、反対させる根拠になったのではないか。

それにしても、すでに竜王丸は十八歳。遅きに失したくらいだ。

「烏帽子名は、何としようかの」氏満はそれを考えるのが楽しげだった。「今川家の系図の写しが要るのう。それにより勘案しようぞ」

むしろ、それが烏帽子親になる楽しみであろう。

堀越公方のような閑人には、待ちもうけた役目なのである。

だが、北川の夢子としては、おのれの腹をいためた子の名に、自分の意志を投入したい思いは、並々ではなかった。

「烏帽子親が、名をつけるのでございますね」

「慣例ではそうなっております」

「こちらで決めるわけにはまいらぬのでしょうか」

「さ、それは……」

殊に、元服が遅れ、今川の当主の座に着くことが遅れている。その間の焦燥が、一度に、ぶりかえしたようであった。

「ねえ、新九郎どの、公方どのは竜王丸の烏帽子名について、お前さまに御下問があるでしょうか」

「多分……」

堀越公方は発明な頭脳ではない。

それは噂でも、そうだし、かれが直接あっての感じでも、そうであった。

いわゆる切れ者ではないのだ。頭の廻りは鈍い。今川家系図を勘案するといったが、それも所詮ポーズだけのものであろう。

幾つかの名を口にするかもしれないが、それは適当に評して話を自分の方に引き寄せるのも難しくはない。

新九郎には、その自信があった。

「御下問あれば、お望みの名を申し上げることにいたしまするが」

「頼みます」

「して、何と？……」

「それが、まだ、決めていないのです」

それなら、ここまで心痛することはないではないか。

新九郎は、いまさらのように女心の複雑さに、呆れるような心持だった。

「では、公方の御命名をお受けになればよろしいのでは」
「でも、それでは、わたくしの竜王への気持が済みませぬ」
「……」
「新九郎どの、一緒に考えて下さいませな」
「はあ、それはよろしいが」
「うれしい」
北川どのは、娘のようにはしゃぎ、侍女に命じて大系図を持って来させた。
今川家の先祖の名である。系図をひろげて、名を書きとらせる。
「一字は故殿の御名を」
「慣例ではござるが、必ずしも、そうせねばならぬということはございませぬ」
「義忠どのの、義か忠か……義氏とか、氏忠とか……」
「氏の名は、なぜ」
「お前さまの名ではありませぬか、新九郎長氏……長の字でもよいけれど。義長など如何？」
新九郎は驚いた。
（なんという女だろう）
図々しいというか、大胆というか、北川どのの考えは、飛躍しすぎている。
（何も、おれの名前を……）

竜王丸は義忠のタネにちがいない。
その子に新九郎の名をつけようとするのは、北川どのの非常識な恋心ではないか。
嘗て、北川どのは新九郎と深い関係にあった。
異母妹としての北川どのであったが、新九郎は京のころから、他人として見るようになっていた。
夢子の美しさが、新九郎をゆり動かしたのだ。それほど、夢子は朝廷の上臈姫君たちに比べて遜色がなかった。
「新九郎長氏というより、公方氏満どのの氏というほうがいい」
新九郎は、穏やかに言った。
「ほほほほ、世間には、そう思わせましょう。でも」
凝っと北川どのの眼は、情感を湛えて光っていた。
「わたくしには、どちらでも同じこと、心の中で、そのように思うているのですから」
北川どのの愛情はむろん、新九郎も痛いほど知っている。
が、それを受けとめる新九郎の方には微妙な変化があった。
北川どのが、情を交した異母妹ではなく、竜王丸の母親としての存在の比重を増してきたこと。
新九郎が小笛を娶ったこと。
その男の変化に北川どのはついてゆけなかった。
彼女の方は変りようがない。竜王丸の成長はたしかに寡

婦にとって楽しみにはちがいないが、すべてではない。
新九郎という漢を、義忠よりも前に慕わしく思った過去は、現在にもずっと尾を曳いているのだった。
新九郎が妻帯するのに反対するような、はしたないところはなかった。むしろ、世間の眼からカムフラージュになると思ったことであろう。
新九郎が妻帯してから、からだの関係は切れたが、
（心がつながってさえいれば）
北川どのはそう思った。
その一筋にすがっていたのである。新九郎との深い仲が、竜王丸擁立とは矛盾しない。むしろ、それゆえにこそ、新九郎は力を尽くしてくれるのだ。
功利的かもしれないが、人間の行動と思惟は、そう割切って考えられるものではない。
「氏か……氏を頭に持ってきて、これまでに少ない名だとすると」新九郎は眼をさまよわせた。「親はどうであろう、氏親どの……如何だ」
「まあ、いい名だこと」
北川どのはロの中で復唱してうっとりした。

堀越御所とは頻繁に使者が往復した。
元服の儀式のためである。
それが大仰になればなるほど、今川竜王丸の地位は大きくなるしそれにしたがって、母親である北川どのと、後見たる伊勢新九郎の勢力は強くなる。
範満には、それがいまいましくてならないが、どうすることもできない。
堀越公方が乗気になっている以上、邪魔を入れると、あとはどうなるか、かえって憎しみを増すだけだ。
（なんとかせねば、なんとかせねば……）
かれは、腹心を叱責して、おりょうの模索に意を尽くさせた。
そうしているうちに、いよいよ元服の時が迫った。
元服の儀式は、本来、その屋形で行うのが、常識である。今川家の跡とりである以上、駿府の府中の屋形で行う。
だが、烏帽子親たる公方氏満を、府中へ招くわけにはいかない。公方にしてみても、府中へのこのこ出かけることは、権威上、できない。
そうなると、竜王丸の方で、韮山の堀越へ出かけるしかない。
が、新九郎は、そういうやり方は、前例がない、と止めた。前例がないこともなかったが、それはまた、軽々しく受けとられるのを恐れたのである。
竜王丸が、もっと若く、もっと幼かったなら、それもよい。それだけ、氏満とも親しめる。親しみが深くなれば、結びつきが強力になるのだ。

が、真実のところ、
「公方どのは、大した人物ではない」
はっきり、新九郎は北川どの母子に言っている。
「ただ、此方としては、名前がほしいだけだ」
「はい」
「堀越公方の名前だけだ。それ以上の親しみは、むしろ、ないほうがいいのだ」
「それは、どういうことでございます」
「――深入りは避けることだ」新九郎の口辺に、うすい笑いが浮んでいる。「深入りするのは、万一の場合、共倒れの危険性がある」
「……」
「公方の名前を利用するのは、竜王丸ぎみが、府中の屋形で名実ともに今川家を継ぐために必要なこと。それ以上のものではないな」
そのためには代人でいい。代人が来てくれればよかった。
「ただ、そのためには、如何にも公方が府中へ来るかのように装っておくのが大事だ。範満一派を屋形から追い出さねばならんからな」
ところが、範満の方でも、また屋形から出ない工夫をしていた。
新九郎より竜王丸の元服に就いて、今川屋形に申しこむと、意外に範満は賛意をあらわにして、

「前々から、左様あるべしと思うてな、屋形のうちを整えておりましたぞ」
という返事だった。
もとより、屋形の真の主は竜王丸であって、表向き、範満は否むことはできない。
だが、従来の範満の態度からして、これほど穏やかに話が進展するとは思わなかっただけに、北川どのも、涙を流さんばかりに喜んだ。
「新五郎範満どのも、漸くに、お諦めなさいましたように見えまする」
「さあどうかな、何せ腹黒い狐じゃ、何を策しているかわからぬ」
「でも、今度は、公方どのの烏帽子親と聞けば、範満どの、へたに手出しはできますまいものを」
「そこでござる。左様に此方で思うて安心しているのを見越して、裏の裏をかいてくるやもしれぬ」
新九郎は油断しなかった。
「奴はそんな男だ」
その見方は当っていた。
何かやる、何かが起る……その何かが、正に起った。
屋形の中の調度もすべて新しくしたのだが、唐紙には狩野正信をして、華麗な花鳥を描かしめ、屏風には小栗宗丹、雪舟などのものを集めた。

この正信は、次郎景信の子で、伊豆の加茂郡狩野に生れたが父が将軍義政に招かれて、京にのぼったとき、連れられてゆき、多くの師に就いて画境をあらたにした。
義政の寵を受けて食邑五千貫を賜わったというほどで、その人物画は、群を抜いていた。
名は四郎次郎、このころは大炊助であった。
花鳥ばかりでなく、動物も多い。花とからみあわせたもので、梅に鶯、竹に虎、牡丹に唐獅子等々である。
ところで、その画が出来上ってから間もなく、異様な噂がひろがった。
「府中の屋形に不吉な雲がかかっている」
噂は噂を呼んでひろがった。
府中城では、その流言をひろげた者を捜索したところ、ある僧の口から出たという。
駿河の有渡郡宮川村に清泉寺という寺がある。禅宗で住職は行乙。
同郡大谷村瑞現山大正寺を草創した禅師だが、その功徳たるや、長尾の白狐、三足の野鶏が草創の夜に来て、自ら瑞祥を現じたという。
だけではない、浅畑沼の湖神が老女に化して来て護法神となったという。こうした由来があって、瑞現山と号していたのだが、この老僧がもとだというのだ。
その噂は、むろん新九郎の耳にも入っている。
「府中屋形に不吉の雲とは、何を言いだしたことか」
ともかく、老僧に聞かねばならない。
「竜王丸ぎみの元服にけちをつける気か。禅師を問いただしてまいれ」
新九郎は荒川又次郎と山中才四郎に命じた。
「異様の言を弄するようなら、連れてくるがよい」
はじめから、長尾の白狐とか三足の野鶏とか、話が伝説めいている。
おそらく気がふれているのであろう、と思った。
禅僧にかぎらず、読経三昧の坊さんの中には、一般の生活から遊離しているために、長年月の間には気がおかしくなる者がいる。
妄想だけが先に立って、あらぬことを口走るのであろう。
ところが、荒川らは、手ぶらで帰ってきた。
「居ませぬ」
というのである。
「所化(しょけ)どもの申すところによると、府中屋形から侍が多勢やってきて連れていったとやら」
「なるほど、さもあろう」
範満が匿まったのであろう。
こういう流言には対処する方法が昔からある。
流言者、つまり、この場合、行乙禅師をとらえて、逆に〝凶雲浄化〟の法を行う。そうして凶を吉に転じる。

方法は色々あるが、流言者をとらえて逆さ磔刑にして火焙りにしたり、狐おとし、と称して、燻し殺すこともある。それらの手段をとられることを恐れて、隠してしまったのであろう。

事の事実か否かよりも、〝不吉の兆〟が、お屋形を翳らせているとすれば、そこで元服の式を行うわけにはいかない。

凶変は重ねて、起った。

狩野正信の描いた虎が、夜な夜な脱け出して、屋形の中を徘徊するというのである。

「馬鹿な！」

描いた虎が、歩き出すということなどあるはずがない。新九郎は、それを信じる者を嗤おうとしたが、多くの者が信じているという。その証拠には、きれいに掃いた箒あとに虎の爪あとがついているという。

「――猫のものであろう」

と、新九郎は一笑に付したが、人々は、虎のものだと信じこんで、おびえているという。

こうまで、信じこまれては、どうにもならない。

「こうなったら、致し方ない」新九郎は歎じて言った。

「もはや、異例のことだが、やむをえませぬ。元服の式は韮山でとり行うことに致しましょう」

堀越公方に烏帽子親になってもらうメリットは、あくまでも、僭称ではあっても公方の肩書が魅力的なのだ。

政知改め氏満の人柄や器量に心服してのことではない。むしろ、遠からず、伊豆を乗っ取る心組でいる新九郎にとって、竜王丸の烏帽子親という設定はしたがって表面的なものであった。

元服の加冠が意味する〝親子〟の関係は、密接でない方がいいのだ。

いたずらに、仲が深くなっても困る。烏帽子子の立場では、烏帽子親を攻めるというわけにはいかない。

そのあたりを考えて、新九郎は慎重に話を進めたのだが、こうなったらしかたはなかった。

「府中のお屋形が使えぬならば、伊豆へ出向くしかない」

「はい」

「堀越公方の手ずから加冠してもらおう」

そのデメリットも考えてはいる。

だが、範満を追いだすのが先決だった。十年かかっても、出なかった奴を追い出すためには、多少のマイナスは覚悟しなければならない。

当日。

新九郎は竜王丸と北川どのの輿を守って東へ向けて出発した。

駿河の山西から伊豆の韮山へ。道中の警固は厳重にして、

石脇城や、泉ヶ谷の竜王丸の屋形には、ほんの少数しか残していない。

普通なら、留守城のことは、気を遣わなければならないが、この場合、その点はそれほど気にすることはなかった。範満もこの隙に、石脇城を攻めるほど、愚かではない。

いかに下剋上の世でも、弱肉強食が正義面して罷り通る時代でも、竜王丸の元服の隙を狙って城を奪うなどということはできまい。

これは堀越公方へ対する大いなる侮辱になる。

堀越公方とその勢力は大したことはないが、公方が動員令をかければ管領上杉顕定も動くし、数万騎が集まる。それくらいの力はあるわけだ。

いまの範満には、それに対応する力に欠けている。そういう行動に出るのは、自滅するだけだと知っていよう。

堀越御所は一行を迎えて、賑わった。

後妻の富士子にしても、喜ぶべきことだったのである。

前妻の子茶々丸を土牢に押し込め、おのれの生んだ三男潤を、後嗣にしようとしているだけに、ここで竜王丸に恩を売っておけば、将来、悪いことはない。

めいめいのそういう思惑で、この異例の元服式は華やかに行われていったが、その最中に、突然、早馬が御所に乗りつけてきたのである。早馬は、新九郎のもとへ秘状を齎した。

堀越御所はいつになく人の出入りが多く、賑わっていた。

地元の韮山城からはむろん、伊豆の諸城から祝いの客が集まってきている。

それらの馬匹や、牛車や、家来たちなどが、御所の内外にあふれていた。

また近郷近在の農家からも、物売りに集まって来ている。おうご（天秤棒）に魚籠を下げた漁師がやってくるし、大した賑わいだった。

そこへ、早馬が駈けつけてきたのである。

早馬は狂ったように走ってき、汗みどろの侍が、

「御注進々々、伊勢新九郎どのにお目通り頼ん申す、頼ん申す」

と、呼ばわって、馬上からすべりおりると、がっくり膝をついた。

「何事じゃ、祝儀の席へ、騒々しいぞ」

家臣が立ちはだかると、

「これは葛山の家人にござるが、火急の用件にて是非に伊勢どのにお目通り仕りたく」

「葛山の？」

葛山はこの韮山から、二十キロばかり北方にある。

御殿場線の裾野駅からも、岩波駅からも、数キロ西に入った愛鷹山の麓にある。

黄瀬川の流れを東に見る、愛宕山に、葛山城はあった。

屋形はその南東二百メートルばかりの山裾に堀をめぐらし土塁に囲まれて、豪族の威勢を示していた。
葛山氏がここに居ついた年代ははっきりしない。が、少なくとも、平安末期には、豪族として羽振りを示していたようである。
その葛山氏からの急使だったのだ。
「なんと、わしにか」
新九郎も意外だった。
大事な儀式だが、かれには、ぎくりとくるものがあったようである。
その使者を別間に通して、新九郎が入ってゆくと、
「殿より、これを」
使者は懐中から、一通の密書を差し出した。
葛山大炊介信堯からの直筆だった。
それを一瞥すると、新九郎の顔色が変った。
「おりょうが！」
「はい、残念ながら」
「さらわれたのか、一体、どこの奴が」
「わかりませぬ。すぐさま手配をいたさせましたが……」
「おりょうが……何ということだ」
道灌の寵妾になっていたおりょうは、道灌暗殺後、定正の糟屋の館に来たが、新九郎はその身のふりかたを慮って、黒丸をしておりょうを助け出さしめたのである。
黒丸はおりょうを定正の勢力圏から救け出して、葛山城に保護してもらっていたのだ。
してみれば、範満が天殊をして占わしめた答えは当っていたわけになる。
（範満か……彼奴がおりょうを突きとめたのか）
新九郎は、そう見ぬいた。
範満が、おりょうを探していることは、前から耳に入っている。
府中の内外を探し、明珍一族にまで手を伸ばして、おりょうの行方を捜していた。
むろん、それが新九郎の弱点になると思っての工作であることは、こちらでも推測していたことである。
（わかるものか）
新九郎は、内心多寡をくくっていた。
駿府から葛山までは、二十里、およそ八十キロも離れているし、山間である。
いまでこそ御殿場線も通り、車の往来も少なくないが、当時としては、相模の足柄山や東甲斐へ脱ける間道にすぎない。
容易に人目に触れることもなく、また葛山大炊介の人柄も安心して任せられたのだ。
（どこから捜しだしたか）
いまさらのように、範満の執拗な性格に呆れ、腹が立った。

おりょうを摑えて何をするのか。
新九郎の弱みであることは事実だった。
当時の風習からいっても、新九郎ほどになれば、寵妾の二人や三人いておかしくない。
それを置かないのは、新九郎の眼が肥えていることと、大望があるからだった。
いたずらに、女のことで内紛したくなかったし、すでに新九郎も若くはない。
若年のころには際限なく、女遊びをした。女遊びには卒業したというか、いまの新九郎は少々のことでは、色香に動かされない。
おりょうに対する気持が、
〝道灌の死〟
によって変ってきたのは事実である。
が、それは、あくまでも、
（哀れな）
その思いが先に立ったし、
（おれが、手を差し延べてやらねば）
という俠気からのものだった。
むろん、そこには、昔からの因縁の深さが尾を曳いていることは否めない。
それはあるいは、愛と呼べるものだったかもしれぬ。少なくとも、からだを交えたことのある異性への思いは、断たれてはいなかった。
道灌の訃報に接する前、江戸での数日が、新九郎に昔の情感を甦らせていた。
但し、おりょうを救いだした黒丸をして葛山大炊介のもとにひそかに伴って行かせただけで新九郎は、逢ってはいない。
それだけ、人の知る範囲は少なかったはずであった。
（どこから洩れたか……）
そのことが、なお、新九郎の胸に澱りとなって残った。
いまの新九郎は大事な儀式を控えて、韮山を離れることができない。残念ながら、この上とも、葛山大炊介におりょうの捜索と救出を頼むしかなかった。
竜王丸の元服はつつがなく行われた。
新九郎のもとにとどいたおりょうの悲報が、唯一の事件だった。
だが、そのことは、新九郎個人の問題である。他へ洩らすようなことはなかった。
竜王丸の烏帽子名は〝氏親〟となった。新九郎と北川どのの希望通り、氏満の気持を誘導したのだが、さして難しいことではなかった。
「めでたいの、これで今川家も安泰であろう」
氏満も上機嫌であった。かれにしてみれば、堀越公方た

る自分の名前を尊重すればこそ、伊豆まで烏帽子親になってもらいにやって来た竜王丸たちが好ましい。

「何分にも力になろうぞ、今川家督のこと、新五郎どのへも、わしから申し入れよう」

とさえ言ってくれた。

だが、新九郎は、

（公方の言葉があったとしても、府中館を明け渡す範満ではない）

と、思っている。

翌日、竜王丸改め今川氏親母子を護衛して駿河へ帰ってきた新九郎は、そのまま府中館へやってきたが、狐ヶ崎までくると、先触れの大道寺太郎が、沈痛な面持ちで待っていた。

「どうした、館の方は、何としたぞ」

「やはり、入れませぬ。不吉の雲を払うためと称して、門扉には護符を貼り、大手に天殊が祭壇をしつらえて祈禱しております」

「ふうむ、考えたな」

範満のせせら笑いが見えるようであった。

口実かまえて、竜王丸が府中館に入れないようにしているのだ。

〝元服〟

をきっかけにして屋形に戻ろうと策した新九郎たちの考えは、ここでも挫折した。

その上、おりょうまで人質にとられている。

範満の姦策が、次から次へと、新九郎たちの一歩前へ出ているのだ。

常に後手へまわっているもどかしさを、新九郎は感じた。

竜王丸は、また泉ヶ谷のいわゆる鞠子館へもどるしかなかった。

「耐忍なされますよう」新九郎は竜王丸へささやいた。

「近日中に必ずともに、府中へ、御父君の館へお連れ申しますぞ」

竜王丸母子を送りとどけるや、直ちに道を引きかえしている。東海道を長駆した。葛山城に向ったのである。

そのころ、実はおりょうは葛山から四里（十六キロ）ばかり離れた青野の村はずれの、廃寺にいた。

おりょう一人ではない。屈強な壮漢が三人彼女を見張っていた。葛山から拐ってきた三人である。

氏親還る

愛鷹山の裾をめぐるように、東西に道が走っている。

東海道ではない。二キロばかり南に殆ど平行して、海沿いに走っているのが東海道だ。

この道は、いつのころから称されているのか、根方街道という。

青野の村は十数戸がばらばらに建っているだけの寒村だが、少し西にゆくと根古屋の村がある。

その間に、廃寺があった。寺は廂が傾き、火灯窓は破れ、回廊はてすりが折れて、板はところどころ抜けている。

ぺんぺん草が屋根を蔽い、昼間でも近寄るのがうす気味悪いような破れ寺である。むろん、人が住んでいるはずもなく、狐狸がわがもの顔にうろついているところだ。

ここにおりょうが担ぎこまれたのは昨日。

屈強な壮漢三人は、

「江戸の太田左衛門大夫が遺臣でござる」

と、称して、葛山の館を訪れたのである。

おりょうの事情は家臣の一部しか知らなかったし、それだけに、その言葉を信じた。

おりょうは野に出ていた。晩秋の野である。黄瀬川の畔で、花を摘み、気をまぎらしていた。

葛山大炊介がつけてくれた侍女二人と、足軽が二人守っているばかりであった。

あいにくと、大炊介は病気で臥せていた。健康なら、韮山の竜王丸の元服の儀式に参列している。

そのため、三人の男たちを取次ぎの者がうかうかと、信じた。

棚橋某というその侍は、御丁寧に三人を案内して、黄瀬川畔まで来ている。

「あれに居られる」と、指さして、「申し上げてまいりましょう、如何に驚かれるか」

これに三人はあいまいな微笑をむけた。

「いや、その必要はない」

「は？」

「ははは、わざと素知らぬ顔で傍までまいろう。ずいぶんと、驚かれることであろうから」

「それは、人の悪い」

「いや、驚きが大きいほど、ほれ喜びも大きいと申すではないか」

「うぬらは、さては敵の……」
「いま気がついたか、たわけめ」
血刀がびゅッと頭上に落ちてきた。
棚橋は身を翻して、これを避けると、
「おりょうどの、逃げなされ」と、血を吐くように叫んだ。
「おりょうどの、早く、お館へ」
抜刀して、太田の二ノ太刀を遮え打つ。鏘然と刃が嚙みあった。
その間に、景山ともう一人の男がおりょうの方へ走っている。
「お逃げなされませ」
気丈にも、侍女たちは大手をひろげた。さすがに、葛山大炊介が付け人にしただけのことがある。
「邪魔するな」
景山たちは、容赦しなかった。
「斬るぞ」
血刀をふりまわした。
侍女たちは面てをふって、小さ刀を抜き放つ。おりょうが少しでも館へ近づけるように、必死だった。
「退け！」
景山は怒鳴った。
太田の方をふりかえった。棚橋が斬られながら、太田の脚にすがりついている。

「なるほど、ははは、左様でございますな」
おりょうはこの葛山に来て以来笑顔を見せていない。
それを思うと棚橋は、面白い趣向だと思った。
三人は黙って近寄った。足軽二人が気がついて、自然と人垣になるように、立ちふさがった。
「どなたさまじゃ」
これに対して、壮漢の一人は、
「江戸からまいったよ、太田資長が遺臣……」
言いざまに、抜き討ちに斬っていた。
油断した足軽は、もろに袈裟がけに斬られてのけぞった。
足軽は二人いたのである。
丈の高い太田某と名乗った男が抜き討ちに一人を仆すのが合図だったように、景山某がやにわに、もう一人の足軽に斬りかかった。
これはさすがに一刀では無理だった。
「何をさらす」
足軽は飛びすさった。
足軽といっても刀を差しているし、槍を持っている。さっとしごいて突いた。
景山の腰をかすった。とたんに、もう一人の男が一跳してわきから斬り下げていた。
足軽二人が斬られたのを見て、はじめて案内の棚橋も姦策に気がついたのである。

「こやつ、こやつ」
太田は曳きずりながら、何度も何度も血刀を叩きつけた。まるで重いさん俵を曳きずっているようであった。
棚橋は血まみれになって、なおも放さない。血が、肉片が、髪が千切れ飛ぶのが見えた。
その凄惨なさまが景山たちを決断させた。
かれは血刀を侍女の顔を目がけて叩きつけている。剛刀である。打ち刀が、ぐわッと骨を割る鈍い音がした。
もう一人の男も、横に薙いで胴斬りした。侍女二人は、猫のような絶叫を噴いて倒れている。
おりょうは草むらを走っていた。が、侍女たちのことが気になって、何度もふりかえり、そのたびに、駈けもどろうとする。
明るい斜陽の中で、噴血がしぶくのが見え、それがあたかも、自分のからだから噴きあがったような衝撃で、おりょうは目がくらみよろめいた。
おりょうは、その場から連れ去られたのである。
館の望楼から、この事件を見張りが見ていた。むろん、すぐに知らせたのだが、おっとり刀で数人が駈けだしたときは、かれらは林の中につないでいた馬に乗って、走り去るところだった。
おりょうは横抱きにされ、馬上でもがいていた。悲鳴が尾を曳いて流れ、騎馬は駈け去った。

その方角は北だった。北へ——わざと、かれらは反対の方へ走ったのだ。北へ向えば、範満の仕わざとは思われない。
太田道灌と扇谷定正の主従の争いの余波が道灌の死後もつづいている。山内顕定の思惑もからんで、おりょうを拐かした者が、範満だとはすぐに気がつかない。
時間稼ぎであった。範満のもとへ連れてゆくまで安全であるための方法だった。
かれらは富士山麓から愛鷹山の間道を通り、赤野観音のある沢から、柳沢を下り青野に出てきたのだ。
陰暦十一月のはじめである。温かい駿河でも、数百メートルの愛鷹山の間道を抜けるのは、異常であった。
晩秋というより初冬なのだ。無理な行程が、おりょうを半病人にさせた。
「もう一歩も動けませぬ」
このままでは死ぬ。そんな顔色に太田たちは困惑した。
「死んでは元も子もない」
「府中の館へ無事に連れてゆかねばな」
「一文にもならぬ」
三人は廃寺に休んで相談した。
「とにかく死なせてはならぬ。やむを得ぬ、ここで暫く、おりょうのからだの本復を待つことにしようぞ」
「やむを得んのう」

「だが、万一ということがある。府中へこのことを知らせておいた方がいい」
「それもそうじゃ、神野、おぬし行け」
神野と呼ばれた侍は、府中へ一人で注進に行く。
太田と景山の二人は、青野の村から酒や味噌などをわけてもらってきて、酒を飲みながら、おりょうの恢復を待つことにした。
医者といっても、このあたりにはいない。
「まともに食事をさせてな、寝かせておけば治るであろう」
「そうだな、その食事じゃが、そこらの嬶に頼むか」
「銭をくれてやれば、飯くらい作るさ」
村の農婦を頼んだ。
むろん、旅の者だが、病気になって困っているという程度の話で頼んできた。
(逃げなければ……)
おりょうは二人の隙をうかがった。
太田某も景山某も、範満とはどういう関係にあるのかわからない。おりょうを拐かせば、金銭的なことのほかに、見返りが期待できるのであろう。
おりょうのからだに手を出そうとしないのが、不思議なほどだった。手籠めにすればできる。それをしないのは、それ以上のものが手に入るからであろう。
食事を運んできたのは、気のよさそうな農婦だった。おりょうは手紙を書いて葛山に届けさせようと思った。が、筆も墨もない。
(早くしなければ……府中から輿でも持って来られると)
ここへとどまっている口実がなくなる。
輿で担いでゆくといわれれば、病人だからと拒めない。
範満のことは、道灌からも新九郎からも耳にしている。
あくどい手段をも弄する男らしい。
救いの手をもとめるのは、急がなければならなかった。
おりょうは、蒔絵の櫛を紙にくるんで渡した。何も言わなくても、おりょうからだということはわかる。
葛山大炊介はすぐに救出の軍勢を差しむけてくれるだろう。
「これを葛山のお館へ届けて下さいな」
隙を見ておりょうは、そう頼んだ。
「向うへゆけば、お礼を下さるはずです」
「じゃァ、お前さまは」
「拐かされて来たのです。お願い、急いで届けて」
「へえ、わしの倅に行かせますで」
農婦の倅は裸馬に乗って葛山へ飛んだ。
新九郎が、葛山へ着いて間もなくのことだった。
「すぐに助けに参ろうぞ」
新九郎は真っ先に馬を走らした。つづいて、数頭の騎馬が遅れじと砂塵を巻いて、あとを追った。

廃寺にたどりついたのは日暮れ方だった。
「高国寺というのか、あの寺は」
「はい、もうずっと無住でございますが」
「わしらが踏みこめば、おりょうを殺すかもしれぬ。お前が先にいって彼奴らを呼び出してくれ」
二人しかいないとわかっているのだ。
その二人がおもてにあらわれるのを待っていたのは、木陰に隠れて弓をしぼっていた射手である。
矢は唸りを生じて夕闇を裂いた。太田も景山も酔っていた。
素面でも、突然のこの矢は避けることは出来なかったろう。
鏑矢は的確に二人の胸を貫いていた。
「やった!」
新九郎たちは木陰から走りだした。走りながら抜刀したが、二人ともすでに断末魔の痙攣を四肢に見せているだけだった。
「おりょうを人質にとっておけば、新九郎は、手も足も出なくなる」
範満はその姦策の成功に酔っていた。
たしかに、おりょうは葛山の館から拐かした。
それも範満の手とわからぬように、上手にやったと聞いて、顔をほころばしたものだ。
「でかしたぞ、早速に連れてまいれ」
それが、一足も歩けぬほど病み疲れていると聞くと、
「輿を持ってゆけばよい。輿に寝たまま、運べ。そうすりゃ、おりょうにとっても楽であろうが」
四人肩の輿を担ぐほかに、足軽五人、騎馬二人。
その人数を派遣することにした。
「夜になって府中へ入るように、時間を加減するがよい。出来るだけ人目につかぬようにするのだ」
そこまで配慮している。
府中から青野までは、往復二日の距離である。その二日目の夜を、範満は期待した。
が、夜に入っても、一行はあらわれなかった。深夜になるのを待っているのかとも思ったが、先触れもなく、その夜、まんじりともしなかったがとうとう夜の明けるまで、おりょうの輿はあらわれなかった。
「どうしたのだ、病人ゆえ、ゆっくりゆっくりやってくるのか」
一日よけいにかけるのかもしれぬ、と思った。が、その日も、夜になり、深更になり、とうとうまた夜が明けても、それらしい影は府中へ入って来なかった。
「おかしいぞ、一体、どうしたのだ」
人数をくり出そうか、と思ったが、それでは、馬脚をあ

らわす。
もう一日待ってみよう、と思った。その一日も、暮れた。
漸く、範満は焦りを感じてきた。
「見てまいれ、愚図々々しておるのかもしれぬ。たとえ半死でもかまわぬ。無理にでも輿に乗せてくるのだ」
東雲之助に命じた。
「手荒になりましてもよろしいので」
「あたりまえだ、わしの想い女にするわけではないぞ」
「かしこまりました」
東雲之助は、従者三人を引き連れ、馬を走らした。三人は徒歩である。槍を担ぎ、馬の口とりをして、走ってゆく。
ところが、その東雲之助も、翌夜になっても姿を見せなかった。
「うぬ、どやつもこやつも何たることじゃ」
「わたくしが占ってみましょうほどに」
天殊が申し出たとき、漸く、狐ヶ崎の木戸から報告が入った。
「高国寺よりの輿が着到しました」
陰暦十一月九日は月が、傾いていた。間もなく、沈むであろう。その暗闇を計っているのかもしれぬ、と、範満は思った。
狐ヶ崎から注進に来た番卒は、
「松明もなく、山陰からあらわれた」
と、一行のことを話した。
輿の上には、おりょうがいた。
「臈たけた美しい女人でございました」
細おもてに片割れ月が、蒼く映えて、この世のものと思われないほどの、妖しい美しさだったという。
「狐ヶ崎など、土地の名前が悪うございますで」
そう語る足軽の眼は虚ろで、まだおりょうの、蒼白い顔が、異様に強く瞼に灼きついているかのようであった。
その一行があらわれたのを見ると、番卒は、申しつけられていたことでもあり、すぐさま、飛んできたという。
「そうか、そうか。そうであろう、来ないはずはない」
範満はただちに、城門をひらかせた。
天殊の祭壇なども取り払い、次の手配をはじめた。
次の手配とは、おりょうをつかって、新九郎と竜王丸改メ氏親の勢力を削ぎとることである。
この十年間の既成事実を踏まえて、範満は今川義忠の権力をそっくりおのれのものにしようとしていた。
やがて、おりょうの輿が近づいたという報告が入った。
東雲之助がもどらずにおりょうの輿が到着するというのは、不審が残ったが、
「彼奴め、またどこぞの化粧首に迷いおったのかもしれぬ」
とも思った。

東雲之助もすっかり〝男〟になっている。むかしの寵童のころとは違う。もっとも十年前でも、すでに薹が立っていたのだから当然だが、その反動のように、女好きで、色若衆をも好んでいるようだ。
所詮、玩童あがりは、頼り甲斐のある武士にはなれないようだ。
おりょうの輿は、
〝万一を慮って〟
松明をつけずにやって来た。
前後を足軽たちが囲むようにして、大手門へさしかかる。
「足軽小頭前田金太夫、ただいまたちかえりましたぞ」
先頭の男が怒鳴った。
輿がおろされる。女人はうつむいている。疲れたように首垂れている。
門前の篝火の明りに、その白い頬がうす赤く映えて見えた。
その女人を左右から支えるようにして、肩をかし、足軽たちは中へ入った。
「上様はお待ちかねだ」
そう言いながら、出迎えた武将は、
「おりょうとは、その女か」
と近づいた。どんな女か興味がある。顔をのぞこうとしたとき、どんと一人が肩を突き放した。
「寄るな」
と、突き飛ばされて、
「なに！」
武将はよろよろとなって、刀の柄に手をかけた。
「何をさらす」
「ほ。何をさらすとは、此方の申すこと、大事な虜囚じゃ」
「……」
「上様のおん前にお連れするまでは、此方の責任でござる」
「ぬ！　そ、そんなことはわかっておるわい、チョイと、顔を見ようとしたまでのこと、観音さままで拝もうとは申しておらぬ」
「わかっておる。さ、徐かれぬか」
「きさま、口はばったいことを」
と、言いさして、武将は妙なことに気がついた。
その足軽たちの顔が、見たことのない顔ばかりだということに気がついたのだ。
「はて……うぬらは、一体」
と、言いかけたとき、いつの間にか、門前には、民衆が多勢、集まって来ているのに気がついた。
男も女も、老人と若者もいる。町衆や農民や、連雀（行商人）や山伏や漁師や牢人風や——衣服や階層はばらばら

だが、その連中が、もの珍しげにのぞきこんで、
「悪霊は退散したのかいな」
「おりょう様とは、どんな女か、一目見たいものじゃ」
「どこじゃ、どこじゃ、あ、あの女人か」
「どれどれ、女人は一人かえ」
「上様の寵妾かのう、こりゃ羨まし」
いつの間に、こんなに集まったのか。
どこから出て来たかと思われる群集であった。
館侍たちが、連中が異常に増えるのを許したのは、いずれも善良で弱い市民に見えたからである。
二、三人なら、と見ていたが、四、五人になり、十人になり、二十人になり、まるで安倍川の川止めにあったように、ざわざわと、集まって来ているのである。
「何だあ、うぬらは」
漸く、館侍たちは、その異常な集まり方に、眉をひそめた。
「向うへいけ」槍をとんとんと突き立てて、「去ね、去ね」と、怒鳴った。
「まごまごしていると、ひっくくるぞ、ぶった斬るぞ」
野良犬でも追うような調子だった。
「なんでい、なんでい。わしらは一目、おりょう様とやらを……」
おりょうの名前をどうしてこの連中が知っているのか。

不審にとどめをさしたのは、足軽小頭が、ぶるぶる顫えていることだった。
眼がおどおどしていた。その背後にいる足軽の鎧返しが脇腹に突きつけられているではないか。
その足軽小頭は、おりょうを迎えにいった宰領である。前田金太夫と称った。
大手へさしかかったとき、この男が、大声で身分を明かした。それが館侍たちの警戒を解いた。
その男の脇腹に突きつけられた短刀は、この一行が、ニセモノであることを物語っていたのである。
「あ、うぬらは」
と、驚愕の叫びで、刀の柄に手を走らした、とたん、
「死ね！」
足軽の一人が長槍をさっと突き出した。
槍は腹巻（胴鎧）に当った。
意外に身軽く飛び退っていたので、穂先は威に突き刺さったが、腹の内までは至らなかったらしい。
「敵じゃ！」
身をひねって、抜刀しざまに武将は叫んだ。その面てへびしゃっと一矢が飛んできた。
敵は、輿を運んできた雑兵ばかりではなかったのである。
飛矢は、群集の中から、弓弦を鳴らせて、来た。
兜はかぶっていなかった。いや、たとえ、かぶっていた

としても、避けられなかったろう。
矢は、武将の眉間にぶっつりと突き立った。
「うっ……」
打ちのめされたように、のけぞった。刀は二、三寸抜きかけたままだった。
が、その叫びと、動きは、他の館侍たちに衝撃を与えている。
「敵だァ」「計られたぞ」「出合え」「奇襲じゃ！」狼狽の叫びがたちまち、血の渦を巻きおこした。
輿を運んできた足軽たちは、その本性をあらわした。
「伊勢新九郎が舎弟にて山中才四郎」
「同じく大道寺太郎」
「同じく在竹兵衛」
「同じく荒川又次郎！」
いずれも陣笠をかなぐり捨てて、槍をしごき、あるいはふりあげて、館侍たちに、斬りかかった。
むろん、府中館の将士たちはかれらの名前を知っている。新九郎の盟友として、一騎当千の強者であることも。
これまで、顔を見たことのある者が多いし、口をきいた者もあった。が、まさか、雑兵に化け、それも、館から派遣された連中になりすまして侵入してくるとは、夢にも思わなかったことである。
おりょうは突きとばされて倒れている。

が、それはおりょうに扮せしめられた東雲之助だったことに、館侍たちは気がついて、さらに愕然としたことだった。一言も口をきかず、疲れきったようにうなだれていたのも、短刀を突きつけられていたからだった。
愛鷹山の麓の廃寺高国寺で、誘拐の浪人たちを討った新九郎は、おりょうを迎えの輿の一行をも討ちとり、腹心をそれぞれ扮装させた。
その上、東雲之助までが、やって来たのが時にとっての幸いだった。
おりょうの小袖を着せて、館侍らの目をあざむいたのである。
「それっ、お館を取り戻せ」
「氏親さまのお館を」
「範満一族の首を大手に並べようぞ」
群集は、農夫に扮した者は、野良着を、町衆に扮した者は、小袖を、山伏に扮した者は笈をかなぐり捨てて、どっと喚いて、乱入した。
いずれも、その下に鎧下や、腹巻をつけていたのである。
たちまち、府中館は混乱に陥った。
奇襲も、このくらいあざやかにやられては、防ぎようがない。範満ほどの狡智にたけた男が、まるきり、無防備に、侵入を許すことになってしまったのである。
「新五郎範満どのはいずれぞ」

「孫五郎どのに見参」
功をはやった者たちは、御殿の中を、かれらをもとめて、走りまわった。
館侍たちはおっとり刀で邀え撃ち、館外の家士の屋敷からも、応援に出て来たが、これも館の門に待ちかまえた新九郎方が、弓矢で射止める。
飛矢の雨をかいくぐって入りこもうとする者は、刀や槍が食いとめた。
もう府中館は混乱の極に達している。女子供は悲鳴をあげて惑い、厩の戸を開けられた馬が飛びはねて走り出るし、収拾がつかなかった。
新九郎がこの斬込みに際して念を押したのは、
「放火をするな」ということだった。「火で焼いてしまっては再建が大変だからな」
範満の驚愕もいうまでもなかった。
おりょうが担ぎこまれることにもっとも期待していただけに、またその動揺は大きい。動揺はすぐに怒りを呼び、黄金作りの太刀を抜き放って、走り出ている。
「計られしか、みなの者、ひるむな、斬れ、斬れ」
声を涸らして家来らを督励した。
館侍たちはしかし、何よりも機先を制されている。戦さというものは、士気だ。軍勢の差よりも、士気に左右される。

機先を制したことが、新九郎方を優先させたのは事実だ。
館侍の狼狽につけ入って、寄手は暴れまわった。
矢が飛び交い、槍が殴りあい、刀が打ち合った。血が飛び、悲鳴が噴き、凄まじい地獄図絵となった。
「ひるむな、いまこそ、今川家の姿をただすときぞ、やれ、十年の耐忍、いまこそ霽らさん」
新九郎も大太刀をふりかざして駈けこんでいた。
十年、待たされている。
その怨みが、たしかに新九郎の刀にこもっていた。
竜王丸が元服したいまこそ、府中館を奪還するときであった。
(この時機をはずしては……)
奪還はいよいよ難しくなる。
新九郎が死物狂いになったのは、意地もあるが、竜王丸の面目と将来を思ったからである。
いまなら、まだ竜王丸が氏親として立つのに不足はない。が、二十歳すぎてからでは、まるで〝嫁かず後家〟のような不体裁なものになってしまう。
それからでは、範満を仆して舞い戻るにしても臺のたった感じで、新鮮味がない。
それに、新九郎としては、先を急がねばならなかった。
もはや新九郎は若くはないのだ。まず府中館を確保して、氏親を義忠の跡目に据えてから、その上で、かれは目的へ

向って進まねばならないのだ。そのためにも、ここで府中館を奪いとらねばならない。
新九郎は、全力を出した。石脇の城には殆ど一人も残さずに府中に集結させたのである。
範満や孫五郎が命からがら逃げだし府中館が、新九郎の掌握するところとなったのは、その夜の白々明けであった。
時間がかかったのは、放火を戒めたからであろう。
流血は避けられなかったが、館が炎上するのだけは未然に防いだ。
こういう城とりの場合、放火しないのは稀である。
府中館が炎上すれば、館だけにとどまらない。城下に火は燃えひろがる。新九郎はそれを慮ったのだ。領民たちの苦しみを招いてまで城とりをしても後がうまくいかない。
「新五郎範満を取り逃してございます」
「そうか、それだけが残りだな」
新九郎は無念げに唇を噛んだ。
こうして氏親と北川どの母子は府中館の主になったのである。
思えば義忠の横死以来、随分長い時間がかかったものだ。
新五郎範満の横車と、それを推す一族の〝小鹿派〟がいなかったら、竜王丸の守護大名の椅子の相続はスムーズに行われていたはずである。

また、伊勢新九郎という存在がなかったら、おそらく、氏親の時代は来なかったであろう。
新九郎は、氏親が名実ともに今川の当主におさまったのを見ると、
「よかったな」と、心から言った。「これで、おれも肩の荷をおろした気持だ」
「忝けなく思います、地下で義忠どのも、どのように喜んでいることやら」
「範満を追い落しただけのことゆえ、また、如何ような術を用いて、攻めてくるかわからないが、まず、心配はあるまい。あの男は、名分がなくては、何もできぬ男だ」
範満もたしかに氏親に次ぐ血脈だったのは事実である。
それだけに、小鹿一族としてはかれに嘱望したわけだが、拠るべき所を失い、追い落されて、流離の身となってしまっては、もはやかれに再起の力はあるまい。
そういう逆境に耐えられる男ではない、と新九郎は見ている。
新九郎は、氏親を支える重臣の一人として、高国寺城を与えられることになった。
駿東郡下方庄十二郷といわれる。
この地はいうまでもなく、おりょうを助けた廃寺高国寺を中心としたあたりである。
愛鷹山の南麓であって、眺望は東西南北、それぞれに素

晴らしいが村々は、大して豊かではない。
しかし、新九郎が、この地を望んだのは三つの理由からであった。
一つは、氏親をはじめ、今川の社稷を憂える人々の希望と合致することであったが、駿河の東の守りである。
駿河は西よりも東と北の方が危険であった。
伊豆から関東を控えていて、二人の公方、二人の管領のほか、三浦氏、大森氏その他豪族が多い。北方には甲斐の猛虎武田氏がいる。
西の方も三河遠江に小豪族がはびこって、結局、義忠の命とりになったのだが、脅威という意味では東方であった。
公方たちが、今川家に貪婪な眼を光らせはじめたら、危なくなる。
その圧えとして、新九郎がここにいることは、たしかに、今川家にとっても心強かった。
新九郎が、その名声の割に、かかる寒村に甘んじたのは、その地位で安住する漢ではなかったからである。
「よろしゅござる」
ほしいものは、おれの手でとる。
新九郎は、新しく城を築きはじめた。
二つ目の理由は、新九郎が、あくまでも今川家にとっては、〝外様〟であることだ。
氏親の成長と当主就任に多大の功があったとはいえ、所詮、外部の者にちがいなかった。
北川どのが実の母であれば新九郎は、実の伯父。理屈ではそうなっても、旅牢人上りといわれる身では、今川家のような、かっちりと出来上った貴族社会では、所詮、よそものでしかないのである。
そのことを苦労人の新九郎はよく知っていた。
(おれが功を誇り、府中の近くにいたなら、今度は、おれに対する中傷と誹謗で、再び、館の中は、妬心の毒に侵されるだろう)
人間とはそういうものだし、社会とはそういうものだ。
氏親にしても、そういう誹謗を耳にするのはいい気持のものではない。
同じことを三度囁かれて、これを否定する者も、同じことを百回囁かれれば、半ば信じるようになる。
それが人間であった。人間の弱さであった。それをしも否める者は、よほどの賢人でなければならない。
哀しいかな、氏親はそれほど非凡の武将ではなかった。まだ若かったし、その才能も、新九郎は高く評価していない。
いつまでも八歳の昔に見えるというのではなく、北川どのに守られて、潜伏しながら育った環境が、ずば抜けた英

智を養うには至らなかったのであろう。
(凡ではないが、非凡ともいえぬ)
新九郎はそう見抜いていた。
このまま、周囲が上手にリードすれば、一応は、明君として、守護大名の重任は果せよう。が、それ以上のものではない。況やリードをあやまれば、欠陥が出てくる。
そのためにも、今川の社稷を安泰に置かねばならなかった。かりそめにも、家中での紛争など起してはならなかった。
新九郎が、府中から見れば辺鄙な高国寺址に城を築いたのもその配慮からだった。
寒村で辺鄙なところであれば、譜代の家来——重臣たちや、被官大名たちが、野心をうんぬんすることもなく、妬むこともない。
さらに、三つ目の理由は、新九郎の望みが、東方に向けられていたからである。
伊豆、相模——そして、関東の広さが、新九郎の胸をふくらませるのであった。
(かの地こそ、おれの情熱を爆発させるところだ。伊豆は、おれのためにある。関東八州は、おれを待っている!)
そのために、まず、足場を固める。
韮山にはすでに、唾をつけてある。あとは機会を待つだけであった。
新九郎は高国寺城の造築に力をそそいだ。
新九郎は城造りははじめてではない。
石脇城の場合は改築ではあったが、半ば以上、新九郎の手になっている。
その経験が、高国寺城では生かされた。
城あとに城を改築するのだからやり易いように思えるが、思いきって斬新な方法をとったり、山を切り拓いたりするとなると、前の石垣や堀などが、かえって邪魔になることがある。
新城はその点造り易かった。思うように縄張りできるし、前のかたちに禍いされることはない。
アイデアのない者にとっては、土台がある方がいいが、おのれを恃むことの強い者にとってはなまじサラ地の方がいい。
根方街道にむかって大手を造り、南から北へ三ノ丸、二ノ丸、本丸とせり上っている。
天守も造った。本丸の後方、もっとも高いところである。
この時代、まだ、天守は閣と呼べるほどのものではない。〝台〟であり〝楼〟であろう。まわりに濠をめぐらし、土塁を構築した。
新九郎の名声を聞き伝えて、近郷近在から、労働提供を申し出る者が増え、工事はいちじるしくはかどった。
「殿、間もなく、この城も出来上りまするな」

大道寺太郎が見まわしながら言った。
「うむ、大過なく竣工しそうじゃ」
「祝着至極に存じまする」
「そのほうらが力を合わせてくれたがゆえじゃ」
「いや、われらが力など、百牛の一毛にすぎませぬ。縄張りその他、殿のお考えがすぐれていたゆえでござろう」
城を造る場合、普通まず、三ノ丸を造るのが最初である。そして、土塁を築き、濠を掘る。二ノ丸、本丸を築きはじめるのだ。
これは戦乱常なき時代の常識だった。
いつ敵から襲われるかもしれないからだ。
だが、新九郎はその心配はなかった。かれは大きく縄張りしてから、本丸から先に造りはじめている。
必要な築材だけ、運び寄せての築城だった。
そのためには、無駄のない縄張りが要求される。新九郎の頭脳は充分、それに応えるものであった。これまでの人生を無駄には過していない。
石脇城は、かれの思い描いた城郭としては、不備な点が多かった。
その欠陥を補った新城である。
「この城が成った上は、寺を移さなければなりませぬな」
大道寺太郎は言った。
「寺を移す、とはどういうことじゃ」
「てまえもよくは存じませぬが、祖父に聞いたことがありまする。寺というものは、如何なることがあろうとも、毀すべからざるもの。改築、改修なすならば、むろん釈尊の慈悲にかないましょう」
「なるほど、わかった」
新九郎は大きく頷いた。
「高国寺を生かせ、と申すのだな」
「左様、いずかたへなりと」
「廃寺であっても、ひとたび寺院を建てれば、そこには釈尊が宿っている、なるほどな、高国寺を建てねばなるまい」
新九郎は、ただちに、寺を建てるよう手配した。
場所は鳥谷であった。前の高国寺よりも、一段と壮麗なものを造らしめた。
この造営も、築城も、費用は氏親のところから出ていた。
金銭に淡白な新九郎は黄金を貯めることがなかった。かれは毎日を精一杯に生きてきた。常に全力をあげて目的にむかって進む。一つの山を乗り越えるのにすべての力を出す。
一つのことを為し得たという自覚と喜びは、次の力を生むのである。
八分の力を出して、二分を温存することが、次への飛躍に役立つというのが常識である。

新九郎はそれを執らぬ。二分の力を惜しんだがために目的を逸することがあれば、次への飛躍はない。
(人生は短いのだ、精一杯生きるしかない)
一歩一歩、確実に歩む。一歩の無駄は一歩だけにとどまらないのである。
城が竣工すると、新九郎は、
〝興国寺城〟
と、命名した。
高国寺あとの城であり、はじめその名をとるつもりであったが、寺を移したことで、名を変えたのである。
〝国を興す〟
その希望を加えた。
かれは城の固めをした上で、理想を実践しはじめた。
これまでは氏親のことで生活の大半が割かれていたが、もはや、氏親の方は心配がない。
政治に理想がある。
まつりごとは領民の倖せを一にする。国を治めるのは、民衆の生活を安定させるということが一義であった。
戦乱の諸国を放浪して民衆の苦悩を実感してきた新九郎には、政治が何たるものかがわかっていた。
(領主が愚かであれば、領民は苦しまねばならぬ。領民あっての領主だということを忘れてはならぬ)
そのためにも、領民に至福を与えるのが最初だと思った。
徳川時代もそうだが、戦国時代は殊に非情である。
弱肉強食は常識であるし、下剋上もすでに普遍化してきている。
こういう時代の大名といえば、豪族、野盗の集団と同義語に考えられ、また、そういっても過言ではなかった。
そういう連中が、力を貯え、天下を狙った。その野望は否定できない。
が、東海地方の今川家は、こうした時代にもかかわらず、貴族的伝統による支配者だったことは事実である。
しかし、どういう場合でも、一つの政治形態が長年月にわたれば、ひずみが生じてくる。
今川家もまた、その例に洩れなかった。
府中を中心とした中央集権によって、辺境の末端までできめのこまかな行政がゆきとどかない。
それが地方豪族の擡頭と反抗を惹起した所以であるし、内部的に緊密な和を欠いていた。
老木が外側は巨大な牢固としたものに見えながら、すでに中心部が腐敗しているようなものであった。
竜王丸、範満の紛争は、それを象徴していたわけだ。
そうしたなかから、新九郎は、執るべき政治の方法を学んだともいえる。
一言にいえば、
〝仁政〟

であった。
「まず、年貢だ」
農民が田畑で生産する。米をはじめとする五穀と野菜類その他、すべて生産するものに対しては年貢がある。
米でいえば、その作るところの量に対して、半分ずつ。つまり、農民と領主とが五分五分。
これを五公五民と称う。
しかし、その比率は常態であり、望むべき理想のかたちとされていたが、戦さは消費だから、戦乱常なき時代ではとても賄えないとして、六公四民にする者が多い。
ひどいやつは七公三民という甚しいことを命じる。
その上、いわゆる矢銭（軍時費）を命じる。
これは臨時徴収の税金だ。それでも足りなくなると、鍬一梃いくら、鎌一梃につきいくら、という税金を命じてくる。
こうなってくると、農民は、顎が干上ってしまう。
むろん、農民だけではない、町衆に対しても、棟別銭を要求する。それこそ、竈（かまど）一つにつきいくら、桶一つでいくらというふうだからたまらない。
考えてみれば物持ちほど、余計に払う仕組みで、合理的かもしれないが、払うほうではたまらない。
そういう時代に新九郎は敢然として、四公六民を布告したのである。

四公六民——
そのお布令を聞いたとき、領民たちは欣喜した。
「ほんとうかのう。そのような御領主さまなど聞いたことがないわい」
「眉唾じゃないかの、うかと信じて、あとで泣きを見まいぞ」
と、疑う者さえいた。
「わしもはじめてじゃ、親父の代にも、祖父（じじ）の代にも聞いたことがない」
半信半疑の者も多かった。
「ほんとうなら、大助かりじゃ、やっとわしらも、暮しが楽になるのう」
「有難や有難や」
人々の喜びは、新九郎にすぐに反応した。かれは、むろん、その約束をたがえなかった。
のみか、不作の年は三公七民とし、さらに病人や老人のみの場合は、年貢免除にすらした。
そういうやり方は、むろん、領主自身の財政に影響がある。まず第一に、家臣の扶持に困ることが生じる。
が、新九郎の家来たちは、この主人にしてこの家来ありで、遊んで食おうというやつはいない。
いずれも、半農半官で、いうならば屯田兵だ。おのれで耕し、おのれで、刀を砥ぐ。

半ばは作りどりということにして、いざ合戦の際には、田からでも畑からでも、山からでも、すぐに駈けつける。
馬を畔につなぎ、鞍には小具足を結えつけ槍を突き立てておく。
そういう日常に、かれらが生甲斐を見つけているのは、新九郎を信頼しているからだ。
「殿にお任せしていればいい」
「われらは、殿にいのちを預けておるわ」
単純だが、信頼がある。相互の信頼によって主従は結ばれていた。
そのすがたは、誰の目にもこころよく安心できるものであった。非情な時代に人と人の結びつきの、これほど、美しい姿はない。
これで民心が慰撫されぬわけはない。
領民たちは、よい主を持ったことを喜び、畑仕事にも、希望を見出して、それは必然的に農作物にも好影響をもたらした。
民衆がうるおえば、領主もまた内所が豊かになる。
伊勢新九郎の名声はしだいにひろがっていった。
その名が高くなるにつれ、他国からも流入する者が増えてくる。人手が増えれば、荒地の開墾も行い易い。
新田の開発が盛んになり、治水工事の人手にも不自由がなくなった。

こうして、土台が固まったころ新九郎に私的な喜びが齎された。
子が出来たのである。妻の小笛が男児を生んだ。
新九郎の喜びは大きかった。
「おれにも子が出来たか」
天の授りものという気持だった。
放浪の時代に子供がいては、思うように動けない。漸く、足が地について、腰がすわった感じである。
とにもかくにも一つの城を持つ。それは、男として、一人前になったことを意味する。
（もうそろそろ子を作ってもいい）
そう思うようになっていた。
それも、小笛という想う女を妻に得てから、新九郎の胸に湧然と起った感情であろう。
かれにとって、人生の目的は大きすぎた。
一介の旅牢人でありながら、
（天下をとる！）
その大いなる志を抱いて来た年月である。そこには、
（おれがやらねば……）
という自負があった。
かれの見た京——室町幕府はあまりにも腐敗堕落していた。
足利将軍や管領、被官大名らは権勢欲と同族意識に左右

されて、血みどろな殺し合いを演じるばかりで、政治の中枢にあるという責任感も使命感もなかった。

教育の普及していない時代であり、農民と商賈の職業的集団の判もまだ確立はしていない。

わずかに〝座〟という一種の同業組合によって、おのれの利益を守っていた時代である。

そういう排他的、独善的な、〝座〟の制度ができたというのも政治が不安定で、というより、まるっきり無法時代だったからであろう。

（おれがやるならば……）

新九郎は、いつもその思いを胸に秘めていた。政治への野望ではない。一見、それは、政治権力への野心に見える。が、新九郎の場合、皮相だけで論じるべきではあるまい。かれは、のちに関八州を掌握した。

それからが、問題である。

すべて結果がよければ、よし、という言葉が西欧にもあるが、かれの野望は、野望に似て非なるものであり、それは〝理想〟と呼べるものではなかったろうか。

明治維新のときの例を見れば、その辺のところが判然する。

攘夷討幕をスローガンにした長州及び薩摩の連中は、勤皇を掲げて、自ら、

〝世直し〟

を呼号した。

悪徳の幕府を倒して、自分たちが天下をとれば善政を敷くと称して、民衆を瞞し、殺戮を重ねて、天下をとった。

明治の時代が、薩長閥による専制政治であり、民衆のための民衆の政治でなかったことは、明白な事実だ。明治維新の結果は悪かった。新九郎の後身である北條早雲はそのような悪徳政治はやっていない。

そのために、あの乱世に北條五代がつづいた。これを倒したのは、豊臣秀吉の大勢力であって、内部的要因ではない。

新九郎の政治は民衆に慕われるものであった。

まず酷税を廃したこと。

これほど直接的に民心を安らかならしめるものはない。

酷税は所詮、政治の中枢にある者の利己的なかたちで費消されるものだ。

いかに大義名分をつけ、数字の魔術で民心をあざむいても、民衆にはわかる。怨念となって、憎しみが残る。

新九郎は、そのような愚かな野心家ではなく、民衆のためを思う男であった。

その理想のためには、思いきったこともしている。暗愚な大名を討つことは、かれにとって、民衆の幸福のためでもあった。

そのかれの行動が、正しかったことは、のちに北條早雲

となって、関東八州を統治する偉業の基礎をつくったのち、八十八歳の高齢で大往生していることでもわかる。

この乱世にあって、八十八歳という天寿を全うすること自体が、すでに容易ではない。

それも、戦乱をくぐりぬけ、勇気と決断で巨大な敵と闘い抜いたあげくのことである。いかに民衆がかれを慕い、盛りたてたかがわかる。

それは、氏親の側から見てもよくわかる。

新九郎の理想のうしろ楯となったのは、氏親であった。氏親は終生、新九郎を裏切らなかった。かれのために、多数の兵を貸したり、援助している。

新九郎の人徳であり、また、かれが氏親を盛り立てるのに、一片の私心がなかったことを、よく知っていたからであろう。

小笛は、小笠原備前守の養女として、新九郎のもとに嫁いだのだが、この腹から男児が生れたことは、今川一門に微妙に揺曳していたところの黒い疑惑を霽すのにも役立ったようである。

北川の夢子との噂であった。

今川五郎氏親（竜王丸）のためにもその噂は立ってはならぬものである。

それは氏親の若い心にどういう翳りを生じさせるかもしれないのだ。

小笛の生んだ子は、

〝伊豆千代丸〟

と、名づけられた。

すでにして、新九郎の、望蜀の思いが、その命名にあらわれている。

この千代丸が、のちの、氏綱である。

「でかしたぞ、小笛」産褥の小笛に頬ずりして、新九郎はほめた。「よくぞ男児を生んでくれた」

「はい、あなたさまによく似た御子をと、念じました」

「似ているとも、そっくりじゃ。が一人では不足、二人も三人も生んでくれい」

氏親は元服はしたが、まだ任官はしていない。

範満の邪魔がそこまで及んでいたのだ。

新九郎はその点にも手ぬかりがなかった。昔の伝手を頼って、氏親の任官のことを願い出ていた。

いうまでもなく、官位は朝廷から賜わることになる。その内実は、名流にして、実力を備え、その官位にふさわしいことを必要としている。

が、それはたてまえであった。この時代ばかりではないが、朝廷を構成する人々——天皇とその周辺にむらがっている堂上公卿たち。かれらは身分的には、天皇の側近であり、血すじがよくて、威を誇っているが、実際は収入が少

ない。
況や、戦乱がかれらの所領である荘園などを荒して、まるきり無収入になっている者も尠なくない。
したがって、かれらの生活費は専ら、別途収入だ。
〝賄賂〟
である。
任官しようという者は、それなりに地方で勢力を持っている。つまり、収入が多い。
天皇に拝謁するのに莫大な金品をつかわねばならない。大臣どもから、奏上の者まで、賄賂が普通になっている。
天皇に拝謁できないまでも、官位を貰えばいいという手合が多いのだが、上洛に際して、金品を馬に積んでゆく。
後のことだが上杉謙信なども、上洛するときは、山のように金品を持っていった。
それはみんな堂上公卿たちの懐へ入るのだ。
そして、天皇に奏上してくれる。天皇にしてみれば、どうせ誰が誰だかよくわかりはしない。かれらの言いなりになっているので、
「あの者には従五位を」
と言われれば、
「さようか」
と、与えるし、
「正六位をお賜わり下さいますよう」
と申し出られて、それは駄目だとは天皇は言わない。言わせないように、大臣たちが、いいように話を持ってゆく。
だが、実際に権勢があり領内を支配している大名には、それにふさわしい官位を与えなければならないわけだが、要するに匙加減ができる。
官位相当を見ても、ピンからキリまでは、二十段階もあるのだがその中の三つや四つの段階はどうにでもできる。上げることも下げることもできる。
新九郎は範満らのことがあるので、氏親に箔をつけてやらねばならないと思った。
そのためには、恰好の存在がいた。三条内大臣実望であった。氏親の姉聟である。
三条内大臣実望が駿河に下向したのは、その年のうちであった。
かれは勅使として来た。駿河の府中館へ来ると、氏親が補任されたことを告げた。
〝修理大夫〟
である。
氏親は面目をほどこした。北川どのの喜びも一方ではなかった。
今川修理大夫氏親となって、一段とその権威は増した。
氏親のことは〔今川記〕にこうある。

――歌道は代々好み玉へども、取分け此道に達し、兵法馬乗水練も勝れたり。譜代の面々、深く此人に傾きければ……
新九郎も一安心だった。家臣たちは心服しているし、修理大夫になれば、他国へ対しても、存在を認めさせることになる。
修理職の大夫の官位相当は従四位下である。
管領の扇谷定正も修理大夫であるし、氏親の父の義忠は治部大輔だから、正五位下。
故父よりも官位は上である。その子を守り育てた者の面目はこれに過ぎることはない。
新九郎の名声と人徳が伝わると近隣からも、荒地を捨てて、新九郎の領内へ逃げこんでくる者が増えた。
――新九郎収納するところは、御所の知行わづか有るばかりを台所領に納め、みな本の侍領知す、其うへ新九郎高札を立てる。
前々の侍、年貢過分の故、百姓疲るゝ由聞き及びぬ。以来は年貢五ツ取るところをば一つゆるし、四ツ地頭おさむべし。この外一銭にあたる義なりとも、公役かけべからず。もし法度を背くともがらあらば、百姓等申出べし、地頭職を取はなさるべき者也……
こう新九郎の意志が高札で明らかにされたわけである。
〔北條五代記〕には、さらに、この仁政の効果をこう書いてある。
――これによって百姓共よろこぶこと限りなし、他国の百姓この由を聞き、あはれ我等が国も新九郎殿の国にならばやと願ふと云々。早雲（新九郎）諸侍をいさめていはく、国主のためには民は子也、民の為に地頭は親也、是わたくしにあらず、往昔より定まれる道也、いかでか憐みをたれざらん……
こうした新九郎が、上下から信頼を得るようになるのは当然である。
氏親は、興国寺城のほかにさらに三枚橋城を築かせた。三枚橋城は、沼津城の旧称である。
新九郎の二番目の子が生れたのは、翌年のことである。やはり、新九郎の望んだように男児だった。
これが、のちの新十郎氏時である。
ところが、この次男の誕生には、喜びだけでなく、哀しみがつきまとった。
小笛が、死んだのだ。産後の肥立ちが悪かった。哀れというほかはない。
彼女は死ぬ間際に、新九郎の手をしっかり握って、淋しげに微笑んだ。
「許して下さいましね……」
「何を申すのだ、小笛。気をたしかに持て」

「いいえ、わたくし、もう駄目な気がします」
「……」
「でも、倖せでした……あなたさまの奥方になれたのですもの」
「小笛！」
「あたくし、あなたさまの望み通り、男の子を五人も生みたいと思いました……生むつもりでいましたわ」
「よいのだ、小笛、そなたさえ、生きてあれば。しっかりいたせ」
「でも、二人……生みましたわね……男の子、二人……」
「忝けなく思うぞ、小笛。二人の子を見るたびに、おれはそなたを思うであろうぞ」
「うれしい……新九郎さま」
小笛の眼は、もう虚ろだった。
新九郎の顔を見ていながら、見えてはいないらしかった。
だが、その面てには微笑みがある。
視力を失ってきた虚ろな眼には、遠い昔のことが、伊勢ではじめて逢ったときの新九郎の面影が、映っているようであった。
「うれしい……あのとき、新九郎さまは、小笛を、抱いて下さいましたわね。しっかり抱いて、そして、そして……」
「小笛！」
「……」
もう、小笛は何もいわなかった。
静かな微笑みのまま、彼女の魂は昇天していた。
その美しくおだやかな寝顔の上に新九郎の熱い涙が滂沱としたたった。
新九郎の落胆ははげしかった。はた目にも正視し難いほどであった。
剛毅で聞えた新九郎である。恋女房の死に臨んでこれほど哀しむとは、六人の舎弟分の者たちにも意外なほどであった。
「まことに情の厚い殿であることよ」
「情の厚いはよいがな、いつまで、歎き悲しんでおられても、国の将来思いやられるぞ」
「それよ、他国から甘く見られてはならぬ」
「左様とも、そこでおれに考えがあるのじゃが」と、荒木兵庫が、したり顔に、「新しく女房をな、お奨めせねば」
「――後妻か」と、大道寺太郎も頷いた。「なるほどの、そりゃ要るわいな」
「早いほうがよいのではないか」在竹兵衛も膝を進めて、「ところで、その、誰じゃ、目あてでもあるのか」
「あらいでか」
と、兵庫は顎をなでた。
「無うては、かようなこと、口にも出さぬ」
「それも道理だ。で、どこの女人じゃ」

「殿も憎からず思うてござる女人じゃ」
「と申すと、われら存じよりの」
「左様とも」兵庫は、みんなの顔を見まわして、「葛山に在られるわ」
あっと、一同は、膝をたたいた。
「わかった」
「あたりまえじゃ、葛山とくれば子供でもわかるわい」
「おりょう殿か」
「左様、左様……良縁であろうがな」
「うむ、われらの眼からすればのう。じゃが……」
「それよ。殿が何と仰せられるか、じゃな」
「それはわかっている」
荒川又次郎が腕組みしたまま、ぼそりと言った。
「要らん、と仰せじゃろ」
そのことは、他の者も感じていたのである。
あれほど、愛妻の死に悲歎にくれたのだ。すぐに、後妻を、と奨められても、うんというはずがない。
「だが、わからんぞ。ともかく、葛山のほうに、話を先に持ってゆこうではないか」
「なるほどな、大炊どのから、奨めさせれば、効果があるやもしれぬ」
「そういうこと、そういうこと」
早速、大道寺と荒木が、使者に立った。
新九郎には相談なしに、家臣団代表という資格である。
おりょうは、廃墟の高国寺で助けられると、ふたたび、葛山に預けられていた。
山中才四郎などは、
「あのようなことになったのも、注意が足りざったためじゃ、もはや葛山はアテになりませぬ」
と、止めようとするのを、新九郎は笑って、
「否とよ。さればこそよい」
と、言った。
「ひとたび、過ちあれば、二度とは繰り返すまじ。愚者なれば知らぬこと、葛山大炊は、左様なうつけではない」
一度の瑕瑾で、その人間を見放してしまうようなことはなかった。
それだけに、葛山大炊介は感激したのである。おりょうの養父となって輿入れさせてくれまいか、と頼まれてむろん否応はなかった。
「もともと、おりょうどのは、伊勢の殿よりお預かりいたした方、いつでも送ってまいるが」
と、葛山大炊介は、大道寺と荒木の真摯な顔を頼母しげに見やった。
「養父には、それがしの身分では、いささか、不足であろう」
「いや、決して」

「此方に、拒むべきことは、何もござらぬ。したが、かような話は、聞いたことがない」
好意的な笑いを洩らして、
「家来の方から、主人の女房どのを選んで、お迎えしようとは」
「前代未聞でござろうか」
「さ、いまだ寡聞にして」
「ははは、これが、まるきり赤の他人というのでは、左様な僭越不遜なまねは致さぬよ、のう兵庫」
「左様、殿は、申しては恐れ多いが、われらとは、むかし同胞であった。伊勢で、六人の男ども、契りをいたしましてな」
「聞いております。羨ましく思うています」
「そのよしみ、と申すか、御心のうちはよくわかる。それに、おりょうどのは、殿とは以前から、浅からぬ縁があれば」
新九郎が喜びこそすれ、怒るはずがない、と見てとっての縁談だったのである。
むろん、兄を思う弟の気持だった。
僭越だから腹を切れ、と命じられたら従容として切腹するだけの覚悟はできている。
おりょうには、もとより異存はなかった。
話を聞くと、
「勿体のうございます」
ただ一言言って、うつむいてしまった。
感激のあまり、胸がつまったのだ。
何という喜びであろう。何という、運命の不思議さであろう。
この十年の歳月が、二人の間を堰き、あるいは引き離し、西と東に別れての苦難であった。
その間に、おりょうは何人かの男を知っている。
むろん、新九郎の方にも、女性は多く、影をおとしていよう。
が、そうした人の世の相も、結局は、運命の導きによっておさまるところへおさまるのかもしれない。
感激の涙が、あとからあとからあふれ、おりょうは顔をあげられなかった。
神仏の存在を信じなくなっていたおりょうは、いまこそ、はじめて、大いなる運命の神の力を信じたい気持になった。
(あたしの想いが届いたのだ、あの方をきっと結ばれると思って、それを唯一の夢にして生きてきたのが、有難うございます、一日でもいい、たった一日でもいい、あの方の妻と呼ばれる身になったら、おりょうは死んでも本望でございます……)
このおりょうの心情は、新九郎にもわかっていたのだ。
かれは、ただわからないふりをしていただけだった。

その男の心を慰めるように、家来たちがお膳立てした祝宴であった。
おりょうは、それから数日後にこんどこそ、ほんとうの嫁御寮の祝い輿にゆられて興国寺城へと、運ばれていったのである。

富士の日影

新九郎の性質はもともと物事のけじめをはっきりつける方だ。
中途半端なことが嫌いだし、あいまいなかたちでは気に入らない。
何事でも望みを持った者の生活体系はきちんとしている。
新九郎にとって、一つのけじめとは、最初が拠点としての石脇城の確保であり、次が竜王丸の成長であり、さらには、範満の追放であった。
そのすべてが片付いていったいま、興国寺城の竣工も見たし、小笛を失ったと思ったら、おりょうが後妻になってきた。
小笛が小笠原家の養女として輿入れしたように、おりょうも葛山氏の養女ということで入って来たのである。
新九郎にしてみれば、そういう固苦しい形式の尊重は、噴飯ものであり、そうした形式を踏襲するのは、こころよ

「頼って来たのなら、いさせてやれ、荒地を拓く者には、土地を与えよう、家を建てる者には、材木を与えよう」
それらの収穫物も、一率四公六民で、その線を崩さなかった。
そうしたある日、新九郎は秋山蔵人の訪問を受けた。
もと韮山の北條家の家老であり、堀越御所の家老になっていた。
蔵人は狩装束であった。
綾藺笠に鎧下、むかばきを穿いて、大弓を携え、矢筒を背負い、供まわりは僅か三人という少なさであった。
「裾野に鹿を追いまして」
と、蔵人はさりげなく言った。
「近ごろ、鹿も少のうなりましたな」
その真意はどこにあるのか、新九郎は、そのことを考えている。
何を話したくて来たのか。
新九郎は、秋山蔵人の眼を凝っと見ている。
「――よい城が出来ましたな。難攻不落というのは、かような城を申すのでござろうか。御配慮がゆき渡っておりまするな」
「いや、なかなか、思うものの、半分もできぬ」
心安だてに、一応、城内は案内したが、全部は見せてはいない。肝腎のところは見せない。城にはそれぞれ秘密が

しとしないのだが、
「御身分のことがありますれば」
などと、周囲に押し切られると、
「やむを得んな」
と、下駄を預けてしまう。
そういうことは、かれにとって、
(陋習にすぎん、事大主義だ)
と、言いたい。
改革は必要だが、いまの新九郎の立場では、影響力はしれていた。
改革には、他の反対を押し切り、もしくは黙認させ、さらには従わせるだけの力がなければならない。
(おれが天下をとったならば)
そのときこそ、新しい秩序を確立する。
理想のために新九郎は、兵を進めねばならなかった。
(まず足もとからだ)
領民悦服ということが大前提であった。
次は領民が富有になることであり、その次は、近隣が平和になり最後に家臣たちの生計が楽になることだった。
その理想に少しずつでも、新九郎は近づいていた。
かれの領地が豊かで、暮し易いと噂が伝わると、他国から、どんどん流れこんでくる。
それを役人が追い払おうとする。

「あの若さじゃ、小さな土牢に押しこめられては、気も狂うであろう。あの御方をお救いするには、あのような狭い檻から出してあげることじゃ」
「――であろうな」
「われらは、そのことを、公方に折にふれ、願うているのじゃが、何せ……」
富士子が、首をタテにふらぬのであろう。
伊豆公方こと、足利氏満は、この後妻を寵愛しすぎて、いまでは逆に鼻面を曳きまわされている。
小悧口な女だから、表面は公方を立てているように見せてはいるが、実際は、夜の閨で、完全に支配権を握っている。
「あの女狐が、どのような手管で、公方を瞞しているのか」
世間では、そう言っているが本人の耳にはとどかないのか、とどいてもこたえないのであろう。
平気なものだった。前に述べたように、茶々丸は、公方の長子で、前妻の腹だ。富士子は、それが憎くてならない。
憎しみにもいろいろあるが、彼女の茶々丸への憎しみは、きわめて、功利的なものだった。おのが子を公方にしたいのだ。
もってまわった言い方だったが秋山蔵人の言いたいのは、
(新九郎どののの口から、茶々丸に哀れをかけるよう、言下

ある。今日の友が、いつ敵になるかわからないのである。
「ところで、公方は御元気か」
「はい、近ごろは割合、元気になられました。それに増して御内室が、ますます御元気で」
蔵人は妙な笑いかたをした。
「なるほどな」
「少々お肥りになられました」
蔵人が、わざわざ、鹿狩にことよせて、興国寺城まで来たのは、何かあるはずである。
こういうのんびりした話は、それをきり出すまでの、マクラにすぎない。
「茶々丸は如何しておる」
これではないか、と狙いをつけて、新九郎は、ずばりと言った。
蔵人の面てに動くかげがあった。
当ったらしい。
「どうだな、狂気ぶりは」
と、話を引き出そうとした。
「左様でござる。ますます」
「悪いか」
「我慢ならぬのでござろう。われらには、無理からぬと察せられますが」
「……」

してもらえないか）

と、いうことだったらしい。

いまの新九郎は、気軽には動けない。

かれの大志の前に妨げとなるものは除かねばならないが、それまでは、むやみに敵をつくることは避けねばならなかった。

「茶々丸どのは、たしかに哀れだ、が、わしの口からは、申せぬな」

「……」

「おぬしとは、立場が違う。わしは今川の家来じゃ、軽率な動きは、殿にも迷惑を及ぼす」

「その儀は存じております」

「いま暫し……時を待てとしか申せぬ」

「茶々丸君が、それまでに、もしものことあれば」

「――やむを得まい」新九郎はそう言って立ち上った。

「わしも、城内に一つ、牢舎をつくるかの」

「冗談を……」

「いや、本気さ。わしは大体、人間という生きものは、過ちを犯すように出来ていると思うている」

「なるほど、それは、たしかに。まことの聖人君子などに、お目にかかったことはありませぬな」

「されば、罪を犯すのは、これ人間なれば、あることよ」

「はあ」

「と申して、罪人を、ほうっておくわけにもゆかぬ。したがって、牢舎は必要だな」

二人は歩きながら話している。三ノ丸と二ノ丸の境のあたりである。一段と三ノ丸が低くなっていて、その段落はおよそ一丈ほどある。

「ここに穴を掘りたいが、御所の土牢の高さは、いかほどありましたかな」

「さあ、よくはおぼえておらぬが……」

蔵人は思いだそうとした。新九郎の言葉には、さっきの冷たげなそれとは違った意味深長なものがあったのである。

その日は、蔵人は、そのまま帰ったが、二、三日経つと、蔵人のもとから一人の密使が来た。密使は何やら書状を隠し持っていた。

そうした密使の往復が四、五回つづいたある日、御所に放火しようとした者があった。

その男は、闇夜を幸いに近づいて、塀を乗り越え、御殿の下へ干草を積み、点火しようとしたところを、宿直（とのい）の侍に見つかった。

「痴れ者か」

誰何するや否や、矢を放った。

矢は、曲者のどこかに刺さったらしく、一たんもんどりうって転がったが、またはね起きるや、一目散に走って塀を乗り越え姿を消した。

その翌日も、妖異のことがあった。

御所の門前で一頭の猪が死んでいた。

天城山中に猪は多い。したがって、猪そのものは珍しくはない。

が、巨大な猪だけに、おそるおそる近よった館侍たちは、その猪を、槍で突いてみて、

「や、こやつ、猪ではない」

「なんと」

「中身は人間さまじゃ」

その言葉通り、大きな猪の毛皮をかぶった人間だったのである。

（なんのためにここへ）

人々は疑惑に思った。

猪の毛皮には矢が五本突っ立っている。

その猪らしい黒い影は昨夜、館の門へ近づいた。

何をしようとしたのか。猪の毛皮をかぶっていれば、いざとなっても人々が竦んで、その間に逃げきれると思ったのであろうか。

警備の者の矢が十数本、射られたという。

闇夜なので、命中したかどうかわからない。逃げおうせたと思われたのである。

その死体となっていた男は、界隈の者ではない。誰も知らない顔であった。

「旅の牢人者であろう、猪に化けて入り、財宝でも掠めようとしたのであろう」

そう人々は噂した。その噂が当っていたかどうか。

その次の夜は、もっと奇怪なことが起った。

門前に旅のくぐつ女たち十数人が、榊の小枝と、振鈴を持って、ヂャンヂャン鳴らしながら、踊り狂っていたのである。

「あやつら、追い払え」

富士子は、この種の女たちが嫌いだった。

下賤の者を近づけてはならぬ、と、つねづね言い聞かしている。富士子のそんな高い調子には、口先だけでない憎しみすら感じられた。

早速、屈強の者たちが追い払いにかかった。

「われらを追えば、不吉なことが起りますよ、それでもよいか、それでもよいか」

宰領と見えた年嵩の女が、かん高い声で言い、けらけら笑いながら、榊の葉で、地面に円陣を描いた。くぐつ女たちも、それぞれ円い輪を描いた。

そして、

「いまに見やれ」

「いまに見やれ」

「御館の者どもは呪い殺されようぞ」

けらけらと笑って、さっと風のように走り去った。

「なんじゃ、あやつら」
呆れて見送っていると、その地面に描かれた円の輪の中に、何やらうごめくものが見えた。
白いものが地表にあらわれたと思うと、ぽかりと割れ、何やらちょろちょろと、うごめくものが出てきた。
蛇だった。
（敵の城を乗っ取るには、まず、民心を離反させること）
これは、新九郎にかぎらず、戦国時代の武将の〝城取り〟の初歩的な心得である。
堀越御所の異変が、御所乗っ取りのための、巧妙なテクニックだと見るのは、至当な推測だがはたして、誰が使嗾したことか。
これを、伊勢新九郎の策謀と見る者は多い。
史家の多くもまた、その説を否定しない。
というのは、結果的に、新九郎が奪うことになるからなのだが、彼の手先だという証拠はない。何もない。
その証拠を与えぬところが、新九郎らしい巧みさだと見れないこともないが、それも所詮は類推の域を出ない。
というのは、話が前後するが、新九郎が西伊豆攻略の兵を進めるのは、ずっと後になるからだ。
むしろ、かれは、このあと、韮山の北條家に手を伸ばしているのである。
それも政治的テクニックの一つにちがいないが、直接的ではない。
かれの慎重さといえないこともない。たしかに、かれは慎重だった。すでに年齢的にも、やり直しのきかないところに来ている。一つの行動が失敗すれば、それまでの足固めが、ばらばらに崩れてしまう。
若年のうちなら、失敗もまた貴重な経験になるし、その失敗の多いほど、成功への道は近くなるのかもしれない。
が、新九郎は、すでに若くはないのだ。
（失敗は許されぬ）
慎重にならざるを得なかった。時に、慎重すぎることはマイナスになる。
が、伊豆の形勢を見た場合、その点は心配なかった。公方の氏満も、北條氏も、ともに、老衰してゆくだけであり、その意味でもあせることはなかった。
したがって、御所の変事を仕掛けたのは、伊勢新九郎だとする説は、必ずしも、とることはできまい。かれかもしれないが、そうでない感じも強い。
もしも、かれだとすると、小当りにこころみてみたのであろうか。
ともかく、変事は次々に起っている。夜毎、近くの山にのろしが上った。
「素破ッ、敵が攻めてくるぞ」
と、武装した御所侍たちが緊張していても、何も起らない。

御所内で悪疫が流行り、御所侍たちが猛烈な腹痛で下痢をして、ばたばた倒れたりした。
これも、何かの祟りだとして、人々は恐れた。
当時の人々は素朴だから、異変が起ると、すぐに神意や祟り、もしくは前世の因縁と考えたがる。
蝗の大群の襲来などがあると、悪政のゆえだと思うし、旱ばつがつづいても同じだ。気候の急激な変化などの条件が、蝗の大群を生じさせると考察する者がいても、その気候の急変が即ち、神意だといわれれば、頷くしかなかった。
日常の小さなことにも、そういう素朴な感情が支配するから、階段から落ちても、頭が痛くても、すべてそこに結びついてくる。
堀越御所に起った異変は、それがかなり人為的ではあっても、評判は波紋を拡げるごとに、勝手な推測がつけ加えられ、それが信じられて、さらに飛躍するのである。
「――公方の御所では、面妖なことばかり起るわいの」
「なんぞ悪いことがあるきざしではあるまいか」
それが、そのまま、
〝悪いこと〟
だけ受けとられて、
「悪いことをなさってござる」
というふうに伝わってゆく。
「そういえば、御年貢が、ちっときびしいわい」
「駿河では、六分四分で、百姓のとり分の方が多いという話だで」
「御所の仰せでは、その反対ではないか」
「大きな声では言えんが、なんでも、奥方の化粧料にどんどん費われるそうでの」
「わしらの血と汗のたまものが、奥方の髪油や紅の料になるのかいの、何じゃら馬鹿々々しいのう」
「それもさ、京まで御家来衆を買いに行かせるというぞ、なんと、贅沢なものだで」
「わしは、もっと別のことを聞いたがのう、唐土の品が、筑前の唐ノ津だとか、周防の山口とかに着くそうな。それをはるばる取り寄せるとか」
噂というものはエスカレートするものだ。
噂を口にするものは、それを面白い話、興味のある話、聞く必要のある話として聞かせるのだから、相手に衝撃を与えねば、話す意味がない。
それが無意識に、大した悪意もなしに拡大してしまうのであろうが、聞いた方は半ば信じながら、さらに輪を重ねる。
堀越御所の足利氏満の夫人富士子が、唐土から化粧のための品々をとり寄せる、というふうになると、温和しい民衆も反撥してくる。

事の真偽はわからない。
が、富士子の非常識な虚飾に費消する金穀は、西伊豆の民衆の労働から生れたものであるのは事実だから、そんな噂が、かれらを怒らせるのは、当然である。不平がしだいに拡がっていった。
堀越御所の方に気をとられているうちに、北條家の方で、凶事が起った。
城主が亡くなったのである。ずっと病弱であったし、さほど近隣に衝撃は与えなかったが、このことは、伊勢新九郎の人生に、変化を齎すことになった。
その喪が明けるか明けないうちに、思いがけない話が持ちこまれたのである。
「――如何でござろうか、北條家の名跡を継いでは頂けまいか」
「それがしが北條家をな」
新九郎は、首をひねった。
家老の田中内膳の真意が奈辺にあるかを疑ったのである。
新九郎には妻がある。小笠原氏の小笛を娶って、歿ったあと、葛山氏のおりょうを後妻に娶っている。
二人とも養女名儀である。おりょうは健在だし、前妻の子も二人ある。
こういう複雑なところに、北條家を継ぐとなると、家の中が難しくなる。
家の中が複雑で、家督争いなど欲望がぬきさしならなくなると、家の存続そのものが危なくなるのだ。
多くの実例を見て、新九郎はその点に留意していた。
早い話が、堀越公方が、もっともその悪いかたちになっている。
それも結局は、人によるのだろうし、富士子などという典型的な女性のせいであって、一般論では計り難いかもしれない。
が、少なくとも、トラブルの起る可能性はある。
(だが……)
と、新九郎は考える。
(瑕瑾を省いていては、大望に邁進することは、できぬのではないか)
一家のまとめをするのが、主であり、その一家眷族の結束により、連帯の手を拡げてゆくところに大志が実現できるのではあるまいか。
(人間一人の力では、できることは知れたものだ)
いかに才智に自信を持っていても、その行動半径は知れている。
(城とりもそうだ、攻むると、治めるとの手が要る)
攻めるだけでは、天下はとれない。天下をとるというのは、治めることだ。
そのために信頼のおける人手がなくてはならない。

(やるか……)
新九郎の気は動いた。
それに、何よりも、
〝北條〟
の名が魅力的だった。
殊に、豆相に於ては、絶対的である。
いうまでもなく、鎌倉以来、北條の名は支配者としての存在感が出来ている。人々は、〝北條〟と聞くだけで、信頼するのである。
田中内膳とは何度も逢う機会があった。
内膳の方から、興国寺によく来たし、新九郎が堀越にゆくと、内膳はすぐに聞き伝えてやってきた。
新九郎は、
(北條の名跡を継ぐのは悪くないが……)
九分通り、肚裡が決ったが、まだ確かな返事は与えなかった。
内膳が熱心になればなるほど、新九郎は、微笑を返すだけだった。
「こういうことは、軽々に決められぬ」
「むろんの事でござる。重々、承知しております」
「何せ、伊勢氏の名も捨てたくないゆえにの」
と、勿体ぶって見せてから、
「いま一つは、これまで、おぬしの話ばかりで、肝腎の相手の気持がわからぬ」
「いや、その儀は御心配なきように」
「ではあろうが……やはり、な」
「それがしが、ちゃっと承った上での話なので」
「まことかな」
おどけて見せると、内膳は、躍起となった。
「これはしたり、まことでござるとも。かようなことが、たわむれに、できましょうか」
「怒るな。左様なことはわかっておる」
「では」
「わしの申しているのは、後家どのが、どのくらいわしを望んでいるかじゃ」
「それはもう……」
内膳が力説しようとして膝を進めると、新九郎は笑って手を振った。
「おぬしの口からでは、何とでも申せよう。問題は、後家どのが、何を第一義にしているかじゃ」
「何を、とは？」
「北條の名を絶やしたくない……ではないかな」
「……」
「なるほど、名家にちがいない。鎌倉執権職としても、有名じゃ、絶やしてはならぬ名家であろう。じゃが、おれも、伊勢氏じゃ、流れを遡れば平氏じゃ、悪い家ではないぞ」

「むろん、承知しております。それゆえ、かく、お願い申しておるわけで」
「それにしても、家を絶やしたくないゆえに、おれを望むといわれて左様ですか、と、欣喜して、聟入りすると思うてか」
「いや、決して左様な……」
「ありようはそうであろうが」
新九郎は、ぷいと横をむいた。
「これでも、おれは、男として、すぐれた男と思うている」
「正に……」
「それゆえ、聟はいやだな。男として、そこまで、落ちたくない」
「では、駄目でござるか」
「後家どのがおれに惚れていれば話は別だ」
内膳は、ほっとしたようであった。
(なんだ、そんなことか)
と、思ったように、
「それなら、話はしやすいので」
「申すがよい」新九郎は生真面目な顔になった。「かようなことは、はっきりしておかねばならぬ」
「いかにも」
「わし一人のことではないからな。わしのことではあるが、妻にも子にも、家来どもにも、はたまた領民どもにも、関わりのあることゆえ」
「如何にも、如何にも。では申し上げまする。この話は、実は、奥方より、いやさ、御後室より持ち出されたもの」
「たばかるまいぞ」
「これは、疑り深い」
「当り前だ。疑わずにおれるか。わしには妻子がある」
「はい」
「年齢も、ずんと上じゃ」
「はい」
「後室には、まだ二十代であろう」
「二十五歳に相成ります」
「なおさらに、それでは、釣合がとれぬ」
「いやいや、この道ばかりは年齢ではありませぬ」
「……」
「男と女のことは、それ、俗にも、惚れれば親兄弟も一族もなし、と申すではありませぬか」
「うむ、そのように言うが、それは、もののたとえだ」
新九郎は涼しい顔で焦らしている。相手が焦れるほど、値段が吊り上るのは、取引の場合の常識である。
この結婚も、新九郎にしてみれば取引であった。すでに愛妻はいるし、子も二人もいる。
この上、妻を娶るとすれば、それは正式なかたちでの、

〝妻〟ではない。
この国では、妻と呼ばれる人は一人に決っている。
平安の昔、公卿の社会では、通い婚が普通であり、それは、鎌倉の世でも、多分にそうであったが、この時代になると、もう、一夫一婦の一つ家に起居するかたちが、普通になっている。
とすれば、新九郎は、どちらか一方をとるしかない。おりょうを捨てることはできない。いまさら、新しい北條未亡人を正妻にするから、おりょうに側室でがまんしろとは言えない。
言って言えないことはない。当時、地位ある男の社会ではできないことではない。柔順なおりょうは、承知するだろう。
が、あくまでもそれは、新九郎の望みに従うという意味でのことだ。本心から、それを望む女はいない。新九郎は強要はしたくなかった。
(おりょうは、妻だ。是非にと北條家で望むならば、後室は側妾ということにせねばならぬ)
新九郎も男である。
閨房のことを思うと、悪い気はしない。
(美人だからな……悪くはない)
その気持は、しかし、この場合別にして考えねばならなかった。
内膳を焦らしたあげく、
(御後室の方から、新九郎どのを是非にと、望んでいられる)
との言葉をひき出すと、
(これでよい、これだけ言わせれば)
新九郎は内心、北叟笑んだ。
「わしに惚れているとか」
「はい」
「その方の口加減で、適当に申しているのではあるまいな」
「決して」
「その方が申すように、わしは疑いぶかい」
「そのようで」
「されば、確証がほしい」
「弱りました」
内膳は、がっくりと肩を落して歎いてみせる。
かれの方も、かなり駆け引を心得ている。
「証拠と申されても、女人の心のほどは……」
「さ、その心映えよ。文をくれるように申されよ」
「文……御後室の筆蹟で、という意味でござるな」
「左様。わしも、それを手にいたせば、心が決る」
「……」

すでに、新九郎は攻略をはじめている。韮山の北條氏――主を失って狼狽している一族と後室を心理作戦で、攻めているのだった。

伊豆の修善寺には出湯がある。

傷に効くといわれていた。現在とちがって、そのころは、湯治に泊りを重ねて行くということはない。

連雀（旅商人）と違って、通常、他国へ行くということは大変なことであった。

したがって当時の湯治場というのは、せいぜい一日がかりで歩いてこられる範囲の人が、やってくる。

むろん、温泉で商売しようと思ってもなりたたない。

出湯に簡単な四方柱の萱か藁の屋根、板屋根、もしくは檜皮の場合もある。

四方柱も皮つきのままか、せいぜい、皮を剝いて、磨いたくらいのものであった。

着物を脱ぐのも、脱衣所など気の利いたものはない。脱いだものは、この四方柱にひっかける。四方柱は枝のところを一寸ばかり残して切ってあり、それがそのまま、着物掛けになる。

多勢で、押し合いへし合いということがないから、これで結構、間にあうのだ。

むろん、こういう工合だから、混浴である。このころに

「内膳、そちは悪い男だ」

「は？」

「わしほどの男、これまでにも、何人何十人の女のからだを知ったかしれぬものを、この年齢になって、左様な話を持ちこまれては……心が千々に乱れる」

「まさか」

「後室はたしかに、美しい。眼を閉じれば、くっきりと浮き上るな、あの姿は……たまらぬ」

新九郎は、深い吐息をついた。

楚々とした容姿は、男の征服欲をかきたてずにはいない。たしかに、男心を惹く。

新九郎の表現は、いささか大仰ではあるが、まるきり嘘ではない。

「では、早速立ち帰って、御後室に左様に伝えます」

「取り計ろうてくれるか」

もう一歩だ、と思った。

新九郎は重々しく言った。

「わしは、これより修善寺に湯治にまいる」

「いつ、興国寺へお帰りで」

「わからぬ。わしの心は乱れておる。若者のように、胸が騒いでおる。この気持を鎮めるには、二日や三日では、難しかろう」

わざと、含みを持たせた。

は、混浴は当り前のことであった。史実の上で、混浴を禁止する法令が出たのは、江戸時代に入ってからだ。

もっとも、銭湯が、都会の象徴として、いかがわしい振舞いをする者が増えてからである。

素朴な感情を人々が持っていた時代には、混浴をとがめる法律など必要ない。不埒な行為があれば、常識がそれを罰した。

村には村の掟があり、それが法律だった。それで充分、村の治安は保たれたのである。

さて、新九郎は、馬の口とりまで加えて僅か五人ほどの供廻りで、修善寺へやってくると、村の長の家へ泊った。

「数日、逗留したい」

木賃宿などもない時代だから、寺か民家へ旅人は泊る。

むろん、富裕な者は、食料の木賃――薪料として、幾ばくかの礼金を置いてゆく。

旅絵師などは、絵を描いてゆく。

高僧などは説教をしたり、書や絵を描いて礼とする。そういう時代だ。

新九郎が、何日と、日をきらずに、

〃数日〃

といったのは、含みがあったのである。

かれは、毎日、悠然として出湯に浸る。

時々、思いだしたように鹿や猪を射ちにゆく。といっても遠方へは足をのばさない。一刻か二刻で戻ってくる。

何やら心待ちにしている様子である。

新九郎は何を待っているのか？

手紙であろうか。

田中内膳は、北條の館に立ちかえって、新九郎の言葉を伝えたろう。

後室が、どんな反応を示すか。それが、興味があった。

（賭けだな、これは）

新九郎自身、それを楽しみにしている。

勝っても、負けても、楽しい。

（文がくるか？）

（梨のつぶてか？）

いまのところ、どちらかわからない。

後室に対して、新九郎は男としての欲望を感じてはいる。以前、何度か顔を合わしたとき、眼には思いをこめていた。

それを敏感に感じたであろうか。感受性の鈍い女だと、添寝したとしても、楽しくはない。

（あの女はちがうな）

表面は淑やかだが、内に激しい熱情を秘めているはずであった。

新九郎の経験が、そう考えている。

その実体を識りたい思いが、いまの新九郎にはある。

「村の長がまいりまして」と、二日目に、山中才四郎が困

った顔で言った。「お側に仕える女を連れてまいる由にござります」

「要らぬ」と、にべもなく新九郎は断わった。「左様に、申しつけておいたではないか」

「はあ。その由、申し聞かしたのでござるが、何分にも、信じませぬので」

「困ったやつだ」

習慣といってよかった。

富裕な者や、身分のある武士がくれば、村長が、

〝お側御用のため〟

と、称して、垢ぬけした女を連れてくる。

日常の身のまわりの世話をする者が当然、必要だから、そのこと自体、不思議ではないが、昼間だけではない、夜のつれづれをもなぐさめる。枕の塵を払う奉公である。

むろん、新九郎のことは、界隈でも知っている。名を秘めるわけにはいかない。

韮山から修禅寺までは、山を越せば、すぐなのだ。したがって、村長ばかりでなく村人にしても、ないがしろにできない。

況や、他の大小名と違って、

〝四公六民〟

の慈悲深い殿さまだと噂はこのあたりにも聞えている。

「その御方の御寵愛を蒙れば、家の末代までの名誉でございます」

村長だけでなく、村人たち、娘の家族まで、本心、そう言ったという。

「要らぬ。世話をする者に不自由はしていない」

頑として、新九郎は、はねつけた。

たしかに、供の者はいる。食事の支度から、洗濯まで、男手ながら、やる。

武士の生活は、それをさして異としなかった。

戦場では女がいない。城内にはいるが、遠征したときは、女手がない。

うっかり、敵地の女など雇っていたら、どんな透破や乱破がまぎれこんでくるかわからない。

寵童など、男色が普遍的だったのもそういう事情が、裏にあるのだ。

単に、

(身の廻りの世話を)

と、いえば、たしかに、

(こと足りている)

と、突っぱねることになる。

まさか、妻妾の代りの役を、というわけにはいかない。

山中才四郎の固辞を、村長たちは、一種の社交辞令と受けとったらしい。

「てまえでは、駄目でござる」

弱音を吐いてしまったので、新九郎は直々に、村長と娘と、その親たちを引見した。

「志は忝けないが、わしにその必要はない」

「はあ、ではござりましょうが、何かと御不自由……」

「いや、不自由はない。家来どもが、すべてやってくれるでな」

「はあ」

呆れたようだ。

娘も垢抜けしている。村で一番の美女を選んで来たのであろう。

「可愛いな」

失望させてはならないから、新九郎はそう言ってやった。

「わしに妻がいなければ、娶りたいくらいだ」

「勿体ない仰せを」

村長は平伏し、娘は耳までまっかになった。

「ははは、真実よ。わしは年齢をとりすぎている。その娘御は、十三、四であろう」

「はい、十三になりまする」

「わしには勿体ない。村の若者で焦がれている者があろう、娘にも想う男があろう、一緒にさせてやるがよい」

「恐れ多いお言葉でございます」

村長は恐縮し、娘はわっと泣き伏した。

感激したことは、人に話すことで、さらなる感激を味わうことができる。

たちまち、噂は村中にひろまり、さらに近隣に聞え、韮山までも聞えてきた。

新九郎がその効果を狙って、固辞したとは思われない。そこまで、策を弄することはなかった。

むしろ新九郎が、娘を追い帰したのは、賭けに勝ったとき、困るからだった。

賭けは、むろん、後室のことである。そして、とうとうその日が来た——

(——文がくるか、後室がくるか……どっちかだ)

新九郎に自信があった。

内膳に対して、城ほしさの聟入りはいやだと、突っぱねたのも、その自信があったからである。

(おれに惚れてのことでなければ、承服できぬ)

と、まで言ったのも、その話が流れると思わなかったからだ。

それきりになるのなら、口に出しはしない。この縁談が、流れてしまったら、新九郎は、恥をかいたことになる。

その日——

修禅寺に来て、四日目だった。

槍持ちの平太というのが、飛んできた。

「見えましたぞ、見えましたぞ」

「何が見えた」

「急げ。みなの者に伝えよ、急ぐのじゃ」
この主人が、頭に閃くことは郎党たちには、すぐにはわからない。
ともかく、命令だ。
急遽支度を整え、あわただしく出かけた。全員である。わざと一人ものさない。
「こりゃ大変だな」
「輿の主は驚くじゃろな」
「韮山からわざわざ来たのに、もぬけの殻では、さぞ、がっかりなさるじゃろ」
「韮山と決ったものではあるまいが」
「決っているわい。西の道から、あのような女輿がくるとは、北條家の後室に決っているではないか」
「叱ッ、聞えるぞ」
郎党たちは、主人の意中を計りかねてはいるが、何やら面白くなるような気もして、あれこれ私語しながら新九郎に従うと反対の山へ入っていった。
その女輿には——
槍持ちの平太が睨んだように、北條家の後室が乗っていたのである。
まさか、新九郎がいなくなっているとは思わぬ。
(わたしが来るとは、夢にもお思いではあるまい……)
いささか、悪戯っぽい気持もあった。

「輿でございます」
「……」
「あの方の輿でございます、間違いありませぬ。山の狭間をこちらにやってまいります」
郎党らは、かれらなりに、あれこれ臆測をめぐらしていたのであろう。
「あの方とは誰だ」
「きまっております。殿がお待ちになっていられる御方で」
「おれは、誰も待ってはおらぬ。湯治を楽しんでおる」
「殿が湯治を。はい、どこも悪くはありませぬのに。いえ、これは卒爾を申しましたわい。何やらお考えをまとめるための湯治でございましょうが、ともかく、輿がまいります」
「そうか」
「韮山からにちがいありませぬ」
「そうか」新九郎は、気難しい顔になって、「すぐに、支度いたせ」
「は？」
「鹿狩りにゆく」
「え！　あ、あの輿は、殿に逢うための……」
「鹿狩りだと申したぞ」
「は、はい」

(あの方は、相当の器量人、わたしが突然にあらわれると、やはり驚くであろう。驚いただけ、わたしの方が、分がよくなる)
後室としては、たしかに新九郎をほしい。
逞しい男の肉体もほしいがそれ以上に、〝北條〟の名跡を継ぐ男がほしい。
新九郎以上の男は、見わたしたところ、居ないのだ。
いうならば、この縁談は屈辱的であった。
その恥しさを、こういう突飛な思いつきで、少しでも誤魔化そうとする。
その女心は、新九郎のほうに、すでに先に読まれていて、
(文でも……)
という言葉に裏があったのだ。
(自身でくるだろう)
と、見抜かれていることに気がつかなかった。
自分では、いい思いつきだと思っている。
権謀術策の時代である。複雑多様な女心も、
〝男と女〟
という原初的な観点に立ってみると、答えは、意外に簡単に出る。
(ていさいを保っていても、所詮、後室も女だ)
新九郎には、自信があった。
(病弱の夫と数年もの間、何もなかったはずだ。とすれば、心の中では、わしが欲しくてたまるまい)
新九郎が賭けたのは、その女心である。
思った通りに、彼女は来た。輿が来たと報告をうけたとき、新九郎は、
(勝った！)
と、心中に思った。
あとは、有利に、この話を進めるだけであった。
後室の方は、それとは知らぬ。逆に、驚かすつもりでやって来ている。
新九郎の泊っている家はすぐわかったから、行列は、乗りこんでくると、
「これは韮山の北條家御後室である。伊勢新九郎どの御滞在と聞き及ぶが、拝謁を願い出たい」
供先の口上である。
気張っている。むろん、どんな用で来ているか知っているから、供の者たちは、こう気張るしかない。
ところが、アテがはずれた。
「御不在」
と、家の者は返事したのである。
「まあ、お出でにならない？」
後室は落胆をあらわにした。
新九郎がどんなに驚くか。それが後室のひそかな楽しみだった。

なまじ、意表を衝いて驚かすつもりだっただけに、するりと掌の内から逃げられた感じだった。
失望を顔にあらわすと、
「――やむを得ませぬ」と、静かに言った。「お帰りまで待ちましょう」
近くの家に泊ることにした。
共同湯というか、出湯は一ヶ所だから、どこの家からも、そこにやってくる。
村人たちにとっては、一日の憩いにもなるし、病弱の者には、療養になる。
したがって、日昼は、湯治の者が多く入る。
夜になると明りが要る。貧しい農民たちにとっては、灯油は貴重なものだから、なるべく浪費しないように、陽とともに起き出で、陽の入りとともに寝に就くのが普通である。
したがって、日が暮れると、出湯には、入る者が殆どいなくなる。
北條家未亡人は暗くなってから来た。
従者たち三人を周囲で見張らせて、誰も近寄らせぬようにして、裸になった。
小袖を脱ぎ、腰のものを剝ぐとすんなりとしたしなやかな裸身が、闇の中に浮び上る。
未亡人のからだは、闇がヴェールをかけてくれるせいか、侍女の眼にも、まるで娘のように見える。
そのたおやかな肌を、静かに湯に沈めると、未亡人は湯気の中で、ほっと吐息をついた。
長い髪は、たばねて、桂包みのように手拭いでたくしあげている。そういう姿だと、やんごとない上臈衆という感じはしない。
この出湯から二間ほど離れた岩陰に侍女はうずくまっていた。未亡人に背をむけて、近寄る者を警戒する。
男の従者は、さらに、二、三間離れた小径などに、それぞれ、槍や薙刀を握って、闇を睨んでいる。これだけ、気をつかっていればけものでも近寄るまい。
未亡人は安心していた。
韮山から修善寺まで、旅の疲れを癒す出湯の中で、のびのびと、手足を伸ばしている。
(新九郎どのも、この湯へ入られたのであろうか)
そう思いめぐらすと、あたかも湯の中に、新九郎の男の臭いがこもっているようで、独りで頬を赧らめた。
ほどよい加減で、腹が温まるのが気持よく、上気していただけに血ののぼりが早い。
そのとき、岩陰で何か音がしたように思った。
侍女の背後からふいに大きな手が、口をふさいだのである。いつの間に誰が忍び寄っていたのか。
「静かに」と、その男は囁いた。「声をだしてはならぬ」

声を出そうにも、大きな手で圧えられているのだ。侍女はただもがくだけだった。
男の熱い息が、耳にかかっている。
「よいな、凝っとしていよ」
「……」
「そのほうのためだ」
「……」
「あとで、叱られるような真似をしてはならぬ」
どういうことだろう。侍女は、その囁きの意味がわからなかった。
が、ともかく男の声には、強さとともに優しさがあった。
それは命令でありながら、従うことの快さを感じさせるものなのだ。一口に言ってしまえば、男の魅力というものであろう。
女の抵抗が弱まり、へなへなと崩れた。まるで、男の囁きに暗示にかけられたようなものであった。
その男は、
「よいな、声を出しては、ならぬ」
さらに念をおしてから、侍女の傍を離れた。
侍女は、うつつになっている。その眼に、男の広い肩幅がぼんやり見えた。
男は、出湯の方へ近づいてゆくではないか。
未亡人も、むろん、そんなことが岩陰で行われたとは知らぬ。
侍女は慎しく、こちらに背をむけて、近寄る者を警戒していると思って、のびのびと手足をのばしていた。
湯気がのぼって、月もうるんで見えた。
(ああ、新九郎さまは、どこで鹿狩りをなさっていられるのであろうか)
うっとりと眼をほそめたとき、湯が騒いだ。何か、大きなものが、転げこんだようであった。
「あっ……」
思わずふりむいたとき、そこに男の顔があった。
「ははは、驚かして済まぬ」
新九郎の顔が笑った。
新九郎さま……と、呼びかけようとして、その声が出なかった。
「いい夜だな、暑くもなし、寒くもなし」
「は、はい……」
「かような夜に、山の出湯に、男と女」
「……」
「二人きりで月を見る。悪くはないなあ」
未亡人は、真っ赧になっている。湯にうだったようだ。
見張りどもは何をしていたのか。その腹だたしさとともに、このまま、誰も近寄らぬようにと、祈りたい気持だった。

「そなた、美い女だ」
「……」
「わしは、美い女が好きだ」
意表をつかれただけでも、未亡人には衝撃だった。
女性にとっては、もっとも弱い湯の中である。裸であることが、何よりも、女性の羞恥心を刺戟する。
その上、屈辱的なことに、新九郎は、彼女を北條未亡人とは認めていないようであった。
顔を合わせたことも何度かある。口をきいたこともある。にもかかわらず、まるで、初対面のような態度をとっている。
それも未亡人としての身分に対するものではなく、まるで、そこらの村娘にでも対するような調子なのだ。
「こういうところで逢ったのは、神のひきあわせであろう」
「は、はい……」
「神仏は、われらがこうして逢い識ることを望んでおられる」
「……」
「されば、そのもとめに応じなければなるまい」新九郎は湯の中を進んでくると太い腕をのばして、未亡人をとらえた。「わしは、伊勢新九郎長氏」
「あ、あたくしは……」
「否とよ」新九郎はかぶりを振った。おごそかな調子であった。「そなたの名は聞くまい」
「え!?」
「そなたは、今宵から、わしのものになる」
「……」
「さすれば、昨日までの、今日、ただいままでのそなたは居なくなる。これまでの名は要らなくなる」
「――では、あたくしは」
「新しい名を与える」
「わたくしに、名を」
「左様、新九郎の妻にふさわしい名を」
と、凝っと見つめる。両手は女のはだかの腕をとらえている。
強い力である。骨が折れそうだった。ゆたかな胸乳も、隠しようがなかった。
それを羞しいと思う気持は失せて、むしろ濡れた胸乳のなめらかさが、月の蒼い光のなかで、幽艶な美しさに見えた。
まるで、呪縛にかかったようであった。
未亡人は、凝っと新九郎の眼を見返していたが、やがて射竦められたように、眩しくなってき、瞼が重くなってきた。睡気がきざしたような感じである。
新九郎の顔や、逞しい肉体も、湯気でうすれたようにお

ぼろになっている。
「――左様さ、そなたは伊豆で一番美しい女子じゃ」
「……」
「韮山は、伊豆の都……その女であれば、伊都女……どうじゃ」
いとめ。
(伊都女、ああ、いい名だわ)
(――伊都女……)
いとめ。
新九郎は、この即興的な命名に大いに満足したようであった。
糸のような繊細さを持っている女性なのである。新九郎の手のなかで顫えているのが可憐であった。
嘗て夫を持った女とは思えない、嫩さと、浄らかさが、肌から感じられた。
「伊都女……そなたは美しい」
「はい」
「この新九郎の妻になりたい、そう申したとな」
「は、はい……」
やっぱり、知っておいでだったのだ。ひどい、わざと忘れたふりなどなさって。
伊都女は、こみあげるものがあって、うすく涙がにじんだ。
「男と女が結ばれる。これは大変なことじゃ。わしにはすでに妻がいる」
「――存じております」
「その上で、わしの妻になりたいという」
「はい」
伊都女は、大きく眼をあけた。
いま、はじめて、自分の意志を伝えるべきだと思った。
その機会を新九郎が作ってくれたのだ。
「その御方を押し除けるつもりはありませぬ。でも、新九郎さまは御立派でございます。いいえ、どう申し上げたらいいかしら、素晴らしい御方……殿方の中でも、けたはずれな……」
どう表現したら、思いを的確に口にできるか、伊都女は焦った。
前から想い、心の中で確立していたはずの新九郎観が、いざとなると、的確に表現できないもどかしさで、伊都女は焦っていた。
「いいえ、悪い意味ではないの、そこらの殿方の物差しでは計れない御方、日本一の、あの、坂東一の……」
「伊豆一と言いなおしてもいいぞ」
「それは申すまでもありませぬ、東海では新九郎さまお出でなければ、今川家の社稷は崩壊していたと専らの噂でございます」

「誇大じゃ」
「真実でございます。されば、新九郎さまは、駿河のみの新九郎さまであってはなりませぬ」
伊都女の言葉は熱を帯び、情熱が、澱みをなくしていくようであった。
「そうでございます、新九郎さまほどの殿方は、駿河にとっても必要なように、伊豆にも必要なのでございます」
「……」
「おなごと申すものは、嫉妬ぶかい……それも当然でございまするが、それは並の男と女の場合のこと。新九郎さまほどの殿方を女は一人占めにしてはいけないのでございます。つまり、新九郎さまが韮山へお出でになれば北條新九郎、駿河へお戻りになれば、伊勢新九郎……そうなることが、それぞれの国のためにもなりまする」
伊都女の言葉には一理あった。
その理屈は、葛山から入ったおりょうが聞けばどう思うか。
男にとって、都合のいい論理なのだが、女性の方から、その論理を確立されると、いささか照れくさい。
が、新九郎の自負は、その照れくささを通り越して、
(おれほどの男は……)
と、あらためて思った。
青年の時代から、自信はあった。この乱世に生れてきたことの意味と、
(乃公出でずんば)
との意気は、青年時代にたいていの者が持つ自信だが、また、その大多数が、馬齢を加えるにしたがい、失望と落胆と挫折と、そして、自信のない気弱な男になってゆくのである。
社会というものが、いつの時代でも大多数の人間には、きびしく、苦しいものであることに違いはない。
新九郎もまた、度々の逆境に苦しめられた。
が、常に、無一文になっても、絶望の重い蓋で頭上を圧えられても、
(いつの日か!)
と、再起を心に誓い、挫けることがなかった。
失敗もある。落胆もある。が、そこで終らなかったのは、
(おれが出るしかないのだ)
という使命感だった。
その新九郎の気持を思い上りとはいえない。
若いころは若いように、壮年のころは壮年のように、常にかれのその自負には、逆境から来た裏付けがある。
かれは幸運児ではない。運がいいとか、ついていたとかいう表現は、かれの場合、あてはまらない。
すでに、新九郎は若くはない。
中年を過ぎて、やっと摑んだ栄光の座は、それまでの経

験の裏打ちが存在感となっているのである。
かれが、常人と違うところは逆境を重ねて、かえって自信を得てきたことだ。
逆境が失意でうちのめすのは常人の場合である。新九郎は逆境をかえって、ばねにした。
ばねは、撓められることで、反撥する。新九郎がもし、幸運の青年期を過していたなら、中年以後における、かれの活躍はなかったであろう。
それはまた、かれの人間的魅力も、青年時を踏まえた上で、形成されたと見られるからである。
伊都女の眼にうつる新九郎の姿が、いかに魅力的なものだったか。
その、女の口から出たにしては、大胆で率直な論理は、新九郎を〝識る者〟の言葉であった。
「伊都女……そなたの乞いに応えようぞ。新九郎は約を違えぬ」
新九郎は女の手をつかむと、下腹部へと誘ったのである。
出湯の中での交媾は異常であった。
異常といえば、すでに妻のある男性がまた別の女性を妻にするというのも、この国では異常といわねばならない。
その異常さを、敢て行うところに伊勢新九郎のけたはずれの性格がある。
むろん、伊都女にしてみてもはじめてであった。
強引に新九郎のものをつかまされて、伊都女は真っ赧になった。
それは雄々しく、小さな掌にはあまった。
久しぶりの〝男性〟であった。
病弱の夫に仕えて、永い間、交りはなかった。
殆ど、男の味を忘れていたといってよい。
その飢えが、彼女を新九郎との縁談に積極的にさせたのだ。
そのことを、伊都女は、熱いおとこを、掌いっぱいに識ったことで、否みようもなく自覚した。
(ああ、わたしがもとめていたのはこれだった……)
逞しい男との性交への期待だけでは、むろん、無い。
その新九郎の雄偉なものは、新九郎自身であり、新九郎のすべてを象徴するものにほかならなかったのである。
「どうだな……」
「……」
返事ができない。
新九郎の声には、いたわりがある。
伊都女の感情を慮り、そして、羞恥のヴェールをひき剝いでやることで、新しい人生へ踏みだすことを、速やかなものにしてやろうとした。
「これが、わしだ」
「は、はい……」

「そなたのものは」
新九郎の手が、下半身にのびた。
むろん、湯の中である。反射的に、伊都女は腰を引いたが、手は新九郎のものをつかんだままだった。
それは熱い鉄棒のような固さであり、女の掌はまるで、焼けた鉄棒をつかむと、皮膚がただれて吸いついたまま離れないのと同じだった。
伊都女の意志とは別に、掌が離れないのだ。
男の手は伊都女の秘所へ伸びている。新九郎の手は大きく、指も大きい。
伊都女の口から、せつない喘ぎが洩れた。眼は閉じてしまっている。その粗大さを感じさせないような指の動きであった。
その指はこれまで、どれほど女の部分を知っているかしれない。が、憎しみや怨みを感じるより先に、その多くの経験があればこそ女を喜びへ導いてくれるのだと伊都女は思い、湯の中で腰を浮していた。
この夜——
伊都女にとっては初夜にひとしかった。
死んだ夫のことは忘れた。新九郎の男性の逞しさは、まるで処女のように、破瓜の苦痛をともなった。
その苦痛は、むろん快感を齎すものであり、新九郎の両の手も唇も舌も、彼女の苦痛を柔らげるのに、努力を惜しまなかった。
伊都女は、湯気に包まれ、出湯を騒がせ、なかで、ほとんど失神せんばかりになった。
こんな気持になったことはない。
これが、ほんとうの男だと思った。
男と女のまじわりが、これほどの快感を齎すものだとは、知らなかった。
話には、いろいろ聞いていても誇張されたものだとしか思わなかったが、いま、その陶酔を識ると、やはり本当なのだ、あたしはまだ、娘のようなものだったのだ、ほんとうの女にはなっていなかったのだと、目ざめた思いだった。
出湯の中だけでは、しかし、新九郎の情熱は終らなかった。
借りた部屋へもどってからも、
「初夜の思い出を大切にしような」
新九郎はそういい、夜の白むまで伊都女を愛撫した。
女性の中には、体質や育ちの環境によって、性感の発達の遅い者がいる。
伊都女などの場合、そうであったろう。年齢的にも成熟度が丁度よかったのかもしれない。
伊都女は新九郎の腕の中ですすり泣き、女であることの喜びに浸った。
次の日、新九郎は伊都女をともなって、韮山へもどった。

多勢の家臣たちを集めて、正式に、新九郎が北條家の主人になったことを伝えた。
「これで北條家も万々歳でございます」
田中内膳はじめ、家臣たちは大いに喜んだ。
新九郎ほどの男を主人に迎えたことは、衰退の北條家を隆盛に導く、唯一無二の方法であることを、家臣の誰もが感じていたのだ。
この時代は、力がなくては、大屋台を運営してゆけない。北條家が他の勢力に押し潰されることは、家臣たちが生活の安定を失うことである。
新九郎の二重生活がはじまった。
駿河の興国寺城に在るときは伊勢新九郎であり、韮山に来たときは北條新九郎であった。
この二重生活が、惑いなく行われたのは、やはり、新九郎の非凡さであり、その存在の大きさであったろう。
こうした生活に、しかし新九郎が快楽を感じていたと思うのは、現代人の心の小ささであろう。
かれはその生活の中で、次の飛躍を考えていたのである。

破牢

新九郎が北條家の未亡人と婚姻したことは、堀越御所内に、疑惑と不安の渦をまきおこした。
何しろ目と鼻の近さなのである。
「伊勢新九郎は、何を企んで……」
「いや、もはや、伊勢ではない、北條新九郎じゃとよ」
「どっちでも同じだわい、同じ新九郎ではないか」
「それはそうじゃ……ま、何を考えているか、われらにはとんと」
「ともあれ、用心せねばなるまいのう」
颱風の眼というか、新九郎の行動するところ、必ず、渦が巻き起る。
どっしり坐っているだけの伊豆公方の下にいるだけに、家臣たちには、新九郎の行動性が、羨望とともに驚異的にうつっているのであろう。
そうした御所内の空気を慮って新九郎は故意に沈静して

いた。

（御所の中は、すでに内部崩壊がはじまっている、こちらから手を出すことはない）

土台が腐り、もろくなっているところに、自ら、柱を傷つけ合っているのだ。大屋根が崩れ落ちるのは目前だった。こうしたときに、新九郎が手を出すことはない。静観しているだけで崩れる。

この見方は正しかった。

延徳三年二月、京の管領細川政元が、駿河の富士遊覧に来た。

これは今川五郎氏親が、今川の主として招待したのである。

氏親の任官運動であった。氏親は伊豆公方を烏帽子親に立てて、元服して五郎氏親とはなったが、まだ官位はない。大国の領主として、官位がなければ、威厳が具わらず、したがって、力もない。

このことが遅れたのは、範満の策謀の余韻が尾を引いていたと見られるのだが、ともあれ、官位を賜わるためには、朝廷へ賄賂をやって運動しなければならない。

細川政元へ手を差しのべたのはその第一のやり方で、まず、実情を見せること。

細川政元は、富士遊覧に名を借りてやってきた。

それくらい、当時は東海地方といえば、京都と離れていたのだ。

実際、氏親がどれくらいの実力者かわからない。このことは、義忠の死後、範満の時代が十年もつづいたことにも由来している。

その十年間の工作が、邪魔をしていたのである。

駿河へ下向してみると、間違いなく五郎氏親が今川の当主となっていて、一族老臣らいずれも、この若い君主に仕えているから、細川政元は合点した。

「帰京の暁には、堂上方にも、よしなに、お伝え申そう」

手蔓はほかにもあった。氏親の姉が三條内大臣実望に輿入れしている。

細川政元が富士の美しさを堪能して帰京して間もなく、氏親は修理大夫に補任されている。

前にも述べたが、修理大夫は官位相当では従四位下である。

祖父の範忠が上総介であり、父の義忠は〝治部大輔に叙し上総介を兼〟ねしめられたというから、正五位下。

氏親は二階級上だ。新九郎の忠告や運動が功を奏したのであろう。

補任のため下向してきたのは三条内府実望であった。勅使として義弟氏親のためにやってきた。

細川政元は駿府に来たとき、足を延ばして、韮山へもやってきたが、氏満は大いに悦んだ。

数日して帰京の途につくとき、氏満は病苦を訴えて、「わしも、もはや長くないと思うが、一目、義遐に逢いたいものじゃ」

といった。

義遐は次男である。天竜寺香厳院の喝食になっている。

この天竜寺は、むかし、氏満がやはり喝食として入っていた。その由縁もあるが、直接的には、此度は細川政元が口をきいているのだ。文明十一年十二月の生れだから、もう十三歳になっている。

「なるほど、さもあろう。そのようにお取り計らいいたしましょう」

病床の氏満の願いだ。政元はそう返事したが、内心は困惑していた。

ひとたび僧門に入れば、簡単には里帰りなどできない。寺内はすなわち浄土であって俗世間は汚穢の世界である。ましてや、若年者ならば、心も動揺するし、俗世間の垢に染まりやすい。

そのころ、新九郎は、三枚橋城の築城にかかっていた。駿河の東の守りとしては、興国寺城の地は必ずしも完璧ではない。もっと東のほうが、地勢的にも、地の理から見ても、いい。

そのため、三枚橋の地を選んだ。

のちに三枚橋城は観潮城などと風流な名をつけられたが、沼津城の旧称である。

まだ当時、沼津という宿駅はなかった。

昔昔、ここは車返し、と呼ばれた。車とは牛車であろう。つまり箱根に登ることが出来ないで、ここから輦を返す。

鎌倉時代、駅舎の地は、後の日吉村裏三枚橋の内で、鎌倉どのの旅舎があって、〝牧ノ御所〟と称されていた。

ここは大岡の牧だったからである。中古、大岡荘と唱えられていた。荘園があったのだ。沼津の名称は天正ごろからららしい。

この築城半ばに、新九郎をひそかに訪れた者がある。

女性であった。

女性だということが、周囲の気を許させた。築城の縄張り内は秘密主義である。どういう工作をされるかわからないし、抜け穴など作ると、逆に利用されるおそれがあるから、部分部分で、殊に秘密の場所がある。

したがって、夜でも不寝番が見張っている。

その女は、不寝番の足軽に近づいて、こう言ったのである。

「御城主さまにお目にかかりとうございます」

そう言って、小さな包みを差しだした。

「なんだ、これは」

「お届け下さいますよう」

「だから、なんだと聞いておる。殿さまにえたいの知れん

やつからの献上物など、簡単に取り次げんわ」
「お届け下さると、お喜びになります」
「何をこやつ……うぬは何者だ。まず、素姓を申せ。どこの何というやつだ」
「小田原から参りました」
「それで？」
「小桜と申します」
若い女である。小田原から箱根を越えてきたにしては旅装束ではない。
被衣をかむり、小袖も粗末ではない。二十歳前後であろうか、この時代では、年増であるが、容姿は悪くない。
「小桜か。それで、この品物は、なんだな」
足軽の声はいくらか優しくなった。
「御不審ならば、披見なされませ」
「うむ」
と、開けようとすると、
「殿のお叱りがあっても、知りませぬぞ」
と、逆に威した。
あわてて足軽は、手を止めた。
そこまでいわれると、何やら重大なものに思えてくる。
「ともかく取り次いでみる。そこへ控えておれ」
「はい」
「そこらを歩きまわってはならんぞ」

宵の口である。もう夜の色が流れている。近くにいた同輩を呼んで、この由を告げると、足軽は、上司のところへ行った。
この手の曲輪を預かっている小頭は、さらに、上役の山中才四郎のところへ持っていった。
才四郎は焼魚を肴に酒を飲んでいたが、
「追い返せ」と、にべもなく言った。「かようなときに妙な奴を近づけてはならん」
「では、この品物は」
「なんだ、見せろ」
無造作に才四郎はそれを開けた。
紙包みである。中から出て来たのは、櫛だった。
さして上等のものではない。黄楊の塗り櫛で、秋草が描いてある。もうかなり使い古したものと見えた。
「なんだ、女櫛ではないか」
山中才四郎は眉をひそめた。
「この櫛にイワク因縁があるのか」
「さあ、殿に御覧に入れればわかるとか」
紙包みである。中から出て来たのは、櫛だった。
「かような古櫛で殿のお目をけがすことはできんぞ、第一、櫛などというものは、あんまり、人前に出すものではない。贈り物にしてもいかんのだ」
「はあ、左様で」
「櫛は、苦死に通じる」

「苦しみと死でございますな」
「それを殿に差し上げるということは、苦と死を齎すことになる。とんでもない話だ」
「なるほど承れば、その通りでございます。あの女め、ひっ捕えて、さかさ磔刑か火焙りにでも」
「待て待て、そこまで、先走ってはいかん」
山中才四郎は件の櫛を懐中にすると、
「ともかく、押えておけ、おれが言上する」
新九郎のところへいった。
新九郎は仄暗くなった室内で繩張り図面をひろげて、工匠頭や荒木兵庫などと話していたが、才四郎が来客を告げると、眉を寄せて、
「女人が？　妙だの」
「はい、妙でございます。櫛を献上するなど、言語道断」
「ふむ。だが、櫛くらいのことで、そう目くじらたてることもあるまい」
「ですが、櫛は苦死……殿は大事なおからだでござる。たとえ、言葉の綾とは申せ」
「なに、呪い殺そうと思っても、わしには効き目はない」
「とは存じておりますが」
「どんな女だ」
「ま、顔立ちは、悪くはありませぬが……女というやつは魔性でござるゆえ」

「ははは、よほどこれまでに女にもて過ぎたのだな、精気を抜かれて、恐ろしくなったか。とにかく、その櫛というのを見せろ」
「よろしゅうございますか」
と、山中才四郎は逡巡した。
「もしも、魔性あれば、それがしが吸いとって、虚しきものにせんものと思い、懐中にしておりますが」
と、懐をおさえた。
呪いがかけられているなら、自分が、それを身替りに受けようというのである。
伊勢で五人の同志と血盟したなかまである。その気持は年月が経っても変らない。
「案じてくれるのは有難いが、それくらいで恐れては、新九郎これから先、志がのべられなくなる。見せろ」
「よろしゅうございますか」
「気を持たせるなよ」
笑って手にとった新九郎は、灯のもとで凝っと目を走らした。
「よし、逢うてくれる。呼べ」
「よろしゅうございますか」
「大事ない。心配いたすな」
新九郎は、女性に対しては自信がある。
すぐに、その女は連れてこられた。

「小桜と申すか？」
「はい……」
見たことのない女である。どう見ても、見おぼえない。いくら歳月が経っていても、一度口をきいたことのある女なら思いだすはずだ。
「小桜……わしは知らぬぞ、逢うたことがないな」
「はい、わたくしは、はじめてお目もじいたしまする」
「そうであろう、すると、この櫛はそなたのものか」
「いいえ、わたくしの知り人の小萩さんのものでございます」
「小萩？　どこにいた女だ」
「府中でございます」
「それなら、知っているかもしれぬ、で、その小萩が、何とした」
「いいえ、小萩さんが、よくお噂しておりましたゆえ……わたくしその小萩さんのともだちということで、それでお目通り願ったのでございます」
新九郎は、件の櫛に字が彫ってあるのを見つけたのである。
（なんと書いてあるのか……）
字は小さい。
派手な櫛の中に、小さな字は灯の下では読みにくい。
新九郎は目を細めかざしてみたりしたが、あきらめて、才四郎に渡した。
「これを読んでくれい。ここだ」
「はあ、何やら彫ってありまするな、呪い文であろうか」
「頭からそう決めてかかるな、素直に読め」
才四郎は新九郎よりも若い。すぐに読みとった。
「こはぎ、と読めまする」
新九郎は首をかしげた。聞いたようでもある。
これまでに、多くの女と交りがあった。記憶している者ばかりとはかぎらない。
行きずりの場合もあるし、深い関係が生じた者も尠なくない。が年月は、そうした由縁をすら、遠い霞のかなたに押しやるのである。
「小萩、なあ……」
「よい名でござるな」
と、荒木兵庫がひやかし気味に口をはさんで、
「美女を想像しますな」
「いい名だ。たいていおぼえているのだが……思いださぬ」
「これは薄情な」
「そうともいえんぞ、必ずしも、関係があったとはいえん」
それにしても気になった。
そういうところを相手は計算していたようである。

なるほど、考えたものだ。
新九郎ほどの身分に逢うのは容易ではない。昔の友人がよく知っていたというのをおぼえていて、その名前を利用して、逢いに来たのであろう。
「ふむ。小萩のう……思いだせぬが、まあよい。そなたは小桜とか申したが、その小桜が何の用だ」
「大事なお話がございまして」
小桜は、切れ長の眼を左右へ走らせてから、
「お人払いを願わしゅう……」
「なに、人払いを」
新九郎は、荒木や山中が怒り出す前に、苦笑して言った。
「気をつけて口をきけ、小桜。かれらは、わしの手足だ。わしの手足を切っては、わしが達磨になってしまう」
「お聞き届け願えませぬか」
「考えても見ろ。わしは、小桜をよく知らん」
「……」
「が、この荒木や山中は、十数年の同胞じゃ。いや、生れるまえから、同胞になるように運命が定まっていた仲じゃ、いかなる秘密もわれらの間には存せぬ」
こういう新九郎の態度が、同志の仲を深く固くするのであろう。
荒木兵庫も、怒気を浮べたものの新九郎の言葉に、それみたことか、と、和んだ表情になった。
山中などは、思わず片膝立てて猿臂を延ばそうとしたのである。
「この者どもを遠慮させねばならんような話ならば、聞かぬ。去ね」
と、新九郎は、強い言葉になった。
そこまで言われると、小桜はもう押せなかった。彼女は、威に打たれたように平伏した。
「恐れ入りまする。では、これを御披見下さいますよう」
懐中から、一通の書状をとりだした。
書状は封蠟してある。厳重であった。書状の中身が安易なものではないことを物語っている。
山中才四郎がそれを受けとって、新九郎の前に届けようとするのを、
「兵庫、読め」
と、顎をしゃくった。
「それがしが」
「読め、大きな声でな。近ごろ耳が少し遠くなったような気がする」
と、新九郎は笑った。
闊達な笑顔である。小桜は秘密めいた自分の慮りが、なんだか、恥しくなった。自分だけがこそこそしたどぶ鼠のようであった。
兵庫は封蠟を破ってから、書状をひろげると、さっと目

を通した。
それから、
「一筆啓上仕り候、ことは隠密に取り計らい給わるべく候……」
内容は、思いがけないことであった。
堀越公方家の転覆を計った内容であった。
まず、土牢の中の茶々丸を助け出して、家中を混乱に陥れ、公方氏満（もと政知）、夫人富士子、その子潤などを討ち果す、というのである。
「ふむ……」
新九郎は、凝っと小桜の顔を見た。
（一体、こやつは、何者か）
新九郎のいまの立場からいえば軽々に口に出せないことを、平然という女の素姓が、気になった。
むろん、この女の考えではあるまい。
背後に誰がいるか、だ。
こういう提案には、むろん即答を与えるべきではないし、感情をあらわにするのは、得策ではない。
こういう場合の表情は新九郎心得たものである。
「面白い話だな」
と、新九郎はとぼけた。
自分とは無関係な話、として受け取った。肚裡の中は、まるきり〝白〟という態度である。

「話としては面白い……だが、左様なことが出来るかのう」
「――出来ます」
「ほう、そうかな。しかし、小桜とやら、その話は物騒だぞ」
口もとに笑いを浮べて、
「そなたが、左様な考えを持っていると、公方のほうに通知したらどうなるかな」
意地の悪い質問だった。
小桜は、覚悟しているのか、顔色も変えず、
「はたもの（磔刑）にもかけられましょう」
「ほう、恐くはないか」
「人間は」と、そこで、一息いれて、「いつかは死ぬるものでございます」
「それはそうだ」
「いずれ死ぬると決れば、ただ早いか遅いかだけのこと、恐ろしいことではありませぬ」
「痛いぞ」と、また新九郎は、揶揄した。「はたものにかけられ、錆槍でぶすりとやられてみい、痛いぞ」
「ほほほほ、痛みなど、生きてあればこそ感ずるもの、死ねば、痛みなどありませぬ」
「……」
「死は、無でございましょう。つまりは、安らかなもので

ございます。左様に観ずれば、何の苦しみ、何の痛み」
小桜は若い。若い女がこういう考えを持っているのは、いささか驚かされるものだった。
新九郎は、あらためて、女を見直す気持になった。
こういう覚悟を持っているとすれば、いくら威嚇しても効果はないし、たとえば、責め問いしても、口を割ることはない。
「ところで、聞きたい。いまの話は、いったい誰の考えなのだ」
小桜は、すぐに返事をしなかった。大胆にも、話をそらしている。
「書状の趣について、お考えのほどを承りとうございます」
「こりゃ、女！」
荒木兵庫が、膝を向けなおして、
「この書状は、一体、なんだ。われらが殿に宛てたものにしては、署名がないではないか、何としたことだ」
「はい」
「はいではない。誰からともわからぬ、かかる大事を記していながら、署名花押がないとは、心得ぬぞ」
「その儀は、大事ゆえ、他聞他見を憚ってのことでございます」
小桜は、兵庫の割れ鐘声にもおびえることなく、きっぱりと言った。

「誰からともしれぬものなれば、万一のことがあっても、こちらさまには迷惑はかかるまいと存じます」
「……」
「根のない企みということになりましょう。されば、わざと省いたと存じまする」
「わかった」
新九郎は、その言葉に頷いて、言った。
「それならそれでよい。あらためて聞こう、誰だ」
「……」
「かような企みをする奴、誰だ」
「お考えを聞かせ願えれば、申し上げます」
「女！　図に乗るな」
こんどは山中才四郎が怒った。
「殿があのように、優しゅう申されているのを、よいことに、つけ上ると、その分には捨ておかぬぞ。うぬは誰の手先だ、それを申せ」
「申し上げられませぬ」
「なに！」
「そうではございませぬか、立場を逆にお考えになれば明瞭なること。あなたさまが、私の立場なればなんといたしまする」
「うぬ！」
「かかる大事を洩らした以上、お力添え頂けるか否かで、

笠の台が飛びまする」
「ううむ、こやつ、うぬの無礼な態度だけで、笠の台は飛ぶわ。生きてここを出ることが出来ると思うと間違うぞ」
「才四郎」
新九郎は笑みを浮べて、手を振った。
「もはや、下げよ」
「え!?」
「おれには用のない女だ。このまま、帰してやれ」
「仰せでございますが……」
「よい。気狂いには、縁がない。公方討ちなど、途方もない話よ」
それが返事になった。
「気狂いと手を組む気はない。おれは正気だからの。大方、その女も気狂いであろう、気狂いは、正気ではないゆえ、罪とはいえぬ、罰は与えられぬ。放逐せよ」
そういって顎をしゃくった。

(負けた……)
小桜は坂を下りながら思った。
新九郎の大きさに打たれた。あのような話を持ってゆけば、誰でも動揺するはずであった。
野心がなければ別だが、新九郎が、現在の程度で満足する人物でないことは、少し眼のある者にはわかる。
その野望にあてての企みだったのだ。
野望を見ぬかれたと思えば、動揺する。驚くか、それでなければ、膝を乗りだす。
(そのどちらかだ、どちらかを見きわめて来い)
と、言いつけられていたのである。
小桜は、それを確かめることもできなかった。
(一つ間違うと、そなたの命はない)
と、その人は言った。冷たい言葉であった。
もともと冷酷な男だ。が、その冷酷さに惹かれた女は、その話を持ちかけられたとき、進んで、使者を買って出たのである。
(新九郎めが、話に乗ればよい。乗らぬ場合が問題だ。五分五分で、そなたは斬られるだろう)
謀計を持ちこまれたというだけでも、場合によっては、新九郎の不利になる。
斬られても文句はいえないのである。
(そなたを斬れば、しかし、それだけでも新九郎の意図が明らかになる。おれは、ある手を打てる……そなたの死が、おれの浮ぶ瀬になるのだ。やってくれるか)
これは冷酷な、犠牲の強要であった。
犠牲になることを覚悟してきたからこそ、小桜は、新九郎や兵庫たちの前で、あれだけ、きっぱりといえたのである。

にもかかわらず——
新九郎は、そのどちらの態度も見せなかった。
小桜に何の条件もつけず、放逐したのである。
(肚裡が大きい……)
その感じだけが残った。それだけしか残らなかった。
(あたしは一体……)
小桜は、奇妙な憂鬱にとらわれている。
使者として、何をしてきたろう、と、思いかえすと、小桜は戻って報告することが、辛くなるのだった。
彼女は、道を辿りながら、何度も振りかえった。
尾行を恐れている。
あまりにもあっさりと放されただけに、尾行されるのではないかと思った。
曲りかどや、林の中などで、背後に素早く視線をなげたり、見晴しの利く草原を通ったりした。
尾行の影は見られなかった。
あるとすればよほどの巧妙な者でなければならない。小桜は半刻ほど後に、浜辺に出ていた。
松並木がつづいている浜辺には遠くに漁舟が二、三艘浮んでいるらしく、漁火が見えるだけで潮騒ばかりが高い。
小桜は、暗い浜辺を見まわした。手を口にあて、ぴいッと、するどい音を放った。
すると、まるで木魂のように海上で、同じような音が聞えた。
灯はなかった。一艘の小舟が漕ぎ寄せてきた。
小桜は、夜の底を透し見て、
「弓削かえ」
ああ、と、返事があった。
「わしじゃ、小桜よ。早よう乗れや」
「あい」
「跟けられはせなんだか」
「大丈夫と思うけど」
また小桜は振りかえった。
暗い浜辺ではしかし、人影が近づいても、もはや容易に気がつかない。
松の樹陰に隠れているかもしれなかった。
「海の上ならな、追ってくりゃ、すぐわかるで」
弓削爺は嗄れた咽喉で笑い、手を差しのべた。
水際に、脛まで浸って、小桜は小舟に乗った。
「ほれよ。さあ、出すで」
太い竹竿で、浜砂を一押し。潮の退く勢いに乗って、舟はひきかえす。
小桜は目を凝らして、浜辺を見まわしている。
しだいに、小舟は磯から離れていったが、小桜の眼のとどく範囲では、それらしい人影は見えなかった。
「——誰も、跟けてこなかったようだけど」

「まだ、安心はできねいで」
そう言って、弓削爺は、
「火を焚くがいい」
「え？　そんなことをしたら」
かえって、目印になるではないか。
が、老人は、しわしわと笑い、
「その方が好えんじゃ」
自信のある言い方である。小桜は舟に乗りこんだことで、それまでの緊張感が解け、全身の疲れが出たようで、舷側につかまって、ぐったりとしていた。
舳に鉄籠がぶら下っている。油をしみこませた薪は舟の胴ノ間に油紙でくるんであった。
それを入れて火をつけると、ぱっと、薪は燃えあがった。海上には風がある。風に煽られた炎が大きくなり、火ノ粉が飛び散った。
老人は舟を西の方へ進めている。
この駿河湾では、沼津から西へ進めば、清水に至る。西南に針路をとれば焼津の沖へ出る。
そうやって、小半刻も進んだろうか、
「もうよかろう、消すがええ」
そう言われて、小桜は、柄杓で水をかけて消した。弓削爺は、そこからぐいと、舟の向きを変えた。
舟がかがり火を焚いたのは、闇夜にわざと目を惹くためであった。
火を点した舟は西へ向う。もしも、尾行してくる舟があれば、安心して、距離をおく。
夜の海上の火は、地上よりも、遠くから見える。かなりの距離でも見失うことはない。
その安心感の逆手をとったのだ。弓削爺は、歯の抜けた口で笑った。
「これで一安心じゃろ」
やっと、真意がわかって、小桜も、胸をなでおろした。
そのまま、小舟は、南東へ、向って進んだ。
しかし、行方をくらますために西へ向ったのも、はじめは損をしたように見えたが、実はそれほど無駄ではなかったのである。
伊豆の地形を見ると、西伊豆は大きく駿河湾に張り出している。イカのようなかたちだ。
したがって、沼津から西へ進んで、途中から南へ折れると、大瀬崎から戸田、土肥沖を南下するようになる。
「疲れたじゃろ、寝るがいいわ」
と、弓削爺は、ぎいぎいと、櫓を操りながら、親切に言った。
「ええ、有難う、では、少し横になっています」
風もあまりなく、海上は凪いでいたが、それでも小舟は大きく揺れている。

どれくらい眠ったろうか。大役を果したという解放感で、小桜は眠りに落ちていたらしい。
「着いたよ」
舟底が、砂を噛んだ。
小桜は眼を醒ました。
まだ夜は暗い。星座は大きく位置を変えてい、漸く風が出てきたように、松籟の音が高い。
「よかったな、もう少し遅れたら、この風で、岬へ寄せにゃならんところだったわい」
雲行きが激しくなっていた。星の光をかき消すように、黒雲が動いている。
流れているというより、奔っているという感じだった。
小桜は、この戸田の漁村のはずれにあるあばら屋に入っていった。
板屋根も朽ちているし、石もところどころ落ちてしまって、板がはずれているところもある。こういう家に誰がいるのか。
深夜にもかかわらず、淡い明りが洩れている。
小桜が砂を踏んで近づくと中で、その気配を察したように、声がした。
「小桜か？」
老人の声である。
低い、しわぶきも聞えた。
「はい……ただいま、立ち戻りました」
小桜は、こう答え、戸を開けた。
軒が傾き、戸を開けるにもギシギシ軋んだ。ひどい有様である。
一穂の灯のもとに、その老人はいた。
どう見ても老人であった。ほうけた髪は灰色で、頬がこけ、眼だけが、鋭く光っていた。
老人は、坐っていた。まるで彫像のように身じろぎもしない。
「――弥三郎さま」
小桜は蓆の上に膝をついた。
「首尾は、如何じゃ」
「はい、それが……」
「新九郎め、如何な様子であったぞ、喜んだか、驚いたか」
そういう表情も、しかし、言葉とは違って凍りついたように動かない。
これは、たしかに弥三郎春忠に違いなかった。
あれからの年月が、まるで数十年を経たかのように、相貌が年月をきざんでいる。
労苦が、皮膚やからだつきにあらわれていた。
あれ以来、弥三郎はどこを彷徨していたのか。
その姿を見ただけで、その過してきた年月の苦しみがわ

かるようであった。
弥三郎春忠は、韮山にいて、鳥羽十蔵を用いての工作に失敗してから、土地を離れた。
伊勢新九郎の名声が高くなるにつれ、北條家はもとより、堀越公方の信頼も厚くなると、アンチ新九郎を生涯の目的とする弥三郎春忠の立場は一層、難しいものになった。
かれは韮山を離れるしかなかった。
だが、遠くへ行く気はない。
(新九郎めを……)
いつか怨みを霽らす。それだけが、弥三郎の目的になっていた。
生活はしだいに不如意になっていった。
かれにとって、生きること、それ自体が、闘いだった。
一年は一年の苦難をきざんだ。
昔のように、醜い部分を人目に触れさせぬように頭巾をいつもかぶっていたころは、まだしも、希望があった。
もはや、老いた。頭巾をかぶる気もない。その醜怪な傷を剝きだしにして憚らぬように、新九郎への憎しみをあらわにしていた。
「いまのわしにとっては、やつを、痛めつけ、苦しむさまを見て笑うてやりたい、それだけが、生甲斐じゃ」
そのためにのみ、生きていた。いのちを永らえる、それが薬になっていた。
そういう思いを抱くこと自体がすでに地獄であった。
弥三郎春忠の姿そのものに、地獄があらわれている。本人には、それがわからないのか、弥三郎は、そうやって坐っていながら、呼吸をしていないように見えた。
呼吸を惜しむことで残された寿命を細々と費消しているかのようであった。
「申せ、新九郎めは何としたぞ」
小桜の報告の間、弥三郎春忠は胡麻塩になった眉毛を一すじも動かすことなく聞いていた。
「――それだけか」
「はい」
「たった、それだけか、彼奴は」
「まるで、何も読まなかったような……」
「嘘だ」はじめて、感情をこめた声を弥三郎春忠は洩らした。「そんなことはあるまい、それほど、肚裡のできたやつではない、新九郎は」
「でも……」
「では、馬鹿だ」
「……」
「これほどの計画を教えてやったのに、乗らぬはずはない」
弥三郎の眼は光った。兇々(まがまが)しい光である。
「やつに野望がなければ、乗るまい。御所を討つ気がなければ、乗るまい。だが、奴の心底は、伊豆一国を、おのれが掌の中にすることだ」
「……」
「さればこそ、北條に聟入りした。堀越御所に屢々、顔を出している。さらに、三枚橋に城を築いておる……これだけ見ても、伊豆への野心がないといえるか」
弥三郎の眼は、宙に新九郎を描いているかのようであった。
その場にいれば、つかみかかったろう。
新九郎が斬ったとしても、弥三郎は、斬られながら、血みどろになりながら、つかみかかるだろう。
「うぬには、天下はとらせぬ、地獄へ共連れしてやる!」
堀越公方を仆すには、茶々丸をして、行動させるのが一番良い。
弥三郎が、長い間かかって考え出した方法であった。
この公方仆しには、しかし、裏がある。
新九郎がかれの計画に乗って動きだすようなら、逆に、その計画を公方に知らせることで、新九郎を挫折させ、弥三郎春忠が浮び上るという、二重の企みだった。
念願の新九郎に思い知らせ、かれが、嘗ての今川弥三郎春忠にもどる。
今川家には戻れないが、公方氏満が地位を約束してくれるだろう。
(それが、なんとしたことか)
新九郎は、何ら興味を示さなかったという。
「ばかな、そんなことがあるか、彼奴は、乗るはずだ、彼奴の狙いを、これほど、はっきりと衝いたことは……そうだ、彼奴はあまりにも心の内を見すかされたゆえ、そなたを帰したのだ」
「――そうかもしれませぬ」
「そうだ……」
はじめて弥三郎春忠は、喜びの色を頬にのぼらした。
「小桜……来よ」
と、手をつかむと、その幽鬼のような姿にも似気(にげ)ない強い力で抱きよせていた。
数日後の事である。
韮山の堀越御所で事件が起った。
月があるはずだったが、雨雲が低く垂れこめて暗い夜になっていた。
数日来の雨で、狩野川は、水かさが増し、囂々(ごうごう)と音を立てていた。その音にまぎれ、闇を幸いとする人影が、守山の崖を伝わっておりてきた。
風が強く、その男の頭巾の端がはためいている。背には槍をななめに担いでいた。一本の命綱を頼りに、崖をすべりおりてくると、すでにそこは邸内である。

まさか、山を伝わっておりてくるとは考えられない。その常識の裏をかいたのである。

御所の塀は高いし、四門の固めはきびしい。れいの傀儡女などの騒ぎがあって以来、富士子は、必要以上に、門番を増やした。

侵入者は、その裏をかいた気持であろう。

崖からおりると、その影は、あたりを見まわして、槍を背からはずした。

土牢は崖の麓をくりぬいて作ってある。土牢の傍には番小屋があり、交替で不寝番が見張っている。

影がおりてきたのは、その眼から死角になっている部分であった。

大胆不敵な侵入を企てるからには、充分、調査の上であろう。

かれは槍を振りあげて、戸口に立った。

「おい、誰かいるか」

と、声をかけた。

横柄な口調だったのは、上司を思わせるためであろう。

不寝番は酒を飲んでいたのだがあわてて出て来た。

その頭上へ、槍が叩きつけられた。

一撃である。刺突しなかったのはなぜか。槍先が鈍るおそれを慮ったのかもしれない。

もっとも、槍は、突くだけのものと、一般には思われているが、戦場での槍つかいは、叩き伏せ薙ぎ倒すことも多い。

悲鳴もあがらなかったのは、その男が、槍づかいに、巧みだったからであろう。

不寝番は、首すじを叩き伏せられている。声が出る前に、頸骨が折れたにちがいない。

声もなく倒れるのを一顧もせずに、牢に近よると、中をのぞきこんだ。

中は真っ暗である。むろん、灯など、無い。

暫くのぞきこんでいたが、

「茶々丸どの」

と、低く呼びかけた。

眠りをさまされて、茶々丸は何気なく奥から立ってきた。

その姿へ向って、ものも言わずに、槍を突きこんだのである。

「何をする」

茶々丸は飛び退った。

雲が切れ、月が顔をだした。男の姿がくっきりと描き出された。

風がある。上空の風はもっと早いのであろう。雨雲が切れて、月が顔を出した。下弦の月である。

月光はもろに土牢を照らし、侵入者の姿を浮き上らせた。

御所に侵入し、番人を倒し土牢に近寄った男。

誰が見ても、これは茶々丸を助けに来たにちがいなかった。

が、そうではなかったのである。茶々丸を呼び起すや、槍を突きこんだのだ。

「うぬ、何をする」

茶々丸は、飛び退った。

牢格子が幸いした。槍を突き込むのに、一たん、たぐらなければならない。

刺突には長い方がいい。が、その反面、たぐりこむ不利な点がある。

かれは焦った。たぐり寄せては突き刺す。穂先は茶々丸を避けて、空を突く。そのまま、左右にはげしく、動かした。

土牢の中はせまい。奥行きは長槍で充分だった。

一突、二突は辛うじて避けたが、はげしい槍の動きに、逆らい難く、滑って転んだ。雨が牢の中に流れこんで、濡れていたのである。

「しめた」

いったんひきぬいた槍を、今度は肩の高さにあげるや、なぬに突きおろした。

茶々丸は転がって、これを避けた。穂先は、土を掻いた。濡れた土をえぐるように、走った。

茶々丸は身を起しながら、夢中で、槍を摑んだ。

千段巻のあたりである。

「くそ！」

刺客は、思いがけない反抗にあって、狼狽した。

これは予想外のことだったのである。

もっと容易に刺せると思っていたらしい。声をかけたのも、真っ暗で茶々丸の姿が見えなかったからだ。おぼろ気でも姿が見えていたなら、眠っているところを刺し殺したであろう。

「ぬ！　放せ」

引き抜こうとして焦っている。

茶々丸は必死に摑んだまま、

「出合え、出合え、狼藉者じゃ」

茶々丸の叫びは、考えてみればおかしい。土牢に押し込められている囚人が叫ぶというのは面妖だが、もともと〝若殿〟なのだ。家来たちに対しては、自分が主人だという気持がある。

その声を聞きつけた者がある。

家老の秋山蔵人だった。

御所の中の御文庫で書きものをしていたのだ。だけではない。茶々丸のことを気遣っていただけに耳にするのも早かったのであろう。

蔵人は、おっとり刀で走り出た。

土牢にしがみつくようにしてうごめいている影を見つけ

ると、
「何やつだ」
槍を奪い返そうとしていた男は、狼狽して、槍を放すや、抜刀した。
「不埒者、そこ動くな」
走り寄りざまに、蔵人は斬った。鏘然と刃が咬みあって哭いた。月光の中に血がしぶいた。
秋山蔵人の手練は、刺客の刃にまさった。刺客の方には焦りがある。
槍を茶々丸に奪われたというだけでも、すでに負い目になっている。
もはや、所期の目的を果すことよりも、
(逃げなければ)
という〝負〟の意思が、その刀を持つ姿勢に明らかだった。
刺客は、目的の者を殺すために来た。
それに失敗したら、姿をくらますしかない。顔を見られることも、他の者と刀を交えることも、避けねばならなかった。その気持が、蔵人の意気込みとの間に差をつけたのである。
蔵人の刃が、肩先を斬り、血を霧のようにしぶかせて、刺客は飛び退った。
「逃がさぬぞ」
さらに蔵人は踏みこんだ。
「うぬ、うぬ！　うぬ!!」
蔵人にしてみれば、大事な茶々丸を暗殺に来た男への憎しみに、からだ中の血が逆流する思いだ。
この刺客が、誰か、どこから派遣されたか、一切、わからぬ。
それだけに、どんなことがあっても、逃がすわけにはいかなかった。
「出合え、出合え」
狂ったように叫び、その叫びにおのれを鞭撻されたように、蔵人は斬り込んでいった。
相手は走りながら、ときどき振りかえっては、刀をうしろ手に閃めかした。
一太刀喰っているだけに、刺客としての腕前があるはずなのが、すでに逃げるしかなかった。
(どこから来たか、まさか、お屋形内の……)
屋形侍ではあるまい、と、それを念じたい気持だった。
氏満が病臥するようになってから、富士子の振舞いは目にあまるようになっている。
京から供して来たような譜代の家臣を、僅かの失敗や、家庭内の些事を理由に追放したり、新たに素姓の知れぬ者を雇い入れたりしていた。
それらは、氏満に一言も話さぬことも多い。

以前はまだ、事後承諾をもとめるというふうであったが、いまでは、まるきり独裁者の振舞いであった。
その富士子の、
〝魔手〟
を、秋山蔵人が感じたのも、あながち邪推とばかりは言いきれない。
「かえせ」
蔵人が勢いこんだのは、刺客は崖ぎわに追い詰められる、と見たからだった。
とたんに、振りかえりざまに、ぱっと、刀を投げた。刀は月の光を裂いて、蔵人の面上へ。
「しゃっ！」
かっと、払う。ちゃりんと、刀は音けたたましく、転がった。その隙に刺客は降りてきたときの綱を摑んで崖を上っている。
肩先に一太刀喰っていながら、さすがに気丈なものであった。
刺客は、あの命綱につかまって、崖をよじのぼりはじめた。
蔵人が、投げられた刀を叩き落す間に、するすると、一、二丈のぼっている。
「待てい、こやつ！」
蔵人は、いったん綱の端へつかまろうとした。
と、どうしたことか、するすると綱は上った。上から引かれたのだ。
あとへぶら下がられまいとして、刺客自身が引き上げたと思ったのだが、そうではなかった。
崖の上に、なかまがいて、操作していたのである。
樹木の陰になって、その人影はよく見えない。が、いることは確実だった。
「待てい、不埒者」
蔵人は、追うことを断念して、おのれの刀を、投げた。
刀は刺さりはしなかったがどこかを傷つけたようであった。あっと、悲鳴が聞えた。が、気丈にも、さらに上へのぼってゆく。
そのとき、蔵人は、多勢の足音と、そして風を切る矢羽の音を聞いた。
「おお、やれい！」
矢が数本、崖に向って飛んだ。崖をよじのぼる刺客の影へ。さらにまた、数本。そしてまた数本。
明らかにその矢は、何本かが命中したらしい。うっ、うっ、と呻きが聞えた。
「落ちるぞ」
誰かが叫んだ。
すでに、蔵人の背後には、弓矢の者が十人ばかり駈けつけてきていたのだ。

はじめからの傷といい、投げ刀の傷に加えて、数本の矢傷では、いかに剛の者でも、たまらない。すでに、その影は、崖の鼻にとどこうとしている。

そこから、力尽きても、もんどりうって落ちてくるかに見えた。

だが、さらによじのぼっている。

これには、みんな、逆に啞然としてしまったのだ。

夜目にも、そのからだに突っ立った矢が、針鼠のように見えた。それだけの傷を蒙りながら、まだ生きている。

むろん、崖の上のなかまがいなければ、一人では上ることが出来ないらしい。

その姿へむかって、また弓組は争って矢を射かける一方、槍組の者は、

「向うへまわれ、逃げ道をふさいで袋包みにするのだ、敵は二人ぞ」

まず山麓を囲んでしまえば逃げ道はない。

槍組は勢いこんで、塀外へ走り出、山を包囲するや、松明を手に手に持って、のぼりはじめた。山といっても、丘なのだ。さしたることはない。が、のぼりつめたかれらは意外なものをそこに見た。

侵入者の死体が叢に転がっていた。夥しい血にまみれ、まだ血泡は傷口から吹きだしていた。

十数本の矢がそのからだに突き刺さっている。まるで針鼠のような姿だった。

だが、その針鼠には、頭がなかった。胴体だけだったのである。

首はいま斬られたばかり、血がとめどもなく噴きだしていた。その血が、叢をじとじとに濡らしていて、ほかに人影はなかったのである。

「二人いたはずだ。この首を斬ったやつは？」

助けあげた影を、人々は思いだそうとしたが、暗かったし、距離があった。樹木も邪魔をしたのである。

その男が、なぜ、首を斬りとったのか。

「首といっても、重いはずだ。簡単には、持って走れないぞ、そこらに隠れているにちがいない」

と、山へのぼった連中の指揮者は、松明をふりまわして、

「虱つぶしに探せ、見つかるはずだ」

「麓もずっと、綱を張り、鳴子なども仕掛けましたゆえ」

「それは気が利いているぞ、探し出せ」

松明と人数がさらに増やされた。

が、それらしい姿は見られなかった。

しかし、潜んでいたのは事実なのである。殺られた者がいる。

鳴子がはげしく鳴りだして、警戒の人々の注意をひいた。

「いたぞ」

「どこだ」

「あっちだ、逃がすな」

鳴子の音の方へ、人々は駈けだした。

松明が幾つも集まり、あたりは昼のように明るくなった。火ノ粉が飛び散り、ぱちぱちと松葉などが弾けた。

その明るい中に、人が死んでいた。足軽の一人だった。みごとに、うしろ袈裟に斬られて、鳴子のついた綱にもたれかかって死んでいた。

加害者は、暗闇にひそんでいて、ふいに足軽を斬り、そのからだを足場にして、綱を乗り越えたらしい。

「くそ！　頭のいいやつだ」

片手に生首を抱き、血刀を咥えて死体を乗り越える姿を想像して秋山蔵人は、舌をまいた。

「一体、どうして首を斬りとっていったのか」

おそらく、顔を見られないためであろう、と、考えられた。

「それにしても、どこのやつが、命令したのか」

と、蔵人は、茶々丸の無事を喜ぶとともに、その謎の暗殺剣の刃を警戒せねば、と思った。

土牢の茶々丸を殺そうとする者が忍びこんだと聞いて、病床の公方氏満（政知）は心を痛めた。

気が弱くなっている。美食と安逸は、肥満を齎し生気を失わせる。

肥満した姿は、一見、健康そうに見えるが、老化を早めてゆく。氏満の病気は、その意味でも老衰というしかなかった。

寝たり起きたりしている毎日で、全く張りがなかった。その氏満の老衰の分だけ、逆に富士子の方に精気がある。

いまでは、ほとんど堀越御所は、富士子の指先で動かされているといってよい。

近隣の地豪たちは、雨が降ったといっては、見舞いに参上したし、天気がつづいたといっては機嫌うかがいにやってくる。

いうまでもなく、そのたびに貢進の品々が運びこまれる。その量が多ければ、富士子の唇もとはほころび、少なければ、目尻が吊り上った。

女性の権力者ほど始末に悪いものはなかった。

近ごろ、富士子のもとに召し出された女人がいる。どういう伝手を頼ったのか、あの小桜であった。

小桜は、あのなめらかな巧弁で富士子に取り入り、数句を出ないうちに、彼女の寵を集めた。

これが男なら世間の非難の眼が集まるが、同性だということで、問題は起らない。

従来、富士子に仕えていた女たちの間に、不満の色が流れるようになったが、それはどんな場合でもあることだった。

それとても、
「おまえたちは気がきかない」
と、言われればそれまでで、
「小桜は、私の心を先に読むゆえ一々、差図せずとも、気持よく、ことを行うてくれます」
富士子は、満足している。
実際、小桜は気がきいていた。早い話が、筆を、といえば料紙も揃えてくる、気分がすぐれぬ、といえば、水を持ってくる。飲み終えるころには、御寝の支度が整うて居りまする、という。横になると、早くも煎じ薬が運ばれる、というふうで、こういう秘書が気に入られるのは当然だった。
やりすぎるかもしれないが、富士子のような嬌慢な性質の女にとっては、丁度いいのだ。
この小桜が、茶々丸の事件のあとで囁いた。
「悪い噂があります」
湯殿の中である。二人きりで、裸になっていると、親しみが深くなる。小桜は、糠袋で、背中を流しながら、
「お耳に入れたくはありませぬ。お方さまの気分をけがす噂で」
そう言われると、かえって気になる。
「かまわぬ、申すがよい」
「でも……」
とためらいながら、小桜は、たしかに気にさわることを話した。
「御牢内の茶々丸どのを殺めようとしたのは……」
と、小桜はゆっくりと言った。
世間話のような調子である。
「お方さまだと」
「まあ、何を言うのです」
きっとなって、富士子はふりかえった。
湯殿の中である。小桜は、富士子の背を流している。からだをぴたりと密着させて、糠袋を動かしながら、小桜は富士子の反応を見ているのだった。
「わらわは、そのような、そのようなことなど！」
「左様でございますとも」
くるりと小桜は掌をかえすように、富士子を庇う側に立って、
「お方さまはお心の寛い、信心ぶかい御気性で、茶々丸さまの狂疾をも、心配なさってお出でのこと」
「その通りじゃ」
「はいはい、折にふれて、そのように、私も世間の人たちに話しているのでございます」
「わらわを知るものは、小桜そなただけですよ、うれしく思いますよ」
「まあ、お方さま、勿体ない」

感激したように、小桜はぴたりと、背に顔をつけ、しがみついた。
富士子も感激した。こういう女の心は飢えている。小桜の手をとって引き寄せると、抱きしめて、頬ずりした。
「ああ、お方さま！」
「小桜、わらわのことをそのように思うていますか」
「ええ、ええ、お方さま。この上は、茶々丸さま暗殺のお疑いを霽らさねばなりませぬなア」
「どうすれば、よいか」
「私に考えがございます。まず、茶々丸さまをお見舞いなさいまし」
「でも……」
「その方がよろしゅございます」
「……」
「多勢の目の前で、憐れみの言葉をかけるのでございます。そして」
「そして？」
「京から、義遐さまをお呼びするのです」
富士子の眼に警戒の色が走った。
「義遐さまにお逢いしたくはございませぬか」
「それは、逢いたい。実の子ですもの」
「お呼びなされませ」
「でも、それでは、外聞が……」
富士子はためらった。
おのれの野望を糊塗するために義遐を京の天竜寺に入れている。
その誤魔化しは、一応成功したのだ。富士子の邪心は、糊塗され、氏満も疑いを消したのだ。
こうしなければ、茶々丸を入牢させることは難しかった。
そこへ義遐を呼べばどうなるか。
「かえって、茶々丸廃嫡により、義遐を次の公方に立てる算段と疑われはしまいか」
その富士子の心配に小桜は自信たっぷりに顔をふった。
富士子には男の子が二人いる。上の子は義遐で、下に幼い潤がいるが、前妻の腹である茶々丸と義遐は年齢的に接近していることで、その野心を疑われるのは当然だった。
その義遐を京の天竜寺に出家させたのは、世間の疑惑の目をくらますためであった。
小桜は、その義遐を呼ぶがいい、という。
「お見舞いということにすれば、よろしゅうございましょう」
「なんの？」
「公方さまでございます。公方さまのお弱り方は、この日ごろ、とみに目立ってきました。若君がお戻りになれば、いかにお喜び遊ばされることか」

「なるほど」
「お父君お見舞いのため、是非お呼び戻しになられませ」
そうけしかけられて、富士子は、我が意を得た思いだった。
野心があるだけに、自分でも咎めるものがある。欲望がなければさらりと済ませられるものが、
（誰かに疑われるのでは）
と、思うと二ノ足を踏む。
茶々丸を土牢に閉じこめてその死を願っている富士子とすれば、氏満に早く隠居してもらって、義遐を二代目伊豆公方に据えたい。
（その時が……）
来た、と感じた。
茶々丸を暗殺する動きがある。
（私は知らない）
富士子は、この点だけは、神仏に向って言い張ることができる。自然死は願っても、刺客を派遣したおぼえはない。したがって、その首なし死体が誰であるか知らないし、見当もつかない。
が、世間では、
（御方さまが、やらせたのでは）
と、思う向きがあるという。冷静に考えても、いま、もっとも疑われる立場にあるのは、富士子だ。

たしかに生さぬ仲の茶々丸を姦策を弄して、押し込めたのは事実だから、これは疑われるのはしかたがない。
むしろ、身から出た錆である。
（それならいっそ！）
どうせ疑われるのなら、一気に公方の座を奪って決着をつけてしまうのが早道ではあるまいか。
茶々丸が、狂い死にするのを願っていた。その狂死と、義遐の成長と、氏満の老衰死――これが富士子の狙いであり、心の中での予定図だった。
これを一気にちぢめて敢行してしまう。
富士子は決心した。
「そうなされませ、御方さま」
糠袋を動かしながら、小桜はそそのかした。
「御方さまの天下がまいります」
「おお、そなたは……」
富士子は、官能の疼きに、身もだえした。忘れていた情感であった。
糠袋はあやしく、動いている。乳房から下腹部へと動いてゆく。
「――義遐にあいたい……」
病床の公方氏満がそう言ったという。
富士子が、その言葉を伝えた。

「ただちに、京へ使いの者を出すように」
家老の外山豊前守と秋山蔵人は顔を見合わせた。
「しかし、御出家なされましたものを、そう急には」
「できませぬか」
柳眉が、びりびりとふるえた。
「いえ、できないことはありませぬが、ちと面倒な手つづきを必要とします」
「面倒であろうとも、公方が申されるのですよ。いかなることがあろうとも、ただちに」
富士子の強い命令には家老たちも従うしかなかった。
一たん出家したものを還俗させるのは難しい。出家とは俗界からの離脱を意味している。それでもまだ喝食のうちだから、比較的容易であった。
外山豊前守は、心利いた者を京へ遣わして、ふたたび管領細川政元に頼みこんだ。
細川政元は駿河下向の折に、病床の氏満に一度、そのことを頼まれている。天竜寺の怡中全順師は容易に許してくれなかったのだが、今度はいよいよ、伊豆公方が危篤のため、といわれると全順師も諦めざるを得なかった。
政元が義遐に逢うと、まだ髪は残している。
「よかったな」
得度していなくてと言おうとして、
「健やかに見ゆる」
と、あわてて言った。
「有難うございます、父の病いは如何でしょうか」
「そなたの顔が一目見たいと申されておるようだ。されば伊豆へ下向なされば、元気な顔を見せれば、恢復されるのではあるまいか」
義遐は使いの者に護られて、即日京を発った。
伊豆へ着くと、氏満はいたく喜んだ。
「おお、来たか、来たか、ずんと大きゅうなったのう」
たしかに病床に就いてはいたが、危篤というほどには見えなかった。
少年の義遐にはよくわからなかったが、ともかく、実父に逢えたことは、かれもうれしかった。
「お父上が、危篤と聞きましたので、師の坊の許しを得て、立ち戻りました」
「危篤？　このわしがか、ははは、なんの、大したことはない、ただなんとのう、気分がすぐれぬだけじゃ。ま、とにかく、来てくれてうれしいぞ」
氏満にしてみれば、異母兄弟も、みんな同じおのれの子だ。茶々丸は不憫だが、これは病気（狂気と信じている）だからしかたはない。
富士子は、氏満の喜びを見て、いよいよ、事成れりと思った。小桜がそそのかしている。
「義遐さまの還俗をお決め下さるがよろしゅうございましょ

う。公方後嗣たることも、御家来衆にお示しなさいませ」
人間は弱っているときは、自分でも思わぬ面をのぞかせるものだ。健康なときに振りかえっても、どうして、あんな弱音を吐いたろうと思う。
氏満の場合は、たしかに老衰で弱気になっていた。
茶々丸の狂疾と義遐の出家で、あとは幼い孫のような潤がいるだけだから男親としては、身辺寂寥だった。
剰え茶々丸は、刺客に狙われる、というところへ、義遐が突然戻って来たのだ。
一ぺんで、その弱気をさらしてしまった。
小桜はそのところを見ぬいたのだ。そそのかされた富士子は、氏満に義遐の後嗣決定を迫っている。
「そうじゃの、そう決めるがよかろう」
「まあ、ほんとうでございますか」
「わしも、義遐が側にいてくれるのが心強い……」
「みなの者も喜んでくれることでございましょう」
だが、富士子の思う通りには、人々の気持は動かない。
「困ったことになった」と、秋山蔵人は眉をひそめて、
「いよいよ、義遐さまを後嗣としてお立てになるらしいぞ」
「すりゃ茶々丸さまのことは、どうなる」
外山豊前守は顔色を変えて、
「廃嫡はうたがいなしだ、許し難いことぞ」
「左様、入牢とは申せ、茶々丸さまは罪を犯したのではない。あまりに暴れなさるゆえに、格子のうちで耐えて頂いているのじゃ。されば、いまだ治療中ということ、いずれ、治るかもしれぬし」
「義遐さまが、当家をお継ぎになれば、茶々丸さまは、生涯部屋住みということになろう」
「おいたわしや」
「公方におかせられても、いささか軽はずみなことよのう、これはわれら両人しておいさめせねばなるまい」
「お聞き下さるであろうか」
「容易には」
難しい顔になって、
「したが、これは、命を賭してもやらねばならぬことじゃ。何も、いま、かようなことを」
「左様、あと、二、三年すりゃ、茶々丸さまも、恢復遊ばされようしのう」
「せめて一年、お待ち下さるように頼みまいらせよう」
「諫死ということになるやもしれぬが、よいか」
二人は、顔を見合わせた。
嘗て富士子が茶々丸入牢を強引に定めたとき、上杉治部少輔教朝は当時政知の氏満を諫めて死んだ。
その轍を踏むかもしれないのだ。二人は覚悟して病間に伺候した。
「逢わぬ」

氏満は蒲団の上で脇息に身を寄せたまま、怒鳴った。
「左様な話、聞く気はない」
「まげてお目通りを願っております」
「逢わぬと申したら、逢わぬ」
氏満は手の扇子を投げつけた。
逢えば負けるのは、わかっていた。二人の家老に交々強諫されれば、折れてしまう自分の弱さがわかっている。
その弱さが、かえって居丈高にしてしまうのだ。痩せ犬の吠えるにも似ていた。
この日、奇妙に蒸し暑かった。
六月の末である。梅雨が明けてから暑熱がつづいている。梅雨のうちは、雨にうんざりしているが、炎暑が十日半月とつづいて雨が一滴も降らないとなると、空を仰いで、無情をかこつようになる。
この蒸し暑さが、氏満を感情的にしていた。
義遐と水菓子を食べたり、生姜湯を作らせて飲んだりして、京の話をしているのは楽しい。
このごろ、ずっとヒステリックだった富士子も、気分が和んで、毎日が楽しそうである。
もともと京の話が好きな富士子だったが、義遐は戻るし、氏満は言いなりになるし、病的な癇の強さが治ったように見えた。
氏満にとっては、御所の内部が平和でありさえすればそれでよかった。
かれにとっては、領内の飢饉も、盗賊の出没や、河川の氾濫なども直接御所を襲わないかぎり、大した意味は持たなかった。
領民の安寧のために領主が存在するのではなく、公方の安楽な生活を成り立たせるために伊豆の国人たちは苦しい生活をしていた。そのことを考えようとしない氏満であった。
氏満のような変則的なかたちでこの地を領した者には、地豪と違って国人の愛情も主従一体となって国を興す情熱もない。
あるものは空虚な地位と、栄華への欲求だけである。いま、それに加えて欲しいのは、おのれの健康と、夫婦子供との和親だった。
それ以外のことは考えたくなかった。
そういう意味では、直接の被害者たる茶々丸や、国人たちの見る富士子という女性が、別の眼で眺められるのかもしれない。
夫婦の仲の交りは別にしても、なげやりな氏満に代って、独善的ではあっても政治の手綱をとってくれる富士子の存在は、たしかに役に立っていたし、茶々丸のことを除けば不満はないのだった。
強いていえば、茶々丸が立とうが義遐が継ごうが、氏満

には同じ実の子なのである。
豊前守と蔵人がしおしおと退出するころから、空は曇りだして、夕刻になると、雨粒がおちてきた。
茶々丸の土牢は、牢番の一人が刺客に殺されたことで、昼夜の交替を増やしている。
常時二人で見張るようになった。それも四交替である。したがって八人必要だった。
夜が更けるにしたがい、雨ははげしくなった。子ノ刻に代った牢番の一人が、空を見上げて呟いた。
「いやな晩だな」
老いた方だった。
「のう、半助、こんな晩は酒でも飲んで、ぐっすり眠るのが一番だのう」
「そりゃ極楽だわえ、だが、それが出来ねいのがこの役目の辛いところだわさ、勘六よ。おぬしは、お役目に就いてまんだ三日目だったのう」
「そうじゃ。ところで、こいつはどうじゃ」
勘六は隠していた酒壺をとりだした。
「ほッ、さ、酒か」
「なあに、気付け薬じゃ」
「左様々々、かような晩には、気付け薬が必要じゃて」
「飲めやい」勘六は酒壺を渡した。「わしはちょっと、見廻ってくる」
「御苦労だな、雨の中を。こっちは御馳走になって悪いのう」
「なんの、たんと飲むがよい」
勘六は、簑笠をまとって、外へ出た。片手に槍、片手に松明である。
雨の中でも燃えるように魚油をたっぷり滲ませた杉葉や小割りの松木の束である。点火すると、よく燃えあがったが雨の中へ出ると、ぶすぶすいぶって、夥しい煙があがった。
勘六は、番小屋の戸を注意深く閉めると、雨の中を土牢の方へ近寄っていった。闇と雨である。土牢の中は暗い。
勘六はあたりを見まわすと、土牢に近寄り、そっと格子からのぞきこんだ。
「もし、茶々丸さま……」声をおさえて、牢内へ呼びかけた。「もし、お目ざめでございますか、もし……」
もぞもぞと動く気配がする。が、茶々丸の返事はなかった。
狂気ではないのだ。狂気じみた振舞いはあっても、茶々丸は正気なのだ。
先夜のことがある。うっかり格子に近づくと、槍が突きこまれる。そのことをおそれているのであろう。茶々丸は、たしかに眼をさましたが返事をせず、外の気配をうかがっていた。

いぶる松明を持った勘六は、しきりに中をのぞきこみながら、
「茶々丸さま、お救けにまいりました」
「……」
「もし！　これを」
勘六は何やら差しこんだ。
闇の中で茶々丸は眼を光らした。その眼の前に、ことりと落ちた。一本の短刀だった。
茶々丸は、しかし、それでもすぐには手を出さなかった。
（何ものが？　……）
疑い深くなっているのはしかたがない。あのようなめにあっているのだ。
いまの心境では誰もかれも信用出来ないのであろう。
（何の魂胆があって？　……）
その短刀の意味を、おしはかっていた。
外では、茶々丸が無言で、眼だけ光らしているのに、気がついたらしく、
「茶々丸さま、お救け申しまするぞ」
と、囁いた。
それでも尚、茶々丸は信用しなかった。餌を与えて隙を見て何をするかしれない。
うっかり短刀に手を出せない。槍か、矢が飛び込んでくるかもしれないのだ。
勘六は、もどかしげだった。愚図々々していては、人目に立つ。闇と雨が幸いなのである。
「もし、お救けにまいったのでござる」
「……」
「信用なされて下され」
短刀をとらぬとすると、これはもう、牢から救け出すしかなかった。
勘六は大きな鍵をさしこんで、錠を開けた。船載のものである。ガチャリとはずれると、勘六は、戸を開けた。
戸前は低い。這わなければ出入り出来ない。
「さ、茶々丸どの」
いつの間にか茶々丸は短刀をつかみ、鞘を払っていたが、なお、慎重だった。
「槍を……」
と、はじめて言葉を発している。
「槍を貸せ」
「は？」
「槍だ」
と、茶々丸はくりかえした。
「石突のほうから差し入れろ」
疑っている。
勘六はそれを察した。
「かしこまりました」

かれは槍の穂先を手前にして、石突のほうから、そろそろと差しこんだ。
「茶々丸さま、早く」
「よし！」
と、茶々丸は短刀を咥えると槍をつかみ、戸前を出た。
その間、勘六は、背をむけ、あたりの気配をうかがっていたのである。
狂気じみて、すべての人を信じなくなった茶々丸にも、その姿ははじめて信じることができたのであろう。
茶々丸は雨の中へ出た。何年ぶりであろう、茶々丸は土牢から出たのだ。
そのとき、見張小屋の戸が開き、半助が顔をだした。
「勘六ぬし、ええ気分に酔うたでおぬしも一杯……あっ」
茶々丸の姿を見て仰天した。その手から酒壺が落ちた。
刹那、茶々丸の手から槍が飛んだ。
槍は雨の中を、うなりを生じて飛んでいる。
土牢の上で暮していても茶々丸は力があった。
もともとからだは大きい。怨みをこめて、牢格子にぶつかったり、飽きずに揺すったりしていたのが、力を貯えるのに役立ったのであろうか。
夜と雨を裂いて、槍は飛び、ぶっつりと、半助の胸を貫いて穂先が小屋の羽目板に音高く、突き刺さった。
「ちゃ、茶々丸さま！」
勘六が悲鳴に似た声をあげた。
茶々丸は雨に顔を打たせて、声もなく笑った。
松明の火明りと小屋の戸口から洩れる明りが、その凄まじい笑いを浮き上らせた。
（地獄の顔だ……）
勘六はぞっとした。
茶々丸は左手に短刀をつかむと、
「うぬの名は」
「か、勘六……で、ございます」
「よし、勘六、火を放て」
茶々丸は、羽目板に釘づけになった半助の腹を足をあげて、ぐいと押しざまに、槍を引き抜いた。
半助は、すでに死んでいた。意地汚なく、やたらと呷って、酔っ払ったところを、槍が貫いたのである。
驚きから、瞬後に、かれは昇天している。恐怖は殆どなかったろう、酔眼には、一瞬の悪夢でしかなかったのではないか。
ぬかるみの中に、ぼろ布のように崩れ折れた半助の顔は、驚愕で瞠目したままだった。
「勘六」
茶々丸は右手に槍をつかみ、短刀を捨てて、半助の刀を奪いとってこれは左手に握った。
「早く焼け」

「へ？」
「この小屋を焼け」
「へ、へえ」
「おれは、御所の中を掃除してくる」
「そ、掃除……」
「女狐と、狐の子と、古狸だ」
吐きだすように言って、はじめて茶々丸は笑い声をあげた。
牢番の小屋が雨の中で火を噴きあげるころ、茶々丸は御殿の中へ走りこみ富士子の寝所を襲っていたのである。
子ノ刻をまわっているから、正確には七月一日である。
板戸の一部は開け放して、ただ雨の降りこむのを簀戸でふせいである。
中には一穂の灯がともって、おぼろに寝所を照らし出している。そこに、茶々丸は富士子の寝顔を見た。
「女狐め！」
叫びざまに、簀戸を蹴破って茶々丸は躍り込んでいる。
寝耳に水であった。
富士子は、突然、簀戸を蹴破って飛び込んできた茶々丸に愕然として、飛び起きた。
「女狐め、驚いたか」
茶々丸は仁王立ちになって、高笑いした。
ずぶ濡れの茶々丸である。小袖は垢じみて破れ、濡れ鼠になって、からだに貼りついている。
逞しいからだは、この復讐のために鍛えられたようであった。肩の盛り上りも、腕の太さ、胸の厚さ、すべてが、仁王像のように圧倒的であった。
槍の穂先はすでに雨の中を走ってくる間に、洗い流されていたが、それだけに、一穂の灯にぎらぎらと凄まじい光を反射していた。
「よくも、おれを苦しめたな、いまこそ、積年の怨みをかえしてくれるぞ」
「あ、あ……お待ち」
漸く、富士子も、事態がのみこめたようである。
破牢！
破牢してきたのだ。そのことは何を意味するか。自分が一体どうなるか、考えただけで慄然とした。死刑の宣告を受けたような恐怖であった。
「茶々丸、お待ち、そなたは、何をしようというのです」
「ははは、女狐め、何をするか、何をされるか、うぬの胸に聞いてみよ」
「あ……茶々丸」
その眼の前を、しゅッと、氷のような穂先が走った。
ひくっと、身をのけぞらせる胸にさらに、また走った。
富士子の悲鳴の奔りか、寝衣の裂ける音か。胸のあたりが、はらりと切れ、豊満な双の乳房が剝きだしになった。

「あ……」
「女狐、よう肥えたな、誰の米を喰うて肥えたか」
そのとき、戸外で叫び声が聞えた。
火事だ、火事だ、という叫びであった。牢番の小屋に勘六が火を放ったのだ。湿気ていて、燃え難かったのかもしれない。
「あっ、誰か……」
助けを呼ぼうにも、声が咽喉にひっかかった。
富士子は、添寝していた末弟の潤に手を伸ばそうとした。とたんに、槍がおどった。何か飛んだ。富士子の指が二本切れて飛んだのだ。ひいーっと、悲鳴がつんざいた。
「助けておくれ、茶々丸、殺さないで、私が悪かった、私が悪うございました。わが子が可愛いゆえに、つい、そなたに辛く当ったのじゃ、許してたも……」
「それが、狐の夜泣きか」
茶々丸の頬に、復讐の残忍な笑みがのぼった。乳房に擬された槍の穂先は白い肌に音もなく、めりこんだ。
茶々丸が、槍を片手づかいしていたのは、左手に抜き放った刀を握っていたせいもある。
が、それよりも、一刺しで、息の根をとめたくなかったのではないか。
右の乳房を刺した槍を、ひょいと引き抜くと、また左の乳房へ。
無造作に刺した。富士子は、虚空をつかんで、のけぞり倒れ、苦悶の呻きをあげてもがいている。
室内には、ほかに末弟の潤がいるだけだった。
宵の口に、肌を合わせて、女同士の淫らな楽しみに耽った相手の小桜の姿は、どこにもなかった。
「思い知ったか」
茶々丸は、百年の恨みをこめたように、こう罵りながら、左手の刀で、富士子の額をざくりと切った。
髪の生えぎわから、眉間まで、一太刀。ぱっと噴きだす血が、顔を染め、目を塗り潰した。
「助けて、茶々丸……」
「七生、生れ変って詫びるがいい、許されるのは、それからだ」
茶々丸は、嗜虐的な喜びで、さらに、富士子の耳を切り落し、眼を突き刺し、咽喉笛を切り放した。
その一太刀、一太刀に、恨みをこめた。
もはや、人間ではなかった。富士子の顔は血どろになり、目も鼻もわからなくなり、それでも、まだ死なずにもがいていた。
復讐は、恨み霽らしにちがいないが、そこには、おのれの行為を正当化する、自認された嗜虐の追求ということもできる。茶々丸の復讐劍がそれであった。
富士子をさんざんに切りきざんだあげく、かれの血刀は、

一隅で立つこともできず、顫えている異母弟の潤に向けられた。
「うぬか、うぬが弟だな、うぬのために、おれは、気狂いにさせられた」
さすがに、その幼さが、乱刃をためらわせたのであろうか。
これは一刀であった。片手討ちに、頭上から叩き斬った。
異母弟だという懐しさや親しみは、茶々丸の眸には片鱗もなかった。
むしろ、そのゆえにこそ、憎悪したのではないか。
富士子に、義遐と潤が生れなければ、茶々丸の生涯は、もっと気楽で、そして伊豆公方は後代までも繁栄したかもしれないのである。
かれには、潤の存在が、母性を地獄の奪衣婆にまさる鬼の心に変えたと思われた。
母子が致命傷を受けて、褥を夥しい血で汚し、のたうちまわっているのを一瞥すると、茶々丸は、対ノ屋から走り出で、父の寝所に飛びこもうとした。
このとき、簀戸を開けて、出てきたのは、義遐であった。
二人は鉢合わせしそうになって、飛び退った。茶々丸は見た。潤以上に憎い、すぐの弟の姿を。
「義遐か！」
思わず、茶々丸は叫んだ。
かれには意外だったのである。一瞬、その信じ難いあまりに、棒立ちになった。
義遐が戻って来ていることを、茶々丸は知らなかったのだ。以前、出家したときのことは聞いていた。
それは秋山蔵人らが、茶々丸の狂気を鎮める一助にもなればと思って、教えたからであったが、いま、目前に立った義遐を、見て、呆然となった。
「兄上……」
義遐は思わず、声をかけている。
かれにとって、この義兄は、哀れな狂疾者でしかなかった。
「兄上、一体、何を……」
義遐は、かれの姿を見、その手の刀と槍が血にまみれているのを見た。
ある予感が、若者の胸を走った。
「まさか……」
その疑惑と不安と恐怖の眼の前で、茶々丸は狂笑を聞かせている。
「それだ、その、まさかだ。ははは、斬ってきたぞ、なぶり殺しだ、うぬの母親と、うぬの弟を、この槍で、この刀で、ははは、ナマスにきざんでやったわ」
濡れた蓬髪をふりみだして、茶々丸は笑い、
「うぬも、この刀の錆になれ」

出家したはずの弟が戻ってきたということは、後嗣になるのは明白であった。

茶々丸には、先夜の刺客と、この義遐を関連づけて考えずにはいられなかった。

「うぬが、おれを、この義兄を」

廃嫡の元兇の一人か、との恨みをこめて、茶々丸は、血刀を振りあげた。

義遐が、ここにいるのは、かれにとっての幸いだったのである。

義遐は仰天し身を翻した。かれは寝衣のままの無腰だった。

「待てい！」

そのときは、もう宿直の者なども走り出してきていたし火事と聞いて、忠臣たちが寝殿に公方の身を気遣って集まって来ていた。

「若君、お鎮まり下さい」

数人が群がって、ひき止めようとした。

「寄るな、くそ！」

茶々丸はそれらの者を蹴倒し、槍で薙いだ。が、人数が多い。たちまち、槍は摑みとられてしまった。片手で振っていたから、二、三人にかかられては、しかたがない。

茶々丸は屈せず左手の刀を右手に持ち代えて、義遐を追った。

義遐は父の寝所に走りこんだ。

氏満も起きていた。老衰してはいるが歩けないわけではない。よろよろと立ち上った。

義遐が救いをもとめて、走りこんできたのを見、ざんばら髪に悪鬼のように眼を光らし、返り血をあびた茶々丸を見ると、棒立ちになった。

「おお、茶々丸……」

氏満には、茶々丸への憎しみなどない。

実の子であるし、むしろ不憫の思いが強い。

破牢してきた茶々丸の悪鬼のような形相にも、他人と違った懐しさを感じた。

「茶々か……」

もしも、血に狂っていなかったら、茶々丸のほうに、その父親の情を、冷静に受けとめる何かが動いたかもしれない。

後妻の愛に溺れ、その姦策に気づかず、わが子を土牢に閉じこめるという愚かなことをしてしまったことを、この一瞬に後悔したにちがいない。

「茶々……」

許せ、という言葉が口に出る前に、近習の者が、

「殿！」

と、背後から佩刀を差し出した。

要らぬ、と振った手が佩刀の柄にさわった。

それが茶々丸の殺意を促したのか。茶々丸は一跳した。何か叫んだ。何と叫んだろう。氏満には聞きとれなかった。血刀が氏満のぶよぶよに肥満した肩から袈裟掛けに斬り下げていた。

氏満は、もろく崩れた。肥っていても、精気のないからだは、もろい。

だが、崩れながらに、氏満は茶々丸の足にしがみついた。

義遐を追おうとする茶々丸の足に重いからだが、まつわりついた。

「ぬ！　放せ」

「茶々……許せ、よ、義遐だけは見逃してくれい」

「ええい、邪魔な」

「そなたの、弟じゃ」

「なんの、あんな奴、何が弟だ。みな殺しにしてくれる」

「弟を、殺すのか、茶々……」

「黙れ！」

蹴放そうとしたが、氏満のからだは放れない。

茶々丸は血刀をとりなおすと、両手で逆さに握って、垂直に刺した。

肩を、頸を、背中を、めったやたらに刺しつづけた。

「こいつ、こいつ、こいつ！」

実の父であるという意識が、かえって、憎悪させていたのだ。

その肥った肉塊が、ただ、憎しみの対象でしかなかった。刺すところから、血は泉のようにあふれ、褥を、床をべとべとに濡らしていた。

それでも尚、執念の手は、離れなかった。

「なんだ、こいつ、こいつ、くたばれ」

突き刺し、突き刺し、蹴放した。そして、茶々丸は血笑した。

「公方は死んだ、公方は死んだぞ、今日から、おれが公方じゃ、おれが御所の主じゃ、伊豆の主じゃ、うぬら、おれにしたがえ」

茶々丸の血笑は、高らかに、いつまでもいつまでも響いた。

駈けつけてきた外山豊前守も秋山蔵人も、この事態にただ呆然となって、顔を見合わすばかりだった。

怒濤の如く

「茶々丸どの御謀叛」
の急報が興国寺城へ入ったのは翌朝のことである。韮山の田中内膳が知らせて来たのであった。
「やったか！」
新九郎は、思わず叫んだ。
早朝、起き出でて百矢をこころみていたところだった。
十五間の距離で、つづけざまに百本の矢を放つ。命中するに越したことはないが、腕が衰えると百張りもつづけることはできない。
これは老いを知る方法でもある。新九郎は、乗馬や的矢や槍づかいなど、武辺者としての日課を欠かさない。
それは、精神の弛緩を引き締めるとともに、筋肉の老化を防ぐことになる。
「大道寺を呼べ」
新九郎は弓を放さない。矢をつがえて、また兵ッと放った。
爽やかな冷気の中を奔った矢はあやまたずに黒目に音たかく入った。
「お見事！」
近習が膝を打つのへ、
「いや真中ではない。右へ寄っている。それに、まだ半ばじゃ、百本目が入ったら、褒めろ」
そして、また無造作に放った。
これは黒目をそれたが、角へは入った。
「それ見ろ、余分な追従は、腕を慢心させる」
「はあ」
「才四郎は出て来ているな。ただちに伊豆境へ参って様子を窺うように申せ。それから余分に馬を曳いてゆけと、な」
「余分の馬を？」
「左様に申せばわかる」
弓を引きながらも、あれこれ、事後対策を考えているらしい。
「和七」と、田中内膳から遣わされた小者へ、振り向きもせずに言った。「茶々丸に弑いされたのは公方と内室と末の若君……左様に申したな」
「はい、ほかには牢番など」
「御喝食はなんと」
「はあ……」

「天竜寺の喝食とならられた義遐どのよ」
「御遺骸は見えざりしとか」
「うむ」
満月にひきしぼって、ぱっと放つ。矢羽の唸りが、前よりも高かった。これは、鮮やかに黒目の中芯をぶっつり貫いた。
そこへ大道寺太郎があたふたとやってきた。
「聞いたか」
「はあ、伊豆公方御一門の内紛、ついに……」
それから先は言わせずに、
「三十騎ばかり引具して、まいれ、すでに山中が先駈けしておる」
「よも駿河を犯すことはあるまいが、何をしでかすかわからぬ。狂気のほどは如何か、人心の動向を見さだめよ、逃散してくる者あらば入れてやるがよい」
逃散してくる者。
それは、動乱に際して田畑や家を焼かれた町衆農民たちをさしているようであったが、新九郎の言葉の裏には、別の意味が含まれていた。
（公方の遺児、義遐を……）
茶々丸の兇刃は逃れ得たらしい。
とあれば、山中へ逃げ込んだか浜へ走ったか、いずれにしても、まず、頼るのは駿河にちがいない。
茶々丸の狙いがどこにあるかわからない。また陰で糸を引いている者があるとすれば、誰か。
それらのことは、すべて、これから明るみへ出ることで、新九郎はいまは静観していればよかった。
むろん、駿河の今川五郎氏親（前名竜王丸）と連絡をとって善後策を講じるにしても、当分、表情をあらわさないほうがよかった。
（とうとうやったか）
いずれ、何かが起る、とは思っていた。
それが起った。公方家としては、もっとも不幸なかたちで、起ったのである。
氏満は氏親の烏帽子親だから、氏親としては、黙っては居れまいが、ここで、軍勢を動かすのは、得策ではなかった。
明日にも、駿府にいって、そのことを氏親に進言しようと思いながら、新九郎は弓に何十本目かの矢をつがえるのであった。
（義遐が一命を全うしていれば、ひそかにこれを匿まう……）
そして、何くわぬ顔をして、茶々丸の動きを見る。
新九郎が、他の戦国前期の大名豪族たちと違うことの一つは、民衆の心を、無視しないことだった。
力と力のぶつかり合いが、武門の争闘であり、その力の

評価しかない者が多いが、所詮、広大な領地を統べるにしても、その末端では、為政者の目はとどかない。
名君といわれ、領国が治まっているのは、領民が威服か雌伏かしているにすぎない。
そのいずれかによって、将来のことも推量できるし、予測もつく。
茶々丸の謀叛が、はたして民衆にとって、どういう意味があるか、それを見究めることだった。
公方家の所領とその因果関係の深い伊豆民衆たちが、はたして、公方氏満の弑逆を喜んでいるかどうかだ。
喜んでいるとすれば、それだけで茶々丸は、二代目伊豆公方としての地位を保証されたといえる。
が、歎き悲しんでいるとすれば茶々丸の地位は脆い。
民衆の支持如何を第一とすれば、第二に家臣たちの思惑である。
茶々丸が狂気ということで土牢に押し込められていたことは、事情を知る家臣たちの同情を集めていた。
はたして、今度の謀叛が、その同情と支持のたまものであるか、どうか、だった。
(手引きした奴がいたのか……)
新九郎は、小桜のことを思った。小桜の背後にある〝影〟を思った。
破牢を助ける者がいなければ、ああは鮮やかに謀叛できないであろう。
父たる公方氏満を弑し、義母富士子と異母弟潤を斬殺する。
その大それたことをやってのけたということは、支援の手を感じずにはいられない。
先ごろ、小桜が、その話を持ちこんできたのだ。
その計画には、後段がある。
——親殺しの茶々丸は、仏罰を蒙り、神慮に反するゆえに、これを討てば、世間は喝采するでございましょう——というのである。
新九郎がこれに乗らなかったにもかかわらず、事は運ばれた。
(おのれの代りに、一枚噛んだやつは、誰だ?)
小田原の大森氏か、南伊豆の豪族のいずれか、か。
百本を射終えると、新九郎は食事もせずに馬に飛び乗った。
「まいるぞ」
一声言って重籐の鞭を振るう。
あわてて近習らが、あとを追った。
新九郎にしてみれば、山中や大道寺らを遣ったものの、まだ案じられるのであろう。
国ざかいに近づいたとき、一散に疾駆してくる騎馬の群れが見えた。

七、八騎である。
「何ものか、見よ」
これに応えて、馬上から傍の下枝に飛びつき樹上によじのぼった者がある。
小手をかざして、すぐに報告した。
「まず先頭が山中才四郎どの、大道寺太郎どの、三騎目は……」
「三騎目は?」
「あ、足利義遐どのにござりまするぞ」
「おお、脱けて来たかっ」
漸くのぼり初めた夏日のもとに砂塵がもうもうとあがり、騎馬の群れは一団となって走ってきた。
「わいらは、国境いへまいれ、万一ということがある。軍勢が押し寄せてまいったら、容赦なく討ちとれ」
新九郎は扈従の面々を入れ違いに走らせた。
「殿! 殿!」山中才四郎は顔を紅潮させている。「おつつがなく脱けて来られましたぞ」
「屋形へ、お連れ致せ」新九郎は手を振って、「こまかな話は、あとじゃ」
「忝けのうございます」
義遐の声には喜びと感謝があふれている。汗も拭きあえず、義遐は馬を進めた。一歩でも早く伊豆から遠去かりたいようであった。
「われながら、よくぞ逃れられたものよ」
新九郎の屋形に落着くと義遐はほっとして悪夢のような夜をふりかえった。
興国寺城に一泊した上で義遐は駿府へ向った。
これには新九郎も同行している。護衛も二十騎、足軽など数十人が前後を走った。
今川五郎氏親も、この報告を得て、狐ヶ崎まで、義遐を出迎えた。
「茶々丸も謀叛に踏みきった以上、当然、義遐どのの身辺は危険になる。やはり、京へ戻られるのが最上の策であろう」
氏親はまだ若いが、竜王丸の時代から苦労してきている。母の北川どのと二人で、府中から落ちていったときのことを思いだしたのであろう。
その北川の夢子は、すでに四月二十六日に歿っていた。
慈雲妙夢大姉と法名され、手越の向敷地に葬られた。現在の徳願寺はその菩提所として建立せられたものである。
氏親にしてみれば、母の死は衝撃的であった。
ただの母子ではない。夢子が命がけで守り育てなければ、範満の奸計にあって、とっくに氏親は抹殺されていたろう。
山西の長者小川法栄の庇護をうけているときも、仙窟泉ヶ谷の新館でも、常に竜王丸の身辺には、刺客の眼がつきまとっていた。

漸く今川の太守の座につくことが出来、氏親の名を得て元服したわが子の姿を見て、夢子は、自分のこの生に於ける役目が終ったことを知ったのか、張りつめた気力の糸が切れたのであろう。

氏親は竜王丸の苦難の時代をふりかえると、義遐の立場に同情を禁じ得なかった。

「如何ようにも力になりますぞ」

氏親は言った。

「御尊父は、われらには烏帽子親でござる。わが父桂山宗公を早くに失うたこの身としては、御尊父の好意が身に沁みて嬉しゅうござった。何事にても仰せあれい、お力になり申す」

義遐が、父母と弟の仇を討ちたいといえば、氏親はすぐにも軍勢を催したろう。

新九郎は、凝っとその表情を見つめていた。

(何を言いだすか)

氏親が若さのあまり、昂奮しているのは、わかる。が、かれには、今川家を背負っている立場がある。軽々には動けないはずであった。

時代は、父母と弟の仇討ちというような、感傷を要求してはいない。

政治というものは、もともと、親子の情とは無関係なのだ。

義遐は眼を伏せた。

その気弱さは、新九郎には頼りないと思われた。ひとたび喝食となって、僧籍に入ると、こうも気弱になるのか。

「義遐どのは、天竜寺へお戻りなされるがよろしいかと」

「そうじゃ、この身も、香厳院に戻って、父母弟の供養をしたい」

その乞いにまかせて義遐を京へ送り、ふたたび細川政元をわずらわせて得度させることになった。

義遐が足利将軍家の政争により、将軍義澄になって浮上するのは、ずっと後のことである。

「漸く、芽が吹いたぞ」

弥三郎春忠が、練綾の直垂姿で手輿に乗り、堀越御所にやってきたのは、修羅場の後始末もととのわぬ七月三日のことであった。

これを手引きしたのは、いうまでもなく小桜であった。

小桜は、あの夜、茶々丸に抱かれている。

若者は飢えていた。土牢に長年月閉じこめられていただけに、すべてに飢えていた。

若いからだは、陰惨な土牢暮しにも負けなかったのである。欲求があふれていた。その欲求が、あの思いきった破牢と、肉親への復讐を決行せしめたといえる。

自由に飢え、血に飢え、女に飢えていた。

手足の伸ばせる自由を得、恨みを霽らして血を存分に流しめた茶々丸が、女体を見て、情欲を奔らしたのは当然である。

「小刀を差し入れるように、申されたのは、こちらさまでございます」

松崎ノ勘六が、茶々丸にひきあわしたのが、小桜だったのである。

実父の首をあげて、血笑した茶々丸にとって、あとは情欲を噴きださせる相手がほしかった。

「おまえか」

茶々丸は、光る眼で見た。

「湯を汲め」

湯殿に入って命じた。

湯を汲めとは、背を洗せということである。

小桜も心得ている。そのために来たのだ。茶々丸の顔や手足や、返り血を洗い流してやり、その部分を、よく洗った。

洗っているうちに、充血し、はち切れるようになってきた。

「おんな!」

うわずった眼で、茶々丸は見た。

男の気持はわかっている。小桜の手は、柔らかく、微妙に動いて恥垢をゆっくりと洗い流してやる。

「おんな、おれがこんどは洗うてやる」

強い力であった。小桜は抱きすくめられた。

「何をなさいます」

「おんなだ、おんながほしいぞ」

茶々丸の手は、股間にのびている。素早く、裾をめくられた。茶々丸の固く熱くそそり立ったものが、内腿に触れた。

「いけませぬ」

「黙れ、余にしたがえ」

「ああ、わたくし、左様なことは」

「男ははじめてだと申すか」

「は、はい……」小桜は自分でも、この演技を巧みに出来たと思った。「はじめて……ああ、こわい」

「こわいことはない。余にしたごうていよ、愛でてくれる」

「——痛くしないで」

「よいとも、よいとも」

「お側に……末長う、お側に仕えさせて下さいませ、若さま」

噴きだすんばかりの情欲の昂ぶりである。茶々丸はうつつに叫んでいた。

「よいとも、余の側女にするぞ、それ、そこへ寝よ」

餌を見せびらかして芸を仕込むのは、動物の飼育に共通

の方法である。
この場合、茶々丸は、飢えた狼であった。女に飢えていた。小桜の柔らかい肌を、手に、内腿に感じていながら、
（側女にして下さいますね）
と、念をおされると、それを否む余裕はなかった。
このときの茶々丸には、政治の抱負もなければ、使命感などもない。
あるものは、
〝力〟
それだけだった。
権力である。伊豆公方という身分と地位と権力——そのすべてを手に入れたことの喜びだけであった。
どんな女でも、手近なものはおのれのものになる。その喜びを、行動にして、自らを慰めたかったのだ。
小桜は恥じらいながら下肢をひらいた。あふれる情欲を茶々丸は小桜にぶっつけた。
覚悟はしていた。長年月、耐えに耐えた若者なのだ。それがかなうとなると、どれほど、逞しく、どれほど我武者羅に挑んでくるか。
およその想像はしていたし、覚悟はしていたのだ。が、茶々丸の情欲は、そうした想像のほかであった。狂ったかと思われた。
そのたけり立ったものは、火をもっても焼けず、打ち砕いても砕けず、銅鉄をとろかす炎で煮ても溶けることはあるまいと思われた。
小桜ほどの女が、茶々丸のそのものがからだを割って入ってきたとき、たまぎるような悲鳴をあげている。
演技ではなかった。事実、からだが二つに裂けるかのような痛みであった。
「いいか、いいか……」
茶々丸は、涎を噴きこぼれさせて、うつつの声をあげた。
一度では終らぬ。二度、三度、狂ったように、小桜のそこへ注ぎこんだ。
しまいには、血を噴いた。
小桜は月のものがはじまったかと思ったほどである。
だが、それは十日ほど前に終っている。茶々丸のものも真っ赤になったし、双の内腿もべっとりと血だった。
自分のそこから流れ出たものと驚き、不安に駈られたが、べとべとになった肉体を、茶々丸が自身の手で、荒々しくこそぐように拭きとったとき、その部分が破れて血を噴いているのが見えた。
「痛い、痛い」
その痛みもしかし伊豆公方の椅子の快さの前にはものの数ではないようであった。
その機嫌を見はからって、小桜は弥三郎春忠を伺候させたのである。

「今川弥三郎春忠でござる」
弥三郎は平伏した。
茶々丸の顔を見たのは、声をかけられてからである。
「余の家臣になれ」
のっけから茶々丸は言った。
土牢から出て来て何もかもが新鮮に見え、天地は自分のために存在しているような気持になっている。
茶々丸にとって、公方家のルールなどは、問題ではなかった。
公方——将軍、といえば、足利家の伝統と格式の故実に常住坐臥しばられる。茶々丸はそれを一顧だにしなかった。伝統を尊重することは、即ち、父祖への敬愛を意味する。そのすべてをぶち毀した茶々丸なのだ。
現代風に言えば、
（法律はおれだ）
であろう。
（おれが法律だ）
と、叫んで憚るところがなかった。
土牢で狂死させられる寸前にかれは破牢して、〝生きた〟のだ。
生きてある存在感は、かれにしてみれば、何ものにもとらわれない放縦さ、そのものだったのだ。
いまも脇息に寄りかかって、足を投げだしている。足を女二人に揉ませているのである。
「弥三郎、そちは頭がよいか」
「はあ」
この突飛な質問にも弥三郎は驚かない。
「良いでございましょうな」
と、笑いを含んで答える。
この質問は、弥三郎にとってむしろ、我が意を得たという感じであった。
「そこらに居る者よりは、切れるつもりにござる」
じろりと、次の間へ蔑すみの視線を流した。
外山豊前守と秋山蔵人である。
二人は家老だ。先代の政知を支えて来た。いうなればかれらがいたからこそ、伊豆公方家は持ちこたえられたといっていい。
茶々丸が毒殺を免れたのも、この二人が陰に陽に、政知や富士子の気持を制馭していたからだ。そのことが茶々丸にはわからない。脱牢できたのは、しかし、直接的には小桜とこの弥三郎春忠の工作である。茶々丸にとっては、家老二人はあくまでも〝頭の悪い〟連中であり、〝役立たず〟でしかない。
「よし、そのほうには、色々と、やってもらおう。まず、屋敷が要るな」
茶々丸は、外山豊前守のほうを見た。

「豊前、そのほうの屋敷を開け渡せ」
「え！」
「そちは誰かの屋敷へ入れ、この弥三郎に譲るのだ」
無茶な命令である。この時代、いくら主人でも、こういう乱暴きわまる上意はない。豊前守に落度があったのならしかたはないが、そんなことはないのだ。
強いてあげれば、茶々丸に対する消極的忠義ということだろうか。
しかし、そういうことになると豊前守としては、
（おれが政知や富士子を諫めなかったら、いまごろは毒殺されているかもしれないのに）
という気持になる。
むっとなったが、豊前守はその命令に反撥出来なかった。
「御意……」
と言いかけて、口惜しさに、涙さえ、出かかった。かれは深く頭を下げた。
思わず、秋山蔵人が膝を動かしかけたとき、
「あいや、その儀は」と、弥三郎春忠自身が、口をはさんだ。「恐れ乍ら、御辞退申し上げまする」
「なんと」茶々丸は、ぎょろりと眼を剝いた。「なんじゃ、拒むか」
いまの茶々丸にとって、家臣の言行は否か、応か、しかない。
「はあ、なりませぬなあ」
これには外山も秋山も、意外な面持ちになって、顔を見合わせた。
「なりませぬね。左様なことはなりませぬ。第一、それがしは、他人の屋敷へは入りとうはない」
ここ一番の勝負である。弥三郎の〝読み〟の深さは、辛苦の歳月と無関係ではない。
「それがしに、御家老の屋敷を賜わるとのお言葉には、涙がこぼれます。さりながら、御奉公仕るにそれがしは左様な立派なところは要りませぬ」
「……」
「このお屋形の郎党部屋の端になりと置いて頂ければ、それで充分」
「そんなことはできん。そちには政治を何かとやってもらうのじゃ、郎党と一緒にはできん」
「では、お厩の隅でも結構」
よほどの謙虚な人柄と思われる言葉だったが、さらに、こうまで言った。
「できるかぎり、殿のお側を離れとうはない。犬馬の労を厭いませぬぞ」
「うむ」
茶々丸は、それに反応は示さなかった。が、心に食い込んだのはたしかである。

弥三郎が堀越御所の政治に腕をふるいはじめたのは、それからだった。
まず、検地を行うとともに、所領の増収を計り、きびしく農民から米麦を取りたて、小物成りも届け出を厳にし、びしびしやりはじめた。
そうした弥三郎春忠の〝忠義〟に茶々丸は感じ入って、御所内に屋敷を新築させたのである。かれの計算は、当った。
嘗て今川家の当主たらんとして、範満と竜王丸派の争いに食いこんだ弥三郎春忠である。
野望虚しく、自滅のかたちで、駿河を逃亡せざるを得なかった。
この伊豆の韮山に住みついて、北條家や公方の御所に仕官をこころみていたが、いずれも失敗した。
かれの場合、失敗の要因は、才気のゆえである。人生をすべて巧か拙かでしか判断できないところに、弥三郎春忠のこれまでの失敗があった。
（いかに巧みに世渡りするか）
それしかなかった。
かれには、誠意や真実がなかった。駿遠二国をおのが手に収めたいという気持だけであった。
その出自からくる悲願であったにせよ、かれにとって、おのれ以外のものは、すべて踏み台にすぎなかった。
それがわかると、人々は、叛き、あるいは去った。
だが、世の中はわからない。今度はその姦策が成功したのだから。
（茶々丸の下剋上の陰の演出者はおれだ）
と、いう気持が、弥三郎春忠をして、堂々と、御所入りさせたのである。
（おれが小桜を使って、破牢させなければ、いまの茶々丸は無い）
茶々丸が重用するのは当然なのだ。
外山豊前守や秋山蔵人などに対して、かれがひるむところがなかったのも、そのゆえである。
茶々丸がどの程度に、弥三郎のことを理解していたかはわからない。
が、本能的に、
（豊前や蔵人よりは、おれの性に合う男）
と、感じたに違いないのだ。
仕官すれば、誰でもまず屋敷を欲しがる。屋敷は生活の必要性というより、ステータス・シンボルであった。
〝屋形〟という名称にも厳しい制限があり、その名称自体が、すでに身分と地位を意味したように、屋敷もまたそれに準じるものだったのである。
弥三郎はそれを欲しなかった。少なくとも表面は、である。

お屋形の隅に、寝るだけのスペースがあればいいという。そういう気持が主人を喜ばせるのはいうまでもない。

（欲のないやつ）

単純に感じた。政治に才腕をふるいはじめた弥三郎のために、茶々丸は、屋敷を新築させたのである。

それも御所の中であった。弥三郎の地位は完全に固まったかに見えた。

弥三郎春忠の志向も、苦渋の歳月によって変ってきている。若壮のころの願望は権力の座であり、華やかな〝駿遠二国の太守〟であった。駿河守護大名たる地位が、当時は望みのすべてであった。

だが、それが挫折した。挫折は反省と、意志の転換を余儀なくした。

年齢もある。すでに、欲望の種類が違ってきている。若さがなくなれば、華やかな地位に対しては、嘘のように望みが失せるのだ。あるものは、支配権力と、意地であった。

（新九郎に負けるものか）

その怨みは、韮山から逃亡したとき、さらに二重の憎悪となって灼きついていた。

かれにとって、思いがけなかったのは、新九郎が竜王丸にとって代って、政権を掌握しなかったことだ。

自分に権力願望があったゆえに当然、

（新九郎めも同じだと思ったが）

まさか竜王丸を今川五郎氏親として立てようとは。

自分は興国寺城と三枚橋城の主に甘んじて、東辺の守りに意を注ぐなどとは、弥三郎の人生観を覆すものでもあった。

（存外、欲のないやつだな）

それなら、

（まだ遅くはない！）

出世競争に負けたとは決っていない。随分と道草を食ったが、

（兎と亀だ。結局、おれの方が先を越すことになる）

氏親をあそこまで奉ってしまっては、新九郎は、もはや、氏親を討ちとって今川家を収奪するわけにはいかない。

（が、おれならば……）

茶々丸は、もはや、自家薬籠中のものだ。

竜王丸と違って、茶々丸ははっきりと、〝親殺し〟であり〝弟殺し〟の狂人——いや犬畜生にもおとる人非人ということになる。

すでに世間に、その概念がある。それに乗っかりさえすればよいのである。

これは容易であった。

その時機を待つ。

事を起したあと、そっくり、弥三郎のものになる。しかし、それも、かれが足利公方にとって代るというわけには

いかない。

（おれの子を、茶々丸の次に据えるのだな、おれの子を小桜に生ませて）

まず、実権を握ることだ。

政治の実をあげ、豊前と蔵人という邪魔者を消す。むろんかれらを消すにも、下手に手は下さない。

（茶々丸に殺させることだ）

こう考えついて、にやりとした。

快心の笑いを洩らしたとき、弥三郎は、本来の若さをとり戻すのであった。

むろん、茶々丸は、小桜一人では満足しない。

若いのだ。普通土牢などに長く入っていると、顔色が悪く、いわゆる牢人色になって不健康は免れないのだが、茶々丸は生来、頑健だったのであろう、御所の主となって、〝二代目伊豆公方〟を名乗ってから、一向に、その牢人病らしいものが出てこない。

それどころか、実に精力的なのだ。

御所内の女の子に片っ端から手をつけた。それも渋皮の剝けた侍女たちならわかるが、下働きの水仕の女でも、かれの情欲を煽るらしい。

女たちのちょっとした動作でも、かれの情欲にとっては、刺戟的なのか。

まるきり見境いがつかなかった。必ずしも、十四、五の若い女にかぎらない。二十歳でも三十歳でも、茶々丸には、手籠めにするだけの魅力に見えた。

「御牢内で、随分と、耐えてござったゆえの」

と、はじめは、さもあろう、と同情と理解を示していた者たちも、この状態が、二ヶ月三ヶ月と続くと、呆れてきた。

むろん小桜は別だ。彼女はあくまでも、

〝側妾〟

であり、それも第一の地位を与えられている。茶々丸が妻帯する気がまだないから、小桜は正室のような顔で、侍女を顎でつかう身分になっている。

「馬鹿殿がどんなに女に手を出そうとも、そなたは黙って見て見ぬふりをしているのだ」

「ほほほほ、そのつもりでいます」

「妬くではないぞ」

「妬くほど惚れているわけではありませぬ。わたくしには、やはり弥三郎さまが」

「そうだ、やがては、この伊豆一国そなたと二人のものになる」

弥三郎春忠は、そういって、小桜を抱き寄せるのだった。

同じ御所のなかだけに、寸暇を盗んで逢うことが出来る。だが、弥三郎は必要以上の配慮をした。

二人のあいびきが、人目に触れ、茶々丸の耳に入れば、永年の苦心が水泡に帰すからだ。
「小桜、暫く、逢うのは止そうぞ」
「あら、つまらない」
「我慢するのじゃ、大いなる夢のためにな」
「はい、わかりました」
「茶々丸の機嫌を損じぬようにせよ」
その茶々丸を、弥三郎は領内視察と称して、外へ連れだす。
領内を巡ることによって、農地の工合などの認識を深めるためでもあったが、また茶々丸の気持を外へそらし、さらに悪行を重ねさせるためでもあった。
茶々丸は青空の下を馬を走らせるのが好きだ。
やはり狭い中に閉じこめられていたことの鬱屈が、外へ向って放縦にさせるのであろう。
無目的に、やたらと走らせる。馬が疲れて、肥腹に波打たせて喘ぎはじめると、漸く、とめて馬から降りて休息する。
徒士の者はむろん、馬で供をする者も、この疾走にはなかなか追いつけない。
汗と埃りで真っ黒になって、漸く追いついてきたときは、茶々丸は、汗を拭いて、けろりとしている。
あるいは、もう鼾をかいて涼しげな木陰で昼寝をしているという塩梅であった。
近くの農家から水や白湯など持って来させて、接待するが、その際、若い娘を見ると、もう押えがきかない。
「来よ」
と、手をつかんで引き寄せる。
青空の下でも、燦々たる陽光の下でも、肌を蔽うものが何もなくても、茶々丸はかまわなかった。
人目があっても、かれには、憚るというものがない。無知ではない。
が、無恥といえよう。人間は一度、死の淵をのぞいた者には、俗を超えるだけの強さが齎される。茶々丸はもともと公方の伜である。生れつき伸々と育ったのだ。
それが富士子によって、歪められた。苦難の歳月を、おのれの力で乗り切ったという自信がある。
土牢の中で、地虫のようにうごめいていた日々の欲求が太陽の下でのまぐわいに憧れさせている面もあった。
家の中に閉じこもっていると、陽光の下へ出たくなる。広い天の下で、両手をひろげて大きく伸びをしたくなるものだ。
茶々丸の行為は、その程度の気持だったのではなかろうか。
ただ、領内の娘や若妻にしてみれば迷惑な話だ。
数の中には、

（やがて公方さまになる御方）
と先を読む者もあるし、
（お血すじも若さまに間違いないのだから）
と、憧れる者もいた。
（御牢内で、どれほど苦しまれたことか）
と、同情する者もいる。
女心は複雑である。一概には言えない。必ずしも、犯されることに、恨みを持つとはかぎらない。
茶々丸は土牢のときと違い、髭を青々と剃り、艶やかに髪を結って髷をぴんと立てたところは、凛然たる若殿である。上背があるから、白綾の小袖や緞子の袴、白柄の太刀などが、よく似合う。犯されたことを喜ぶ娘もいた。
「困ったことじゃ」
「女どもが、上様を嫌うてくれればよいのだが、数の中にはのう」
「そうじゃ、お情けを受けたと喜んでいる者すらいる」
「自ら、吹聴している者すらいるらしい」
「女というやつは、わからぬ」
「上様がなまじ、御容子がよいゆえの」
「しかし、あれでは、政治の乱れのもとじゃ」
「女どもは喜んでも、親兄弟にしてみれば、腹の立つことじゃ。領民の怨嗟が重なれば、どういうことになるか」
外山豊前守と秋山蔵人の心痛はそこにあった。
「お諫めしようにも……」
「そうだ、彼奴がな」
二人は、同時に弥三郎春忠の顔を思い浮べている。
茶々丸の放縦さも、うしろに弥三郎が控えているからだった。茶々丸はすっかり弥三郎を信用しているし、弥三郎は、茶々丸の言うことしか聞かない。
豊前守たちが、
「足利家の故実は……」
と持ち出しても、弥三郎は一蹴してしまう。
「足利家の故実は、京に於てこそ行わるべきもの、室町御所とここは違いましょう」
そう言われて、しかしすぐには、ひっこまない。
「では伊豆の公方家として故実を守らねばなりますまい」
「それも、代が代ったからのう」
「……」
「殿の御意志ひとつじゃ、伊豆公方家の故実典礼なるもの、殿がお作りになる」
洒ァ洒ァとしてこう言うのだ。そう言いながら、肚裡の中では、
（おれが作るのさ）
と、嘯いている弥三郎春忠だった。
茶々丸はますます野放図になるし、しだいに怨嗟の声が高くなる。

世の中には、平穏無事を喜ぶ者ばかりとはかぎらない。若い者は殊にそうである。天下が崩れたほうが面白い。

土地持ちやそこで生れ育った老人たちには、平和が何より望ましいし、多少の無理難題を吹きかけられても、その土地から離れたくない思いとの両天秤で、現状維持を執るということになる。

茶々丸の下剋上と、弥三郎の実権掌握を歓迎する者もあったわけである。

茶々丸の横暴が一層、目にあまって来たのは、年が明けてからであった。

翌延徳四年になると、茶々丸の横暴の証しのように、かれが手をつけた娘たちのうち、妊る者が多く、その訴えが寄せられてきた。

土牢の苦しみに耐え抜いた茶々丸である。

常人の体軀ではない。執念だけが支えたわけでもあるまい。生れついて芯が強靭だったのであろう。

それだけに、女色の方も並はずれている。犯された娘や若妻の中に妊った者がいたのは当然である。

若妻の場合は、はたして夫の子か、茶々丸の子かわからない。

これは家庭の悲劇を招くし、娘の場合は、嫁にゆくことができなくなる。

「村方の名主や肝煎などから御所に申し出ておる。妊み女が十人を越したそうな」

「十人！　大変なことになりましたな、一時にそれだけの若君が誕生ということになると」

「若君とは限らぬ、姫かもしれぬが」

「姫ならば、まだいいが……若君となると、また、事件だ」

家老たちの心配はそこにあった。

茶々丸の謀叛も、遡ってみれば後妻が男児を生んだことにある。

もしも、富士子が女の児しか生まなかったら、一家一門、殺戮し合うこともなかったはずだ。

「その十人以上にもなる妊み女の子が、必ずしも殿のお胤を受けたともいえまいがの。中には、村の者との遊びの責めを殿にかこつけて居る者もな」

「さ、それよ。どこまで、殿のお胤か、さぐりようはない」

「十月十日経たねばな」

「さ、それもさ、早産ということもあるからのう」

「左様じゃ、見分けがつかぬ」

まだ腹部に変化が見えるくらいのことである。たとえ早産でも、まだ三ヶ月や四ヶ月はあとになる。

だが、それまで待てない者もいた。御所にくる親もいたが、遠乗りの茶々丸に直訴してお墨付を貰おうとする女の親や兄弟たちもいた。

生れる子が、茶々丸の胤ということが、本人によって確認されると、その子の将来ばかりでなく、娘をはじめ一家眷族の生活の安定になる。うまくいけば、出世ができる。

御所から少し行ったところに堀之内というところがある。ここの岡の上に城址がある。深根津城址と呼ばれている。

茶々丸は、この城址に小さいとき、よくお守役に連れて来られた。

お守役は関戸小次郎吉宗と称ったが、いまでは、茶々丸が引き立てて播磨守に陞り二百騎の将になっている。

この城址に茶々丸がよく遊びにゆく。僅かの供廻りで行くのだがそのことを知って、待ち伏せしている老爺があった。

「もし、上様！　お待ち下されませい」

走り出てきて袴の裾にすがりついた。

山上の城址である。春のことで、南国伊豆とはいえ、まだ残雪が残っていい、風は冷たい。

その老爺は六十ばかりに見えた。突然、雑木林の中から飛びだして来たのである。

「上様、お聞き下されませ、わたくしめは、おすぎの親父で、源十と申しまする」

「おすぎ？」

茶々丸には、急に女の名を言われてもわからない。

あわてて、源十は村の名を言い、上様のお情けを蒙って、妊った女でございます、と早口に言った。

「控えろ！」

と、供の一人が怒鳴った。

「退れ、無礼者」

もう一人も、叫びざまに、源十の肩をつかんだ。

「お許し下されませ、無礼は重々知っております。いかなるお咎めを蒙ろうとも、露お恨みには存じませぬ。せめて一言……」

「退らぬか」

「お願いでございまする。おすぎの腹には、上様のお胤が……」

「まだ申すか、無礼者め」

供の者は、源十の襟がみをつかむと、ぐーんとうしろに引き倒した。

源十はそれでも、はね起きて、

「上様！」

と、袴をつかもうとする。

「目障りな」

その前に立ちはだかると、

「殿！　早やお出でなされますよう」

「む。帰る」

不快だった。

茶々丸はとっとと足早に、城址から下りはじめた。

自然石の表面を少し削っただけの石を組み合わせて、石段がずっと下まで残っている。
手の鞭で、あたりの雑草を打ちながら、飛ぶように下ってゆく。
あとの供の者は、
「痴れ者めが、なんというまねをする」
「お聞き下されませ、やつがれの娘が……」
「うるさいぞ、二度とまいるな」
と、突き飛ばして、茶々丸のあとを追おうとしたが、源十は決心して来ただけあって、もう夢中だった。
「お願いでございます、お願い！」
半狂乱になっている。
「ええい、面倒な」
ぱっと蹴倒すや、一人が抜き討った。
「あ、佐山、何をする……」
同僚の短慮に、思わず止めようとしたが、遅い。
無抵抗な老爺は中腰のまま、袈裟掛けに斬り下げられて、血けむりをあげて倒れた。
「馬鹿な奴だ」
肩を波うたして、佐山某は血刀に唾をぺっと吐きつけると、断末魔のもがきをつづけている源十の布子でぐいぐい拭った。
茶々丸が源十を斬り捨てたという噂は数日の間に、領内にひろがった。
佐山という供侍が上意をうけずにやったことだが、ことがことだけに、茶々丸の行為と思われてもしかたがない。
「おのれが妊ました女の親父を斬るなんて」
「非道な公方さまじゃ」
「なんと恐ろしい」
人々は、ひそひそと、囁き交した。
「かようなことになるのではないかと」
秋山蔵人は腕を拱いた。
「怖れていたことがとうとうな」と、豊前守も眉根に皺を寄せて、「なんとかせねばならぬ。なんとかなあ、このままでは、大事に至るぞ」
「しかし、忠告も聞いては下さらぬ……」
「いや、宇佐美の言葉ならば、あるいは」
「宇佐美か、なるほど、宇佐美なら、殿も耳を傾けるかもしれぬ」
二人は早速、宇佐美能登守のところへ出かけた。
宇佐美は伊藤祐継の仲子、従五位下左衛門尉宇佐美三郎祐茂が先祖である。
左衛門尉祐孝の子に生れた貞与は、関東管領上杉顕定に属して伊豆国守護代であった。この能登守貞与の言葉なら、茶々丸も聞くだろうと二人は思ったのだ。

二人の懇願で能登守貞与は腰をあげた。
「わしもそれを思うていた」
と、二人の言葉に、深く頷いて言った。
「評判は聞いている。あのようなことでは、虎狼の狙うところとなろう」
「虎狼とは？　いずこの……」
「わからぬかな」
それだけしか言わず、能登守は目を笑わせた。
かれがどこをさして言ったのか二人は後から考えた。
かれの口から出た以上、上杉顕定ではあるまい。とすると、
（今川か？）
氏親であろうか。
氏親というより、北條新九郎長氏かもしれない。
義遐の逃亡に、一役買ったらしいことは、噂を聞いている。今川の方ではむろん秘しているが、茶々丸を承認はしていない。
承認といえば、京の足利将軍家でも、まだ茶々丸を二代目伊豆公方と認めていないのである。
したがって、茶々丸の元服ができない。いや、元服はやろうと思えばできるが、豊前守らが考えているのは、政知の正統嫡子としての二代目継承である。ところが、義遐と富士子可愛さのあまり茶々丸を廃嫡にしている。それを覆すのが大変だったのである。
たとえば、政知こと氏満が自然死し、義遐も出家のままで、茶々丸が、旧に復したのなら、それもできたであろうが、謀叛で肉親をみな殺しにしたのだ。京のうけは悪い。京の義政にしてみれば弟を殺されたのだから憎しみは当然であった。
「わかった」
と、しまいまで言わせず、茶々丸は大きく頷いた。
「そちの申すこと、ようわかった」
「おわかり頂けたか」
「わかった。女どもに手をつけねばよいのであろう」
「はい、側女をお置きになるのは何人でもかまいませぬが、むやみと、お気の向かれるたびに、左様なふるまいは」
「悪いか」
「はい」
さすがに、緊張して答えた。
「ははは、悪いか」と、意外におおらかな返事で、「そうだの、何人もの女に、何人もの子が出来たら、困るのう」
「御意」
「わかった、わかった、決った女とすればよいのであろう」
と、茶々丸は、小桜を振りかえった。それは小桜とちかごろ閨をともにしていないことの悔いのように見えた。

小桜は、ぽっと頬を染めた。よくもこういう際に、恥じらいの感情が巧みに出来るものだ。
「お側の女を……」
「よい、そこまで、考えてくれずとよい。おれが決める」
たしかに効果はあった。
宇佐美も、おのれの言葉が、役に立ったことを喜んで、
「話のわからぬ殿ではない」
と、退出してから、二人に言った。
「むしろ、さっぱりとなされておる。これからはようなろう」
「忝けのうござる、そのように、願うておりますが」
二人は、ほっとした。
ところが、茶々丸は女色に自戒したと思ったらひどい遊びをはじめた。
〝犬追物〟
である。
これはいうなれば、野に於て鹿や猪を追い射つのと同じで、犬を追い、馬を走らせながら、弓で仕止める。
ひところ馬場で、これに興じていたが、それだけでは飽きたりなくなった。
「屋内でやろうぞ」
と、言いだした。
「屋内で、犬を……」
「犬ではない、人間じゃ」
茶々丸の考えはこうであった。
殺してもよい囚人を、夜の室内で放つ。それを室外から、蔀戸の格子の隙から弓で射るというのである。
「面白い……」
畳にして十八帖ほどの広さであった。
放たれた〝犬〟になる死刑囚は闇の中を逃げ廻る。それを矢が追う。
走りまわる足音と、まぐれ当りの矢に掠められて悲鳴をあげる、それを目あてに、数本の矢が集中する、という塩梅であった。
囚人が少なくなると、家中の罪を犯した者をこの〝檻〟へ放った。
さすがに、これには、豊前守たちも、黙っていられなくなった。
「いかに殿でも、これぱかりは甚すぎる」
「女のことで、ほっとしたものの、これは……人殺しではないか」
〝獲物〟がいなくなれば、それを作る、ということになる。軽微な罪でも、死刑を宣告するということになる。
主人殺し、強盗、放火などは死罪だったが、その範囲を広げて、牛泥棒や、博奕の争いまで、死罪と決めた。
絶対君主なのだ。茶々丸が法律なのである。他の容喙を

許さない。
弥三郎春忠の言葉には、豊前などの老臣よりも耳を傾けるが、その弥三郎が、少しも忠言しようとしないのだから、どうにもならない。
「これは、やはり、われらが忠言しなければ、ますます、殿は悪霊におかされてしまう」
「聞き入れて下さろうか」
「もしも……」
と、言いさして、豊前守は、語尾を呑んだ。
その面てに蒼い翳りがある。
「もしも、お聞き入れなければ……いや、お聞き入れあるまで、くりかえし、お諫めするしかないが」
「しかし……あの御気性では」
二人が同時に感じたのは、
〝お手討ち〟
であった。
おのれの実父義母を弑逆した男だ。その兇暴な血は、尋常ではない。
土牢に押し込められれば常人でも怒るが、この場合、肉親も他人も区別がつかないほどの憤怒にかられている。幼い異母弟まで、手にかけているのだ。
やはり茶々丸の血は〝兇暴〟と烙印されてもしかたがない。
「茶々丸どのは、もともと、素直なお子であった。それをあのようにしたのは、土牢と、それから弥三郎めじゃ」
「土牢のことは、もはや過去のことでいたしかたはないが、あの弥三郎を遠去けねばならんのう」
「彼奴が傍にいては、いかにお諫めしても、容喙するであろうからの」
「まず、彼奴のいないときを見計ってな」
「さ、それが、彼奴め、なかなかに、殿のお傍を離れぬ」
「とは申せ、彼奴だとて、寝にゃなるまい。彼奴が寝たあとでは」
「その時刻では、殿も御寝遊ばされる」
「弱ったな……術をもって引き離すしかないな」
ともかく、弥三郎の動静を、細大洩らさず探らせよう、ということになった。
心利いた者をして、日夜、見張らせることにした。それが思わぬ情報をもたらしたのである。
「なに、密通じゃと！」
この日ごろ、めっきり窶れてきた豊前守の面てにぽうっと、赧みがさした。
「弥三郎めが、か!?」
と、しかし、その双眸は、まだ疑いを放って、
「――信じられぬ」
と、呟いた。

「はい、わたくしめも、まさかと思いましたが」
「見とどけたか」
「はい」
「女が、弥三郎と逢うただけでは証拠にはならんぞ」
「わたくしも左様に思いまして、一部始終を……」
その様子を思いだしたように、狭山という男は、言いさして、ごくりと生唾を呑んだ。
来たのは、小桜だというのである。
同じ邸内といっても広い。はじめ被衣姿だったので、顔がわからなかった。
女は、凍るような寒月の沈むのを待っていたように、対ノ屋から出てきた。
庭を横切って、網代垣の中仕切の戸を排して、さらに、もう一つの戸から出ると、広場があり、矢竹の垣のうちに入った。そこが弥三郎のために新築された拝領屋敷であった。
女が被衣を脱いだのは、弥三郎の手引きで、屋内へ入ってからである。
「弥三郎さま」
と、小桜はよろめくように、胸にすがりついた。
「うむ。誰にも見つからなんだか」
「はい、それはもう」
「用心せいよ」
「そんなことより、早く、あたくしはもう……」
と、男の手をとって、おのれの乳房に誘う。
弥三郎は小桜のからだの隅々まで知っている。そのかんどころにも通じている。小桜は弥三郎の手にかかると、容易に燃えるのだ。
「殿は、誰を寵愛している」
「いま、お千を」と、小桜は甘い声になって、「あんな女のどこがよいのかしら、そんなことより、早く、あたしを可愛がって下さいまし」
「よしよし、急ぐな」
弥三郎春忠の執拗な愛撫のさまを、詳細に見きわめてきたというのである。
「して、まだいるのか」
「いえ、それが、半刻ばかり、二人でとち狂うておりましたが、いましがた、小桜どのは、戻られてござる」
「たわけめ、なぜ、早よう知らせてこぬ」
「はあ、すべてを見届けませぬと、どのようなことを申すやら……」
「それもそうだが。うぬは、それを楽しんだのであろうが、この卑しいやつめ」
「いえ、楽しむなど、滅相もない。ただ……」
「まあよいわ」
豊前守は何やら考えはじめた。

豊前守と蔵人が相談したのは、この次の機会を狙うことだった。
「小桜が弥三郎と密通していることを知れば、殿の怒りが爆発するじゃろ」
「この次は、いつ逢うかだ」
そのことも、しかし、狭山は耳にはさんできていた。
小桜が囁いたのである。
(三日ののちに……)
と、きぬぎぬの別れを惜しんで言っていた。
「三日目の夜だ。二人のあいびきの現場を、御覧に入れよう」
「三日目に間違いなく逢うか、だ。たとえその夜が虚しくても、翌日には逢うだろう」
「なるほど。見張らせていれば、必ずな」
その三日というのが、小桜の欲望には限度だったのだろう。
来た。
被衣をかぶった女が、弥三郎の屋敷に入っていったと、狭山は豊前守に告げた。
「よくやった」
「頂戴できますか」
狭山は手を出した。
「くれてやる」
豊前守は丁銀を投げるように与えた。ずしりと重く、小石のような丁銀が膝前に落ちた。
「おさらば仕りまする」
「どこへゆく」
「小田原へ参りまする、伯父が大森家に仕えておりますで」
「なぜ、ここに居らぬ」
「弥三郎どのの恨みを買うのが恐ろしゅございます」
サグリは巧みだが、小心者だと豊前守は、単純に思った。だが、そのうけとりかたは、あまりに単純すぎたようである。
たしかに狭山は、堀越から姿を消したが、かれの懐中には、豊前守から貰ったもののほかに、より以上の金包みが、入っていたのである。
そんなこととは知らない豊前守と蔵人は、茶々丸の寝所に押しかけている。
「至急に、お目通り、願わしゅ存じまする」
奏者ノ衆に申し入れた。
「御寝中でござれば」
「さ、そのことは存じている、存じながらに、かように二人してまいったのは余の儀ではない」
「左様じゃ、至急にお目通りを」
「しかし……」

奏者ノ衆は茶々丸の逆鱗にふれることを恐れて、声をかけられない。
「ええい、何をいたしている、早く申し上げぬか」
豊前守はいらだって、扇子で、とんとんと膝前の床を叩いた。
「は、はあ……」
中では茶々丸が女を抱いているのだ。ことの最中なのである。こんなときに声をかければどうなるか。
だが、こちらも時間が大事なのだ。
「ええい、奏上せぬなら、斬るぞ」
蔵人は刀の柄に手をかけた。
「申し上げます、申し上げます」
威されて奏者ノ衆は、しかたなしに板戸の内へ声をかけた。
板戸は二重になっている。まず、簀ノ子（廊下）から声をかけて、その次に板戸を開けて控えの間に入る。その向うにさらに板戸がある。
その内側が公方の寝所である。
茶々丸は、多津という女を抱いて褥に入っていた。
「申し上げます、恐れ入りまする、火急に、お目通りを願いまする」
奏者の声が板戸の外に聞えて、愛欲に狂っていた茶々丸も、漸く顔をあげた。

「なんだ、いまごろ」
と、怒鳴った。
「お目通りを願い出ております」
「誰だ」
「外山どの、秋山どの御両名にござります」
「こんな時刻に、馬鹿どもが！」
吐き捨てるように言った。
「追いかえせ」
「はあ……それが」
奏者ノ衆はまごまごしている。
茶々丸の叱咤も怖ろしいが、二人の家老に憎まれるのも、たまらない。
豊前守は、取次ぎの段階で愚図々々してはいられなかった。小腰をかがめて、つつーっと、入っていった。
「退けい、わしから申し上げる」
「あ、それは」と、役目だからあわてて、「なりませぬ、いかに御老職とは申せ……」
「ええい、大事じゃ。退れ」
と、押しのけると、
「殿！　豊前でござる。夜中の推参、幾重にもお詫び仕りまする。なれど、大事なことが」
「豊前か、何事だ」
「はい、実は……」

「早く申せ、おりゃ、まだ済んでいない」
茶々丸は抱き寄せた女の胸を掬りながら言った。二人とも全裸であった。
「殿！」
と、秋山蔵人も、勢いを得て、口を添えた。
「お出まし下さりませ、驚くべき一大事が発生しました」
「一大事？　何たることじゃ」
「不祥事なのでございまする、何卒、お出ましを」
二人の家老が、こうまで言うのだ。
しかたはなかった。茶々丸は欲情を中途で遮られて、不快を顔にあらわしたまま、寝衣をひっかけて立ち上った。
板戸を開けて出ると、二人の家老が平伏していた。
「何事だ」
「はい、申し上げ難いことながら大事ゆえ」
「申せ」
「今川弥三郎春忠の儀……ただいま、小桜どのと、ひそかごとを楽しんでおりまする」
「なに！　小桜と!?」
茶々丸は不機嫌だった。
誰だって、こういう場合は、機嫌が悪い。
愛妾と裸で戯れていたところを、邪魔されたのである。これが先代からの宿老でなければ、どんなことを言っても、行為をやめはしない。
仏頂面で出てきたところへ、（小桜と弥三郎の不倫！）との報告だった。
「まことか、それは！」
思わずせきこんだ。
「はい」
と、豊前守は膝をすすめて、
「なんとて、殿をたばかりましょうや」
「左様、事実でございます」
と、蔵人も声を大きくした。
「前々から、怪しいと睨んで居りましたが、確証もなく、申し上げてはと、差し控えて居りました」
「……」
「漸く、今宵、現場をおさえました。殿、弥三郎めが屋敷へお運び賜わりませ」
「なに、おれが行くのか」
「両名の不倫のさまを……まことにもって不埒な両名。殿の御愛寵をよいことに、したい放題のことを」
「殿をないがしろにしての行為こそ、実にお手討ちあってしかるべき……」
黙って聞いていた茶々丸は、なぜか、笑いをこらえた顔になった。
「小桜と弥三郎がのう、いつのことじゃ」

「いつと申して、ただいま」
「さればこそ殿を弥三郎の屋敷へ」
二人が交々言いかけるのを、茶々丸は遮って、
「面妖だのう」
「え？」
「小桜は、東の対ノ屋にいるぞ」
「ま、まさか……」
二人は仰天した。
「いつの間に戻ってか、そのようなはずはない。いつの間に」
「いつもくそもあるものか、小桜は今朝、足を挫いたと申して、一歩も外へ出ておらぬわ」
二人は、しかし信じられなかった。
「たしかに弥三郎のもとへまいったはずですが」
「では、幽霊であろうか、余が直々、見てくれる。両名とも供をいたせ」
足音荒く、茶々丸は、その東の対ノ屋に入っていった。
小桜はいた。寝衣をまとい、横たわっていた。
病人だというので、御添寝が一人。次ノ間には、侍女が一人。足くびには、ぐるぐる巻きの繃帯をしていて、とても歩けるようではない。
因みに用を足すのは、平安のころからの風習で、屏風をひきまわして、砂を盛った壺にうちまたがってするのである。
「小桜、起きるがよい。ははは、幽霊かな、これが」
なんということであろう。二人は一瞬、顔色が変った。
咄嗟に感じたのは、
（間違った！）
ということである。
かれらが見違えたのではない。狭山が見違えたのだと思った。が、もう取り返しがつかなかった。
「うぬら、弥三郎を陥れんとして、埒もなきことを、嘘言をかまえて申し掛けたな」
茶々丸の怒りは、小桜と弥三郎を罪に陥すことによって、豊前らが、勢力伸長を計ろうとしたことにあった。
かれにとって、豊前らの心配は杞憂にすぎない。むしろ、茶々丸の恣意から出ていることなのだ。
弥三郎を失脚させることは、即ち茶々丸をやりこめようとすることにほかならなかった。
「目通りかなわぬ、退れ」
茶々丸は大喝した。
深夜であったが、ただちに、役職の者が呼集され、豊前らの閉門を命じられた。
屋敷内に謹慎、出入りの門はすべて青竹をななめ十字に打たれて御沙汰を待つ身となった。
弥三郎は、この由を聞いて、呵々と笑った。

「馬鹿者どもが」
狭山に渡した礼金は、二人を始末した価値から見ると安いものだ。
むろん、持ちかけてきたのは、狭山である。どっちに転んでも、どうせうだつの上がらぬ軽輩にしてみれば、道義よりも金であろう。
わざと小桜に似た女を弥三郎のところにゆかせることで、豊前らを瞞着したのだ。
弥三郎春忠は、一応、ことが落着いてから、洒ァ洒ァとして、御前に罷り出た。
「恐れ入りましてござる」のっけから言った。「この身の不肖ゆえ、大騒ぎになってしもうた、面目しだいもござりませぬ」
「何を申すぞ、弥三郎」と、茶々丸のほうが、慰め顔で、
「そちに罪はない」
「したが、あの女性を……」
「ははは、男は女がほしいものだわさ。男と女がナニをしたからとて、一々罪になっていたら、この身など、いくつあっても足りぬわい、そうではないか」
ははは、と笑い飛ばす。
「いいえ、殿の御身と、やつがれめは、違いまする。如何なる罪も、上にはこれを科せずと、唐土でもいにしえより申しておりまする」
「それは、天子のことであろう」
「われらにとりましては、殿は、天子と同じこと」
ここまで持ち上げられると、追従とわかっていても、悪い気持はしない。
「伊豆の国人、みなひとしく思うておりまする」
「豊前らは別としてな」
ははは、とまた茶々丸は、満足げな笑いを噴き上げた。
蟄居謹慎は、それ自体が刑罰に価しなかった。乱世なのである。
これは、何分の御沙汰があるまでの暫定措置であった。
茶々丸の豊前らに対する憎しみは甚だしかった。
「老職を鼻にかけて、おれをないがしろにする」
豊前と蔵人を処刑すれば、他の者は、自ら、襟を正して、茶々丸の威に服するだろうと思った。
「弥三郎、二人を斬れ」
と、命じた。
さすがにこれには、弥三郎は驚いて、
「仰せながら、その儀はチト」
「反対か」
「いや、仰せとあれば、行いまするが、斬罪は、罪の深い場合にございます」
「彼奴らのふるまい、許せぬ」
「いいえ、かれらの申し掛けは、やつがれに対する反感か

らのことなれば」
「……」
「殿に対しての御無礼ではございませぬ」
「しかし……」
「斬罪なれば、かれらの武辺たる誇りを奪うことになります」
「うむ」
「遺族のやから、一族類縁にまで、影響が少なくありませぬ」
「それはそうだ」
では、どうすればよいか、と、その眼が、思案していた。
「斬罪を一段、御寛恕あらせられましては」
はっきりとは言わない。これも弥三郎の老獪なところである。
酷刑を歎願して寛やかにしてやった、という事実だけあればよい。
豊前らの一族も、それだけで感激するのだ。
「では切腹か」
と、茶々丸の方で言った。
すかさず、
「はい」
と、答えて、
「さすがに殿、御仁慈のほど、罪人(つみびと)どもも感泣いたすでござ

いましょう」
「そうか。そうだな、では切腹を命じよう」
茶々丸もいい気持になっている。
激昂して、首を刎(は)ねようとしたものの、その怒りは、決して結果的には、おのれの得にならない。
ここで忠言してもらったのは有難いことだった。
おのれが寛大になることは、亦、心を豊かにする。自分が慈悲深い人間になったような気がするものだ。
切腹もまた、たいていの場合、首を刎ねるが、それは介錯(かいしゃく)であって苦痛を早く取り除いてやる行為にすぎない。
斬罪は、切腹をさせずに、首だけ斬る。庶民の扱いである。
「有難き仰せの趣き、ただちに両名に伝えまする」
茶々丸の気が変らぬうちにと、弥三郎は、言った。寛大になりすぎて、許してしまったら、せっかくの苦心が元も子もなくなる。
弥三郎春忠は冷静であった。いや、冷酷といっていいかもしれない。
「両名切腹の検使、それがしに御申し付け下さいますよう」
と、自ら申し出ている。
茶々丸にとって否む理由はない。
「しかと見届けよ」

「御意」
弥三郎は肚裡の中で、北叟笑(ほくそ)んでいる。翌朝、二人は死の座に就いた。
寅の下刻、夜の色がまだ残っているうちで、豊前守は、短刀を抜き放って、端然と坐したまま、東の空を見守っていた。
かれは、死を賜わったとき、すべてを諦めた。
茶々丸がかれら重臣を死に追いやることは、
(おのれのいのちをちぢめることではないか)
と、思った。
(伊豆公方家も、これで終りだ)
氏満と富士子が弑逆されても、善悪は別として、茶々丸が、奔放ながら公方の器量を持っているなら、それはそれで、革新的な体制の確立も望みなしとしない。
が、老臣の忠言に耳をかそうとしない茶々丸の姿に、豊前守は絶望した。
切腹の沙汰は、とどめを刺したといってよかった。
(おれは死ぬ……)
豊前守は、襟をくつろげ、剝きだした下腹を静かになでながら、心に呟いた。
(だが、公方家も遠からず、滅し去るだろう……)
おのれで言うのは照れ臭いが、豊前守と蔵人は、伊豆公方家の二つの柱であった。
文字通りの柱石でもあった。この二つを取り除いて、公方家が存立するとは思えない。
死ぬ——と諦観した以上、心は静かであった。凝っと睨んでいる弥三郎に対しても、もはや憎悪も怨恨もない。
東の空が仄赤くなり、かっと、雲を破って、陽が射した。
「おお……」
思わず、感動の声が洩れた。
美しい夜明けである。この美しくも荘厳な御来光を浴びて死んでゆけるのは、倖せだと思った。
支配者の盛衰とは関わりなく、夜が明け、陽が沈む、その日々の律動の中で、人々は生活をしてゆくに違いなかった。
(公方家はほろんでも、伊豆は残る……伊豆の国は残る、伊豆の人々は、生き残る!)
澄みきった心境であった。
豊前守は、穏やかな語気で言った。
「御検使、御苦労に存ずる、お見届け下さい」
短刀が、キラリと御来光を反射した。
左腹へぶっつりと突き刺した短刀を右へ引き廻して莞爾とした豊前守の顔を、旭光は赤々と照らしだした。
豊前守に比べて、秋山蔵人の死は凄まじいものであった。
かれは、はじめから、
「介錯は要らぬ」
と、言い放った。

弥三郎春忠が二人の家来とともに設けの席へ着くと、蔵人は、死の座にどっかと坐って、おもむろに、短刀を抜き放った。

「男の死にざまをよく見ておけ」

と、誰にともなく言った。

蔵人にはすでに両親はいなかったし、係累は少なかった。妻も数年前に歿っていて、ただ娘が一人いた。

その娘を昨夜のうちにひそかに逃亡させたのである。

娘さえ、茶々丸の手の届かぬところへ奔ってしまえば、もう怖れるものはない。

豊前守は家族が多い。その安全を考えると、茶々丸の逆鱗に触れた以上、静かに、死んでゆくしかないが、蔵人は、その分だけでも思いのたけをぶちまけてゆきたかった。

(こやつを斬って……)

との思いが、最後まで、蔵人の胸から消えなかった。

弥三郎春忠がもしも一人で検使に来たのなら、飛びかかって、斬ったかもしれない。

その心配があったのか、弥三郎は屈強な男たちを連れて来ている。

蔵人は自分の非力をこのときほど悲しく思ったことはない。

弥三郎殺害が可能なら、かれの死体にうちまたがって、立ち腹を切る。

そのことによって、真意が茶々丸や、他の家臣たちにも通じるはずである。

もしも弥三郎に斬りかかって、逆に斬り殺されたとすれば、

「蔵人発狂」

の汚名を残すことになる。

それが懸念された。

茶々丸に死を賜わったことの〝汚名〟は、むしろ、諫言による〝美名〟なのだ。

茶々丸の暴戻は、いずれ、時の審判を受けるだろう。その時になって、いやそれ以後も、永遠にかれらの両名の諫死は、後世に伝わるのだ。

いま〝発狂〟することは、その誠意がすべて無になる。

ただ、死の恐怖による発狂と、蔑すまれるだけだった。

蔵人の武士の誇りが、それを許さなかった。

「見ろ！　弥三郎！」

蔵人は上半身裸になった。両の袖を膝の下に敷いたのは、最後まで沈着であったことを示すためである。

「主を諫めて成らず、姦臣を目前にして、虚しく死ぬ。武士の最期とはこういうものじゃ」

ぶっつりと、左腹に短刀を刺した。深い。一寸以上突き刺さった。

蔵人は、かっと眼を剝いた。

「見ろ！　見ろ！」

血を吐くような叫びである。

切腹は通常、腹の皮をうすく切る。うすく切らないと、左から右へ引き廻し難い。苦痛が、力を奪ってしまうからだ。

いかに豪の者でも、切腹などは何度もできるものではない。一度きりである。したがって、その加減というものが、実感としては、経験することができない。

たしなみのある武士は、万一に備えて、切腹の練習をしている。どの程度の強さで、突き刺すかである。

蔵人が、深く刺したのは、逆上したのでも、拙劣なわけでもなかった。ぎりぎりっと、右へ引きまわす。

「や、弥三郎！　わしは死んでも、魂魄は、残るぞ……」

噴きだした血が、下腹から左の大腿部を染め、さらにあふれて、右へ及んでくる。

その凄まじさに、弥三郎に付き従っていた家来も、真っ蒼になって、目を引き吊らせていた。

「見ろ、こ、これが武士の切腹じゃ……」

その語尾がかすれた。

蔵人の力は尽きた。刃は半ばで止った。右の腕だけでは、もう刀は動かない。

蔵人は、はったと弥三郎を睨めつけながら、左の手を添えた。

右へ引く短刀の刃の背に左手を押しあてると、ぐぐーっと、力をこめた。

さすがに、浅くはなったようである。が、刃はともかく、右腹の上まで切った。

滝のように血があふれ流れ、下半身は、さながら紅瓶に浸ったような凄まじさであった。

弥三郎も声がない。

(これで邪魔者は死んだ)

という安堵感が、その凄絶なさまを、自分に関係ないものとして突き放して眺めさせた。

(死ぬ者貧乏……死ね、死んでゆけ、あとは、わしの思いのままになる)

冷酷に冷静に、おのれの心を、保とうとしていた。

「や、弥三郎！　うぬに、土産じゃ、く、くれてやる」

蔵人は左手で、臓腑をつかもうとした。

大きく開いた切り口から、ぞろりと、腸がはみ出てきた。

それをつかんだ。つかんで投げつけようとしたが、もう、腕があがらない。つかんだだけであった。

本来、十文字腹は、右へまわした刀をななめにはねあげて、心臓を突くか、咽喉を突いて死ぬ。それをせずに、怨みをこめて、腸を投げつけようとしたのである。

が、気力が尽きた。蔵人の眼がかすみ、かれは、おのれの腸をつかんだまま、がばと前へ伏した。

弥三郎はゆっくりと床几から腰をあげて、うなずいた。
「済んだな……」
疲れた声がでた。

伊豆公方家にとっては柱石というべき豊前守と蔵人の両名を死なせてしまったことは茶々丸の大失敗であった。これは自らの首をしめたにひとしい。
このことはたちまち伊豆の国中に知れわたり、領民たちを恐怖させた。
「あれほどのお方を！」
豊前守と蔵人は以前から、公方家の武将として、領民の尊敬を集めていた。
その人々が、主君の手で殺される。領民が疑惑と恐怖を感じたのは当然であろう。
すでに茶々丸の評判は悪い。
領民にとって、生活が一番大事である。誰が領主になろうとも、生活の安定を計ってくれる者だったら、それでいい。
いかに下剋上（が目立ってきた）の乱世とはいえ、社会改革の思想などは、一般民衆と無縁のものである。
いかにその日その日を安らかに過すか、それだけが望みであり、したがって領主とその家臣の善悪だけが、問題だった。
茶々丸が、父や義母や異母弟を殺したこと自体は、さしたることはない。
単に家族内の争いだから、民衆へ慈愛の手を差し延べてくれさえすれば、それでよかった。
それが望めないとすれば、あとは、保身に汲々となるしかない。
「恐ろしい御領主さまじゃ」
恐れたのは領民たちだけではなかった。
家臣たちですら、その逆鱗に触れぬことをひたすら気づかうようになった。
君臣の情というものもなく、畏敬と慈愛がなければ、その結束は乱れるばかりである。
茶々丸の気持を荒れさせていたのは、元服と、任官がうまくいかないからであった。一日も早く、任官したい。
当時はまだ実力時代に入っていない。実力もさることながら、それにふさわしい身分階級というものがなければ、世間の尊敬を集めることができないのだ。
行政も乱れている。主君がそのようだと家臣の方でも、いい加減になってくる。
公方家そのものが、不安定だといつどうなってもいいだけのものは貯めておかなければならぬ。
農民たちから米穀を受納する係りの者や、漁師の漁獲を調べる者、小物成りの任にある者などは、それぞれ、帳簿

を誤魔化してヨロクをきめこむし、調度の係りは、リベートを要求する。他国者から、関銭を巻き上げる者は、さらにピンハネするという汚職の横行は、現代の官僚たちと変りはない。
この伊豆の混乱とそれに伴う窮乏の噂は頻々と新九郎の耳に入ってきた。
「漸く、おれが立つときが来たぞ」
新九郎は六人の腹心たちを呼び集めた。
「いよいよでございますな」
と、大道寺太郎が言った。
「それがしは、かくなることを待っておりましたので」
と、在竹兵衛がしたり顔に顎を撫でた。
「そうだ、おれもそうだ。伊豆公方家は乱れすぎていた」
吠えるように荒木兵庫がつづけた。
「あれでは領民が困惑する。領主交替せねばならんのだ」
「そのことは、おれも度々、申し上げていた」
と、口をはさんだのは荒川又次郎である。
「だが、お聞き入れなかったのだ。伊豆を乗っとる野望は持たぬ、と仰せられていてな」
「乗っとるのではないわ、乱世を平定することよ」
と、黙って盃を口に運んでいた山中才四郎が顔をあげた。
「いまや、この伊豆を救うのは、わが殿をおいてほかにない」
と、多目権平も言った。
伊豆を救う。
疲弊し困窮している伊豆の人々を救うこと——その目的は、領土的野心ではない。
韮山城が、新九郎にとっては、伊豆に於ける拠点であり、興国寺城との間に、三枚橋城を置いてある。
この城の配置は、疑えば、
（伊豆乗っ取り）
のための布石とも見える。
事実、家臣の中にも、そう考える者もいた。
謀をめぐらすには身内にも秘めておかなければならない。
家臣が疑いを持つ以上、当然、敵にそれは通じる。敵もまた、その警戒を持っていると見た方がよかった。
新九郎が、茶々丸の謀叛以来、伊豆へ無関心の態度を示していたのは、腹をさぐられたくないからだったにちがいない。
痛くもない腹をさぐられるのは嫌なものだし、痛い腹なら、尚更、秘めておかねばならなかったろう。
新九郎の本心がどこにあるか、六人の腹心の武将にも判りかねたのである。
茶々丸の暴戻が、家臣や領民の間に、怨嗟の声をのぼらせ、不安が醸成されたと見てから、新九郎は腰をあげたのだ。

「堀越を襲撃する」
と、はじめて、新九郎は六人にだけ、胸中をうちあけた。
「何と申しても公方が屋形じゃ。一つ間違うと、われらに不利になる。されば……」
新九郎は、一語一語、慎重に、考えを明らかにしていった。
「こたびの戦さは、新九郎一代の合戦になろう。伊豆を領せば、わいらは、それぞれ一城の主になれよう、心して働けよ」
「かしこまってござる」大道寺太郎が一同を代表して答えた。「して、いつの日に」
「両三日のうちだ。準備せい」
両三日——
話は早い。いざとなると新九郎は、決断が早く、実行に移すのに手間はかけない。
一つの行動を思い立つには、それだけの理由がある。その状況は、時機を失すると、違ったものになる。遅れることは、むしろ逆効果を招く場合もある。
乱世の城であり、家臣たちである。
準備はできていた。毎日が戦さ支度のようなものだ。
武士といっても江戸時代の侍の生活とは、まるっきり違う。
泰平の世の生活は、鎧など虫干ししたり、刀は寝刃(ねたば)にして、油をひいておく者すらあるくらいだが、乱世は常時戦場である。
いつ、どこから、敵が攻めてくるかわからない。
それに備えて、刀槍はすぐ使えるようにしておかねばならないし、馬の手入れも怠らない。鎧具足も、手近にある。たとえば、土佐には〝一領具足〟と呼ばれる郷士がいた。一領一匹とも称われるのだが、いわゆる屯田兵で、日ごろは農耕している。
その間、槍を畔に立て、馬をつなぎ、鎧を乗せておく。馬のない者は、槍に鎧をひっかけておく。
田畑で働いている姿は平和な農民だがイザとなれば、法螺貝の音とともに、鍬を捨て、鎧を着込んで、馬に飛び乗り、槍をかいこんで走りだす。
土佐ばかりではない、どこの国でも、それに近いものであったろう。
五公五民にしろ、六公四民でも、当時の耕田と収穫から見ると、小物成りなどの産業は少ないから、武士といっても、遊んでいられるほど、食禄は多くない。
現米を支給されるのはほんとうの下っ端で、中くらいからは知行だった。
その辺が、後世とは随分違う。
知行の多い者は、郎党を代官に置き差配させるが、多くの者は、自ら耕す。

新九郎の家来のなかで、代官を置いている者はせいぜい十人に充たない。
「ただちに触れをまわせ」と、新九郎は命じた。「伊豆攻めのことは、しかし固く秘しておけ、どこにサグリの目があるやもしれぬ」
「かしこまりました」
「武者揃えと申すがよい」
三枚橋の城ではなく、興国寺城のほうであった。
ただちに武士たちは集まって来た。馬を飛ばして駈け集まった武士の数は、二百騎。
「少ないな……」
新九郎は当時、城を三つ持っている。
愛鷹山の麓の山根街道に面した興国寺城と、いまの沼津の三枚橋城、それに伊豆韮山の城——この三つの城を支配していたとすれば、〝城〟の機能からいっても、相当の家臣があってもおかしくない。
この場合、韮山周辺は別としても、両城に関係するだけでも、少なくとも四、五百騎はいるように感じられるが、それはわれわれの認識がやはり江戸時代の組織の概念に犯されているからであろう。
新九郎の触れで集まったのは、二百騎にすぎなかった。
これはむろん、家人(けにん)や郎党らがつく。したがって、総人数は、一騎最低三人としても、平均四、五人。七、八百人で、主従あわせて千人ほどということになる。
当時の記録が、この一騎二騎しか書きとどめぬのは、武士としての身分ばかりではなく、その忠誠心を意味している。
武士は、主のために尽くす。だが、郎党たちにはその義務感はない。
わかり易くいえば、新九郎のために大道寺太郎らは尽くす〝武家義理〟というものがあるが、太郎に仕えている郎党らにとっては、新九郎は、直接の主人ではない。
現代でいうなら、労資の関係がない。雇傭契約がないのである。
太郎に忠誠するのなら、太郎の主人の新九郎に忠誠する義務もありそうだが、そうではない。そこに、後世の主従関係との違いがある。
いうならば、さめている。したがって、郎党らは、戦さが不利になると、逃げだす。命が大事だから、逃げだすが、新九郎の立場からは、責められない。
太郎は責めることができるが、新九郎からいえば、かれらは、
〝また者〟
であり、
〝陪臣〟
であって、その間に、武家主従の義理合いが、隔たって

いる。
この間のつながりがわからないと、当時の武家社会のありようや、ひいては、責任と義務から生じる戦闘の実際が理解できなくなる。
ともかく〝公方〟を名乗る堀越御所を襲撃するのだから、
「二百騎では少ない」
と、新九郎は思った。
この戦さは、義理や、やむにやまれぬ立場でするのではない。
（勝つためにやる。勝たねばならぬ）
完璧を期さねばならないのだ。
「五百騎は要るなあ」と、新九郎は思案した。「早速に調達しよう。才四郎、府中へ使者となって罷り越せ」
氏親に宛て手紙を書いて山中才四郎に托した。
山中才四郎が托された新九郎の手紙には、こういう意味のことがしたためられていた。
——時節到来、大風至る、これに乗じ、かれを撃つ、巨楼倒るるは、目睫にあり、乞う三百騎。
むろん、事前に話はひそかに進められていたのであろう。新九郎の胸中では、着々と、その準備がなされていながら、腹心にも、のぞかせていなかったのだ。
氏親は、その密書を一読するや、
「書面の趣き、承知したと申せ」
と、才四郎に笑顔をむけた。
氏親は鼻下に髭を立てはじめている。若年ながら、駿河の太守におさまって、その地位にふさわしい貫禄を示すためであった。
才四郎が興国寺城へもどり、復命すると、新九郎は、さらに、多目権平を第二の使者として派遣した。
その秘められた書翰には、軍勢の集合場所と時刻とがしたためられていた。
さらに、在竹兵衛と荒木兵庫が港へ走った。
清水港と焼津や周辺から早船を調達するためであった。
「陸路を一気に突っ走るほうが、早いかと存じますが」
と、大道寺太郎が不審を感じると、
「おれもそのつもりでいた」
と、新九郎は絵図に指をおろして言った。
「この興国寺城から三枚橋城、それから韮山——こう進むが道理であろう、だから、やらぬよ」
「はあ」
「おぬしが、考えたように、向うでも考えている」
「……」
「この道を進めば、陥し穴におちるようなものさ」
新九郎の言葉は、絶対の自信に満ちていた。
太郎が退ってから、新九郎は、背後をふりかえって、
「小太郎」

と、呼んだ。
返事の代りに、床ノ間のわきの袋戸棚があき、するりと人が出て来た。
眼ばかり頭巾をかぶり、筒袖に軽衫袴である。
かれは、音もなく出てくると、部屋の隅へうずくまった。
「堀越の動静、如何だ」
「——未だ、気がついておりませぬ」
小太郎と呼ばれた忍びノ者は、ぼそぼそと、答えた。
その声は奇妙にくぐもったもので、口を開くことなく、声だけを洩らしていた。
新九郎は頷いて、
「油断はならぬ。茶々丸は暗愚だが、よい将がいる。宇佐美、関戸などがな。かまえてさとられるな」
「陸地でまいりますなれば、術がございますが」
小太郎は、ぼそりと言って、上眼づかいに、新九郎を見た。
「術だと？」
新九郎は、あやしむようにこの忍びノ者を見た。
「左様、術でござる……」
茶々丸の暴戻は、二人の宿老を自裁せしめて、自ら、その力を弱めていたが、当時外に対しても、茶々丸の勢力は、割かれていた。
関東の勢力争いが、ふたたび激しくなって、両上杉の軍勢が関東平野のあちこちで、戦火を煽り、殺戮の修羅場をくり展げていた。
関東管領が二人いたことは前にも度々述べたが、忠臣の太田道灌を愚かな猜疑から誅戮してしまった上杉定正と上杉顕定の戦いである。
これに古河公方が加わった。古河公方が定正方につけば顕定方には結果的に堀越公方家がつく、ということになる。
関東に於ける覇者たる両公方、両管領の争いということになれば、他の小名豪族たちも安閑と、中立を許されない。
必ず、どっちかに与力するしかない。こうして、関東中が、兵燹の吹き荒れるところとなったのである。
茶々丸も顕定からの使者に接してみれば、しかたがない。いまは公方家としての家臣の整理や組織作りで、手が放せないなどとは言っておれない。
もともと伊豆はこの上杉民部大夫顕定の分国であって、顕定の動員できる軍勢は二十万余と称された。
伊豆公方だなどと称して御所をかまえていられるのも、この顕定のおかげなのだ。
それは故父の氏満（政知）の時代から変らない。
「関東に兵を出してほしい」
と、乞われれば、断われない立場であった。
それに、茶々丸としては、なんとかして、元服と任官の望みをはたしたい。

そうしなければ、口ばかりで、実質的に〝公方〟たる権威がない。将来も不安であった。そのためには顕定の財力と口添えが要る。

それらのことどもが重なって、茶々丸は、軍勢を関東へ派遣している。

が、重臣の宇佐美左衛門尉祐孝が、

「東へ軍勢を向けるときは、西に備えるべきでござる」

と、忠言したことで、ひそかに駿河に対しての防備線を張っていたのである。

表てむきは、和平を保っていながら、裏では警戒は怠らない。

この時代、どこの国でも、それは同じだったが、伊豆の場合、もっとも都合が悪い。

伊勢新九郎――伊豆の北條新九郎が韮山城をも領しているので、工合が悪い。

「彼奴に備えることは、わたくしも賛成でございます」

と、弥三郎春忠も宇佐美の説に同調した。これは当然であろう。

「備えあれば、憂いなし……虎狼が西より口をあけていまするれば、まず備えること」

と、弥三郎春忠は、宇佐美の説を支持した上に、こう付け加えた。

「さりながら、ことは、隠密を要しまする。家中にも如何ようなる〝眼〟がまぎれこんでいるやもしれませぬ」

自分がその方法で、茶々丸の重臣に成り上っただけに、弥三郎の乱破透破対策は具体的だ。

「三枚橋城は、今川家の当伊豆攻略の出城と見た方がよろしゅございます。されば、三枚橋城の動きを昼夜わかたず、看視すること、これ一つ」

「うむ……」

「次には、万一に備えて、伏兵を置きまする。三枚橋城より、当所へ至る道は三筋ありまするが、これの要所に、兵を伏せておき、万一の場合は、烽火をあげて急を知らせるとともに、防戦する」

「よかろう、すぐに計らえ」

同じ伊豆内でも、南伊豆など豪族がいる。一応、堀越公方家に従っているが、腹の底はわからぬ連中がいる。

その方にも、備えねばならなかったが、それら小豪族は、いざとなっても、兵の動員数などで、心配はなかった。

何よりも、駿遠二国を領する今川家と新九郎の策謀智略と、その戦争巧者なところ、心配のタネだった。

早速、三枚橋の東と南の眺望のきくところに物見をひそかに作り、街道の要所の民家に命じて、足軽たちを交替で住みこませることにした。

こうした上で、関東へ出兵したのである。

しかし、そのことは、新九郎の方でも感づいている。

（誰が考えても、堀越公方家の弱体化は明らかだ、とすれば、防備を怠ることはない）

新九郎が韮山へ寄りつかなかったのも、故意である。

徒らな疑惑を招きたくなかったのだ。

一つには、北川の夢子が殁ったこともある。新九郎にとっては、忘れ難い女性である。

この愛人であるとともに義理の妹でもあった女は今川家でかれが足場をつくるのに大きな役割りを果している。

新九郎は、人を派して、伊賀の山中から忍びノ者を呼んだ。

小太郎である。嘗て伊賀ノ太郎と呼ばれていた忍びだ。

新九郎が駿河へくる途中、曳馬の城（浜松）で土牢から助けたことがある。

あのときの由縁である。

新九郎は、この男の忍びのワザだけでなく、男同士の信じ合えるものを感じていたのだ。

小太郎は来た。

（風の如く）

そして、

（魔のような）

神出鬼没ぶりで、堀越公方家の伏兵の様子を捜り出してきたのだ。

「三道とも、すべてか」

「すべてでございます」

「そこを抜けて、一気に襲うことは」

「まず、難しゅうございましょう。伏勢の力のほどは、さしたることはござりますまいが、そこを撃ち破っているうちに、烽火（のろし）が次へ知らせまする」

「ふむ、面倒だな」

新九郎はそれから破顔した。

「面倒ならば、やらねばよいのだ」

「……」

「そうであろう、無理押しは性に合わん」

新九郎は転換が早い。無駄だと思ったら、道を変える。それだけのことである。

「小太郎、御所のうちを捜れ」

「はい」

「正確な人数じゃ、残りの侍は何騎か、足軽は何人か、小者どもはいざとなれば、如何ほどの働きをなすか」

「はい」

「御所の内の見取り図もな」

新九郎は、大きな図面を持ち出した。

「弥三郎めが差図しているとすれば、必ずや内部の間取りは作り変えているにちがいない」

新九郎を仮想敵視する弥三郎が、軍備の充実と御所の城構えに智慧をしぼっていることは、容易に想像できたので

ある。
「よく捜れよ。弥三郎は奸悪なやつじゃ、一筋縄ではゆかぬ。思わぬところに、穴を穿ち、矢狭間をきっているやもしれぬ」
「はい」
小太郎は、にやりとした。眼が笑った。
「急いでくれい」
「はい、明日までに」
「明日の昼ごろまでだ」
新九郎は強く言った。
「悉皆調べておいてくれい、三津か長浜辺で落合おうぞ」
新九郎の計りごとは、迂遠に見えて、確実であった。
愛鷹山の麓から韮山までの距離と比較してみれば、駿河の清水ヶ浦からは直線にしても、倍近い。
距離的にはしかし、遠くても、発見される確率はずっと低い。さらに、海には邪魔な障害物はない。
翌朝、新九郎は五十騎を引具して、清水ヶ浦に至ると、すでに荒木兵庫らが百五十騎を差図して、船の用意をしていた。
「おう、府中からの軍勢は如何したぞ」
「未だ着到仕りませぬが」
「間もなく夜が明けよう、夜明けまでに船出せねば……」
そう言っているうちに、どろどろと、大地を揺るがして騎馬の群れが、暁闇を衝いてあらわれた。
その先頭の大将は葛山大炊介である。氏親の命令と、新九郎のために、家臣をひき連れて来たのだ。
「おお、まいりました、まいりました」
多目権平が弾んだ声をあげた。今川氏親さしまわしの軍勢三百騎。夥しい旗差物と長旒が暁の風にはためいて、砂塵が濛々と舞い上っていた。
足利茶々丸を攻めるに際して、新九郎は、かれなりの理由を持っていた。
力と力の時代であり、弱肉強食は日常の乱世のように思われているが、このころまではまだ伝統と格式が生きている。
下剋上が乱世の常態として、市民権を得るまでにはまだ少し間がある。
新九郎の伊豆攻めの必然とする理由は、一に茶々丸が父母と弟を殺したことにある。
この〝非道〟による公方家の乱れを、〝革める〟という義務感にかられて、としている。
かれは、六人の腹心を呼集したとき、伊豆攻めの必然を、天の時に托して、こう言ったという。
「時至れり時至れり、至れる時は過ぎ易し、急に討ちて失う勿れ、天与なるかな、天与なるかな、天の与を取らざれば、却て其殃を受く……」

この通りに言ったのではあるまい。後世の史家の誇張した表現であろう。
だが、新九郎の当面した心事にかなり近いと見てよい。
世の中の動きには、一種の歴史の法則というものが作用している。
足利政知と茶々丸の父子の葛藤も、伊勢新九郎という一人の男の出現のために用意された舞台にすぎないという気さえする。
新九郎が大きく飛躍するためには、駿河に隣接する伊豆で内紛が起らねばならなかったし、それも新九郎が幾つかの城持ちとなって、つまり充実してからでなければならなかった。
といって、かれの年齢では、あまりに歳月が経ては、もはや、意欲をわかしても、五体がそれに伴わなくなる。
それらのことを見ても、新九郎が立つに幸いな時機であったし、茶々丸を討つことにも、無理はない。
「時至れり時至れり……」
という重ね言葉には、ただ欣喜しただけではない、運命の廻り合わせというようなものを感じるのだ。
新九郎の乞いに応じて、氏親が三百騎をまわしてよこしたのも、かれの計画の成就を物語るものだったろう。
たしかに、
「我が事、成る！」
と、勇躍したにちがいない。
五百騎は大船十艘に分乗したが、愛馬と郎党らを乗せる船は、揃っていない。
大小の船をかり集めて、夥しい数となったが、この大軍団は、漸く紫紺の色に明け初めてきた東の空を望んで、エイオウ、と漕ぎ出したのであった。
「漕げ、進め、腕のつづくかぎり、漕ぎ進めよ、われらが敵は堀越にあり」
新九郎は先頭の船に突っ立って、一世一代のこの大襲撃を指揮する喜びにあふれていた。
暁闇の駿河湾である。時に延徳四年四月五日。
頬に触れる潮風も爽やかななかを、夥しい新九郎の軍勢は、怒濤のように、東へ、伊豆の西海岸へ殺到したのであった。

御所炎上

近代戦と違い、当時の戦争は天候や地勢に大きく左右される。

少し後世になるが、将軍義輝が松永弾正に弑逆されたときも宵闇と雨を利用しているし、織田信長が桶狭間（実は田楽狭間）に今川義元を討ちとったときも、豪雨を利用した。武田の大軍を長篠の設楽原で信長が破ったときは多数の鉄砲（三千挺?）がものをいったのも事実だが、このときは地形が役に立っている。

戦略が実力以上にものをいうのである。武将の価値は、刀槍に強いだけではならない。統率力とともに、智謀に負うところが多い、その基礎をなす知識と応用と決断に尽きよう。

新九郎には、茶々丸攻めに就いての、いくつかの腹案があったにちがいない。

正攻法である陸地直進のほかに、迂回する策や、南伊豆の土豪を動かして、搦手を突かせる方法、あるいは海沿いと、陸地と、山地の三道をとる方法、あるいは、海陸、二道からの攻撃等々。

それらを勘案した結果、軍勢の僅少さや距離と地勢から見ても、もっともよい方法が、駿河湾横断と結論したのであろう。

当然、海上をゆくには、潮の流れと風の方向がある。隠密な行動には、夜と闇。速度には風と潮の流れ。

これらを綜合して、払暁に漕ぎだしたのであろう。

どの程度の風が吹いていたかは記録にない。西伊豆に着到したのが、午ごろといえば、当時の船の大きさ、甲冑着た軍勢の分乗など考えても着到時刻は大体、新九郎の計算通りにいったと思われる。

確実と思われる記録によると、かれらが上陸したのは、松崎、西奈、田子、あられなどであったという。

松崎と田子は現在でも地名として残っているが、西奈はない。類推できるのは仁科である。あられは、安良里と見てよいであろう。

これらの諸港のうちでもっとも韮山に近い安良里からでも、およそ四十キロはある。

この辺に上陸することは、たしかに、茶々丸の側近の目や耳にも聞え難いにちがいないが少し遠すぎるのではなかろうか。

徒歩では一日の行程である。

それに、右の四ヶ所、つまり、安良里から松崎までも、およそ十キロ離れている。この間にばらばらに上陸したことは、計算外のことであろう。

つまり、船団が流されたのではないか。かれらの目ざした上陸地点は、たとえ、御所侍の目をくらますとしても、せいぜい、戸田から土肥くらいのところが都合よかったのではあるまいか。

土肥からだったら、山越えして修善寺へ出ることもできる。とすれば、新九郎の狙った地点は、そのあたりだったのが、方向を誤って、南へ寄りすぎたのではないだろうか。

正確なコンパスや六分儀など使っていないから、この程度の誤差はやむを得まい。

ところで、当時としては、これは大軍団である。ばらばらに上陸したのが、風と浪に邪魔されてのことにしても、沖で漁をしていた沿岸の人々にしてみれば恐怖を呼んだに違いない。

「海賊が来たぞ」

「大変な数じゃ、海原が真っ黒に見えたわ」

漁師たちは、釣竿や網も捨て死に物狂いで漕ぎ戻ると、

「女子供は逃げろや、それ、直ぐにも上ってくるぞ」

漁師といっても乱世の生活である。少々のことでは驚かない。戦さがあって、落武者でもくれば打ち殺して鎧を剝ぎ、肌付金を奪うのは常態である。

だが大軍団となれば、一ぺんに弱い善良な民になる。錆刀をとって戦おうとするには、相手が多すぎる。

逃げるしかなかった。

乏しい家財を急いでまとめ、女子供の手を曳いて裏山へ駈けこんだ。

こんなときには、どこへ逃げてゆくか。お互いさまだから、親類縁者と相談はできている。

ある者は山へ隠れ、ある者は遠くの縁者のところへ。

ところが、先ごろから、この西海岸一円に疫病がはやっていて病臥している者が多かった。

老人ばかりでなく、壮者も若者もいる。重症の者は動けない。

「わしらはしかたがない、これも運じゃ、あきらめる。わいらは逃げろや」

老人の中には、自害しようとする者もいたが、すでにその力もなく、運を天にまかせるしかしかたがない。

そうやって、動けない病人は残し、どうにか立てる者は、杖にすがり家族の肩にすがるなどして、浜辺から逃げていった。

そのあとに、軍船は着岸したのである。

前述したように、松崎、仁科、安良里のあたりである。

「意外に早かったな」

先頭の船に乗っていた新九郎は安良里の港でほっと息をついて、

「大分、南へ流されたようだが早く駈けつけてくるように伝えろ。そこらの民家に入って乱暴などしてはならぬぞ」

念を押した。

この船出に際して、新九郎は軍令を下している。厳しくいましめたのは、

一、傷害
一、強姦
一、分捕

の三つのことだった。伊豆の住民の反感憎悪を買うような行為は一切戒めて言った。

「われらの敵は、父母殺しの茶々丸にある。御所を助ける者以外には刃をむけてはならぬ。命令に背く者は斬る！」

十キロほどの間に渡って分散上陸した軍団は、半日の船疲れも見せずに一刻あまりのうちに集まってきた。

上陸に際してかなりの抵抗を予想していたのだ。それが一刀一槍、一矢だにかれらを阻むものはなかった。

いうまでもなく、このあたり一帯は伊豆公方の勢力圏にある。

度々述べているように直接の家来ではないが、大小名豪族などが、被官になっている。

常態では、被官とはいえ、当然不穏な侵入者を阻止する。

そのことは新九郎の方では充分覚悟していたのである。ところが気味の悪いほど抵抗がなかった。

「なんとしたことぞ」

拍子抜けしたような気持は免れなかったが、

「ともあれ、邪魔が入らぬのは幸いだ。先を急ごうぞ」

奇襲がすべてを決する。

一世一代、巨大な組織へ立ちむかうのだ。新九郎は失敗してはならなかった。

（やる以上は、勝つ！）

考えてみれば、多くの戦さを経験はしているが、これほどの強大な敵へ向ったことはない。

かりにも公方（将軍）家なのである。たしかに公方の名称は政知のときから、僭称ではあったが、世の中というものは、嘘でもそれを押し通す歳月によって、世間に信用される。

目くらましは七日、の謂いもある。

嘘は所詮、すぐにばれるものだという先入観がある。

公方を称しつづけていることが出来る、というのは、それが本当だからだという説が成り立つ。

その理屈よりも、その存在感が世間を圧倒してしまうのである。

政知が伊豆公方であれば、その子が二代目伊豆公方であっておかしくはなかった。

場所も同じ堀越御所である。

茶々丸の横暴に怨嗟の声も少なくなかったが、勢力のあるところには、必ず、あやかろうとする者が出てくる。

また、実際、茶々丸への同情票もあるのだ。その伊豆御所を急襲するのである。無位無冠の新九郎の大冒険といわねばならなかった。

新九郎は安良里で人数を三手に分けた。

一隊は大道寺太郎が率いて騎馬で進み、一隊は荒木兵庫の指揮のもとに山越えして修善寺経由、さらに一隊は山中才四郎がもう一度船に乗って沿岸を北上する。

急襲にも計画性がいる。一隊が遮られても、他の二隊が突っ込める。

夜を徹して三隊は急いだ。最も困難だったのは夜の山越えだった。

四月五日の夜である。宵月が沈んだあと、初夏の闇は暗かった。星もうるんでいる中に、松明だけが火の縄のように延々とつづいた。

船よりも馬のほうが早かった。

船では大瀬崎をまわらなければならない。西伊豆の地形は咽喉もとを熱海とすれば、長烏帽子をかぶったようなかたちだ。

伊東の辺を鼻と見立てると、すなわち項（うなじ）のあたりが韮山、江浦にあたる。

この烏帽子のうしろのところが、大瀬崎だ。

この岬が大きく張りだしているので、ここを迂回しなければならない。

騎馬の方も、沿岸を北上して、この大瀬崎の道をまわれば大変だが、戸田から山越えして西浦の古宇、立保へ出る道がある。

ここを走った。

幸いだったのは、この進撃に、西伊豆の土豪たちが、阻止する動きをまるきり見せなかったことである。

もしも阻む気配があれば、殺戮して、斬りひらくしかなかったろう。

それをしなかったことは、新九郎のその後の伊豆経営に大いに幸いした。

それらの侍たちがいなかったわけではない。

雲見には高橋将監、妻浦には村田市之丞、田子には山本三郎左衛門尉、土肥には富永三郎兵衛など、名ある者たちがいた。

雲見は現在、野猿の棲息地として知られる波勝崎に近いあたりだから、南限が仁科だった上陸地から見て、気がつかなかったともいえるし、妻浦も妻良とすれば、さらに南になる。

だが、田子と土肥はかれらの上陸地点であり、進行先である。

阻むつもりならば、その行動も可能だ。
だが、姿も見せず、むろん、歓迎の意思表示はなかった。
その勢いに押されたのであろうか。
韮山近傍にも、三津には松下三郎左衛門尉が居り、江梨には鈴木兵庫助繁宗が居た。
これらの小名たちも、二、三十騎の手勢はあったがとても、新九郎の軍勢に敵対すべくもない。
西浦は鈴木兵庫助の勢力圏であったが、見て見ぬふりをしたのか。
深夜の進撃だから、それと気がついた村代官が急報しても間にあわなかったのか。
西浦から江梨までは、同じ沿岸の道をおよそ六キロの西だ。
急報で起き上ったときはもう、騎馬部隊は砂塵を蹴立てて平沢、久連、赤崎、木負と走り、長井崎をまわって内浦をのぞんでいる。
「大変でございます、軍勢が押し寄せてまいりました」
西浦の代官が馬から転げ落ちるようにして、駈けこんできたとき、兵庫助繁宗はまだ眠りのうちにあった。
夜はまだ逡巡していた。僅かに東の空に赤みがさし、駿河湾は凪ぎの海原に微茫のいろをのせて静かな夜明けを迎えようとしているのだった。
この海沿いの小さな村は、眠りのうちにある。磯釣りの漁舟が二、三艘、置き忘れられたように、浮んでいるだけであった。
その西浦代官の馬蹄の音は、やけにかん高くひびいた。
鈴木兵庫助繁宗はこの江梨の地豪である。屋敷は北方に駿河湾を見はらす小高い丘の上にある。
「こりゃ、いったい何刻だと心得ているのだ」
急な注進に叩き起されて兵庫助は眠い眼をこすりながら、縁側へ出て来た。
「はい、恐れ入りまする。何やら事情はわかりませぬが、戸田の山越えして軍勢が、駈け下ってまいりましたので、御注進をと思いまして」
「なに、軍勢が……何騎くらいいたぞ」
「およそ二百」
「しかと数えたか」
「いえ、およそ……全く突然のことで、しかとは」
「たわけめ、何のために代官をしている。タダ飯を喰いおって。その軍勢は、こちらへ向うておるのか」
それならすぐに立ち上らねばならなかった。郎党たちを呼び集め、防衛しなければならぬ。
「いいえ、東へ」
「なに！　では御所へ」
「あるいは」
「たわけ、東へ向ったら、堀越御所へ向ったわけではないか、そのほかに、何処を攻めることがある」
「でも、北條を……」
「だから、たわけだと申すのだ。北條攻めなら、三枚橋か興国寺を攻めるわい」
と、言ってから、鈴木兵庫助は、
「北條新九郎は……」
何気なく呟いた。
新九郎の城を攻める者があるとは思えなかった。新九郎が、御所の前あるじ、伊豆公方であった足利政知（氏満）と近しかったのは知らぬ者はない。
その父を弑した茶々丸に対してどんな感情を持っているか。
その辺のところは、かれらには判断できないのだ。新九郎の老獪さは、意思をあらわさない。
茶々丸の行為を認めるか認めないか。どちらとも意思表示をしないのだ。
茶々丸が二代目伊豆公方を僭称しても、御所に膝行してこない。
それだけに、無気味といえばいえた。
北條の城が同じ韮山だけになおさら、理解に苦しむところだった。
「ともあれ、郎党どもを叩き起せ、物ノ具させよ。馬を曳け」
兵庫助は立ち上った。その眼が海上に向けられた。
「や、あれは何だ？」
江梨の入江に臨む小高い丘の上の屋敷である。
縁先から庭になっているが、後世のような庭造りなどはしていない。ただの空地といっていい。
その先がきり立ったような傾斜で、小松が生えている。小松が垣をなしていてその向うに海が見える。
駿河湾である。こちらからは、丁度、真北に、海を越して富士山を見るようになる。
その富士山の肩に愛鷹山、その麓に新九郎の興国寺城があるのだ。
したがって、江梨の地豪鈴木兵庫助繁宗は、いつも海に目をむけると、興国寺城を意識することになる。
富士山という威大で秀麗な姿を毎朝見るにつけ、ただその麓の城の主というだけで、新九郎長氏までが、かれの眼からは、大きなものに見えた。
（成り上り者が）
という気持もある。
（氏素姓の知れぬ旅牢人が）
いつの間にか、今川家に重きをなし、さらに、北條家を継いでしまっている。
苦々しさとともに畏敬するものがあった。
かれが新九郎の名を口にしたとき、海上を見やったのは、

そのかなたの駿河と興国寺城を思い浮べたのであろう。
その駿河の山は、まだ暁闇と朝靄の中にあった。
「あの船はなんだ？」
海上岬をまわってくる、多数の船影をみとめたのである。
「あ、あのような夥しい船は見たことがございませぬ」
注進の代官も驚きの声をあげた。
「さては！」
鈴木兵庫助は口走った。
「新九郎めの軍勢にちがいない」
西浦から南へ——地鳴りをさせて騎馬隊が疾駆していったという報告を受けていなければ、すぐには気がつかなかったろう。
鐘の音が朝靄をやぶって聞えて来た。村の寺の鐘である。時刻を知らせるのではない。時ならぬ軍船の襲来を伝えるものであった。
「殿！」
と、郎党の一人が法螺貝を抱えて走り出てきた。
「おお、気が利くな。吹け、みなを叩きおこせ、御所攻めの敵じゃ」
法螺の音が無気味に暁闇の空をわたり、静かな漁村がたちまち、蜂の巣をついたような騒ぎになった。
その軍船はしかし、江梨の入江に入ろうとはせず、岬を掠めるような近いところを、真東にむかって漕ぎ進んでゆく。江梨の騒ぎには目もくれない。
仰天した人々が長刀をかいこみ、あるいは櫂を担いで浜辺に走り出たのも無視して、横切ってゆくのだった。

韮山の堀越御所にもっとも近い海辺は内浦の三津である。
ここには松下三郎左衛門尉がいた。
御所にとって、海への出口であり、西の守りでもあった。
松下三郎左衛門尉が新九郎の襲撃を予知したのは、深夜であった。
前日、かれは御所で多忙をきわめた。
故左兵衛督政知（氏満）こと法名勝幢院殿の法要が行われるのでその準備に忙殺されていたのである。
自分の手で殺しておきながら、法要をするというのも、おかしなものだが、死ねば仏、という仏教思想がゆき渡っている。それに乗ることが、巧妙な世渡りでもある。
またそのことで、罪障が消滅するという計算もある。世間というものは、またそんな程度の誤魔化しで、目くらまされる。
茶々丸は弥三郎春忠に入れ智慧されて、
「法事は盛大にやれ」
と、命じている。
これに心痛したのは、宇佐美、関戸らの重臣である。
「御所の侍は、百騎そこそこでござる。関東へ出兵して、いまは御所にとって、もっとも手うすなときなれば、万一のことを恐れまする」
「万一とは何じゃ」
「不埒者が、御所を窺うことも」
「馬鹿な、左様なことがあるものか」
茶々丸は一蹴した。
まわりにおだてられて、おのれの力を過信している。おだてるよりも、恐れのほうが、家臣や被官大名には強い。
狂人を見る眼だ。狂人に刃物という言葉もある。茶々丸の行動のすさまじさは、側近にも恐れられている。
それを、
（おれが偉大だからだ）
と、過信している。
若さが、そう思わせるのである。
その法要のことで、あれこれ差図して三津の屋敷に帰ってきたのは深更だった。
法要は暁方からはじまる。その前にひと眠りしたかったのだ。かれは用心深い。
法要の際に万一のことがないように、海岸と街道に木戸を組ませて、徹夜で警戒に当らせた。
それで安心して一眠りできると思った。
ところが、屋敷に帰って褥にからだを横たえようとしたとき、燭の焔が揺れた。
（隙間風か？）
と思った。板戸は閉っている。なのに風が吹きこんでくるのだ。
影——
三郎左衛門尉は、ぎょっとなった。
すーっと燭の火が消えかけた。
その仄暗くなった中に、影が浮び上ったのである。
影は、床脇にいた。そこには鎧櫃が置いてあった。日ごろ見馴れているものに対しては殊更に気をつかわない。
ところが、ふっと気がついてみると、鎧櫃だけではなかった。そこに人影がいた。人影は鎧櫃に腰かけていた。
「な、何者だ!?」
三郎左衛門尉は、枕元の床の間の刀に手を伸ばそうとしたが、何故か、からだがいうことをきかず腕が鉛のように重かった。
〈左衛門尉……〉
嗄れた陰鬱な声がした。
その声は、影の口から洩れたものというより、頭上の闇から、滲み出るようであった。
〈わしじゃ、左衛門尉……〉
「は？……」
頭にもやがかかったように、左衛門尉は、朦朧となっていた。

〈左兵衛督政知じゃ〉
「殿……」
あと二刻ばかりで、法要がはじまる。
左兵衛督政知の亡霊が出て来たのであろうか。
現代人に比べてこの時代の人は素朴である。神仏に対する気持は、愚かしいほど純粋な部分がある。
魑魅魍魎をも否定はしない。人間というものの、怨念と霊魂の存在を、現代人以上に信じていた。
〈殿の亡霊が……〉
あらわれた、と思うと、それだけで、左衛門尉は、うつつになっていた。
〈左衛門尉、大事がある〉
「は？……」
〈郎党どもを呼び集めよ〉
どこからともなく聞える声に、左衛門尉は魂を抜かれたように聞き入っていた。
〈急ぎじゃ、郎党どもを呼び集め、徳倉の砦へまわせ〉
その言葉が何を意味するか、かれにはわかった。
亡霊の言葉は、それですべてだった。
左衛門尉は、そのまま、頭の芯がしびれたように、突っ伏してしまったが、やがて正気にかえると、燭の火は正常にまたたき、鎧櫃の異様な影もかき消すように消えていた。
〈徳倉の砦、と仰せられたな〉
徳倉は、現在の沼津市街地と狩野川をはさんだ南側で上香貫につづく一帯で、香貫山、徳倉山、鷲頭山、大平山と二、三百メートルの小山が連なり狩野川の西方の壁を成している。
その狩野川に突きだすような小山の岬がある。現在は本城山と呼ばれているが、そこに出砦があった。
その本城山の砦は、狩野川を臨んでいた。百メートルに満たない、山というより丘である。
狩野川は麓を経めぐるように南から西へ流れ、その果ては駿河湾にそそいでいる。
沼津の市街地はいまでこそ、対岸までも及んでいるが、当時は三枚橋城が出来て間もなくのことで、河口の漁村と城下の僅かの人家とから成っている小さな聚落であった。
この本城山の砦に郎党らを向けよという亡霊の指示は、
〈外敵の襲来を勝幢院殿さまが教えて下さるのだ〉
と思った。
気がついてみると、鉛のように重かった腕も軽くなっていたし、靄がはれたように、頭がすっきりと醒めた。
ただちに左衛門尉は近習を呼んだ。
「諸所に配置の者どもに早々に立ち戻るように申しつけよ」
「全部、でございますか」
「急げ」

つまらぬことを聞くな、というように左衛門尉は顎をしゃくった。
数人の者が闇に散った。半刻たらずの間に街道や港に配されていた家来たちが一隊ずつ引き揚げてくると、
「徳倉の出砦へ行け、矢をふんだんに持ってゆくのだ」
狩野川沿いの道を攻めてくるものと思われた。三枚橋からくるには、これと海路であろう。
要所に伏せてある者どもも連絡をとって外敵に備えさせる。
攻めてくるのが誰か、左衛門尉には予測つかなかった。
戦国の世である。もっとも近い仮想敵国は新九郎である。だが、新九郎とは断定できない。
政知は今川氏親の烏帽子親であり、新九郎との間はうまくいっていた。御所攻めの軍勢が新九郎の輩下なら、政知の亡霊が教えてくれるのもおかしい。
むしろ、政知はおのれを殺した実子茶々丸を怨んでいるはずではないか。
〈面妖だな……〉
新九郎ではないのか。今川の被官の葛山大炊介か、小田原の大森氏か、どちらかということになる。
北方から攻めてくるということになると、この三者しかいないのだ。
ともかく政知の亡霊の言葉に従って南の兵を北にまわしたのである。
この処置のために寝そびれてしまった左衛門尉は、妻女に酒の用意をさせた。
「一刻でも寝たほうがいいからな」
冷酒である。椀に一杯飲んで横になった。
そのとき、また燭がまたたいた。左衛門尉は眉をひそめた。あの影がまたあらわれたのである。
〈かかったな左衛門……〉
「なに！」
〈眠るがよい、眠っておれば、怪我をせずに済む。ふふふ〉
酒に何が入っていたのか、松下三郎左衛門尉は手足に痺れを感じていた。
政知の亡霊と思っていたのが、そうではないと気がつくと、左衛門尉ははね起きようとした。手は刀をつかんだ。が、つかんだだけであった。
それを抜くには、肘がいうことをきかなかった。
「う、うぬは……何者だ」
辛うじて、こう喚くだけだった。
〈知りたいか〉
「……」
〈知ることもあるまい。早く眠ってしまうのじゃ。されば何も知らぬ間に、戦さは済む〉

「いくさ？……やはり、誰か攻めてくるのか」

〈……〉

奇妙に意識ははっきりしていた。霧の底からあらわれるように新九郎の姿が浮び上ってきた。

「北條新九郎か！」

やはり返事はなかった。

影はうすれている。視覚が鈍ってきたのか、どちらかわからなかった。手足の痺れだけでなく、左衛門尉は朦朧としてきた。眼の前がぐらぐら揺れ、深い奈落にぐんぐん惹きこまれていった。

この屋敷は、城あとである。内浦湾をのぞむ三津に城が築かれたのはかなり古いころで、〔太平記〕にでてくる。現在も空濠のあとがあるが、この時代には、城あとに屋敷を建て周辺に家臣たちを住まわせてある。

城としての規模はそのままで多少の補修をして海辺の看視の役を受け持っている。

韮山の堀越御所へ海の上から侵攻するとすれば、この内浦湾の三津か、江浦湾の口野しかない。

口野からは長塚を経て江間ノ原へ出て迂回して北側から攻めることになる。

三津からゆくにも山越えしなければならないわけだが、嶮峻な峠は僅かな部分だけが東漸し、長瀬の山峡へおりて戸沢川沿いに長岡へ出て、堰之上へ抜けると狩野川の対岸で、守山の背後へ出ることができる。

こうしたことから考えても、内浦の三津の重要さは、いうまでもなかった。

松下三郎左衛門尉の配備は、完璧ではないまでも、西と南を固め外敵の侵攻には役に立ったはずである。

故政知の亡霊と思ったは、忍びノ者の巧妙な目くらましだったのだ。

左衛門尉が、新九郎の侵攻に気がつきながら、意識が溷濁したあと、この三津の屋敷から一つの影が忍び出た。

その影は、すべるように音もなく走り小海の丘の上にのぼってゆく。

背が低い。子供のように見える。これが〝風魔〟の異名を持つ小太郎であることを左衛門尉が知ったのは翌日の夜のことである。

丘には松が数本生えていた。潮風にいためられて、曲りくねった巨松の下に立って風魔ノ小太郎は、海上を見たが、ひらりと下枝に飛びついた。

そして、さらに上の枝へ。あざやかであった。身軽い。

背が低い。子供のように見える。これが〝風魔〟の異名を持つ小太郎であることを左衛門尉が知ったのは翌日の夜のことである。

丘には松が数本生えていた。潮風にいためられて、曲りくねった巨松の下に立って風魔ノ小太郎は、海上を見たが、ひらりと下枝に飛びついた。

そして、さらに上の枝へ。あざやかであった。身軽い。

するすると、猿のように頂辺までのぼると、梢から海上を眺めわたした。

右手に近く岬に接するように一衣帯水に浮んだ小島は淡島である。

左手には長井岬が突出している。この内側が内浦湾だ。

外は洋々と涯しない駿河湾になる。

その水平線に点々と滲み出てきたものがある。船影だ。

それは点と点の間にさらに湧き出て、さらにその間隙を埋めるが如くに姿をあらわし、一刷したような黒い線となって近づいてくるのであった。

「ほ、漸く来たわいの」

小太郎は独りごちると、するすると、巨松からすべりおりた。

丘を駈けおりるや、南にむかって砂浜を走った。

飛ぶが如く走る。歩き難い砂浜もこの忍びノ者にとっては固い土の上と変りないものの如くに、迅い。

長浜を南へ——

大きく湾曲したあたり、川が注いでいる。蔭野川と呼ばれている。

この川の対岸は重須の村である。小太郎は川に沿って少し遡った。

かれが見つけていた浅瀬は、河口から、二、三町のぼって小川を併せるデルタの近くである。

その手前に渡し舟があって番小屋が立っている。左衛門尉はそこにも、かなりの人数を置いていたのである。

小太郎の奇略でその人数を北方に遣ってしまっていたから、小屋は空だと思ったが、のぞいてみると、まだ二人いた。

もう夜が白みかけているというのに、二人とも、ぐっすり寝込んでいる。

小太郎は小屋に忍び入ると、壁にかかった燧道具と松明の束をとりおろした。

そして、ちょっと考えてから、二人の枕元に立った。

簡単な番小屋である。土間につづいて板張りがある。畳などはない。荒莚がその半ばを蔽っていい、二人は居ぎたなく眠っていた。

守備の者たちが去るにあたって、念をおされていたのであろう。眠ったままで一人は刀を、一人は槍を抱いていた。

小太郎はその枕元で、とんと足踏みした。

「——なんじゃい……」

眠りをさまされて、うす目をあける。

「やっ、何者!?」

寝耳に水である。仰天して飛び起きるのへ抜き打ちの一刀が叩きつけられる。峰打ちであった。

袈裟がけの一刀、と見えた。が、抜き打ちに刀身をかえしている。峰打ちである。もう一人の男は、寝呆け眼に、これを見た。

悲鳴をあげて、槍を取り直すや、さっと殴りかかった。

寝呆け男にしては、かなり的確であった。が、小太郎の矮軀は反射的に飛んでいる。

槍が風をきって薙いだ一瞬に、天井に届くかのように一

跳しながら、その短い刀は手を離れている。
空を薙いだ槍をとりなおそうとした胸に、刀は深々と突立っていた。
ふわりと軽やかに舞いおりた小太郎は、もがいている男の胸に足をかけてぐいと刀を引き抜いた。
「やれやれ、刃がねぶれたろうで」
刀の半ばを汚した血を、断末魔のもがきをつづけている男の着衣でごしごしと拭いながら、
「阿呆んだらが、あたら死なんでもよいものを」
手向いしなければ、気を失わせるだけで充分だったのである。
小太郎にしてみれば、愚か者のせいで人殺しをさせられたと言いたいのであろう。
かれはとどめを刺そうともせず、松明と帯を二、三枚抱えて小屋を出た。あの様子では、息が絶えるまで、四半刻もかかるまい。
そこから一町ばかりゆくと、灌木の生えたところがある。小太郎は小枝を手当りしだいに手折って積み上げると川の水を掬って、ぱらぱらとかけた。湿らせたのである。
まず、松明に火をつける。その上に湿った小枝を置く。生木だし火つきは悪い。その上に帯をかけたのだ。
それだけで支度ができたように、かれは身をかがめると、帯を一寸あけて、ふーっと息を吹きこんだ。
ふいごの代りであろう。火吹き竹がなくとも、忍びノ者は肺活量が大きい。
湿った生木の下で松明は勢いよく燃え、ぱちぱちと、小枝を燃やしはじめる。
どろどろと地響きがしてきた。馬蹄の地を蹴る音である。十頭や二十頭ではない。
まだ夜は明けきっていない。その夜の色をたゆたわせた空に濛塵があがり、近づいてくるのが見えた。
小太郎はにやりと片笑いすると、帯に手をかけた。
さっとめくる。
充分に帯のうちにこもっていた濃煙は、解き放たれた喜びをあげるように、ぼわッと噴き上った。
噴きあがった濃煙——
瞬後に、小太郎は蓆をまたかぶせている。
松明は燃えていたし、生木はくすぶっている。蓆はまた煙を抱いた。
噴きあげられた濃い煙のかたまりは、数丈の高みへのぼっている。
この狼煙にはコツがある。火種の大きさと、生木の湿り工合、その煙の籠る時間と、さらに、蓆のめくりかたである。
呼吸にして、五ツ——ふたたびかぶせた蓆を、小太郎はもう一度、めくった。

ふたたび濃煙が舞い上る。
これが合図であった。
西浦の古宇から、まっしぐらに沿岸を突っ走ってきた軍勢の先頭にあった新九郎は、
「見よ！」
と、馬上に伸び上るようにして采配で示した。
「狼煙じゃ」
「おう！」
「ふたつ煙、は、風魔の合図よ」
新九郎は大道寺太郎を振りかえって、快心の高笑いを洩らした。
「もはや勝ったも同然ぞ。あの合図は、道に阻むもの無きを知らせるものよ」
「されば、御所までに敵はもはや」
「居らぬ」
「面妖でございますな」
「風魔が術をつこうたのであろう」
新九郎は確信的に言った。
「彼奴は忍びノ者じゃ、常人のはかり知れぬワザを心得ておる」
「はあ、それほどの」
「太郎は好かぬか」
「好きませぬな」馬を走らせながらの会話である。「生得、化性（けしょう）の者は好きませぬ」
「そうではあるまい、同じ太郎ゆえ嫌うのであろう」
「……」
「されば、奴には小太郎とつけてくれたのじゃ」
「さァて、似たようなもので」
「了見せい。伊賀の忍びは敵にまわすと何を仕出かすかしれぬぞ」
「それゆえ、きらいでござる」
「好き嫌いなど申しておって天下が動かせるか。人にはそれぞれ、特色がある。すぐれたところのない者も、一見、そのように見えるだけで、何か取柄はあるものよ」
「はあ」
「その取柄を生かして使うのが、人の上に立つものの心得よ。それを見抜く眼が無うてはかなわぬ」
新九郎のその饒舌は、勝利を目前にしたがゆえの気の弛みではない。
堀越御所を打ち破ったあとの経綸にすでに心は走っていたのであろう。
狼煙はまた、蔭野川の浅瀬の場所を知らせるものだった。
新九郎はその狼煙にむかって馬を進めると、川岸へ出た。
空間へたちのぼった濃煙は、すでにうすれていたが、その煙のもとに渋柿染めの忍び装束を着た小男の姿がいた。
風魔小太郎であった。

かれは、先頭の騎馬が村を通り抜け川岸の疎林から姿をあらわしたとき、素早く、灌木の茂みの中に姿を隠している。

忍びノ者は、味方の目にも触れてはならないのであった。味方といっても、向背常ならぬ時代である。誰が真の味方かわからない。功利的な感情しだいで、簡単に立場を変える者が尠なくない。

この場合、風魔ノ小太郎が姿を見せる相手は、新九郎長氏ただ一人であった。

腹心の六人の武将の前にも、姿はあらわさない。

かれらは、伊賀者〝風魔ノ小太郎〟を新九郎が使っていることだけは知っているが、顔も姿も見たことはない。

新九郎が信用しないのではなく小太郎が、なお、用心していたのだ。いかに用心しても、しすぎるということはなかった。

忍びノ者には、顔がない。顔があってはならなかった。その行動は雇い主だけが知っていれば充分だった。いうなれば、雇い主は、おのれの手と足を別に買ったようなものなのだ。

手や足に人格はない。大脳中枢からの指令を即座に実行すればいいのである。

その意味では、主と従との関係に似ているが、似て非なるものだ。

家来には人格がある。人間として同じである。そのゆえに、感情が食いちがうことがある。

反撥する。下剋上が起る。下剋上は、したがって、もっとも人間的な行為といえる。

忍びノ者は、おのれの技術を売るのである。

一切の人間的感情をころし、超人的な技術だけの存在になったとき、それは、金銭に代えられるものとなる。

この伊賀者に、もしも多少の人間的感情があったとすればそれは、新九郎の依頼を受けたときに、

〈昔の好みでな〉

と、頷いたことであろう。

曳馬の城で、新九郎に土牢から助けられたことを、かれは忘れていなかったのだ。

〈だが、鳥目はもらうぞ〉

と、言っている。

〈生業だからな〉

そしてしわしわと笑ったのだ。

新九郎の騎馬隊が、浅瀬を水を蹴たてて渡りはじめるのを灌木の間からたしかめると、小太郎は、栗鼠のように、小さくなってどこかへ走り去った。

騎馬隊が三津の城址に着いたころ、海上を急いだ山中才四郎の船団は内浦湾をさけて江浦湾へ入って来ていた。

大道寺太郎らは一息入れただけで後続部隊の着到をも待たずに山路へのぼる。なまじ待っていては、御所侍に知られるおそれがあった。奇襲は瞬時の遅疑も許されない。

江浦湾へ入った船団は、口野の磯へ上陸すると、長塚から江間ノ原へと走った。迂回して、御所を北から攻めるのである。ここから本城山までは、五、六キロはある。

松下三郎左衛門尉の郎党らはまさか背後にそういう軍勢が上ってきたとは夢にも思わぬ。

一方、修善寺へ山越えした荒木兵庫の一隊はもっとも遅れていた。

嶮峻の山である。これればかりは絵図の上で案じるようにはいかない。

だが、新九郎にしてみれば、大道寺と山中の隊だけでも、成算はあった。

「一刻も戦っていれば、後備えが着到するであろうぞ」

新九郎は騎馬の群れを力づけた。

およそ百五十騎である。

今川氏親が貸してくれた三百騎の長は葛山大炊介であるが、それぞれに分散して、多目権平や在竹兵衛、荒川又次郎などの指図を受けている。

三津の屋敷の住人たちもこの軍勢には息を殺してその通過を願うだけだった。

騎馬の群れは、堰之上から古奈へ出て浅瀬を越えると、守山の背後から堀越御所へ殺到したのである。

堀越御所の茶々丸にとって、不運が重なっている。

法要のときでなかったら、まだしも、この奇襲に気がついたろう。

おのれが弑した父の法要を営むということが、あまりにも欺瞞にみちていたことへの仏罰であったろうか。

平常だったら、殺到する馬蹄のひびきにも気がついたろうし、急を知らせる者も尠なくなかったろう。

大切な法要というだけでも、周囲には緊張があった。

げんに、守山で草刈をしていた者が、堰之上の村道を狩野川岸へ出てくるのを望遠し、

「大変なこっじゃ」

と、転がるように急坂を駆けおりて、裏門へ、

「御注進々々、お取次ぎをお願い申しますで」

と走りこんだ。だが法要のために裏門は混雑している。近在からの供物を運んできた牛車や牛飼たちがざわざわしている。朝飯の割籠をひらいて弁当をつかっている者もいたし、酒を馳走になっている者、ちょっとしたことで言い争っている者などいた。

門番もその連中と談笑したり——冠婚葬祭につきものの、なんとはなしに、浮れているところだ。

大事を告げる声も雑音にまぎれて聞きとれない。

「大事でございます、お取り次ぎを」

草刈の男は汗みどろの顔を振って、喚いたが、番卒らは、なかなか耳をかそうとしない。
そこへ何かの用で一人の侍がやってきた。
侍なら、話がわかると思ったのか、男は、その侍にすがりついた。
「大変でございます。軍勢が攻めてまいります」
「なんと!?」
「守山の向うから攻めてまいります」
「軍勢？　おい、ほんとうか」
侍はすぐに反応した。かれは男を促して、上司のところへ急いだ。
宇佐美能登守貞与の家臣であった。影山七郎信重という者がその侍、上原左京の上司であった。
「軍勢が攻めてまいったと申すか、それはまことか」
「嘘など申しに参りませぬわい。かように申し上げている間にも、軍勢が……」
「一体、どこから攻めてくると申すのだ」
草刈の男には、そのようなことはわからない。
「大切な法要のさなかに何ということだ」
七郎信重はただちに斥候（ものみ）の者を出すとともに、能登守に報告した。
能登守も法要に参列していたのである。近習が傍へ来て背後から囁いた。
かれは眉をひそめて、膝を動かした。そのとき、小坊主が急ぎ足に弥三郎の方へ進んでゆくのが見えた。
弥三郎は小坊主の言葉に頷くとすっと立ち上った。若者のような身ごなしである。
仏間から出ると、そこに表門の番卒の小頭がうずくまっていた。
これも、軍勢の襲来の報告を受けて狼狽してやって来たのである。
この一致した通報は、宇佐美や弥三郎には、ぴんとくるものがあった。
「弥三郎どの、それがしも聞きましたぞ、何処の軍勢が攻めてまいったか」
「きまっておるわッ」
弥三郎は怒鳴った。
「新九郎めじゃ」
「え、なんとして、それを」
「ほかにいるものか」
弥三郎の推測は直感にすぎなかった。が、この直感は万に一つもはずれていないことを、弥三郎は信じていたのである。
「法事はとりやめるぞ」
弥三郎は吐き捨てるように言うと、仏間の戸口に立ちはだかって、割れ鐘声で叫んだ。

「敵が攻めてまいりましたぞ、殿、法事はこれまでじゃ」
読経がやみ、ざわざわと、人々は騒ぎだした。喪主である茶々丸が顔色を変えて立ち上るのが見えた。そのとき、すでに馬蹄の乱れた音が地軸をゆるがして、御所に殺到していたのである。
修善寺を経由してくる荒木兵庫の一隊は、遅れる様子だった。
軍勢を率いた新九郎は古奈の浅瀬を渡ると二手に分けた。
「大炊介どのは、御所の搦手を願い申す、われらは大手から討ち入る」
大道寺太郎が副将である。手勢百余騎。守山をまわって御所へ討ちかかった。
そのときにはもう、鐘が乱打され、法螺貝がりょうりょうと吹かれ、太鼓の音が鳴りひびいていた。
御所の危急を近傍に知らせる音だった。
「射よ、射よ、矢のつづくかぎり射よ」
新九郎は声をはげました。
弓と槍と。この攻撃の間に、荒木の隊が着到するはずだった。
長びけば、徒歩の軍勢が着くのだ。この奇襲は、奇襲の持つ欠陥を補うものであった。
馬蹄のひびきが御所に聞えてきたとき、ただちに門扉は閉じられ、応戦の弓組の者が矢狭間へ走った。
「新九郎めが、くそ！」
弥三郎は地団駄踏んでいた。
「わしとしたことが、彼奴の術に気がつかなかったとは」
縦横の策を弄して、漸く茶々丸に食いこんだ弥三郎にしてみれば、ここまでせっかく築き上げた地位を失ってしまうことが、痛恨事だった。
御所の軍勢は、百騎を出ない。殺到する敵勢は、少なくとも二、三百騎はいるようであった。
「北からくるとばかり思うていたのに……くそ！　裏をかかれたか」
三枚橋城から狩野川すじへ伏せた人数が惜しかった。かれらを全部集めれば三百人ほどにはなる。
関東へ遠征した者は早急に呼び返すことはできない。
御所内は混乱していた。
奇襲の効果は、心理的な動揺と恐怖を与えることにもある。
その意味でも、部外者が入っていたことが成功した。
侍や足軽などだけなら、まだ、これほどの混乱はなかったろう。
法要のための僧侶や小者などが女のような悲鳴をあげて逃げまどい、御所内の士気をかき乱してしまったのだ。
僧侶の長袖くらい、不自由で邪魔なものはない。坊主た

ちは、袈裟をはずしたり衣を脱ごうとしたりしてあわてふためき、おのれでおのれの前裾を踏んでは転び、泣き騒いで大庭を右往左往した。

寄手の放つ矢は、雨のように御所内へ降りそそぎ、僧侶たちを、御所侍たちを射倒した。

御所には、多勢の女や子供がいたのである。茶々丸の側女とその侍女たち。水仕や雑仕の女たち、老幼の別なく、逃げまどい、一層の混乱をひきおこした。

御所の搦手は守山に守られている。そこから葛山大炊介を将とする一隊が雪崩れこんだ。

矢交ぜのあとは槍である。戦国の戦いには自ずと作法があった。その作法の上で、強弱が争われるがゆえに、勝者には名誉が齎されるのである。

だが、こういう奇襲には、それは望むべくもない。

勝つ、という目的がすべてだった。御所攻めという限定戦争の場合は、田畑を荒すことも、民家を焼くこともなかった。

大手と搦手から殺到した騎馬隊は、一刻たたぬ間に、御所内に乱入した。

火矢が御所内で火災を起した。その火と煙に乗じての乱入である。

火は風を得て囂々と吼え狂い、炎は宏壮な御殿を舐めた。先代の横死から一年、新たに建増した棟も、厩も牛舎も炎は容赦なく舐めていった。

馬や牛が解き放されて、逃げ場をもとめて、荒れ狂う。その上に火の粉が降りかかるのである。

修善寺を経由してきた荒木兵庫らは、この火の手を遠望して、

「しまった、すでに御所は陥ちたか」

と、口惜しがった。

山中才四郎らの一隊はやや遅れた程度で、この御所攻めには間に合っている。

「茶々丸はどうした、誰ぞ、討ちとめたか」

新九郎は、御所前の広場に床几を据えさせ、戦況を見守っていた。

「いまだ……」

「逃がすでないぞ。茶々丸と弥三郎の両人は、灰を掻いても探しだせ」

御所を攻める大義名分は、左兵衛督政知を弑逆した茶々丸への膺懲の剣である。

その大義名分を世間は、必ずしももとめてはいなかったが、新九郎はその順序を踏むことで、少しでも非難をそらそうとしたのだ。

火と煙の混乱は、しかし、寄手の自由をも奪っている。この混乱を幸いとして、茶々丸は御所から逃げだしていたのである。

「殿、これを召されましょうぞ」

と、弥三郎が女小袖を頭からかぶせ、おのれも、女小袖をひっかぶって、泣き叫んで逃げまどう、女たちの間にまじって落ちた。

宇佐美能登守は、大薙刀を軽々と苧殻のように振りまわして、群がりよる寄手を斬り払い薙ぎ倒し、

「うぬらに一片の情あれば、女子供は落ちさせよ、道をひらけ」

と、呼ばわり、呼ばわり、斬りまくった。

さすがに寄手もこの言葉には動かされた。まさか、その女たちの中に茶々丸がまじっていたとは知らない。

宇佐美能登守貞与は返り血を浴びて全身、紅瓶から出たようであった。

大薙刀の柄がぬるぬると血糊で滑るのを、僅かの隙を見ては、土をつかんで拭った。

「落ちられたか殿は」

左右の郎党をかえりみて、小声で聞く。

「はい、もはや……」

「そうか、よかった」

父なる左衛門尉祐孝のころより伊豆国守護代として、聞えていた家である。

茶々丸が実父を弑殺したとはいえ、かれにとっては、〝二代目伊豆公方〟であったのだろう。

弥三郎春忠のような功利性で動く連中ばかりではなかった。

「佐橋、汝は落ちて、この有様を舎弟に伝えよ」

能登守には弟がいる。越中守高忠である。郎党の佐橋というのを落ちさせて、おのれは数本の矢を受けて倒れた。

一筋は腿に突き立ち、一筋は腕に刺さり、一筋は、右眼を貫いた。能登守はかっと左眼を瞠って、

「宇佐美は死なぬぞ、死なぬ」

大薙刀を杖突いて、脚を踏んばった。

その姿を見て寄手は一時ひるんだが、

「彼奴、すでに死んでいるぞ、殺れ、槍をつけよ」

葛山大炊介が輩下を叱咤して、自身、馬を駈って、走り寄りざまに、大身の槍をふるって、一突きに胸板を刺した。

一瞥の抵抗もなかった。すでに宇佐美能登守は死んでいたのである。

黒煙をあげて御殿を焼く火勢の凄まじさは、もう手のつけられぬところまできている。燃えるにまかせるほかはなかった。

通常、城攻めで火を放つことも歩なくない。が、たいてい奪った城は、また勝者にとって役に立たせる。

したがって、勝敗が決着すれば、消火につとめる。

だが新九郎はこの堀越御所攻めに際して、徹底的な攻撃を加えることにしていた。

（御所など活用することはない）

あくまでも、伊豆公方は仇花であった。
公方（将軍）の称は、ここでは僭称なのである。その存在理由は、前に述べた通りだが、あくまでも一時的なものにすぎない。
殊に古河公方の存在に対抗しての伊豆公方である。
新九郎は、茶々丸を攻めるに際して、このことが、古河公方たる足利成氏と関東管領上杉（扇谷）定正が喜ぶことになるのを計算していた。
その反対に、上杉（山内）顕定からは敵視されるのは免れない。
（北條の城を改築して堅固にするのだ、この御所では、戦さの役に立たぬ……）
と、見ていたのである。
焼けてしまうほうが、いっそ幸いなのだ。
「茶々丸と弥三郎はどうした、死骸をあらためよ。とり逃がしたとあらば、追わねばならぬぞ」
焼くだけ焼いて、火勢がおさまりかけたのを見て、新九郎はこう命じている。
（殿は落ちのび給うた……）
宇佐美能登守はその安心感の中で死んだ。
武士としての本望であったろう。
逃れ出た茶々丸は、しかし、すぐには遠隔地へ逃げることはできなかったのである。

そのまま、混乱にまぎれて、守山へ逃げこんでいる。
堀越御所の南側裏手にある守山は、高さはきっかりと百メートル、南北およそ五百メートル、東西には六百メートルばかりの、山というより、小高い丘というところだろう。
だがこの守山のおかげで茶々丸は生き延びることができた。
幼時から、庭のようにして、遊んだところだ。雑木に蔽われた山の高みや窪地や崖など、掌をさすように、よく知っている。
現在は、この山上に貯水池があり、北の山腹には八幡神社、その下に願成就院、南麓には真珠院などがあるし、見晴しのよい場所だ。特に富士山を北方に眺めるのに、前景を狩野川が流れ、四季それぞれに趣きがある。
茶々丸は弥三郎春忠よりも、この山中に詳しい。
女小袖は脱ぎ捨ててしまって、
「もう大丈夫だ」
と、先へ立って走った。
弥三郎春忠のほうが息切れがする。
月の落ちたあとの闇である。星の光もうるんでいて、山中は暗い。
この暗さでは、追手は松明がなければ入ってこれない。
「――助かった」
古城址のところまでくると、ほっとして、茶々丸は腰を

おろした。
「やられたな、弥三郎」
「奇襲を喰いました、残念でござる」
「なに、おれはへこたれてはおらんぞ、負けるものか、もう一度、はねかえして見せる」
それが若者の強がりだと弥三郎にはわかるのだが、いまは、その元気が大事だった。
「左様でござる。不肖弥三郎、どこまでもお供仕る」
こう言いながら弥三郎の頭には、いま、幾つかの思いが錯綜している。
昔の弥三郎だったら、茶々丸を捕えるなり、首を討つなりして、寄手に投降する。
それが卑劣であろうとも、助かるためには、弥三郎はやる。
だが、その方法は、もはや駄目だった。相手が、新九郎なのだ。
弥三郎のことはよく知っている。
そういう投降で許しはしない。
その方法が駄目となれば、弥三郎は一人逃亡するか、あくまでも、茶々丸にくっついているかしかない。
これまで築き上げてきた地位も惜しいし、何よりも茶々丸は、父殺しの男には違いがないが、足利政知の実子なのである。嫡男なのである。

その血筋はまだ高く評価される。
将軍義政の甥なのだ。手放すべきではなかった。
（手放すものか）
と、弥三郎春忠は決心した。
（こいつは、おれの金蔓だ。出世の蔓だ。こいつを摑んでいるかぎり、おれには明日がある）
茶々丸の取柄は、健康なことだ。弥三郎の年齢から見れば、子供のようなものだ。
弥三郎にとって、茶々丸は希望であり、いのちの灯でもあった。
（なんとしてでも、茶々丸を逃がしてみせるぞ）
躍くたびに弥三郎は新たな道を探し、そこにはげしい意欲を燃やす。
いうなれば、新九郎を仆すことと、一国の主となることが望みであり、その望みのためにはすべてを犠牲にして悔いない弥三郎であった。
弥三郎は今川氏の主流を外れて石脇城に入れられたときから、執念の火を点しはじめた。
その時点で、悪魔に魂を売り渡したのだ。
一国の主たることが目的の人生にとって、新九郎の出現は、二重の阻害となった。怨みは深い。
「殿、暫く、ここにお出で下さりませ、侍どもを探してまいります」

「まことか」と、茶々丸は疑いの眼をむけて、「まさか、余を置き去りにして逃げるのではあるまいな」
「滅相もない。殿！　左様な人間と思われてか、お情けのう存じまするぞ」
「許せ、心にもないことだ。かような身になれば、心に迷いが生じる。許せ」
「勿体ない。御心痛のほど、お察し致しまする。されば、この弥三郎めを信じて下さいまし。生きるも死ぬるも、もろともでござりますぞ」
「わかった」
茶々丸は頷いて、身を横たえた。
「この場所を忘れるな。それそこに二股杉があるであろう。あれが目印だ」
そう言われて思いだした。
御神木と称われている二股杉は根元が一つで三人抱えするほど大きい。
数メートル上から二つにわかれていて、逆鉾杉などとも畏れ敬っている。
しめ縄の御幣が夜風に揺れている。なるほど、これなら見誤ることはない。
弥三郎は見当をつけて歩きだした。
雑木林と熊笹に蔽われた山である。
寄手の方でも、落武者探しに山へ入ってきているかもしれない。弥三郎は眼を光らせた。
熊笹を踏む音がした。かれは抜刀を手にしたまま、低い声で言った。
「誰だ？」
木魂のように、声がかえってきた。
「そっちは誰だ？」
一つ間違えば命とりである。相手は二人いるらしい。度胸をきめるしかなかった。
「わしじゃ、弥三郎じゃ」
ほっとしたように、二つの影が身を起すのが見えた。
「今川弥三郎どのか」
「……」
「それがしは関戸播磨」
「おう！」
弥三郎は思わず、叫びを洩らしている。
何よりの味方だった。
「関戸どのか、助かったな。殿は御無事ぞ」
「よかった。いずこに在すぞ」
「御神木のところだ。ほかに生き残った者は見あたらなんだか。みんなを集めて、方略を考えねばならぬ」
「そうだ、左兵衛、弥三郎どのと家来どもを探せ」
「かしこまりました」
「わしは、殿をお守りしてくる」

夜の山である。
北側にやってくると、御所を焼く火明りがあたりを明るくしていた。
が、棟が焼け落ちるとき、ごうっと、天に冲するように、炎が噴き上り、樹々の影が動いて人影かと見あやまる。
その明りの中に、姿をさらすのも危険であった。
弥三郎と左兵衛は注意しながら生き残りの御所侍を探してまわった。
夜が明けるまでに、こうして集められたのは、僅か三十人にみたない数であった。
そのうち坊主が二人いた。法要に来ていた僧である。
「夜が明ける……」
関戸播磨守は、夜明けの空を眺めながら、吐息とともに言った。
「陽が高くなれば、山探しの軍勢がくるにちがいない」
「……」
「この人数では、とてものことに数百もの大軍を相手に闘いようはないな」
その絶望的な言葉に、一同は粛然となって頭を垂れた。
「いっそ、主従、いさぎよく腹を切るか。そのほうが、伊豆公方の名誉を残すことになろうと思うが」
茶々丸を見たが、茶々丸は答えない。神木の根瘤のところに身をもたせて、黙っている。
黙っているのも道理だ。寝息をたてているのだ。
弥三郎はいささか呆れるような心持だった。
「ほう、殿は、御寝なさっておる」
じろりと関戸播磨守を見上げて、
「如何だな。かような殿を見て何と思うぞ。このままに、お果てなさる人と思うてか」
「いや、しかし……」
「人間には、生れるときから備わった天運というものがある。運命は定まったものであろうが、それを如何に生かすかは、それぞれの生きようとする努力よ。どこまでも生き抜こうぞ、最後の最後まで生き抜く、よいか。みんな、殿をお守りして落し参らせるのじゃ」
堀越御所を焼く火は、そのまま新九郎の伊豆経略の成功を決定づける炎であった。
贅を尽くした華麗な御殿は、一昼夜にわたって燃えつづけた。
「消してはならんぞ、燃え尽きるまで、燃やせ、悪業を灰にせよ、火は悪障を浄めるものぞ」
新九郎は大道寺太郎らに言い含めて、城に入った。
北條の城である。ここを本拠として、新九郎はまず、伊豆の平定にとりかかる。
（存外、もろかったな……）

いささか拍子抜けの感がある。
奇襲攻撃の成功はこういうものかもしれないが、あまりうまくいきすぎた。
もっと抵抗があると思ったのだ。
何よりも意外だったのは、その抵抗の侍たちに、〝主家に尽くす〟というさむらいの意気込みが少なかったことである。
新九郎の見聞の範囲では、あくまでも、みごとに働いたのは、宇佐美能登守と関戸播磨守二人くらいのものだった。(あのような連中が、十人もいたら、全体の士気はあがったであろうに)
敵ながら、惜しい、と思った。
その理由も、茶々丸の人気にあるのであろう。
壮烈な死にざまをした宇佐美の遺体は丁重に葬るように指示した。
茶々丸は非道の主だが、宇佐美のようなさむらいは、賞揚すべきであった。
主君のためにいのちを賭ける。主君の行動の是非は知るところではないのである。
その純粋さが、さむらいの本分であった。
「関戸の死体はないか」
未だ、という報告であった。
「弥三郎めを討った者もいないのだな」
「逃亡仕ったようでございます。あるいは火の消えたあとに」
「そのようには考えぬほうがいい」
あの男のことだ、必ず逃亡したにちがいない、容易に死なないやつだ、と新九郎は弥三郎の風手を思い浮べて、
「草の根を分けても探し出せ。茶々丸も、だ」
かれらが伊豆山中に逃れて、再起を計ったとしても、大したことはない。
御所の栄光はもはやない。あるものは将軍義政の甥というだけの血筋のよさだけである。
それを奉じて新九郎打倒にまわるような勢力がいるだろうか。
伊豆の侍たちは、新九郎が御所を焼討ちしたと聞くと、陸続として、参向して来た。
これも意外なばかり、早くて、その面々も、思いがけなかった。
茶々丸が、守山に潜んでいると知ったのは翌日の夕景である。
「北條新九郎、御所を焼討ち」
の報は、またたく間に伊豆中に喧伝された。
それは、単に他国の軍勢が攻めてきたという意味ではない。
当然、来るものが来た、というふうに国人たちに受けとられたらしい。
あるいは、新九郎の企図した通りの結果になったといえようか。
これが駿河興国寺城の主としての伊勢新九郎が御所攻め、というのなら、国人たちにかなりの抵抗があったにちがいない。
韮山の北條城の主、北條新九郎が、同じ韮山の堀越御所に、父殺しの足利茶々丸を膺懲する。それなら、筋が通る。
筋が通る、とは、伊豆の地侍たちが、新九郎のもとに、〝馳せ参じる〟面目が立つ、ということである。
新九郎の天下とりの才は、単に力押しではなく、家来になる者の面目を、自ら納得させる下ごしらえが完璧だったことだ。
ただ力押しでゆく者は多い。が、それでは、あとがつづかない。
時代が少し下るが、斎藤道三がそれであり、信長然り、秀吉にしても然りである。
将たる器は、将を将として崇める臣の存在によって、はじめて将たり得る。
その意味でも、新九郎の場合、伊勢時代から、大道寺太郎、荒木兵庫らの畏敬を集めていたことといい、すでに支配者たるべき人望が具わっていたといってよい。
新九郎の旗が立ったと聞いて、伊豆の各地から馳せ参じる侍たちがひきもきらなかった。
大見の植村玄蕃が手勢を率いて駈けつけたのを先駆として、佐藤四郎兵衛が同苗藤左衛門、同苗七郎右衛門ら名ある侍を語らって来たし、さらに遅れじと、梅原木工右衛門が弟六郎左衛門を連れてくる。
これらはいずれも大見衆と呼ばれる人々で、前記の三人は三人衆として知られている。
かれらが新九郎に臣従したということが聞えてくると、江梨の鈴木兵庫助繁宗は、
「敵対せずによかった」と、ほっとして、「ただちに、新九郎勢に加わろうぞ」
と、糾合した軍勢に矛先を変えるように命じた。
勝手なものである。
「汝、北條に走ってこの由を告げよ」
心利いた者を先に早馬させた。
こうしないと、敵と見られて矢攻めされる恐れがあるのだ。
「ついでに三津にも立ち寄り、松下へ申し聞け、お味方に加わるようにとな」
えいえい押しに西浦の浜街道を東へ走る。
三津の松下三郎左衛門尉もこうなっては、はじめから敵対の意志がなかったことを、身を以って証明するしかなかった。

本来、御所方に与力して、新九郎のようなヨソ者を邀撃するはずの大小名たちが、こぞって膝下に参向したのは、全く予想外のことであった。

北條新九郎としてのメリットはせいぜい、かれらが、力を恐れて中立を守るくらいでもいい、と思っていたのだ。それが掌をかえして、

「お味方に」

と、駈けつけたのだ。

今川氏親から借用の侍三百を加えても五百騎にすぎなかった人数が、たちまち、倍近くまでふくれあがった。

一夜にして、

〝伊豆を手に〟

おさめたといってよかった。

「茶々丸を取り逃がしたとあっては、せっかくの殿の功に、画竜点睛を欠く、じゃ、草の根をわけても探しださねばなるまいぞ」

荒木兵庫などは、山越えして修善寺経由で来たために、大見三人衆などを威服させるという、間接的な効果にはなっても、御所攻めの華麗な武功をあげそこねている。

どうしても、ここで、手柄を樹てないと、面目がない。

「草の根を分け、石を掘っても、茶々丸を探しだせ」

「茶々丸だけではない。名ある御所侍は、今川弥三郎春忠と、関戸播磨守などじゃ、彼奴らの首をあげるだけでも、恩賞うたがいなしぞ」

その声にはげまされて、士卒は城下の町や、村々、山谷を探しまわった。

「御所にゆかりの者を匿うに於ては、その者の同罪ぞ」

荒削りのまま高札に殴り書きした布告が、辻々に立てられた。

御所の裏手の守山があやしいがうっかり入って潜む兵あらば、不意打ちを喰う。

「勢子で鹿を追い立てるようにして、隠れているやつらを」

守山は前述したように、百メートルばかりの山ともいえない高さだ。

裾のひろがりが東西南北、五、六百メートル前後あるから、山としてはそれほど急ではない。

南側から西北にむかって狩野川は流れている。

勢子たちは、半周にわたって手をつながんばかりの陣型をつくって、一歩一歩、虱つぶしに、山をのぼっていった。

北側から東へかけて、遠巻きに陣を張っている。

山中にひそんでいれば、追いだされる鹿や猪のように、寄手の陣中へ自ら入りこむことになる。

そのざわめきがのぼってくるのを茶々丸は山上で見ていた。

「来たぞ」

「来ましたな」弥三郎は小手をかざして、「こうなりゃしかたがない、腹を切りますか」

「なに！」

「腹を切ると？」

茶々丸はきっと振りかえった。

「お切りになりますか」

弥三郎の言葉には、笑いが含まれている。

「切りたくない。おれはまだ」

「左様でございましょうな。まだ春秋に富む御身でござる。そのおいのちは、弥三郎がお守りしまする」

自信にあふれた弥三郎の言葉である。

関戸播磨守は、ちらっと弥三郎の顔を見た。あまりに意外だったのである。

この浅い山と僅かな人数なのだ。とても逃れることなどできそうもない。

常識的に考えても不可能なことを、楽々と口にする弥三郎が、播磨守には奇異なものに思えた。

もともと大言壮語する弥三郎ではあったが、ここまで言い切るには、よほどの自信がなければならない。

「弥三郎どの、如何なる方策がござるぞ」

播磨守は眉をぴりぴりさせながら、

「左様な方策あれば、お聞きしたい」

「おぬしが、わしの申す通りに動くなれば、殿は落し参らせることが出来る」

「わかった。如何ようにも、致す。その方策を」

「急かっしゃるな」

弥三郎はにやりとした。いまや茶々丸のいのちは、かれの双腕の中にある。

（これからが、わしの腕を発揮するところだ）

その間にも、茶々丸狩りの勢子は草を踏みしだき、木樹の幹を削ぐ勢いで、じりじりと上ってくるのだ。

「方々にもの申す」

突然、大音声が聞えた。

十数人の武士が、山上に忽然と姿を見せたのだ。

「や、いたぞ」

勢子たちは、喚声をあげ、槍をとり直し、弓に矢をつがえた。

「待たれよ、待たれよ、まず耳を傾けられよ。公方におかせられては、ことここに至れば、もはや生き存えん望みなし、いさぎよく、始末いたさんと仰せられて、ただいま、御用意あらせられる。されば、いま少し、時を与え給え」

戦場に於ける大声は、それ自体一つの技術である。

マイクやスピーカーのない時代には伝達の方法としても、割鐘声は貴重であった。

この播磨守の言葉に、勢子を指揮していた多目権平が出てきた。

「承って候、茶々丸どのが御首、頂戴仕ろう」
「ふた刻の猶予を賜わりたい」
権平はことの次第を新九郎に報告した。その返事は一刻しか待てぬ、というものだった。
一刻なら待つ。
新九郎の返事を多目権平が告げると、
「忝けなし」
一刻でも充分だったのである。すでに日は暮れようとしている。
弥三郎は西の空を見た。
雲が血をしたたらせていた。残照が西の空一帯をぎらつかせ、さながら此の世の終末を暗示しているかのようであった。
「一刻の後に殿の御首をお渡し致そう、それまで、兵を退かれい。お心安らかに御生害遊ばさるがために、山下の会下寺に御座あらせらる」
多目権平はこれを了承した。
無理に追い詰めると、死に物狂いになる。いたずらに味方の死傷を増やすことはなかった。
それにこういう場合は、〝死場所〟を与えるのが、武士の礼儀であった。
まだ、古い型の武士の作法が尊重されている。敗者に栄光を与えるという美徳が、修羅場にも一掬のゆとりをもたらせている時代だった。
会下寺という寺は、現在はない。
守山の麓には、北から、光照寺、願成就院、真珠院とあるが、そのいずれかの前身であろう。
資料によっては、単に〝山下の寺〟とだけ記したものもあり、会下寺なるものの宗派も由来もわからない。
ともあれ、茶々丸はこの寺に入って、自殺することになった。
弥三郎春忠は、新九郎の軍勢が退いたのを見ると、
(わが策なれり)
と、北叟笑んだ。
会下寺に入った茶々丸は、酒を飲んだ。坊主の隠していた般若湯である。
「お覚悟はよろしゅうござるな」
弥三郎はうしろにまわった。
「よいとも、やれ」
「暑気しのぎになりまするぞ」
冗談を言いながら、弥三郎はまず、鋏で、茶々丸の髪をつまんでは切っていった。
またたく間に、ジャン切りの醜い頭になる。
関戸播磨守以下も、次の間から無言で見守っていた。半数は寺の外を見張り、会下寺の僧侶たちを看視する。
その僧侶たちは、いましも本堂で読経に余念がない。読経の声は寺から流れ出で、遠巻きの軍勢にさながら、茶々丸の悲壮な生害をいたむが如くに聞えた。
「昨日が親父の法要で、今日が、子の葬儀か」
と、多目権平は、在竹兵衛と笑いながら、握り飯を食っていた。
「しかし、よく決心がついたな、これまでの噂では、茶々丸というやつは長年土牢で耐え抜いたから、若いが相当にしぶとい。自殺などするとも思えぬが」
「ははは、こう追い詰められてはしかたがないさ」
読経の声は一段と高くなった。
弥三郎は器用に剃刀を動かしている。
ぱさりぱさりと、残りの髪が肩に落ち、膝に落ちてゆく。
青い頭が出てくる。足軽が、水を湛えた鉢を捧げ、弥三郎は左手に小布を持ち、水を浸しては地肌をしめしながら、剃刀を動かしてゆく。
茶々丸はその間、きょろきょろと眼を動かして、播磨守のほうを見たり、おのれの無惨な落髪を見たり、かと思うと、やはり気になるのか、
「鏡をもて」
と、命じた。
鏡にうつるおのれの青頭に、にやにやと笑いかけたり、顔をしかめて、睨んだりした。
そういうところはまだ、子供っぽいのだ。自分の変形が面白くてしかたがないらしい。
「さ、お急ぎ下さらぬと」
播磨守は気が気でないらしく、膝を進めた。
「時刻がうつりまする」
「急ぐな。せっかくの殿が入道じゃ、半分剃り残しもなるまいが」
弥三郎は、なおも剃刀をすべらせながら、
「僧衣の用意をいたしておけ。数珠なども忘れずにな」
とり寄せた僧衣を着せると、にわか坊主ながら、結構それらしく見える。
「これでよし、次の手だては」
弥三郎の目が兇々しい光を放った。
「申しつけた通り、手ぎわよくやれい。一度に火の手があがらねば、やり損じるぞ」
「かしこまりました」
家来たちが散ってゆくと、弥三郎は、おのれの髪をつかんでぶっつりと、脇差で切った。
「播磨おぬしも」
「いや、身共は左様な真似をしてまで、落ちたくない」
「馬鹿なことを申すな。これも殿のおん為ではないか。さ、早くしろ」
播磨守の髪も切る。
月代は常に剃ってあるから、残りの両鬢と後頭部だけで

ある。
ところどころ残っても夜目には大丈夫だろうと、荒く剃るや僧衣をまとい、袈裟を肩にする。
「万一ということがある。刀だけは離すまいぞ」
それぞれ、脇差を衣のしたに忍ばせる。
火事だ、という叫びが起ったのは、その直後だった。
寺の数ヶ所から一時に火を噴いたのである。読経がやみ、混乱が起った。燃え上った火は、たちまち伽藍を舐めて、炎の海となった。
「や、茶々丸めが火を放ったぞ」
「自害して首を渡さぬつもりか」
「引きずりだせ」
仰天した多目権平は足軽らを督励して会下寺に殺到した。まさか火をかけられるとは、会下寺の僧侶たちも思わなかったことである。
茶々丸が自殺の場所に選んだことは、大いに迷惑ではあったが、もともと、先代の公方政知から保護を受けてきたのでしかたはない。
御所焼討ちの飛火を、僧侶たちは総力あげて、消しとめたばかりなのだ。
ほっとしたところに、この新たな放火であった。もう怒りよりも情けなさで、命からがら逃げだすしかなかった。
「火事じゃあ、宝物を持ちだせ」
「うわっ、もはや本堂まで火がついたぞ」
「宝蔵はまだ大丈夫じゃ、早く扉を開けよ」
「庫裡の棟が燃えていますぞ」
「もはや火は消し止められませぬ」
恐怖の混乱が境内を蔽った。
僧侶たちは逃げまどい、殺到した軍勢は火に面てをそむけ、煙にむせびながら、茶々丸ら〝御所侍の主従〟を探しもとめた。
放火してまわった家来たちは、そこここで多勢の寄手にとり巻かれ、死に物狂いに斬り合いをはじめている。
日が暮れたばかりである。山下の寺はいずれも東側にある。日暮れが早く、暗いのだ。その山裾を数人の僧侶が、火に追われるようにして走った。
寄手の軍勢が木戸をこしらえているのを、
「お願いでござります、通して下されませい」
と、恐怖をあらわにして、哀願する。
「坊主か、通してやれ」
寛大なところを見せた髭面の武将は、暫くしてから、
(はてな、あいつらは、はたしてほんものの坊主だったろうか)
と、気になった。
殆ど全伽藍が炎に包まれ、逃げだしてくる侍たちが、あるいは斬られ、あるいは血まみれになって捕まって、次々と引き据えられてきても、とうとう茶々丸や弥三郎らの姿はなかったからである。
「火の中で焼け死んだか」
誰もが、はじめそう思った。
だが、
「あやつども、尋常に死ぬるようなやつではない」
荒木兵庫の見方も新九郎と同じで、
「うまうまと落ちたのではないか、捕えた者どもを、責めてみろ。何か吐くじゃろう」
しぶとい茶々丸が、容易に死ぬとは思えない。死体を見るまでは安心できなかった。
だが、容易に吐く連中ではなかった。
「知りませぬ。何も知りませぬ」
というのが精一杯だった。嘘を吐くのも、難しいのだ。
「茶々丸は落ちたであろう、責め殺すぞ、死にたくなくば吐け」
その拷問でやっと一人が口をひらいた。

伊豆を手に

「なに、坊主に窶して落ちたというのか」
新九郎は報告を受けて慄然とした。
「多分……左様に白状した奴がおります。拷問の末に漸く吐きましたることにて、嘘言ではあるまいと」
「なるほどな……」拷問の結果だから真実だというより、あの際、坊主に変装して逃げたということのほうに、新九郎は、
(ありそうなことだ)
と、感じたのである。
(弥三郎めがついているとすれば、それくらいの術はつかう……彼奴どこまでも、粘るやつだ)
むしろ、その弥三郎春忠の宿命的な敵対に興味をおぼえたようであった。
「彼奴らの行方を探せ。茶々丸、弥三郎、それに関戸播磨だ。この三つ首には恩賞をかけようぞ」

落武者狩りは、わざわざ言わないでも、行われる。戦乱の際の常態である。

人間というものが、その職業階級の如何に関わらず、動乱の際にはどこまで冷酷になるものか、新九郎はよく知っている。

貴賤に関わらず、そうなのだ。

新しい勢力に迎合しようという意図もあるし、幾らかの金品にありつけるという習慣にも目ざめるし、落ちる者――弱り目の者を追う残忍な喜びに浸る者もある。

日ごろ弱者とされている者ほど、こういう場合には、昂揚するものだ。

人間はどこかでバランスを保つようにできている。抑圧に甘んじている者ほど、自分が加害者にまわったとき、自分でも知らなかったほどの残虐性を発揮するのである。

日を追って、新九郎のもとに馳せ参じる大小名は、増えるばかりであった。

前述の諸豪にひきつづいて、土肥よりは富永三郎兵衛、雲見よりは高橋将監、妻浦よりは村田市之丞、田子よりは山本三郎左衛門尉等、名ある侍が、郎党家人を引き連れて参向する。

かれらは一日、二日の遅れを気にして、落武者狩りの成果を持参している。

討ちとった者の首級を長槍の先に刺し、大いなる短冊型の名札をつけて、あるいは証拠の肌付金や、臍の緒など(懐中にしていた者もいたらしい)をくくりつけて揚々とやってくる。

忠誠の証しである。現代から見ればグロテスクで残虐な情景だが当時は日常的だ。

女性でも、敵将の首に化粧をしたりするのが平気だった。談笑しながら化粧している図が残っている。

こうして、瞬く間に、新九郎の勢力は伊豆の半ばに及んだが、かれはその勝利に酔ってはいない。

韮山城を伊豆経営の拠点として整備させるや、席の温まる閑もなく、新九郎は、馬を駈って近郷を視察し、村々を経めぐった。

新九郎が自身で馬を駈って、近郷はもとより、天城以北、西伊豆の大概を経めぐったのは施政の前駆として、かれの方針を示すためでもあった。

板を削り合わせて高札を沢山作らせ、同じ文言を書かせて、鞍に積み、村々をまわって、辻に立てさせた。

高札を立てるのは珍しくないが、その総責任者として、おのれの顔をさらし、自ら徳を示す武将など、これまで前例がないことであった。

その禁制は次のごとく、三ヶ条から成っていた。

一、明(空)家に入り、諸道具に手を掛る事。

一、一銭に当る物何にても取候事。

一、伊豆国中の侍、並に土民に至るまで、住処を去る事。

この文章は現代から見ると、些かの説明を要するかもしれない。

第一の条文は、空家に入って、調度道具などを掠めとることを許さないというのである。

それは、戦場で当然視されてきた分捕禁止を、さらに一歩進めたものであり、その意とするところは、第二条の、一銭――すなわち一文に相当する物は、どんなものでも取ってはならぬというのだ。

分捕禁止の制札は、これまでも出した者はいよう。

だが、一文に相当する物、とまで価格を明示した例は他に聞かない。

一文以上は駄目だということは、以下ならいい、というわけだが、いかに物価が安い時代でも一文以下の物といえば、きわめてかぎられてくる。

厳密に考証すれば、この一文が良銭か鐚銭かで、大体四倍の差があるのだが、こうした表現では、鐚銭の意味と見てよいであろう。

第三条の、侍も民衆も土地を立ち去るな、ということは、逃散を許さない、という意味だ。

国といい土地といい、そこに人々がいて生活しているからこそ、存在の意味があるのであり、無人の土地になってしまっては、荒れ放題となって、地味は痩せ、国力も低下する。

侍も民衆も、と同断に扱っていることで、新九郎の思想も窺えるし時代相も類推できるが、実際に当時の侍は、たいてい半農だった。

殊に二、三十人の郎党を持つ程度の土豪は、大地主の生活と大差ない。

近隣の信望を得、村を守る力がついてくると、侍としての生活部分が生じ、大名の被官として位官らしきものを得て侍となる。

そういう意味では、侍と農民の間に、さして差はなかった。

この三ヶ条のあとに、こう付け加えてあった。

右の條々堅く停止せしめ、若違犯の輩是あるに於ては、稼穡を踏み、在家を放火すべき者也。

随分、思いきった戒告である。

新九郎は村々を廻るうちに、意外な光景にぶつかっている。

西伊豆の地を巡視したとき、家々に病人が多いのに気がついたのである。

先日、奇襲をかけて駿河湾を半日で乗り切り、上陸したときは、全くの抵抗にもあわず、ために思いがけない速さで進撃することができたのだが、そのとき、いささか不審をおぼえた。

途中の家で水を飲む程度だったのだが、病人がいることは気がついてもこれほどとは思わなかった。
「疫病に罹っているのだな」
と、わかった。
村々で、大半の家に病人が臥せていたのである。
それも一戸に五人三人ずつ家人が臥せている。
枕を並べて呻吟しているのだ。その数は、千人を超すかと思われた。
「一体どうしたのだ、どのような症状ぞ」
新九郎は病人の様子を聞くと、
「奇病というしかありませぬ。先ごろから急に村々に流行りはじめ、強熱を発し、苦しみが五、七日に及びその間、前後を弁えませぬ」
「それは酷いのう」
「恐ろしい病いにございます。十中八九は死にますれば、壮者もうつることを恐れて他郷へ遠去かる者多く、先般から、介抱の者だけがとどまって居りました」
なるほど、それで抵抗がなかったわけだ。
病人たちは、さらにこう訴えた。
「看護の者は身のまわりの物を持って山中に逃げこみましたが、私どもは、かように弱って居りまして、動けませぬゆえ、ただ、神仏におすがりして居りました」
哀れな話である。新九郎は歎じて言った。
「人を助くるは人を助くるにあらず、自ら助くるなり。われ今これを省みずして捨て去らば、旦夕を待たずして死に至らん、生かすべきを生かし、殺すべきは殺すを仁政の主とするところ、この輩罪なきに如何ぞ殺さん」
と。
ただちに医者に命じて薬を調剤させた。
だけではない、足軽小者ら五百人に命じて、家々に配置し、病人の看病に当らせたのだ。
薬を投じるだけでなく、食事の世話までさせたのだ。
病人たちは感謝した。何よりの喜びは、恐ろしい敵だと思っていたのが、まるで神仏の使徒のように、情厚く、親身も及ばぬ親切を尽くしてくれたことだ。
新九郎の意思は、士卒に及び、かれらは剣を置き、弓をひく手で粥をたき、菜を煮、魚をすなどりして焼いて食わせた。
病は気からというが、こういう手厚い看護は病人にとって何よりのことだ。
病人たちは、急速に快癒していった。新九郎が看護の兵を派して以来、一人も死者は出なかったという。
新九郎を命の恩人としてたたえる声は村々に満ち、山谷に流れていった。
人間は自分の喜びを他に分つことによって、その喜びを倍加させる。

殊に、感動はそういう性質を持っている。恐怖や不安の伝導も早いが、春を待つ者にとって、その訪れを告げる声の伝わるのも早い。
病気の治った者たちは、地獄から甦った喜びを一刻も早く、親類縁者に伝えようとして、山谷に隠れ棲む人々のところへ分け入った。
「――聞いたかや、皆の衆。このたび御所を焼討ちなされた軍勢はの、北條新九郎長氏さまと申して今川家ゆかりの御方じゃ。身に甲冑を鎧い、その勇猛なること鬼神に似たれども、心は慈悲の徳に富み、行いは仏菩薩にも勝るほどじゃ」
「決してみだりに人を傷つけ殺したりはなさらぬ」
口々にほめそやした。命の恩人なのだ。はじめは恐怖と不安に戦慄しただけに、その行き届いた看病には、いくら誇大にたたえてもたたえすぎるということはないのであろう。
「さ、さ、みなの衆、早よう故郷へ戻って、御礼言上に罷り出て下されや」
身内の言葉だ。疑うどころではない。
自分たちが、伝染を恐れ、あるいは海賊襲来の騒ぎで見捨てた重病人たちが、ぴんぴんしてやってきたのだから、まことに新領主新九郎の行為は、仏もかほどとは思われぬ功徳を施したことになる。感激の深さもわかる。
こうして人々は、それぞれの家に戻り、安んじて家業に励むようになった。
だけではない。五里十里の遠隔の地にも、この噂が伝わり、争い来たって拝謁を申し出るもの、ひきもきらず、韮山はそれらの人々の車馬で、殷賑をきわめたという。
某庄某郷の侍もいたし、山守もいたし、村の庄屋肝煎にいたるまで、やってきた。
分に相当した手土産を持参し、家に伝わる系図、由緒書、先主のお墨付などを持参して私領の安堵を願い出る。
新九郎はそれらのものに目を通し言上と間違いがなければ先規を守って、その職に安んじるように言葉を与え、印判を付して、之を証しとした。
たとえば、大見三人衆の佐藤四郎兵衛などは、いち早く参向したことで、新九郎は印書を与えて、曰く、
「伊豆国田方郡大みのえは、佐藤四郎兵衛先祖の相伝なり。然るに最前に身（味）方に（同）候するの条、神妙なり」
とあって、地頭職に補し、
「子々孫々永代他のさまたげ有るべからず……」
こうした恩宥の沙汰が、土豪たちを感激させたのはいうまでもない。
前述したように、関東各地に転戦の武士たちも、この由を風聞するや、踵を接して帰国して、新九郎のもとに投降した。

これを咎めることなく、旧に安んじしめたから、伊豆の大半は被官となって、三十里以内は悉く新九郎の威風に服したという。

この間、僅々三十日。

伊豆は九割が山である。山中へ逃げこんだ茶々丸は、とうとう追手を巻いて姿を消した。

南伊豆には茶々丸は来たことがあるまい。大望を抱いた野心家の弥三郎はおそらく地勢や人情風俗に就いての研鑽を怠らずにいたことであろう。

関戸播磨守のほうは、南伊豆に知行地があり、これは地理に通暁している。

それらのことが、茶々丸の逃亡を容易にしたと思われる。

新九郎としては、他は許容しても、茶々丸だけは是が非でも討ちとらねばならなかった。

「茶々丸の行方はまだわからぬか」

毎日のように、新九郎は側近に促した。

そのうちに、茶々丸の居所がわかった。

南伊豆下田の山に、旗をあげたのである。

「どこだ」

「下田の深根津城でござる。松崎から二十里の山奥でござるが下田へは、稲生沢川で下れまする」

ただちに新九郎は絵図をひろげた。

幼稚で粗雑ではあるが、大体のところはわかる。これは韮山の城の主となってから、ひそかに作図させていたものである。

里程などもあいまいなものだし地勢も判然としない部分が多いが、およその見当はつく。

「稲生沢川の上流に稲梓川というのがあります。このあたり、古来の要害が多いところでございます」

大見三人衆の梅原木工右衛門が説明した。

「以前あのあたりにまいったことがござるが、荒れ果てた古城がござった。深い谷をもって濠となし二つの小渓があり、山をはさんで流れております。大鐘、木戸段、殿畠、御伐場などの地名が残っておりましてな。これは修復すれば、よき山城となります」

「これに示せ、どこだ」

「どうも、この絵図では」

木工右衛門は太い眉をしかめた。

稲生沢川を併せて東漸していた川が、山裾に沿って、大きく南へ湾曲して流れてゆくようになる。

その地点を指した。

「この山でござるな」

たしか、北側から東側に川の流れが見え、これが、濠の役目をしていたと指摘した。

「ふむ、これは要害だ」

「多分、深根津の城とは、ここでござろう。修復して、濠をさらい、石垣を築き、棚を結びなどして、防備を厳にしているのでござろう」

そのうちに次々と情報が入ってきた。

播磨守の一族遠縁の者などが二百騎ほど集まり、さかんに御所の反撃を号して、いまや五、六百の人数になったというのである。

「南伊豆には、いまだ御仁徳のほどは知られていませぬ」

と、はっきりと木工右衛門は言った。

「されば、茶々丸どのの名のほうが、御所の御曹司として、聞えがよいでござろう」

むろん、新九郎は冷静にこの分析をうけとめている。

「そうであろうな。公方の権威に、世間は、弱い」

「はい」

「それゆえ、如何なることがあっても、粉砕せねばならんな。大道寺、荒木、わいらはただちに兵を起せ」

「かしこまりました」

二人は一揖した。

「茶々丸の首、必ずおれが討つ。弥三郎もな。その間、留守は、才四郎と、兵衛だ。二百騎で守れ」

老獪な弥三郎春忠が存命のかぎり、新九郎に矢を向ける。たとえ、茶々丸が討ち死にしたあとでも、尚、執拗に楯ついてくるだろう。

先駈として、大道寺太郎、荒木兵庫が百騎をもって南下した。

新九郎は一足おくれてこれも百騎を率いた。後備えは葛山大炊介と、多目権平である。

まず、一同が拠点としたのは松崎の北だった。

ここに集結して、深根津城討伐の旗を立てる。

前記の伊豆の諸将への参集の声をかける一方、大道寺と荒木の先鋒が、松崎より真っ直ぐ、東へ向っている。

那賀川沿いの道を遡ると、現在はトンネルで婆娑羅山をぬけることができるが、当時は峠を越すしかない。

婆娑羅山は標高六百メートル、南方の親山が十メートル高いだけだが、子山のほうが急峻なので、見る位置によっては、こちらのほうが高く感じる。

峠は三百メートルくらいで、これを越すと、東方になだらかな摺鉢がたの盆地になっている。

その底に川の流れが光って見えた。那賀川は峠の下で消えている。目の下に見える川は稲生沢川の上流であった。

加増野の村の家々が十数戸盆地の底に点在している。

当然、このあたりには、深根津城の斥候が出ているか、出砦が防備しているものと思っていたが、その様子はまるでなかった。

「面妖だぞ。うかつには進めぬ。伏勢がいるはずだ」

「いや、そうともかぎるまい。われらの勢いに気押されて、

籠城一本にしぼったのではないか」

用心しながら進んだが、伏勢が飛びだしてくる様子はなかった。

一里ごとに、それらの様子を使番が知らせにかえる。黄母衣をふくらませた騎馬が嵐気に乗って走った。

松崎で馬揃えした新九郎は、次々と到着する使番の報告が、

「さながら無人の谷へ参るが如く伏勢の様子もこれなく」

と聞くと、

「刻をおかず攻めおとせ」

ただちに出立した。

総勢二千騎、とある。記録通りに信じていいかどうか、一寸疑問だが、その数も〝旗下の兵〟というから、かなり信憑性があるかもしれない。

新九郎の勢威に服して参集した伊豆の侍たちである。本来、新九郎の兵は二百騎であること、前に記した通り。

葛山を大将とする氏親よりの応援の軍勢が三百騎。これを差し引くと、千五百騎というものが、新しい連中だ。

新しいということは、この場合、中立もいたろうが、御所方だったことを意味する。

被官であって、直接の家来ではないから必ずしも敵ではなかったろうが、この古参と新参の比率から見ると、新九郎を仆そうとするならば案外、難しくはなかったのではないか。

深根津城の茶々丸、関戸播磨守に呼応し、突然、陣営に火を放つなどして、逆風を巻き起せば、千五百と五百では、まず、かなわない。突然であればあるほど、可能性は大きい。

どうして、その機運がおこらなかったのか。

茶々丸に対する不信であろうか。

新九郎の偉大さに屈服したのか、仁慈に感泣したのか。

ともあれ、北條新九郎という男が、容易に仆せる存在でないことだけは誰もが感じたに違いない。

弥三郎春忠が軍師としているならば、その手を打たなかったことは、千載の遺恨事であろう。

伊豆の侍たちに及ぼす力が、弥三郎にはまだなかったともいえる。

これらの条件が、新九郎にはすべて幸いした。

深根津城の反抗は、かえって、新参の侍たちに、

(忠誠のあかしを)

たてさせる好機でもあったのだ。

かれらの意気は盛んであった。

「茶々丸どのは、尊父殺しの大悪人！」

とする声が、士気をいやが上にも盛りあげた。

それは、さながら、新九郎が手を下すまでは、自分たちが動こうとしなかったことに対する贖罪の如くであった。

雲見三人衆は天城から伊豆を縦横して南下し、椎原で合することになっている。

加増野からさらに東へ稲生沢川を下れば、八楠へ出、北湯野、椎原となる。

稲梓川を併せるあたりである。その対岸は荒増で、堀之内の地名が残る深根津城は、二百メートルばかりの小山で鉄壁の要害を誇って蟠踞していた。

〔公方両将記〕という古書によると、

伊豆一国の侍ども、茶々丸殿は父の首を斬りし人なり、此人に与せん事、勿体なき事なるとて、皆々背きける程に……と、ある。

茶々丸から人々の心が離れてしまったのは、父政知(氏満)を斬殺したからだというのだが、新九郎の名声と、その勢いの強さも当然、かれらを離反させる要因になっていたはずである。

暁闇に西海岸の松崎を発した新九郎は、二十里の山道を一日がかりで東進している。

新九郎が着到したときは、すでに太陽は傾き、西山に没しかけていた。

「なるほど、これは要害だな」

赤い残照が、深根津城をかっと照らしていた。

古城に手を入れて急遽改築しただけに無骨だし、粗雑な感じは免れないが、城山の麓には北方東方の川の流れと対応して西側の一部に堀を穿って流れを引き、塀を立て、逆茂木を前面に並べ、随所に門や櫓を起して遠矢にかける算段と見えた。

「この城攻めは容易ではありませぬな」

荒木兵庫は腕を拱いて、城山を見上げ、

「第一に、川が深うござる。川幅も広く、潜ってゆくのもまず難しい」

「舟は出せぬか」

「石落しや矢攻めで向う岸にとりつかぬうちに全滅しましょうな」

流れはかなり速い。上流を堰止めて、水攻めにするには、山が高く、裏山がずっとつながっているので孤立することもない。

地の理に明るいだけに、間道から運びこむだろうから、兵粮攻めにするのも不可能だ。

そうこうしているうちに、大見三人衆も天城から南下してきて、寄手の人数は二千を数えるほどになった。

「これだけの人数で、かの山一つ攻め落せぬとは」

大道寺太郎などは力押しに攻め上ることを進言したが、新九郎は、

「一人でも無駄死にさせたくない」

と、考えこんだ。

「城を陥し、茶々丸を討つのが目的じゃ、そのために足軽

といえども、無駄には死なせるわけにはいかぬ」
「歯がゆうございますな。城攻めには、それ相応の犠牲者はやむを得ぬものでございます」
「かもしれぬ。だが、人のいのちは貴重なものだ。必要とあらば、犠牲を強いもしよう」
新九郎が着到した夜、しかし深根津城では、一部分、まだ工事が行われていたのである。
城裏の山の沢へ向って抜け穴が掘られていたのだった。
その工事を闇の中から見ている眼がある。
大道寺太郎が派遣した道玄と呼ばれる山伏だった。
役ノ行者の流れを汲むと号して、伊豆天城山中に生れ育ち、超人的な修業をしたという。
修験者は山を谷を、平地の如くに走る。跋渉ノ術を心得て、雲形によって、天変を察し、昆虫の動きによって地異を未然に知るといわれる。
大道寺太郎は、その修験者を田子の山本三郎左衛門尉の紹介で知った。
嘗て、何度か使ったという。
僅かの金でどんな役目でもひき受けるという。
その道玄である。
柿色の衣をまとい、頭に兜巾をいただき金輪を嵌めた赤樫の六角棒をつかんでいる。
(妙なことをやっているわえ)
穴は敵地に向って掘られているのではない。
山の沢へ向い、その沢から、川へと、進んでいるようであった。
(なんのための穴か?)
ひそかに敵のうしろへ抜けて後方攪乱など、破壊工作を計るのならわかるが、この方角では、その用途ではない。
もっと近くへ行って見たい、と思った。
道玄は杉木立の間をすべり降りていった。
柿色の衣は渋の濃さによって、闇にまぎれるのである。
道玄は巧みに、樹から樹に伝わり、くさむらに隠れて、様子を窺った。
闇に目は馴れている。
山腹に横穴があけられ、土を運びだしているのである。
その土の量で、大体の進行工合がわかる。
むろん、見張りが立っている。
槍を持ち、松明をかかげて、不審な者の近寄るのを警戒している。
道玄はその眼を避けて、近寄っていった。
耳のそばで、唸り声がしている。藪蚊だった。外耳にふれ耳の穴に入ってきた。こうしたことには耐える修業をしているはずであったが、緊張がかえって、動揺を招いた。
思わず、道玄は、耳のそばで手を振った。
その手が草を揺らめかした。

「誰か、いる」
声は意外な方で起ったのである。
道玄が気をつけていた見張りの男ではない。
別の方角から、するどい眼が、道玄の影を発見したのだ。
「やい! そこにいるやつ、出て来い」
言下に道玄は身を翻した。
草が風になびいた。道玄は数間走った。雑木林の中に逃げこめば逃げおおせる、と思った。衣がいばらにひっかかって裂けた。片袖が千切れた。
もう一息、と思ったとき、するどい痛みが腿を貫き、道玄はもんどり打って傾斜を転がり落ちた。
鷹羽の矢が道玄の左の大腿部に突き刺さっていたのである。
道玄は、殺到する声を聞きながら、金剛杖をとり直した。
「いたぞ」
「逃がすな、松明を早く」
数人がもつれるように飛びかかってきた。
道玄は身をひねって、金剛杖で一刷した。草とともに、最初の男が、双足を薙ぎ払われて、転倒し、次の男が、飛びのきざまに草にすべって倒れた。
道玄は立ち上った。この隙に、と思ったが、足の痛みが、かれの意思を奪った。
槍が脇腹へのびてきた。そいつを金剛杖が打ち払う。
が、それまでだったのである。左側からおどりこんできた男が刀を振りかぶった。
金剛杖を投げすてるや、戒刀を抜き放つ。鏘然と火花が散った。
しかし、二合と交えずして叩き落されている。
「殺すな、捕えろ」
槍の石突をかえして、腰を突く。
足を殴りつける。草の中に転がった道玄の腕を、肩を、背を、土足が踏みつけた。
両腕をうしろで折れるほどひねられて、悲鳴をもらした。荒縄で高手小手に縛りあげられ、穴の入口まで引きずって行かれた。
「透破か」
「責めてみろ、吐かせるのだ」
「死にかけているぞ」
「いや、まだ死にはすまい。矢傷はふとももにあるだけだ」
その矢は突き刺さったままなのである。誰も抜いてくれないのだ。
松明が幾本も集められ、道玄の顔を白昼に見るように照らしだした。
道玄は、凄い眼で、睨みかえした。
「ころせ」

と、呻いた。
「おう、殺してやるわ、その前に吐け」
「何を……吐いても唾しか出ぬわい」
「こやつ！」
ぐわん、と頬げたを拳で殴られた。
「痛う！　こ、殺せ」
「もう一つ喰いたいか」
また鉄拳が飛んできた。鼻柱が折れるほど強く殴られ、生温かいものが、だらりと、流れ出た。塩っぽい、鼻血だ。
そこへ横穴から出て来た者がいる。
「乱破か？　……修験者に化けて来おったか」
弥三郎春忠であった。
「こやつがの、もそっとしゃっ面を見せい」
松明が寄せられ、うしろから、総髪をつかんでぐいと引く。いやでも顔が上向く。
「ふむ。見たことのない面じゃの。誰に頼まれた、新九郎か？」
新九郎か？　と聞かれて、道玄は、ぴくりと眉を動かした。
「こりゃ、名は何と申す」
「……」
「吐け」
弥三郎は、傍の男に目くばせした。
ぐわっと、また顔に拳が叩きつけられた。片眼がつぶれるような衝撃で、道玄のからだは横ざまに倒れた。
また髪をつかんでひき起すと、
「こやつ、なかなか、吐きませぬ。責め問いも尋常なことでは、なかなかに埒あきませぬゆえ、鼻を削ぎ、眼玉をえぐるなどせねば……」
「うむ、そうせねばならぬか」
弥三郎春忠は、郎党が据えた床几に腰をおろして、
「そうじゃな、やれ」と、顎をしゃくったが、「待て、そやつ、裸にせい」
「は？」
「身ぐるみ、脱がせよ」
弥三郎春忠が、なぜそんなことを言いだしたのか、皆は納得できないようであった。
が、命令だ。いましめを解いて柿色の衣を脱がせ、兜巾や、金剛杖などひとまとめにした。
下帯一つの裸になって、両手を前で縛った。依然として、ふとももには一筋の矢が突き刺さったままである。鷹羽のところは折れているが、誰も抜いてくれようとはしない。
「吐かせい、誰の命令で来たか、何が狙いか、すべてを吐かせよ」
「かしこまりました」

抜刀を鼻先へ突きつける。すでに数倍する寄手が城をとり囲んでいるのである。殺気立っているのは当然だ。威しでは済まない。
「鼻を削ぐか」
「……」
「いや、鼻を削いでは、口がきけまい。指からはじめようぞ」
前で縛った手の指を、すぱっと二本切り落した。
「うわっ！」
「吐け、二本で済めば、有難いだろう。うぬの名はなんと」
「ど、道玄……」
「ただの道玄か」
「ま、満金坊道玄……」
「ふむ。して、誰に頼まれた？」
「……」
口を噤んだ。
とたんに、また刀が、指先に落ちた。ずばっと、また二本、第二関節のところから切り落される。
「うおっ……た、助けてくれい」
「饒舌れ、饒舌れば助けてやってもよい。誰に頼まれたぞ」
「だ、大道寺……」
「太郎か」弥三郎春忠は頷いた。「ついでに合言葉を聞こうか」
「大見、といえば雲見。妻浦と問えば、内浦……助けて下され」
はじめから、この満金坊道玄を宥す気持など、弥三郎春忠にはなかった。
茶々丸のためには、どぶ鼠でもトカゲの尻尾でも、利用できるものは何でも利用する気になっている弥三郎春忠である。
満金坊道玄の両手からは、だらだらと血が流れ、その出血の量に比例して、かれの眼はしだいに生気を失っていった。
「こやつ、このままでは死にますぞ」
足軽の一人が、顔をのぞきこんで言った。
「うむ、死にそうだな」
弥三郎の声は冷たい。
「ま、死ぬようなら、死なせろ。聞くことは、あらかた聞いた」
もう用のない人間だ。
自分が生きるか死ぬかの瀬戸際である。弥三郎春忠には、乱破の生死など問題ではなかった。情報さえ得てしまえば、この道玄などは、
（虫ケラと同じだ）

弥三郎はもはや一瞥もくれず立ち上った。
城の裏でそうしたことがあったとは、新九郎はもとより知らぬ。
朝になって大道寺太郎が、冴えぬ顔を見せた。
「実は、様子を捜りに入らせた者が、まだ戻らぬので」
「そやつ、ものの用に立つ男か」
「天城山中に於て、厳しい修業を成したる者、山谷を栗鼠のように走りまする」
「それだけでは透破の役目は果せまい」
新九郎は、風魔ノ小太郎を思った。
(彼奴ならばやれるだろうが)
堀越御所の焼討ちが成功したことで、小太郎には、別の使命を申しつけてある。
このことによって山内上杉顕定がどう出るか、その動向を捜らせている。
新九郎にとって、予想し得る最大の敵は、顕定であった。その動静如何によっては、茶々丸などに拘泥していられなくなる。
小太郎の捜りは、したがって絶対に必要だったのである。
(小太郎がいれば……)
と、残念に思ったのが、現実になった。
道玄が消息を絶ったことで、大道寺太郎も一抹の不安を感じたのだが、その道玄の死を、逆利用されるとまでは思わなかったことであった。
「ここで手間どれば、せっかくの名に傷がつく」
新九郎は、山城の周辺を見まわって、そう感じた。
「是が非でも陥さねばならぬ。早いほどよい。出来るなら一日で陥してしまわねば」
裏山からまわるのが容易でない以上、濠をなんとかして乗り切るしかない。西側には水をひいた新濠と、山につづく空濠がある。
空濠は深い。二丈ほども深く穿ち、下にはするどい削ぎ竹を埋めて、渡れないようにしてある。
(あそこを埋めるのだな、それしか方法はない)
「濠を埋めよ」
と、新九郎は命令を出した。
「空濠を埋めるのだ、それも急いでだ」
近傍の山の木をどんどん伐り倒させた。
その上、無人となった民家を引き倒し、戸障子をはずし、板戸や梁(はり)や柱や、その他、桶、水瓶、蓆でもへっついのかけらでも、ありとあらゆるものを山と積んで、
「よいか、一晩で埋めてしまうのだぞ」
夜に入るのを待って、それらの古材がらくたを、一時に濠へ投げこませたのである。
空濠は渡渉できないように、削ぎ竹をおびただしく植えてあるし、板でも渡して走ろうとしても、頭上から、石を

落し、矢を射かける備えが出来ている。
愚図々々していると、もろにやられてしまう。
飛んでくる矢を避けながら、どんどん、それらのものを投げこませたのである。
城山の櫓から、火矢が飛来し、松明が投げられる。その火明りのもとに、射仆そうとするのだ。
火矢が寄手の頭上に惜しみなく火の粉をふり撒いて落ち、それに数倍する矢が、雨あられとなって降りそそいだ。その矢に当って、ばたばたと倒れる者。火の粉をあびて、顔をおさえ、のけぞる者。中には逃げだす者もいる。
だが、空濠を埋めるのは、至上命令だ。督励されて、次次と二千人の士卒が、その危険な仕事にはげんだ。
こうなれば、身分の懸隔もない。武将も足軽もない。一刻も早く、空濠を埋めるだけであった。
二千人もの人数が、力をあわせるのだ。またたく間に空濠は埋められていった。
櫓の上から飛ばす火矢や松明は時に空濠の上に落ち、古材に火が移り、燃え上るものもあった。それを見ると、寄手のほうが水をかけたり、土をどんどん運んできてかぶせるなど消してはさらに、古材を叩きこんだ。
深更に至って空濠はほぼ埋まった。
「それ、この上に土や蓆などをかぶせよ、草でもよい、夜明けまでに、平らにするのだ」
むろん、平らといっても、地ならしすることはなかった。渡れさえすればいいのだ。
大丈夫との報告を受けるや、時を移さず、新九郎は総攻撃を命じた。
どっと喊声をあげて、二千の士卒が攻めかかったのである。
「ぬ、来おったぞ、みな殺しにせよ」
関戸播磨守は、城内の兵の大半を空濠に集め、果敢な邀(よう)撃戦を展開した。
播磨守自身も、二間柄青貝摺りの大薙刀をひっさげ、声を荒げて寄手の正面に駈けおりた。
関戸播磨守のその暁の働きのすさまじさは、後々までも の語り草になっている。
大薙刀をふるって、雲霞のような寄手の大軍に斬りこんだ播磨守は、もはや、勝敗の帰趨は悟っていた。
いまはただ、誇りある武将としての最後を悔いない働きで飾りたいと思うだけであった。
「来い、関戸播磨の刃を受けてみよ」
夜は明けようとしている。
水色の澄んできた空のもとに、まだ寄手の人々の表情は定かではなかった。
いまのかれにとって、寄手の誰かれが、どういう名乗りをあげようとも問題ではなかった。

生き存えてこそ、名ある武将にうち勝つ意味がある。
茶々丸を主と仰ぎ、その苦境を救って落ち延び、さらなる一合戦を挑んだ以上、もはや勝敗は問うところではない。
力のかぎり、攻め寄せる敵を斬りまくり、おのれの力が尽きれば仆れる。
それだけのことだ。それ以外のことはもはや考えなかった。
(茶々丸の殿は、弥三郎が落ちまいらせるだろう、おれは、ここで防げばいいのだ)
軍勢の多寡は問うところではない。
御所では奇襲を受けたのだし、守山では備えをする時間もなかった。
この南伊豆の深根津の古城を修復してとにもかくにも、城備えの上で旗を掲げたのだ。
この戦さで負ける分には、武将としても、本望だった。
関戸播磨守自身には、新九郎を個人的に憎むものは何もなかった。
茶々丸に対しても、特に愛情を感じているわけではない。故三位政知が関東公方となり、堀越に屋形を構えたとき、その麾下となり、重用されるに至った。
それだけの主従である。政知に目をかけられたとはいえ、茶々丸の奇矯の振舞いと、領内人心の離反を見れば、小狡い連中は、さっさと手を引く。

それをしなかったのが播磨守吉宗の侍の矜持であり、心映えであった。かれは返り血で全身朱に染まりながら、一歩も退かずに斬りまくっていた。
「来い、何人でも来い、刃の折れるまで、斬ってくれるぞ」
一閃するごとに、首がとび、腕が飛び、刀が、槍が、虚空に舞った。
さながら、その血で染めたような紅に朝雲が輝き、爽やかな風が、なまぐさい血と死肉の臭いを吹き払ってくれるころ、数条の矢に腕の力を奪われ、殺到する槍を脳に、腹に受けて播磨守は、その凄絶な死闘に終りを告げたのだった。
そして、そのころ、茶々丸と弥三郎の姿は、またもや、落城の山から消えていた。

空濠が半ば埋められて、あと一刻の後には、攻めこんでくるであろうと、報告が来たとき、茶々丸はすでに陣頭に立って戦う気を失っていた。
「弥三郎、寄手を討ちほろぼす手だてはないのか」
「ありませぬ」
弥三郎はあくまでも冷静だった。
「相手が強すぎまする」
「だが、この城は……」

「せめて、二倍くらいならば、半月やひと月は籠城できましょうが、見たところ二千あまり、一人に四人では、かなうべくもありませぬ、ここは落ちるしかありませぬわ」
「またか」
茶々丸は、おのれに力がないがゆえに、落城を迎えねばならないことにも気がつかないようであった。
まるで、弥三郎や播磨守以下が無力で、城を支えることができないのを、歎いているような調子だった。
「もう、おれは逃げまわるのに飽きたぞ」
「落ちなさいませぬか」
「いっそいさぎよく死にたい」
「そのお気持ならば、それもよろしゅうございましょう」
弥三郎は強いない。
茶々丸の言葉が、若さの強がりにすぎないことを、決して自裁したがってはいないことを見ぬいていたからだ。
人間はおのれの力を信じているうちは、死のうとはしないものだ。
茶々丸は、おのれに、足利家の御曹子としての威勢がついていると信じている。
御所に奇襲をかけられて、いのちからがら逃れたときは、まだ、何の確信もなかった。
が、弥三郎にはげまされて、ともかくも南伊豆におちて、五百人からの人間を集めることが出来たという事実が、絶望には陥れないのだ。
「――落ちる先があるか」
と、言いだしたのは、呼吸にして二百と数えないうちであった。
「ござるとも」
弥三郎は待っていたように応えている。
「ござればこそ、かように申しておりまする」
「どこだ」
「ま、そのことは、おまかせ下され」
「しかし……」
「五百の軍勢で、この古城……さればこそ、負けるのはしかたがない。この次は、二千の軍勢と、要害をもって、新九郎を撃破いたしましょうぞ」
弥三郎は立ち上った。
「ど、どこから抜けるぞ」
城山を包みこむような喊声を聞きながら、茶々丸は、心細くなったように、きょときょとしている。
「おまかせ下されい。まず、これをお召し下さるように」
弥三郎が差し出したのは、あの満金坊道玄の柿色の衣と金剛杖など山伏の装い一揃であった。
柿色の衣をまとい、額上に兜巾を頂いて、山伏に扮した茶々丸が弥三郎春忠と数人の供廻りで掘り抜いた地下道をぬけて、城裏の沢へ出、山裾を隠れ走りして行くころ、ま

だ、城の中では、死闘が演じられていたのである。
これが落城してしまってからでは脱出は難しい。
弥三郎は充分にそのことを知っていた。
「関戸播磨が、時間を稼いでくれましょう」
と、言った。
「関戸は、しかし……脱けられまい」
「死にますな」
平然たる弥三郎である。
「播磨は本望でござろう」
「……」
「殿が落ちのびられる。それだけでも、播磨の死は意味のあるものになります」
「そうか」
「伊豆から脱け出るには、犠牲はやむを得ますまい」
そう言われると、茶々丸はすぐその気になった。
もともと、茶々丸は生れたときから公方だという意識がある。
その思い上りは、一般人のような、こまやかな感情をもたない。土牢で呻吟した歳月は、人間を作ることにはならず、憎悪怨恨の感情を増大させただけだ。
「しかし、落ちるあとから、新九郎めの手が追ってくるような気がしてならぬ」
「その点も、ちゃんと考えてありまする」

弥三郎は自信たっぷりだった。
「何卒、お心おきなく、……この弥三郎がついているかぎりは、お心たいらに」
たしかに、弥三郎は先の先まで考えている。
茶々丸には、空恐ろしいくらいに頭がまわる。
落城もしないうちから、主が、城を脱け出るなどとは、家来たちに対して無責任な話だが、それだからこそ、無事に脱出できたのであろう。
山伏の姿は、万一の場合を予測してのことであった。
その万一のことがなかったのは幸いであった。
裏山伝いに川岸に出ると、漁師の舟を見つけて、奪いとった。
まだ遠くに合戦の騒ぎが、高く低く聞えてくる。
「もう、ここまでくれば大丈夫でござるよ」
さすがに、弥三郎春忠も、ほっとしたように、ふりかえった。
流れに乗って、舟は矢のようにすべってゆく。
稲生沢川は、いまの下田の街の東方を流れて、下田湾へそそぐ。
ところが、弥三郎は、河口に出る手前で、舟を岸へ寄せさせている。左岸である。
「そこだ。みんな上るのじゃ」
下田の港は、市街地を河口から西にひろげて、北方は寝

姿山で遮られている。
文字通り、ねずがたである。弥三郎が舟を止めさせたのは、その山の北麓で、丸山という地名のある河岸であった。
そこで舟を捨てると、弥三郎の先導で、木立ちの間の小径を山へのぼっていった。
このあたり、現在は下田の東郊で家がかなり建てこんでいるが、当時は、殆ど、人家はなかった。
たまに木立にかくれて、ぽつりぽつりと、いぶせき蓬屋が見えるくらいのものだったろう。
「一体、どこへゆくのだ」
茶々丸は、眉をひそめた。
せっかく、舟に乗って、川の流れに身をまかせてきたのに、また山登りさせられるのかと、不満だった。
「――海へ出まする」
「海へ？　この川の果てが海であろうが」
「左様。したが、この川の尽きるところ、南へまいっても、大海があるのみでござる」
「山の向うにも、海があるか」
「はい。相模の海がひろがっております」
つまり、南伊豆の岬の根方を横断して白浜海岸へ出ようというのである。
茶々丸は山伏の衣裳を重く邪魔なものに感じていた。
贅沢な感情である。地獄の底から這い出ることが出来た

と思うと、かれは、かつての栄華が恋しくなった。
山を越え、相模湾の青を目の下に眺めてから間もなく、茶々丸は休息に立ち寄った農家で、人妻を犯している。
茶々丸が、その女房の顔を見たとき、眼の色が変ったのを弥三郎は知った。
「急がねばなりませぬ、さ、出立いたしましょう」
連れ出そうとしたが、
「足が痛い」
と、子供のようなことを言った。茶々丸は童顔である。その表情には甘えがある。
「足など……誰かおぶって差し上げろ」
弥三郎は家来たちを振りかえったが、
「なに、四半刻も、こうやっていればよいのだ」
にやりと好色な笑いに歯を見せて顎をしゃくった。理解しろ、というのだ。
弥三郎は、やれやれというように首をふって、
「病気でござるな」
「そうだ、ははは、おれの病気だ、医師が要る」
「……」
「あそこにいる」
「困ったお方だ。追手がかかったら何とします」
「来はせぬさ、四半刻くらい。見張りに一人立てろ、お前らは、早く船を手に入れておけ。すぐだ、もう何日、女ッ

気なしで過したと思う」

手を伸ばせば、美味佳肴があり、寝れば肉蒲団がある。いつもそういう状態を与えられていたら、人間はそのことに疑いを抱かなくなる。

土牢で死ぬ苦しみを経てきたことも茶々丸は、すっかり忘れているのであろう。いや、それだからこそ、快楽を欲することが、異常なまでに強いのであろうか。

弥三郎は、この家の老父と家族たち五人ばかりを促しておもてへ出た。

「殿が、あのように申される。伽を頼むぞ」

「そのようなことは」

と、老父は顔色を変えて、

「嫁でございます、亭主持ちの女でございます、殺生なことじゃ、許して下され」

「亭主はどうした」

「――戦さに出ておりまする」

「足軽か、誰の手に属しておる」

このあたりの者たちも、半ば強制的にかり集めたはずだ。人数を集めるのに性急なあまりかなり非道な手も用いている。

「深根津の城で足軽奉公をしたなら、殿の家来だ。家来の妻なら、殿の家来にひとしい。殿の仰せには逆らわぬのが、主に仕える者の道ではないか」

「そ、それは……筋道たてれば、たしかにその通りにはちがいありませぬ」

「ならば、有難くお受け致せ」

弥三郎は語気を荒くした。

老父はなおも抗議しようとしたが、一行にとり巻かれて威嚇されると、口を噤んでしまった。

それ以上言えば、首が胴から離れる。弥三郎の狂的な眼の光は、そのことを物語っていたのである。

「得心したらしいな。よかろう、四半刻ばかり、眼をつむっていよ。嫁女も、存外、楽しんでいるかしれぬさ」

弥三郎はにやりとした。

港には漁師の舟が見える。その中で、もっとも大きい船を選んだ。

「公方には、必ずや、また伊豆へ戻ってまいる」

弥三郎は、ぬけぬけとこう言っている。

「そのときに、過分の利息をつけて、お下げ渡しになろう」

はたして弥三郎は、おのれの言葉を信じていたのだろうか。

どの程度に、ふたたび伊豆を見る確信があったのだろうか。

一時の糊塗だったのか。それとも、ひるみかけるおのれの心を自ら鞭うつ言葉だったのか。

船の支度をととのえて待っていると、茶々丸は、やがてにやにやしながらやってきた。

もう柿色の広袖の衣を脱ぎ捨て兜巾も捨ててきている。

「やあ、これですっきりしたぞ、ははは、美い肌だった。さあ、船を出せ」

そんな茶々丸を、一家の者たちは怒りに顫えながら、見守っているのだった。

その当座、茶々丸と弥三郎がどこへ落ちたか、新九郎にはわからなかった。

忠義の侍、関戸播磨守父子は、片柳という部将を呼んで、

「殿の首塚を作れ」

と、命じていた。

茶々丸の落ちる時間を稼ぐためであった。

すなわち、落城の混乱に乗じて逃れた片柳某は、敵の若者の首級を拾い首するや、その首を抱いて、わざと人目につくように走った。

敵の視線をそらせるため、北へ向ったのである。

北とはすなわち天城山である。その山懐へ入る前に何人かの寄手に遭遇した。

かれは、そのたびに大音声で叫んでいる。

「うぬら、傍へ寄るまいぞ、殿の御首を汚れた手に触らせてはならぬ」

一人二人を斬り捨てては、健脚にまかせて走り抜けた。

「あれが茶々丸の首級ぞ」

雑兵たちは眼の色を変えた。

「茶々丸は死んだ。が、首級は逃げた。是が非でも、あの首級を」

かれらは口々に喚きたて、けもののように追ってきたが、地の理に通じている片柳は、沢を渡り、尾根を越え、ひたすら走った。

「北へ逃げました」

「北へ！」

誰もが、北方へ関心を持った。

計りごとは効を奏したのである。

天城山下に至った片柳は、その首級の面貌を縦横に傷つけて、特徴を失くしてから、格好な場所を選んで首級を埋め、こんもりと土を盛りあげて、傍の木の幹を削り、携えた矢立の筆で、

俗名足利茶々丸之首塚。

と、認めた。

それから、更に、こう書いた。

足利家々来関戸播磨此地に死して御首を永遠に守る。

書き終えると、かれは漸く、肩の荷をおろしたように、ほっとして、首塚の傍へ大胡坐をかいた。

それから、おもむろに鎧の腹巻をはずしてわきへ置き、

腹をくつろげた。
そのまま、暫く待った。
敵がくるのを待ったのである。
片柳は脇の下にぶらさげていた小さな竹筒の栓を抜いて、らっぱ飲みした。
酒だったようだ。半ばを飲んでから、残りを塚の上へそそいだ。
「名も知らぬが、首よ。殿の身代りとなるのじゃ、極楽へゆくことになろうぞ」
と言って、白い歯を洩らした。
それから間もなく、落武者狩りの雑兵らが姿をあらわすと、かれは、大きな眼で睨みながら、ぶっすりと刃を左腹部へ突きたて、ぐーっと右へ引きまわして、噴きだす血を左手で押えて、抜きとった刀でわれとわが咽喉笛を掻き切って、前へ倒れた。
みごとな最期であった。
この巧みなにせ首塚のために、新九郎の軍勢は、暫くの間、茶々丸らの落ち延びたことを知らなかったのである。

北條早雲四

昭和五十一年十一月二十日　第一刷
昭和五十二年三月二十五日　第四刷

著者　早乙女貢
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
〒一〇二

本文印刷　理想社印刷
オフセット　共同印刷
製本　中島製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

© Mitsugu Saotome 1976
Printed in Japan

井上ひさし　おれたちと大砲

直参のはしくれ若者五人、共通点はオッチョコチョイ、幕末の浪風にゆさぶられながら、慶喜公のためにと珍奇放胆な計略をたてたが

880円

笹沢左保　剣鬼啾々

天下無双をめざし、生死を賭けて勝負に挑む残酷なまでの華麗さ…剣一筋に己の道を往く流浪の武芸者の非情な生きざまを描く傑作！

950円

文藝春秋刊

新田次郎　武田信玄　全四巻

天下統一の雄図むなしくたおれた悲劇の英雄武田信玄――野望と情熱と波瀾に富んだその生涯をいきいきと描破した三千枚の大河小説

各800円

司馬遼太郎　翔ぶが如く　全七巻

明治新政府は出発した。が、そこには様々な危機が内在外在していた。西南戦争に至るまでの政治をダイナミックに捉え得た大河小説

各980円

文藝春秋刊

早乙女貢

雄大な構想のもとに滔々と描く大河小説

北條早雲

全五巻

出自は謎につつまれ、一介の牢人から身をおこし、ついには乱世の英雄と謳われるまでの波瀾にみちたその生涯——欝勃たる野心を秘めて伊勢新九郎（のちの早雲）が今川竜王丸母子を擁して大活躍！

各九五〇円

文藝春秋刊